
私の旦那様は教師で芸能人？

伊勢の藤原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の旦那様は教師で芸能人？

【Nコード】

N08601

【作者名】

伊勢の藤原

【あらすじ】

先生？スーパースーアイドルと生徒の秘密夫婦の物語私紺野結衣15歳旦那様葵ひろき26歳二人が玄関で出会ってから、始まる秘密の秘密の物語

プロローグ 1

プロローグ 1

私、紺野結衣。中学3年生。4月3日生まれの現在15歳です。

今年白鳥学園高等部へ入学予定なの、この学校は偏差値の高くみんなの憧れの学校なんだ。

中高一貫の学校なのだが、中等部より他の高校などへ転学者がおり、その人数分の補填募集がある。

今期分は10人だったが、100人以上応募がありその狭き門を通り合格したので、喜びもひとしおだ。

春から憧れの白鳥学園へ通学なので、うきうきなんだ。

でもそれをも吹っ飛ばす出来事が起きてちゃった。なんとそれは！！

正月元旦に両親に言われちゃったことなの。

「私たちは外国へ行く事になった。お父さんが転勤なの二人で行くから。結衣はこれに署名するのよ」と・・・なんと婚姻届を私の前に差し出した。

私は「・・・ええ・・・」目が点になってしまった。

お母さん曰く「相手は昔から決めていた許婚者で、結衣は1月5日に引越しのよ。3日に一度彼が顔を見せに来るわよ」なって言ってるニコニコしている。

お母さんは「大丈夫よ、結衣の昔よく知っている人だし。カッコいい人よ。」

私は・・・「うそー！冗談でしょ・・・」って叫んでしまった。

両親は私と一緒に連れて行くつもりはまったく無いらしいし。しかも、この家も引き払わなければならないんだって。

私1人では一人暮らしは不可能だし・・・。これにサインしなきゃ、憧れの学園生活が！！路頭に迷っちゃうのだ。「えくん」泣き崩れた。

しかも「私たちの出発日も1月5日なのよ」ってほざいた！！！！またまたそんな　うそー・・・。

私は仕方が無く、泣く泣く婚姻届にサインした・・・ぐすん。

婚姻届をよく見ると、もう相手の名前が書いてある。ショックであまりよく見なかった。ふう・・・これから私はどうなっちゃうんだろう???

3日に旦那になる人（婚約者）が顔お見せに来るって・・・どんな人だろう。

正月早々悶々とした気分ですごし、今日大きく落ち込んだ状態で1

月3日を迎えた、両親たちは出発準備でうきうき状態なのに・・・。

とりあえずテンションが低いまま、私は婚約者に会うため身支度を整えた。

私は髪は長くストレートで腰の手前まであるんだ。しかし視力が悪いので眼鏡とコンタクトの併用だけど普段のほとんどは眼鏡を掛けている。

今日は正月中コンタクトだったので眼鏡を掛けている。私は、あまりコンタクトは好きでないんだ。服装は薄ピンク色のワンピースを着込み準備完了なのだ。

あとは彼を待つだけ・・・。

・・・

・・・ピンポン！

玄関の呼び鈴が鳴り、私は「ハーイ」と返事をしながら玄関の扉を開けようとした。

プロローグ1（後書き）

自分なりに見やすように修正を試みました。
再度編集しました。

プロローグ2

プロローグ2

オレ、葵 ひろき。現在26歳。

俺は16歳から芸能界に入ってNO.1を取り続けている超イケメン H I R O (芸名) だ。

夏季ライブを行っているときに、おやじからTELが・・・入った。

「おい、ひろき お前一時芸能活動を休止し3年間教師やれ!!」
って言われてしまった。

なんでも当てにしていた先生が急に断りが入り、急遽俺に白羽の矢が当たったってわけなんだ。

俺はちゃんと芸能生活を続けつつ、大学へも行き教員免許も取得したので。

だから親父は欠員が出ないように俺を当てにしたんだ!

俺は、しっかり、ごねたけど最後にはお袋がオレに泣きつかれ? 仕方なく・・・折れた。

お袋には弱みがあるし・・・しぶしぶ教師を引き受けることにした。けれど俺は芸能界を完全休止せずある程度は活動が出来るように条件をつけた。

おれって案外芸能生活が好きなんだ。

それからが大変だった。クリスマスライブを一時休止ライブに変更し、大きな活動の休止宣言をした。

そして、両親の言う通りに、とりあえず教壇に上がるべく準備をすることにした。

それはすなわち4月より白鳥学園で“教弁”を取るって、ことになってしまったって事だ。

しかし！！！！12月に新居に引っ越したらとんでもない話が追加された。

なんとそれは、親父の親友の娘と結婚しろだって。思わず俺は「だれと？」って聞き返すと。親父が「紺野のこの娘だよ。幼馴染だろ」だって？？？いかんせん思い出せない。

頭に？マークを浮かべながら、おふくろにおどされて（わかっているだろうねあのことを世間にばらすよ！！って）しぶしぶ婚姻届にサインをした。

あゝおれって・・・。

1月3日に顔見世だって。今俺は愛車に乗って結婚相手が居る紺野家に向かう。

おれの一番気に入っている白色の2座席スポーツカー（T社の2000GT）に乗って、紺野家に向かっている。

ここちよいDOHCサウンドに宵ながら目的地近くまで来ると、懐かしい雰囲気にも包まれた。

あれ？　なんか見覚えがあるような町並みと思ったらカーナビが到着を知らせた。

（目的地周辺です音声案内を終わります）を聞きナビ画面に目を移し目的地の最終確認をした。

目的地の家の駐車場に泊め玄関の呼び鈴を押した。

ピンポン！・・・

ドアが開いたと思ったら、なんと女の子が降った来た　「ええ」
・・。

出会いは・・・その1

出会いは・・・その1

私は玄関を開けようとして足を滑らせ、ドアを開けながら外にコケ出ちゃったんだ。

「わああああ・・・最悪！！地面に！！」と思ったら、ぐぐっと太い腕に抱きとめられ、玄関に居た男の人の胸の中に納まった。

「キャー」心臓がバクバクしている！！

俺は玄関から降ってきた女の子をびっくりして受け止めた。華奢な彼女は俺の胸の中にすっぽり収まった。

受けとめた拍子で女の子の眼鏡が吹っ飛びそして、玄関先でビシ！！って音を立て割れてしまった。

お互いにかをお見合わせる。

私は目が悪いのでボーっとして見たら、うつすら見えた顔はなぜか幼き日の見覚えがある顔であったが・・・。

うんゝすぐには思いだせない・・・。。。

俺は彼女の顔を見てやはり考えた、あれれ見覚えが・・・。

そして二人して言った 私は「ひろくん？」 俺「ゆい？」

お互いが言い合った所に、結衣の両親が現れた。

結衣のお母さんが「結衣ちゃん　ちゃんと知っている人でしょ」といって微笑んでいる。

私はお母さんの言ったことを聞いて真っ赤になってしまった。心の中で「そういえばこの人と結婚するんだ」と繰り返した。

昔お互いに想っていた、幼馴染のひろくと・・・。

俺は、あれれ？俺が小学校の低学年ぐらいのときに生まれたんじゃないか、確か11歳離れていたはず・・・。

てことは俺は今26歳　結衣と11歳違いだから15歳！だから結衣は今は中学生？　結婚なんかまだ無理じゃないか。

「くそ・・・親父のやつ何を考えているんだ！！」と心の中で思った。

すると結衣のお袋が「結衣は4月生まれなのもうすぐ16歳なのよ、三ヶ月なんてあっという間よ」って言った。

しかも「学校へ行っている途中で苗字が変わるといろいろ詮索されるから。結衣の誕生日に婚姻届を出すように手配してあるわ」って言いながら俺の顔を見ながら話した。

俺は思わず・・・「心を読まれた？」と思ってドキッとしたら。結衣のお袋が「ひろくんそんなこと顔に出てるわよ」なんていわれてしまった。

俺は思わず、えへへって顔をした。

出会いは・・・その2

出会いは・・・その2

お母さんが「結衣、ひろくんをお部屋の中に入れてあげて」と言われて、私は、慌てて、ひろくんから離れ真っ赤な顔をしてひろくんを中に入るように招きいれた。

俺は「お邪魔します」と、玄関先に結衣の落とした眼鏡を拾いあげてから、家の中に入り結衣に案内されリビングのソファに座った。俺は結衣に「結衣の眼鏡割れちゃったね」と言って、とりあえず割れためがねをテーブルに置いた。

母親に即されて、結衣が俺の隣に座った。もちろん真っ赤な顔をしてながらね。

よく見ると、結衣って、めちゃくちゃ可愛いじゃん。そう、結衣はめがねを外すと、クルリとした瞳が愛らしく可愛い。

だから「ふうん、この子が俺の奥さんになるんだ。」って思い、俺はニコニコ顔になった。

それから結衣の両親とのお話をした。

親父さんは「大変申し訳ないが我々はシンガポールへ出向で行かなければならないんだ」少し深刻な顔をして。

「しかし結衣を連れて行くと、楽しみにした学園も入れず会社側も

三人分はちよつと難色をしたので。（実は2人でいきたかっただけ）丁度いい機会なので。結衣を君のお嫁さんにとって思ったんだ。」

「元々は結衣の高校の卒業を待ってから二人を結ばせる予定だったんだが、私の出向で少し早まったしまった。」

「結衣をよろしく頼む」もちろん君のお話も君の両親よりよく聞いている」って言って、結衣の両親はニコってした。

俺は「え？どこまで俺のことを知っているんだろう・・・。」って考えた。

さらに「この家は会社の借り物だから。ひろくんの家に結衣の荷物を送る手配は済ませている。1月5日に引越しの手はずになっているから心配は無いよ」って言った。

横で結衣が「ええ、もうそこまで？」と言って、結衣は赤い顔がさらに赤くなって・・・下を向いた。

俺は12月に教鞭をとるべく、学園とは少し離れたところにマンションを手に入れ引っ越したばかりだった。

なぜそのとき親父たちが俺の考えより一部屋多いマンションを見つけてきたのが判らなかったがようやく意味がわかった。

俺は「結衣となら一緒になってもいいかな？幼い日の約束でもあるし」俺は結衣の横顔を見ながらコーヒーに手をつけた。

そして、俺は結衣のお母さんの入れたコーヒーを飲みながら“ふう”とため息をついた。

私は徐々に昔を思い出してきた。そういえばひろくん今はひろきさんか・・・昔約束していたのを思い出し、もじもじしてしまった。

そう昔の約束とは、ありきたりの「ねえ、わたしひろくんのおよめさんになる」って話だ。

そういえば、いままで一人も男の人と付き合ったことが無の。男の子にとって結衣は天然な性格の女の子だったのだ。

お母さんから「少しお部屋で少しお話をしなさい」と言われ彼を自分の部屋に案内した。

そういえば私の部屋に男の人を入れるのは初めてなの、どきどきしながら、どうぞと言って自分の部屋の扉を開けて彼を招きいれ、そして私は机のいすに腰掛けた。ひろくんは「ここが結衣ちゃんのお部屋なんだ」って言って彼はソファーベットのの上に座った。

私の部屋はピンク系で統一してあるんだ。そして、処狭しに、大きなぬいぐるみがソファーベットの角に置いてあるし、机にはパソコンや写真立が置いてあるの。

彼がぬいぐるみをなぜながら周りを見渡し始めた。

よろしくお願いします

よろしくお願いします

俺は結衣の机においてある写真立てを見た。あれ俺の写真があるのはどういことかな？写真立ての中身は芸能人のH I R Oの写真だった。

結衣、もしかすると俺に気づいてないな、結衣が判るまで俺がH I R Oであることを隠す決意をした。

私はH I R Oの写真立てを見られ、あわてて伏せた。

H I R Oは私の一番好きなアイドルなのだ。このときめがねが壊れていたため本人とはしばらく気がつくことができなかった。

だってこのときのひろくんはH I R Oの姿だったのだけど・・・。

俺は、結衣に尋ねた「結衣ってH I R Oって好きなの？」

私は「うん、憧れの アイドルだよ」て少し頬を赤らめて、答えた。

間違いない、俺がH I R Oだってことが、やはりわからないようだな。

俺は微笑んで、俺がH I R Oだってことはしばらく伏せようと考え、「ふうん、そうなんだ」と結衣に微笑みながら言った。結衣はすこしほほを染め下を向いた。

俺たちは、たわいもない話をして時間をつぶした。俺は彼女が小学校の低学年のとき俺は親父の都合で引越しをした為それ以降は会っていない。当然、結衣は俺が芸能界に入ったことも知る由も無い。

結衣のお母さんから後で聞いたのだけど俺が引越したあと、それを知った結衣は泣き崩れてすごかったらしい。

私はひろくと自分の部屋で昔のお話をした。

昔のひろくんは、私にとってスーパーヒーローだったけどさすがにその話をするのは恥ずかしく、その部分は話を濁した。

幼稚園でいじめられた時にもちゃんと守ってくれたお話や、運動会の走り会で一等を取って褒められた事を、話すにつれ、次々に思い出し、話に花が咲いた。

そういえばひろくに無理やり結婚を迫ったこともあったな・・・へへ。時々、恥ずかしいことも思い出し、赤くなったりもした。

しばらくお話をしたら。お母さんが夕飯ですよと、リビングから声がかかった。

私は「ハイ」と返事をして彼と一緒に食卓に向かった。

お母さんは私の耳元で小声で言った。「どう？ひろき君ってカッコいいでしょう」と言われ、ぼやっとしか見えない彼をちらりみして「う・うん」と答えた。だけどもめがねが無いとよく見えない。

輪郭はHIROに似て、カッコよさそうなんだけど・・・。

家の中は目が悪い私でも余り支障なく生活が出来る、あゝ明日は眼鏡のレンズを入れにいかなくっちゃと思った。

そういうば、ひろくん私のめがね姿まだ見てないね。私は特別なことが無い限りコンタクトはしない。一度、長く装着しすぎて、眼球を痛めたことがある。

それ以来コンタクトはあまりしない様になっているって理由なの。

私たちは食卓に座り「いただきます」と声をかけ、いま食べようとしたときに、お母さんが「これからは結衣がひろくんに食事を作るんだよ」といった。

「ええ」思わず私は叫んでしまった。私は料理が得意でない、いや家事一般が不得意だ。しかしひろくんはそれはたのしみだななんて、ニコニコしている。

私は頬を膨らまし、「知らないよ!どんなものが出てきても!!!」と、心の中でつぶやいた。

そう考える私は、もう彼の奥さんのつもりのようなだ、急に恥ずかしくなり、慌ててごはんを口に入れた。

食事が終わり四人してリビングでくつろいでから、彼が「そろそろ失礼します」と私たちに声をかけて立ち上がった。

両親は彼に「ひろくん結衣をお願いね」って彼の手を握って頭を下げた、彼は「とんでもないです。こちらこそ、よろしくお願いします」と答えた。

両親は玄関先で私はひろくんの車のところまで見送りに出た。

俺は車を暖機運転すべくシートにいったん座ってアクセルを少しあおってキーを回した。

セルの音ともにエンジンがかかり、暖気モードに入った、すこし安定したところで見送り来た結衣を引き寄せ「これからよろしく」と唇にキスをして「じゃあ」と言っただけ俺は駐車場から自宅へと発進させた。

バックミラーを見ると結衣は手も振らず固まっているようだ。かわいいやつと思いつつながら自宅へと2000GTを進めた。

私はひろ君にいきなりキスをされ固まってしまった・・・あああゝ私のファーストキスが！！

何分か固まってしまった。私にお母さんに肩をたたかれようやく我に帰った。その姿は全身真っ赤のようだ体が火照っている、私はあわてて家の中に戻った。

お迎え

お迎え

私はキスの後の余韻でその後の行動を覚えておらず、いつの間にかベットのの中にいた。布団の上に手を出して、ひろくんがここに座っていたんだと思って、また赤くなって布団の中にもぐりこんだ。

俺は結衣を迎えるべく準備を整えた。結衣にHIROとわからない様に髪は七三に分けにし、黒縁めがねを用意した。まあこれは教師をする為でもあるんだが……。

1月5日

今日は両親の出発日で、しかも私の引越しの日なのです。引越しのほうは引越し業者に委託してあるので朝の支度をした後、手持ち無沙汰で彼を待っていた。

彼が来た後で二人して両親の見送りに行く予定なのです。そのあと彼の家に……。

引越し屋さんが朝から現れてきばきと私の荷物を運んでいる。両親の荷物は昨日もう発送済みだ。ちょうど私の荷物が積み終わったあたりに、彼の車が見えてきた。

私は、少し手を振り彼に合図をした。ひろくんが到着して皆さんに挨拶する「皆さんご苦労様です」私はひろくんに「おはよう」の挨拶をした。

そして引越し屋さんと一緒に来ていた、お父さんの会社の人に家の鍵を渡し、彼の車に乗り込んだ。

この車意外と狭い！彼は助手席のドアを閉め運転席に回りこみ、引越し屋さん、会社の人に「後はお願ひします」って声をかけて空港に向かった。

ブロロロロ・・・

少しうるさい音を立て（意外心地よい）一路空港に向かっている。

おしゃべりをしながら、彼の車が高速道路に乗り込んだ。彼が高速道路に乗ったあと、なぜかしきりにバックミラーをよく見ていた。

不思議に思っていたら、突然二人乗りのオートバイが私たちの前方に躍り出た。なぜか後ろの人はカメラを持っていた。

どうしたのかしらと思ったら、こちらに向かってカメラを向けてきた。

丁度その時、前でトラックが急に車線変更し、二人乗りのオートバイと衝突しかけた。

オートバイは急ブレーキをかけ衝突を回避したがそのショックでトラックの運転手がパニックになり、私たちの前でカードレールにぶつかり横になりかけた。

私は思わず目をつぶり「もうだめ！！」私は、思わず目をつぶった。

俺が高速に乗る際にパパラッチに見つかったようだ。そこをどう付回していたんだろう？どうしようかなと思っていると。写真を撮られる寸前にトラックの事故が起きた。

俺は周りの状況を確認しシフトダウンして前方の開きスペースにハンドルを切りアクセルを強く踏んだ。

ハンドルさばきで衝突を寸前に回避し、バックミラーを見ると、トラックが横になり道をふさいでいた。

バックミラーを見るとオートバイがあたふたし狭い隙間から出ようとしていた。俺はアクセルをあげその場から離れた後、携帯で警察にTELし事故を連絡した。

この車は彼らに見つかったようだな・・・この車はしばらく封印か？一番気に入っているのに・・・。

私が目を開けたときは、彼がハンズフリーで警察に連絡していたところだった。私助かったんだ。私はなぜ写真を撮られかけたかも忘れて、ひろくんに「どうなったの？」ってたずねた。

彼はトラックの不注意だよって答えた。そういえば目の前にトラックがいたのにどうなったのだろう？頭の中は？？？でいっぱいだ。

後はスムーズに空港まで走れた。そして空港の駐車場に止め、両親の見送りに向かった。途中テレビで高速道路で事故が発生し渋滞になっているのをニュースで放送していた。

両親はもう搭乗手続きを終えていて、私たちを待っていてくれた。私たちは両親と昼食をとりながら、これからの話をした。両親からは「ひろき君の言うことを良く聞き、幸せになるんだよ」って言われて少し涙ぐんだ。

両親はひろき君に私のことを頼みこんだ。別れ際にお母さんが私の耳元で「孫が出来たらすぐに飛んでくるわよ」って言われ耳まで真っ赤になってしまった。

私が赤くなったのを見て、ひろくんの頭は???が駆け回っていたようだ。両親は私たちに手を振り搭乗口に向かっていった。私は真っ赤になりながら細かく手を振った。

両親の乗った飛行機が飛び立ったのを見てから、空港を出て一路彼の家に向かった。

車の中でお母さんから別れ際に言われた言葉を思い出して赤くなりながら徐々に近づく彼の家に思いをはせたら心臓がバクバクしかけた。

新居はすごい！（前書き）

ひろぎと結衣が一つ屋根の下で・・・

新居はすごい！

新居はすごい

彼のマンションに着くと丁度引越し作業が終わったようで、男女引越し業者の人が終了の挨拶をしてきた。

彼は「ご苦勞様です」と声を掛けカードキーを受け取った。業者さんが帰り際に「かわいい妹さんですね」って言われ、ひろくんが「彼女は婚約者なんですよ」答えたら目を白黒させビクリしながら「では失礼します」って言って帰っていった。

そういえばそうだ。こんな幼いのに「婚約者」なんて変じゃないかな？

私は突然お姫様抱っこされ玄関から入って行った。私は心臓が爆発しそうになった。さらに追い打ちで「奥様これからよろしく」と言われ、ほほにキスをされ、ますます体中の血液が沸騰したようで体が固まってしまった。

私は「私もこれからよろしくお願いします」と小さな声で言うのが、精一杯だった。

彼の家は5LDK+で、しかもマンションの最上階だ。なぜか防音室である。私は思わず「すごい！」って言ったしまった。さらにサニタールームまで・・・そういえばひろくんって何やってんだろう？どこかの御曹司？。

私は、中に案内され、ひろくんに自分用の部屋を覚えてもらい中に入った。中は業者さんがある程度きちんと片付けてくれていた。確認し最終チェックすると「あれれ」ベットが無い！

部屋を出て他の部屋を覗いて確認すると隣の部屋に大きなダブルベットがあった。

まさか・・・心臓がバクバクし真っ赤になっていると、ひろくんが「大丈夫俺は別の部屋で寝るから良いよ」って答えてくれた。とりあえず胸をなでおろしほっとして次を見た。

キッチンも機能的で食器類も整っている。ここで、ひろくんの食事を作るんだ。かなり大きい冷蔵庫を開けると、ほとんど食材が無いあれれ？今夜の夕食はどうしよう、なんて考えていると。

ひろくんが「結衣ちゃん今日は大変だったから外食しようか」って言うってくれて、ほっした。だって「私はほとんど一人では料理は出来ないんだもん」って思った。ひろくんが「どこがいい？」ってきいた。私は「ひろくんにお任せします」って言ったら、ひろくんは軽く「OK」って言ってラフな格好に着替えてから、一緒にマンションを出た。

ひろくんは、手を上げてタクシーを止めると私を先に乗り込ませシートベルトをしながら運転手に行き先を告げた。

タクシーは、こじやれたイタリアンレストランに入っていた。

彼は先に降りて手を出し「奥様どうぞ」って声を掛けた。運転手はその言葉に目が点になり、私は固まってしまった。だって私のカッコウはどう見ても奥様には見えず学生にしか見えない格好をしている

た。

何とか車を降りて手をつなぎながらレストランに入っていくと、店のオーナーらしき人が葵さま「これは珍しい女性連れで妹さんですか？」って言うてきた。

彼は「これから俺に妹はいないって知ってるはずだろう？」ってオーナーの頭の帽子を、ポンと叩いた。

オーナーはぺろって舌を出し奥にある個室へと案内してくれた。途中で彼が私を奥さんだと紹介したので、オーナーと私が固まってしまい、彼がオーナーにぶつかってしまった。

私は「まだ奥さんじゃないですよ」って、頬を膨らました。ひろくんが「まだって言うことはそのうち奥さんになるんだろ」って私は心の中で「キャー！」って叫んだ。

個室に入る際にオーナーが彼に耳打ちをしているのを、小耳に挟んだ。

「ひろきってロリコン？」って言うて言うているようだとき「バカか！違うぞ」って言うているときに、さらにオーナーが言うていた。

「芸○界○ど○した？○アン○」ったら大変だぞ」同時に話しているで私は意味がわからず、内容は不明なのでした。ひろくんは「その話は後で」って言うてオーナーを追い出した。

オーナーは「いつものコースだな」って言うて手を振って厨房に向かっていった。出てきた料理はすばらしく、オーナーの料理の説明

を聞きながら、おいしくいただいた。

私も「こんな料理が出来ると良いな、ひろくんが好きそうだもん。」
って思った。

お店を出てから、タクシーでマンションの近くの24時間スーパーで降り、食材を購入した。彼は赤くなりながらショッピングカートを押してくれ、私は次々に食材をかごに入れていった。

レジに来たときに、「これからはこのカードで払ってね」って私の名前の入った黒いカードを渡された。名前に所に y u i a o i
って刻印してある。すぐ裏に署名しレジに「これで」って手渡す。

名前を書く際に、彼が耳元で“葵 結衣”って書くんだよって念を押されてしまった。初めて”葵 結衣”って書いた。少し震えながら・・・。

レジの人はカードを渡したら、なぜか固まっている、彼が後ろから一括でと言うと、彼を見て、ようやくカードを受け取り決済した。

よくカードを見るとアメリカンエクスプレスって書いてある、まあいいか。とりあえず、ハンドバックにカードをしまい食材と一緒に買ったエコバックの袋に入れ家路に着く。

私たちは両手いっぱい食材を持ってスーパーから数分はなれたマンションに帰った。周りから見たら多分兄妹にしか見えないよ・・・。

彼がマンションのドアを開け「奥様どうぞ」って先に入るように即した。少しなれた私は、少し赤くなりながらも「お先に」って言うっ

て家の中に入った。

食材などを冷蔵庫などに詰め込んで片付けると1／3ぐらい埋まった。この冷蔵庫大きすぎ。片付けていると、彼が飲み物を準備してくれた。

彼と一緒にソファ―に座って今日の出来事をお話しながらTVをみてすごした。

彼が席を立ちお風呂の準備をしてくれ「結衣疲れたろう、先に入って寝ていいよ」と即されて、私は着替えを準備し浴室に入っていた。

「大きい!!」前の家の10倍ぐらいある、浴槽も横にいっぱいスイッチがついて、テレビも見えるようだ。そのときひろくんの声が「おーい スイッチ解るか?」って彼に声を掛けられた。

「解らない」って答えたら「OK説明するよ」って彼が入ってこようとした。私はもう裸だ!あわてて浴室のドアを押さえ「いい、今日はお湯に浸かるだけだ」からって必死で断った。

広い浴槽に身を沈めるて今日の出来事を回想した。奥さんだって言われたこの言葉が一番印象に残った。

浴室を出るとリビングに飲み物が用意されていた。私は「ありがとう」といって、飲み物を飲んでくつろいでいると眠気が襲ってきた。やはり相当神経をすり減らしたのだろうそのまま私は眠ってしまった。

俺が浴室から出ると、結衣がソファで静香に寝息を立てていた。「疲れたんだな」俺は結衣を抱えベッドまで運び、頬にキスをして部屋を出た。

キスをした後に結衣が寝言で「ひろくん」って言ってニコって笑った。

かわいいやつ！俺はどんな夢を似ているのかな？と思いつつ、明日のスケジュールを確認し眠りについた。

明日は、ラジオのゲスト出演がある。

初めての朝

初めての朝

朝のまぶしい光を浴びて私は目を覚ました。「んんここは？」ボートとしながらベットの横にある眼鏡に、手を伸ばし眼鏡を掛けた。

目覚まし時計を見ると短針が9の所にある、「あああ・・・」と声を出しあわててベッドから飛び起きてしまった。

よく考えると・・・「あれれ私なんでここに寝たいるんだろう？」ソファで眠くなりその後は覚えが無い。

あああー！！ひろくんが私を運んでくれたんだ。そうなんだ、昨日からひろくんと暮らしているんだ。ぽっと赤くなりガウンを掛けて寝室を出た。

ダイニングでひろくんが朝食をとっていた。ひろくんから「おはよう」って声を掛けられ、あわてて「おはようございます」と返した。

ひろくんは「朝食の準備は出来てるよ」言ってさらに俺は今日用事があるので朝から出かける、たぶん帰りは夕方だと言う時間が変わったらメールか電話するよ。

「今日のはのんびりとしろよ」と言って頬にキスをして出かけていった。

私は、赤くなり「言ってらっしゃいと」声を掛け見送り、テーブルを見るとトーストとスクランブルエッグ・サラダ・ミルクが用意さ

れていた。

あゝあ、私がやらなければならないのに「ごめんなさい」とつぶやいた。明日は早く起きようって心に誓った。

私は、洗面所で顔を洗って部屋に戻り着替えしテーブルに着き「いただきます」と言ってからひろくんが作ってくれた朝食を食べた。

「このスクランブルエッグおいしい！」ひろくん料理上手いようだ、食べ終わって食器を片付けてから、自分の部屋に戻り。昨日の引越しの残りを整理した。

昼は買い物に出かけるため友人の弘子（白鳥弘子）に電話して待ち合わせをした。

彼女は小学校からの大親友で白鳥学園を中学から入り、高等学校へもエレベーターだ。その影響もあって、私は白鳥学園に受験をした。一緒に通うために。

待ち合わせの駅前に行くと弘子がもう待っていた。「お待たせ」って声を掛けると弘子は手を振った。

昼は駅の近くのファミレスに入り昼食をとった。

弘子は「入学式楽しみだね、一緒にクラスになると良いね」って言った。

あ！ 私まだ弘子に現在のこと話してない。どうしようと迷っていると「この後どこに行く？」って言ったから、思わず「シヨッピングモール」って答えてしまった。

まあ後でいいやって、ファミレスを出てショッピングモールに向かった。

あっちこちの店をウィンドウショッピングすると、ウエディングドレスが飾ってある店の前に着いた。

ひろくんのことを考えながらウエディングドレスを見ていると弘子が「結衣珍しいものを見てるね」って声を掛けた。

私は「う・うん」てあいまいな返事をした。二軒となりのCDショップにはHIROの歌が流れていた。

目的地への途中の交差点で止まっている車のカーラジオからHIROのしゃべる声が聞こえてきた。弘子がやっぱりHIROって人気があるねって言いながら一緒に歩いた。

私は今日の目的の本屋へついた。目的は料理の本だ。奥さんになるんだから少しぐらい出来ない・・・料理の本を見ていると弘子が「珍しい、料理でも始めるの？」って言ってきた。

また「う・うん」てあいまいな返事を繰り返してしまった。弘子不審に思うかな・・・。

私は和洋料理の本を取りレジに持って行って、ひろくんからもらったカードで決済しようとした。店員はこれはうちのカードじゃありませんよって言ってきた。

隣にいた店長が渡されたカードを見て、あわてて店員より、カードを受け取り名前を確認し決済した。

名前確認をされて際に、「葵 結衣 様ですね」私は「はい」と答えた際に思わず、弘子の方を見た。お店のカードを作りますが？って聞いてきたので、結構ですと答えた。

弘子は奥の方で週刊誌を探しているようだ。シートにサインをし私は、ほっとしてカードと本を受け取った。

駅で弘子と別れマンションに帰った。

ドアにカードキーを差し込んだところで、ブブブ ブブブ あーメー
ールだ。

携帯を出して画面を見ると、ひろくんからのメールだった。内容を見ると、今晚は7時ころ帰る予定、夕食宜しく！（はあと）って、書いてあった。

時間を見ると4時半なので、間に合うよね、と考えドアを開け中に入った。

キッチンに行き本を取り出しどれにしようかな？と本をめくった。

俺は今日はマネージャーとパパラッチ対策と今後の打合せだ。9時に家を出て、マネージャーの待つ事務所へと向かった、今日は混んでるな？

渋滞中に横を見ると、ショーウィンドウにウエディングドレスを着たマネキンが目に入った、なにげに結衣ウエディング姿が頭の中に浮かばせると……。

そのとき”ビビー” 後ろの車が警報音を鳴らした。信号が青になっっている、俺はあわてて車を走らせた。

事務所につきマネージャー（白石 由実加）とまず、パパラッチ対策を打合せその後スケジュールに付いて打合せを行った。

結局俺の愛車は車庫に眠ることになった、仕方がない I S－Fにするか、この車は知られていないはず。これで学園に通勤するつか。

H I R Oに变身し、昼からはラジオ番組にゲスト出演 これからは仕事をかなり抑えないと……。

途中で、結衣にメールをすることにする。ピ・ピ・ピ……って打っているとデレクターさんが「熱心だね、誰に打っているのかな？」なんて聞いてきたから「婚約者」っていったら、「またまたそんなこと言っちゃって」って、ぜんぜん信用もせずその場を去った行っ

そりゃそうだ、俺は業界内部では潔癖のH I R Oと呼ばれている、浮いた話はまったく無い。ごちゃごちゃいいよってくる女どもは大嫌いだ！！

本文を打ち終わり、送信っ と ピ！ 仕事は五時半に終わり、車で岐路に着く途中に頼んであるショップに電話を入れる。

プルルルル……「葵ですが、清水さん頼んであるものは用意でき

ましたのでしょうか」

清水店長が「葵様ですね、仕上がりでしたので、いつでもお渡しできます」と答えた。

「ありがとうございます、6時過ぎに伺います」と言っ
て、ショップ方面へハンドルを切った。て電話を切

初めての手料理（前書き）

前回意味深なタイトルでしたが、基本Hはほとんど無いと思って貰って結構です。まあ得意じゃないって言うのが現状です。
では今回は結衣ががんばります。

初めての手料理

初めての、手料理

料理本を読みながら、これが一番かな？お母さんと唯一数回作ったことがある。

私はレシピを見て食材を確認した。そして私は不足分をメモ書きし、炊飯器のスイッチを入れて近くのスーパーへ走った。

戻ってくると、時計が5時40分を示していた。エプロンをつけ、料理にかかる。

いた！包丁で少し切ってしまった。料理の本を見ながら悪戦苦闘だ。料理もなんとか終盤に差し掛かり、時計を見ると針はもう7時を示していた。

あゝん、時間が来ちゃう慌てていると、ピンポンと音とともに、キッチンテレビ画面に、ひろくんの顔が映った。

慌てて、手を拭き玄関へと向かった。セキュリティを解除し扉を開けると、ひろくんが「たたいま」って言って玄関に入ってきた。

私は、「お帰りなさい、ごめんなさい まだ食事できていないの」って、ぺこりと頭を下げた。

ひろくんは「いいよ、汗かいたから先にシャワーを浴びるから」って浴室に入っていた。しばらくすると、シャワーの音が聞こえてきた。

あっと、早く仕上げなきゃ、あわててキッチンへ戻った。

ひろくんが、浴室から出てきて、「ふう〜」頭を拭きながらリビングでポカリを飲んでいた。

ようやく食事の準備が出来、お食事できましたと、ひろくんに告げた。

「おお！」って返事で、ひろくんがダイニングに入ってきた。開口一番「うまそうだな」そのひとことで心の中でガッツポーズをとった。

メニューはハンバーグ・スープ・サラダ・ライスの作りやすい定番メニューだ、こちらからもっとレパートリーを広げようと、こぶしに力を加えた。

俺は何気に結衣の手を見ると傷テープだらけだ。俺のためにがんばってくれたんだなって感心した。

ひろくんは一口食べると「おいしい」言いながら、次々と口に入れあっという間に無くなった。

「本当に、おいしかったよ」って言いながらリビングに食後の飲み物を飲みながら言ったので、私はガッツポーズを超え心の中で万歳をした。

結衣の料理はことのほか美味しかった、頑張りが体中に出ているようだ。

私はがんばって片づけを終わらせ、リビングで俺の隣にすわりTVを見ながら休憩をしていると。

突然、ひろくんがこちらを向いてポケットの中から取り出した小さな赤い箱を渡してくれた。

中を開けると、きれいにカットしてあるダイヤモンドの指輪が入っていた。

ひろくんはそれを取り出して「これ婚約指輪」と言って、私の左手の薬指にはめてくれた。

「わーきれい」こんな高価なものを（ひろくんは「イミテーションだよ、ずーっとつけてね」）って言うけど・・・嬉しくて涙が出てきた。

ひろくんは目の下をそっと拭いてキスをしてくれた。私は、おもわずひろくんの胸に抱きついた。

俺は結衣の左手の薬指に婚約指輪をはめた。イミテーションってごまかしたけど実は本物なんだ。せっかくなんだからいつでもはめて貰うように嘘をついた。

明後日から授業が始まる、2月初旬には白鳥学園の面接がある、白鳥学園は内申書重視で12月中には合格の内定をもらって最終に面接（本人確認）をして終わりだ。

早めに入浴しベットに入った、明日は掃除や洗濯をやろう、やはり

ベットに入ると疲れているのか、左手の薬指を見て顔を赤らめ布団の中にもぐった。今日もすぐに眠りにおちた。

朝起きた、ひろくんはまだ起きて来ない様だ。私はあわてて洗面所に向かって、顔を洗う。左手の薬指にはダイヤモンドリングに、にやけてしまった。

おっと見とれている場合じゃない私は、着替えてキッチンへ向かう。

朝食の準備をする、がんばって和食だ。こはん・味噌汁・鮭の塩焼き・温泉卵なの、昨日の内に本を見て覚えておいたんだ。

ひろくんが起きてきて「おはよう」の挨拶の後、洗面所へ行って顔を洗ってから食卓に腰を下ろした。

結衣今日はすごいじゃないか、ひろくんは朝食をおいしいおいしいと言って全部平らげた。

あ、心の中で「私の分が無くなっちゃった」分量を間違えたみたい、まあいいか。ひろくんがおいしそうに食べてくれたから（はあと）。

家事一般をがんばってこなし明日の準備をした。あすは始業式なの。

送り迎えは”パス”

送り迎えは“パス”

朝の準備を終え出かけようとしていると、ここからはちょっと遠いから送って行くよっていつてくれた。

この家からはそれなりに距離がある。出かけるにはすこし時間が有るので、すこし時間をつぶしてから車で行く時間に合わせるつもりだ。

そして、まだすこし早いみたいだけど送ってもらうことにした。

あ！車が違う、今度のは前より大きい。助手席に乗り込むと、ひろくんが扉を閉めてくれて、運転席に戻って車をスタートさせた。

前の車より静かだ。音は前の車のほうが心地よい。前の車は？って聞いてみると、友達がどうしても貸してくれって言ったので、しばらく貸すことにしたとのこと。

前の車の方がすこし好きかな、でも前の車は2人しか乗れないけど、この車は何人が乗れるので両親が来ても大丈夫かなって思った。

学校に着くと車を降りて、門のほうに歩きながらひろくんに行って来ますの手を振った。ひろくんの車が走り去ってから足早に教室に向かった。

後ろからポンと肩をたたかれた。同級生の大林 菜緒子だ「奈緒、おはよう」「結衣おはよう」って挨拶をした。

菜緒子が「ねえねえさっきの人だあれ？」って聞いてきた。私は、思わず「お父さんの会社の人なの、たまたま方向が一緒なので送ってもらったの」って、嘘をついてしまった。

私が車を降りたところを見られていたんだ。

教室で席に座っていると、なぜか次々にひろくんの事を聞いてくる。

何人かに見られたようで、いつの間にか広まっているようだ。結構早い時間に着いたはずなのに、以外と大勢の人に見られちゃったみたいだ。

男の子は「彼氏？カッコいいじゃん」って言ってからかうし、女の子は菜緒子に言ったことを言うのと、「私に紹介して！」って言うてくる。

何気にかっこいいらしい。やきもちをやきそうだが、でもちよつとうれしい。

半日の始業式が終わり門のところへ歩いていくと、見たような車が止まっている。近づく、と、やっぱりひろくんが降りてきた。

私は、周りにじろじろ見られながらひろくんの車に乗った。顔が火照ってる、どうも赤くなっているようだ。

帰宅途中に、ひろくんに「もう送り迎えはいい、電車で通う！」って宣言した。だって皆にじろじろ見られ恥ずかしいんだもん。

それから私は電車通学に切り替えた。電車の中は混んでいるけど、

始業式の日のようになるのはいやだったから我慢する。

しばらくすると”からかいや冷やかし”などは治まってきた。だ
けど菜緒子だけは時折聞いてくる。

「ねえ、彼氏はおくってくれないの？」なんてね。私は「う・うん
っていつもあいまいに答えるしかなかった。

いつかは話さなきゃなくなるのかな。そんなことを考える間に
つきのイベントが近づいてきた。

それはセント・バレンタインデーって言うイベントだ。

バレンタインデー（初めてのチョコ）

バレンタイン（初めてのチョコ）

一月下旬、私たちは友達三人でバレンタイン用のチョコを購入する為デパートへ向かっていた。

去年までは私は彼氏もいないので、お父さんにしかチョコを渡してないけど……。今年はお父さんでなく、（本命？）ひろくんにあげるんだ。

早めには買わないと良い物はすぐ無くなる。

私は同級生の菜緒子たちと本命チョコを買いに、デパートの中のアリスって言う有名なチョコレートを扱うお店に買いに行った。

菜緒子は「結衣すごく込んでるね」皆で人を掻き分け店内に入りチョコを選んだ。

これこれ、これがいい、ひろくんも好きそうだ。私は、きれいにパッケージされたシフォンチョコを手に取り菜緒子たちに、私これにするってレジに向かい購入した。

もちろんカードでなく自分のこずかいで。余りにもさっさと購入したので菜緒子たちがびっくりしている、裕未が「結衣そのチョコ指輪の人？」って聞いてきた。

私は「へへへ」私はほほを赤らめて頷いた。今日は学校じゃないから例の指輪を着けてきているだ。

実は始業式の日、指輪を外すのを忘れ、その件でも菜緒子たちに散々からかわれてしまっていたんだ。

みんなは、「「「いいな彼氏がいる結衣は」」」って、みんなで笑ってくれた。

私は「だって裕未はいるじゃん」って言い返すのが精一杯だった。

裕未（足立 裕未）は同級生の彼氏がいるだ。でも他の菜緒子や佐織（西村 佐織）には彼氏はいない。

皆が言うのも無理はない。だって、私は彼氏居ない暦15年だったんだもん。

浮ついたことがないのが自慢。でも裏返せば臆病で引っ込み思案な私だけど、ひろくと再開してぱっと花が開いたみたいにはしゃぐ様になった私なのだ。

みんなにからかわれても無理はない。私は赤くなりながら頬を膨らました。

マンションに帰り冷蔵庫の中に見つからない様にカムフラージュを施し14日を待った。

今日はセント・バレンタインデー朝から私はテンションが上がって

いる。ひろくんは朝早くからお出かけ「帰りは7時の予定だよ」って昨日夕食時に予定を教えてくれた。

渡すのは帰ってからかな。学校に着くと菜緒子たちはチョコ談義で盛り上がっている。私は何事も無く授業を終わり帰宅し、ひろくんを待った。

ひろきサイド

今日は朝から、なぜか結衣のテンションが高めだ。テレビでバレンタイン特集を放送している。なるほどそういうことか・・・。

俺は今日も事務所でトラックいっぱいチョコと格闘（ほとんど寄付する）中の手紙の確認作業を行った後事務所を後にする。

白石さんが「後はこちらで処分します」と言って。私は、一度学園に顔を出してから帰宅する。

・・・ピンポン・・・

玄関の呼び鈴を鳴らすと「はい」って結衣の元気のいい返事が返ってきた。扉が開くと会心の笑みを浮かべて結衣が顔を出した。

結衣サイド

私は後ろにチョコの箱を隠し玄関の扉を開けた。

ひろくんが「ただいま」って言ったので、私は「おかえりなさい」って答えた。

私は玄関にあがったひろくんに「どうぞ」って後ろ手からチョコを出し両手を沿え少し頭を下げて渡した。告白のチョコを渡すように・・。

ひろきサイド

俺は結衣の差し出した箱を「ありがとう」って言って受け取る。結衣から受け取るチョコは格別だ。会心の笑みが出る。

結衣を思わず抱きしめてキスをした。案の定、結衣は真っ赤になって固まったようだ。

俺は固まっている結衣の横をする抜け着替えるために部屋に入って行った。

ホワイトデーは？

ホワイトデーは

俺は今日も白鳥学園で、今期からの教壇に立つための準備をしている。教科書や各種書類などを準備室に運び整頓する。

その後、プロダクションの事務所に向かうために学園での作業を半日で一時中断して。事務所に向う途中で事務所の人たちに配る品物を受け取り事務所に行った。

「あ、白石さんこれ」って、俺は頼んであった有名な洋菓子のセットを手渡す。白石さんは「いつも律儀ね」って軽く受け取ってくれる。

あと事務所の女性人に手渡しし、残りのいない人は名前を書いて机の上に置いていく。最後は結衣に渡すだけだ。

もちろん結衣の為に専用にレストランに予約が入れてあり、そこで花束と一緒にイヤリングを渡す予定だ。

マンションに帰った。ピンポン・・・。

少し早めに帰った俺は結衣に出かける支度をさせる。もちろんあらかじめ今日は外食だって伝えてある。

私はひろくに言われて小じゃれた格好をして出かける支度をした。私の好きな淡いピンクのワンピースに少しかかとの高いピンクのハイヒールにする。

髪はいつもはツイン三つ編みかポニーテールなのを、今日はサイドを細い三つ編みでまとめ後ろはストレートでまとめて少しは大人らしい格好にした。

ひろくんの「おい出かけるよ」の一言で玄関を出て車に乗り込む。まだ4時だどこへ行くんだろう？

車は一路海岸線を走っている。冬の海は波が荒いテトラポットに強い波しぶきが上がっている。海岸に降りられる場所で車を止め浜に下りる。

とぼとぼと海岸線を手をつなぎながら二人して歩く。心の中で「わーい、デートだ・デートだ」って少しテンションがあがっていた。

周りを見ると、やはり何人かのカップルが同じようにしていた。

やがて日も落ち、私たちは車に乗って海岸線沿いの大きなホテルに着いた。玄関に横付けし車を降りホテルに入っていった、展望エレベーターで最上階のレストランに向かった。

最上階に着いて中に入ると、ひろくんがウェイターに一言声を掛ける。ウェイターに見晴らしの良い予約席に案内された。

席に着いて、ウェイターにひろくんがよろしくって伝えるとしばらくして料理が運ばれてきた。どれもこれもおいしく、ひろくに「ありがとう」の連発で食事を取った。

食事が終わりひろくんが「ちょっと」と言って席を立った。

しばらくすると大きな花束を抱えてひろくんがやってきた「奥様どうぞ」って花束を渡されびっくりした。

花束を置くためのテーブルをウェイトレスが持ってきたので、そこに置くと今度は少し横長の赤いケースを渡された。

中を開けると、きらきら光るイヤリングが入っていた。私は「ありがとう」って言って思わず涙ぐんだ。私こんなにしていないのに。

ひろくんが「着けてみて」って言うのでもたまたしながら何とかつけ終わった。「似合ってるよ」って言うってくれ、ドキドキし顔中が赤くなって下を向いた。

ホワイトデーの夜は暮れていった。

P S ひろくんかっこつけすぎ!! b y結衣

中学の卒業式

卒業式

今日は中学校の卒業式の日です。空は快晴卒業式日和だった。

ひろくんが「今日は送り迎えしても良いだろう」と言ってきた。私は車で学校まで送り迎えしてもらう事にした。

私は「今日ぐらいは良いよね」って心の中でつぶやいた。

卒業生たちが両親と一緒に門に入って行っている。少しセンチになってとぼとぼと門を入って行くと、突然横から「「結衣」」って声が聞こえてきた。

その方を見るとなんと私の両親が立っていた。

ひろくんの方を見ると笑顔で手を振って車に乗り込んで行った。

私は両親に駆け寄り「来てくれたんだ、ありがとう」と少し涙ぐんで、お母さんに抱きついた。

お母さんは「ごねんね、こんな時ぐらいしか帰国できないのよ。だけれど学園の入学式はむりなの・・・がまんしてね」って言った。

また、お母さんは「ちゃんと暮らしている？喧嘩していない？」と訪ねてくれた。

私は、「仲良くしてるよ。ひろくんには一杯大事にしてもらって

ます」とお母さんに答えた。お母さんは「よかったね」って手握ってくれた。

そのときお母さんが左手の指輪に気がついた。今日は中学生最後の日だからこっそり指輪をはめて来たんだ。お母さんは「結衣これは？」といって左手を少し上に上げた。

私は「ひろくんにプレゼントされた。でも、いつでも付けれる様にイミテーションなんだって」って言った。

お母さんは指輪も見て、びっくりした顔を見せたが（この時すぐ本物だときずいたお母さんは「ひろきくんやるじゃない」心の中でつぶやいた）すぐ元に戻り「よかったね」って言うてくれた。

講堂に入って行くと奈緒たちがもう来ていた「おはよう」言いながら皆のところに駆け寄った。

佐織がいち早く私の左手の指輪に気づき「あゝ今日はしてるんだ！」と言った。

菜緒子や裕未も私の指輪を見て「ふうんゝ今日はしてきたんだ」声をそろえて、冷やかしかげに言った。

私は少し赤くなり「最後の日だからね」て答えた。

講堂に並んで卒業式を行っている、例年にのっとり校長先生のお話は長い・・・周りを見渡すと、両親が隣の人とお話をしている。

ようやく卒業証書の授与式だ。一組から一人ずつ名前を呼ばれる、よばれると「はい」と言って席を立つ、一組が終わり二組三組と進

む、私は三組で女子の6番だ。

名前を呼ばれる「紺野 結衣」名前を呼ばれて「はい」返事をして立ち上がる、今日で中学ともお別れだと思うと、胸が熱くなり少し涙ぐんだ。

式が終わり教室に戻って最後のホームルームが始まる。担任の加藤房子先生が最後の挨拶をする。

「皆さん、これからは全員がそれぞれの高校へ進むみますが、三組で培った和の心で困難に立ち向かって下さい」

「三年間ご苦労さまでした。又次の三年間に向かって進んでください」・・・女子はほとんどが泣いているもちろん私もだその一人だ。皆はある程度の団体で色々な高校に行くが、この中学から白鳥学園に進むのは私一人だけだ。とりあえず幼馴染で親友の弘子がいるんだけど心細いのことには変わらない。

菜緒子達は同じ高校に進む、最後に担任に一人ひとりが握手してお別れになる。

先生には私の手を握り「貴女の進む白鳥学園は紺野さん一人だけど、友達をいっぱい作ってがんばってね。最近の紺野さんなら大丈夫。」って言われた。

私は、両親と離れ離れでも落ち込まず以前より明るくなっていた。ひろくんのおかげだ「やっぱり彼氏（旦那さん）の存在は大きい」なって思った。

奈緒たちと集まりこれから時々会おうねって言って解散した。

帰り支度をし校門のところへ行くと、両親とひろくんが待っていてくれた。

ひろくんの車で帰る途中にレストランで昼食をとり、その後マンションへと向かった。

マンションに着くとお母さんが「良い所に住んでいるね」ってお母さんが周りを見渡して言った。

「ひろきくん張り込んだな」お父さんはマンションを見上げている。

私たちは両親に「部屋に行きましょう」とエレベーターに乗り込むと、30Fのボタンを押した。

”チン”と音と共に扉が開き最上階に着くと、私たちは先に降りて玄関に案内する

リビングで両親とひろくんが楽しそうに笑いながら雑談している間に。私は、飲み物を運ぶと、お父さんが「おお ちゃんと家事をやっているようだね」って言われたので。

私は「ちゃんとやってるよ!!」って言ってすこし頬を膨らませると。ひろくんも「ちゃんと、お嬢さんはがんばっています」なんて言われしまい。私は少し赤くなりながらうつむき加減で、ひろくんの隣にちょこんと座った。

両親に現在まで経過のお話をして、笑いなどで楽しく過ごした。

夕食は両親が泊まるホテルにする事にした。ホテルは駅前にある為、駐車場が少なく、私たちはタクシーで行くことにした。

ホテルのレストランでお父さんとひろくんはワインを飲みながら男のお話をしている。

お母さんと私は、もちろん家事やひろくんの話で盛り上がった。

ディナーが終わる少し前に、ひろくんから「今日は両親と水入らずでってホテルへ泊まるように」って進められ。私は、ひろくん甘えさせてもらって両親と一緒に泊まった。

翌日、ひろくんがホテルまで迎えに来てくれて、両親を空港へと送ってくれた。

別れ際に両親から「いつでも電話してね」って言われ。私は「ん、分かったよ時々連絡するね」って言い、お互いに体に気おつけてって「バイバイ」と手を振って見送った。

家に帰ると、やはり少し寂しくなり、少し涙ぐんだ。ひろくんが何気に肩を抱いてくれ、すこし暖かい気持ちになった。「ひろくんありがとう」心の中でお礼を言った。

春からは白鳥学園での高校生活が始まる。「ガッツだ結衣」!!! 新たに気合を入れなおした。

私、葵 結衣になりました。（前書き）

ついに結衣ちゃんの苗字が・・・

私、葵 結衣になりました。

私、葵 結衣になりました

今日は4月3日。私の誕生日なんだ。今日で私は16歳になる。

朝起きるとひろくんが「結衣、出かけるよ」って言われ、あわてて出かける準備をする。そしてすぐに車に乗って出かけた。

どこに行くのかな？なんて考えていると。車は役所に入って行った。「あ……そうだ今日だ」私は、婚姻届を出す日だって思い出した。なにやら数枚の書類を袋から出して、ひろくんと一緒に戸籍課の窓口を持って行った。

受付の女性役人が書類を確認し、私たちの方を見て「届出は受理されました。おめでとうございます、おしあわせに」って事務的に言われた。

余りにもあっけなく終わったので拍子抜けした。役所を出て、空を見上げると雲ひとつ無い快晴の空でした。

そして、又車に乗って走り始めた。小一時間ぐらい走った。今度は？どこかな？と思っていると、山の上のきれいなレストランに着いた。

隣には小さな教会が……。もしかして……。たぶんそうだ。やはり……。私は、ひろくんに手をとられ教会の横に入って行く。受付で「葵です」告げると奥の部屋に案内された。

中にはミニスカートの芸能人が着るような、ウエディングドレスが飾ってあった。

私は、着付けの方にあつと言う間に着替えさせられ、次の部屋に連れて行かれ髪をアップにし化粧を施された。

そして次の部屋に連れて行かれると、ひろくんが白いタキシードに着替えて待っていた。

ひろくんは私の手を取り教会の入り口に入って行った。その時ひろくんは「今日は二人きりだけで場所も、ここだけ高校を卒業したら皆を呼んでまたやろうね」って囁いた。

私は「ううん、いまはこれで十分だよ」ってはにかんで答えた。だ
いぶ火照ってる体も熱い。

手をつないで牧師さんの前まで来るといつものせりふ。

新郎葵ひろき、あなたは新婦紺野結衣が病めるときも、健やかなるときも愛を持って、生涯支えあう事を誓いますか？

ひろくんは「はい」って答え

新婦紺野結衣、あなたは新郎葵ひろきが病めるときも、健やかなるときも愛を持って、生涯支えあう事を誓いますか？

私は“ドキドキドキ”何とか「はい」って答えることが出来ました。

お互いに指輪をはめあった。プラチナのシンプルで素敵な指輪だった。

牧師さんの誓いのキスを・・・で

ちゅっ・・・

・・・誓いのキスは甘かった。（はあと）

その後私たちは隣接している写真館に行き、記念写真を撮り終え隣のレストランで昼食を取る。

ここは一般も出入りするため、タキシードにウェディングドレス姿はめちゃくちゃ目立ち注目の的になってしまう。私は芯まで真っ赤になりながら昼食をとる羽目になってしまった。

ひそひそ、「あの新婦かなり若いんじゃない？可愛くてお人形みたい。それにしても旦那さんはカッコいいね。私もそんな彼氏がほしいよー！！」

そんな言葉があっちこちで囁かれていたらしいが。私は舞い上が

っ
ていてほとんど聞こえなかった。

かなり羨ましがられているらしい。食事を運ぶときもウェイターは私にウインクするし、ウェイトレスはひろくんに色目を使っている。オーナーシェフが「本日カップルになられた葵夫妻へのプレゼントです」とケーキを持ってきた。私は恐縮し下を向いたままなかなか顔を上げられなかった。

レストランのお客さんや店の人に拍手やお祝いの言葉をもらった。うれしくて少し涙が出た。ひろくんはハンカチを渡してくれ、化粧が崩れないように、ちょんちょんと涙を拭いた。

普段着に着替えて帰りに、写真館に寄ると写真の出来上がり日時を教えてくれて、そして赤と青の長方形のケースを渡された。

中身を見るとハート型のペンダントが入っていた。中には寄り添った二人の写真が入っている。それをひろくんと私で掛け合った。

葵の姓になった事を心に刻んだ。（ひろくん大好きだよって）

本日 私は ” 葵 結衣 ” になりました。

私、葵 結衣になりました。（後書き）

次回より結衣ちゃん待望の学園生活が始まります。
薔薇色？それとも・・・

入学式 新任教師は？（前書き）

これからが、学園騒動のメインです。
葵夫妻は秘密を守れるのでしょうか。

入学式 新任教師は？

入学式 新任教師は？

今日4月5日は白鳥学園高等部の入学式

私はいつもの朝もより早くに起き、ひろくんに朝食を作った。（最近和食が多い）そして、ひろくを送り出してから私は制服に身を包む。

少し早めにマンションを出るためエレベーターを降りると、マンションの住人とすれ違った。

私「おはようございます」 住人「おはよう、あらその制服って白鳥学園ね新人生？」

「はい、そうです。今日入学式なのです。あ・私3001号室の葵です。よろしくお願いします」

「あらあらご丁寧に、210号室の多治見です。貴女その制服に合ってるわよ」って階段を上がろうとした。

私は「ありがとうございます」って頭を下げマンションを出て行った。学園までは徒歩で20分ぐらいだ。

学校に着いて門をくぐろうとすると、桜吹雪が足元を舞った「キャー」私は少し短いスカートを抑えた。

白鳥学園の女子の制服はブレザータイプでスカートはチェック柄の短めのミニだ。卒業生の有名なデザイナーがデザインしたらしい。

たしか”コウノ・ジュン”って言うデザイナーのはず。女子憧れのデザインだそうだ。

中に入っていくと、後ろから肩を叩かれた。後ろを振り向くと弘子がニコニコ笑って「おはよう」って声を掛けてくれた。

「同じクラスになると言いね」ってクラスの書いてある掲示板を見に行った。

1年A組・・・・・・・・二人の名前は無い

1年B組・・・・・・・・私は無いけど「あ！弘子の名前がある」

私とは違うクラスになっちゃった。

次々と見て行くと・・・E組に“葵 結衣”の名前があった。

「弘子、私E組」って言って、E組の名前を見に来る弘子に名前がばれないように、掲示板を見られない様に手を引っ張って足早に講堂に向かった。

離れたクラスでよかった。私が葵って事がわかると大変だ。普段は名前でしか呼ばないので判り難い。とりあえず、ばれるまで黙っているように・・・。

講堂に入ってクラスごとに整列する。並んでいると後ろから肩をたたかれた。振り向くと鼻の辺りに少しそばかすがある可愛い子が叩

いていた。

「私、佐藤 由美 由美って呼んで」って声を掛けてくれた。「私は、葵 結衣 こちらこそよろしくおねがいます」由美は「葵さんって堅いね、結衣って呼んでいい？」って聞いてきたので、「うん、いいよ よろしく由美」って答えた。

由美は私の左手の指輪を見て「彼氏っているの？」って言ったので「う・うん彼氏はいない」って答えてしまった。

旦那さんは彼氏じゃないはず。由美は「なんだ、魔よけか」って言った。以前、菜緒子が「指輪をすれば魔よけになるよ」って言ったのを思い出した。

旦那さんは彼氏と呼ばないもんね。意味がわからず。魔よけって言われてしまったので、そのままにすることにした。

魔よけってどう有意味だろう……。天然の結衣には意味も判らず使ってしまっただけだった。

周りを見ると20〜30人に1人ぐらいの割合で左手に指輪をしている。後で聞いた話だけとお金持ちや有名人の子供が多いようで許婚の関係者が多いって話だった。

講堂で入学セレモニーが行われ、校長先生の挨拶の後に教員の名前が呼ばれ挨拶をする。

「1年A組を担当する谷竹 澄矢です……………」

「1年B組を担当する田石 行隆です、教科担当は英語です判らない事はどんどん聞いてください」って挨拶した。かなりの女子の目がハートの形をしている。

弘子のクラス担当イケメンじゃん。いいな、そしてC組・D・・・そしてE組の番になる。

「1年E組を担当する田中 久晴です。教科担当は現国です。そして私のクラスには副担任が付きます」と言った。その後びっくりする事が・・・。

なんと、ひろくんが壇上に上がり「1年E組の副担任をすることになった新任の葵 ひろきです。教科担当は物理と情報補佐です主に物理を担当します。新任ですので皆様お手柔らかに」ってあいさつした。

私は、あまりにもびっくりして固まってしまった。後ろで由美が「葵先生って格好よくてかなりのイケメンじゃん。ラッキー」って言った。

私はあいまいに「う・うん」って答えるしかなかった。

入学式が終わり自分たちは各自にクラスが書いてある教室へ入る。席順は男女混合のあいいうえお順だ。“あ”行は私葵と青山君しかおらず、私が先頭になる。席は廊下側の一番前になる。

担任の田中先生とひろくんが教室に入ってきて挨拶をする。

「えー私が担任の田中久晴です」黒板に名前を書きながら「現国の担当します」「次、葵先生挨拶を」そして、ひろくんが表壇に立つ。

「E組の副担任になりました。新任教師の葵 ひろきです。初めてですので、よろしく願います」といった。

田中先生が「出席をかねて名前を呼ばれたら自己紹介をしてください」「それでは一番葵さん」わ！私が一番だ。

「えーっと、葵 結衣です。青葉中学から来ました。よろしくおねがいします」一番なのであたふたして答えた。

「二番青山君」

「青山 正美です。白鳥の進学組です。得意はスポーツ一般、彼女募集中です」周りから、くすくすって笑い声が聞こえた。

三番伊藤君・・・上野さん・・・次々に進み。

最後、渡辺 薫さん

「私は渡辺 薫です。西條中学出身です。得意はお菓子づくりです。それと（少し赤くなり）婚約者がいます」と左手を上げ薬指の指輪を見せた。

田中先生は「おお、おまえか、例のお話は」って言う。みんな「「えーなんですか？」」「って聞いた。

先生は「渡辺は三年生に鳳って言う婚約者がいるんだ」って田中先生が言うと、渡辺さんが真っ赤になってうつむいた。

田中先生は「次は俺だな、講堂で言ったように担当は現国。年齢は45歳で家内と3人の子供。上から女・男・女、下二人は双子だ。なにか質問は？」

クラスの女子が「「無いでーす。早く葵先生をお願いします（はあと）」」ってひろくんの挨拶を即した。

えー私は「ひろくんもてるんだ」っと、その時はそれしか頭に浮かばなかった。

当然次は、ひろくんの番で「新任の葵 ひろきです。教壇に立つのは教育実習以来ですが皆さんと仲良くやって行きたいと思います。よろしくお願いします」って言う。

「先生、年齢は、誕生日は、彼女いるんですか？住んでいる場所は？」次々に質問が飛ぶ。

「年齢は26歳」「生まれは9月」「彼女はヒミツ」「住所は・・・個人情報なのでNGです」って答えた。

再度女子生徒たちが「「「彼女は？」」「」って言う。ひろくんは「それはヒミツって答えましたよ」

上野（上野 里美）さんが手を上げ「でも私は、彼女に立候補します」って言い切った。クラス中がざわついた。

田中先生が「もうこれまで、次は、クラス委員の選任に入ります」

「立候補者は？」・・・どうもこの学校の委員は大変のようだ。積極派が多いと思ったのに、意外と立候補しない。

田中先生は「・・・まあいい。葵さんと青山君でお願いしたい。葵さんは他校出身だから副委員をお願いします」って言った。

青山君は私に手を出して「よろしくお願いします」って言った。私は戸惑いながら握手を交わし「こちらこそ、判らないことばかりですが、おねがいします」頭を下げた。

本日はこれで終わりとします。各自書類を忘れないように。後購買で教科書などが在りますので、それを受け取って本日は終了です。

すぐ購買に行く人や、こんでるので少し遅く行く人などで、教室内が少しずつ減ってゆく。

教室で皆が雑談しているとき、私に渡辺さんが声を掛けて来た。「あなたも指輪してるけど私と一緒に？」

私は佐藤さんに言ったのと同じに「魔よけなの。これってイミテーション」って左手を見せた。渡辺さんは「本当？」って疑っている。

「へへへ」私は結婚しているのを笑ってごまかした。仲良くしようって手を出してきたので両手で握って「こちらこそ、よろしく！」って答えた。

（実はこの時点で渡辺さんは指輪が本物のダイヤモンドってことを見破っていた。後で解るのだが彼女のお母さんは宝石のデザイナーだった。）

その時後ろで「葵さんって青葉中学出身ですって」速水 裕子さんと後藤 絵美さんが声を掛けてきた。

「私たち青葉中学校下なのよ、小学校は青葉東小なの」って言った。私は「青葉西小出身」って答えた。

四人で紹介しあった。ひろくんの葵って苗字が一緒なのを聞かれたとき。しらくっと同じ苗字なんて珍しいねって自分で言っでごまかした。

後は渡した各種書類をまとめて、皆と雑談してから購買で用意された教科書を受け取ってから、もう一度教室に戻った。

教室に戻って休憩していると・・・ブブブブ携帯を見るとひろくんからのメールだ。「一緒帰ろう後一時間ぐらい待って」って内容で、私は「OK」ってメールを返し教室で待つことにした。

皆は、大半の人が両親たちと、帰っていて校舎には残っている生徒はほとんどいない。椅子に座って、ぼくっとしてっていると、大分たってから教室にひろくんが現れた。

ガラガラガラ・・・ひろくんが「葵さん」私は「ひろくん」って言う、ひろくんは唇に人差し指を当てて「シー・・・ここでは葵先生だよ」って言った。まだ何人かは学校に残っている。

私はプーって頬を膨らませると、ほっぺを突いて「帰ろうか」って言って、荷物を持ってくれて教室を出た。以外にも誰にも会わず車にたどり着いた。

ひろくんに「聞きたいことがいっぱいあるんだけど」って言う「あとで・・・」って言われた。家に帰ったら、じっくり聞こう。岐

路に着いた。

入学式 新任教師は？（後書き）

つたない小説を読んでくださる読者様。

私事及び社の都合で更新が遅れます。早くて12日遅くなると15日以降になりそうです。

下書きはそれなりですが、読みやすくするための修正作業が・・・。
次回は結衣の？にひろくんが答えます。「では更新日に」

彼はモテモテ

彼はモテモテ

私は車の中でも？マークがいっぱいで、もんもんしていると、マシヨンに着いた。

私は玄関にすばやく入り振り返りざま仁王立ちで玄関先のひろくに「ちゃんときかせてね」って言うってからリビングに向かった。

ひろくんはニコって笑いながら私の部屋に荷物を運んでくれた。

リビングで座っていると、ひろくんが私の荷物を片付けて隣に座ってきた。ひろくんは「ちゃんと説明するよ」って話し始めた。

「親父に教師のお願いを言われたときは、結衣の事は知らなかったんだ。1月終わりに学園に挨拶をした時に理事長から聞かされた」

「理事長からばれないように言われたから、今日まで黙っていた“ごめんね”」ひろくんは頭を下げた。

「えー私たちのことは理事長公認なの？」って言うと、ひろくんは「実は理事長と結衣の両親とは顔なじみなんだ。」って教えてくれた。

そして「俺は理事長と遠縁だがつながりがあるらしい。教師を頼まれたのもその関係」って教えてくれた。

「但し結婚しているのは理事長は知ってるけど他の人には内緒だよ」

とも言われた。

私は頬をプーって少し膨らましたが「黙っていたことは、ゆるしてあげる」って言って、ひろくにすばやくキスして着替えする為に部屋に向った。

両手を頬に当て、わく顔が赤い！！！！

俺は結衣が初めて自分からキスをしたのでびっくりして少し固まってしまった。「結衣って意外と大胆なんだ。」

私はひろくんの行動や態度の一端が判った。それ以外にも秘密な所はあるの様な気がするけど、今はひろくんの言葉を信じよう。

二人で夕食後に学園での態度のとり方などを話し合った。メインは、ひろくんは「先生」私は「生徒」の態度でってことだった。

当たり前って言ってしまえば、それまで何だけど。少し位は甘えてもって思うんだけど、ひろくんはだめだって！「プンプン」

私は心の中で「でも学園を出れば」旦那様と奥さんの関係」だもんね」って強く思った。

授業は始まった。物理の授業は多くなく、週一の割合でひろくんの授業がある。教え方はうまいが態度はクールな態度になっている。

しかし私のクラスの副担任“葵 ひろき”先生は格好・性格はまじめで一本やりの堅物態度なのに、なぜか、やたらともてるらしい。

（女子生徒はクールで真面目なのに問題の答えで正解を出すと、カッコいい微笑を浮かべるらしく、女子のハートをわしづかみにしているらしい）

物理準備室には、いつも黄色い声がするらしい。私はいつもひやひやだ。とくに里美さんが積極的だ。昼休みや放課後には必ず準備室に訪れる。

家に帰ってから文句を言うところくんは苦笑いをしている。実際に困っているようだ。

ようやく俺も結衣も学園生活に慣れてきて、お弁当を作ってくれるようになってきた。準備室や職員室で食べるのだが、

読者も解ると思うが当然の様に、ご飯の上には”ハートマーク”が必ずある。しかも中身はやはり少女趣味だ。

職員室では隣の先生に覗かれそうになり。お弁当の内容から自分で作ったとは言えず、仕方がなく物理の準備室で食べることにした。

昼食時も準備室に上野さんたちがやってくるので、中身を見られないようにするのが大変だ。

俺は上野たちに弁当を覗かれないように、生徒たちには休憩用ソファ―に座って貰っている。

一度上野が自分で私にお弁当を作ってくれて持ってきて強引に迫ったが、一度許すといんでもない事になりそうで必死に断った。泣く泣く諦めてくれたが・・・。

家に帰ってそのことを伝えようと。困惑しながらも断った姿を想像され、最後には結衣に腹を抱えて笑われてしまった。

その後も色んな方法で俺に迫ってくる。一度色仕掛けで迫ってきたときは真っ青になってしまった。

準備室を出入り禁止にも出来ず。これからも色々苦汁をなめることになる。ホッとする時は家に帰った時だけだ。唯一結衣の笑顔が俺の元気の源だ。

実は俺、学園を時々抜け出して芸能化活動も行っている。とりあえず結衣にはまだばれていない様だ。

ひろくんは、なぜか毎日学園に来ることは無い。朝から来るのは週二回程度で午後から一回、ほかに大事な用事があるらしい。私は里美のような付回し行動はしないので解らなかった。

本人は前にやっていた関係の仕事で、「時々お願いされるから」っ
てしか教えてくれなかった。

それでも毎日弁当は持ってゆくし、必ずきちんと食べてくれているみたいだ。（お弁当の中身の味を教えてください）

通常は一年だけの担当だったが・・・。

二年の物理担当の斉木先生がインフルエンザで休んだ時。代理で授業を行ったら、すこぶる評判がよくて。元々始業式あたりで目をつけられていたらしく、二年を中心に口コミで三年生まで拡がり。

最近は二年や三年生までもひろくんを追いかけるみたいになってしまった。

実はこれらが大変で、学年を越えて、もてまくり、ひろくんは逃げ回るのが大変で。わたしは嫉妬を通り越し呆れ返った。「ふう〜」

彼はモテモテ（後書き）

私用は終わりましたが、今度は社用で投稿が遅れます。
15日ぐらいを予定しています。

次回はゴールデンウィークの出来事です。

連休の過ごし方

連休の過ごし方

今日から五月の連休が始まる。今年は日曜がうまいこと祭日の間に入ってすごく長い休みになった。

いつもだったら家族で小旅行の予定だけど。両親は海外へ出向しちゃって私は結婚したからいつもと違う。

今回は、ひろくと温泉宿泊の予定2泊3日の旅行をする。後の残りの日はクラスメイトの裕子（速見 裕子）・絵美（後藤 絵美）そして私、結衣の三人でHIROのコンサートを見る計画を立てた。

もっとも旅行はひろくん任せになっているし、HIROのコンサートも裕子任なのだ。「へへへ・・・」HIROは芸能活動を少なくしているのでチケット取りは大変だったらしい。

最初は温泉旅行に出かける。ひろくんの運転する車で山奥の秘境温泉に向かう。山道をぐんぐん進むと、ぽつんと一軒宿が見えた。

玄関先につけると中から番頭さんが現れ、私たちの荷物を持ってくれて中に案内された。

玄関に入ると和服の似合う綺麗な女将さんに、「私は当旅館の若女将の静香と申します」って頭を下げて。「葵様ご夫妻ですね。ようこそお越しくさいました」と頭を下げた。

ひろくんは「無理言ってごめん。よろしくおねがいします」と言う

と。女将さんが部屋まで案内してくれた。

道中の途中に、女将さんがひろくんの耳元でなにかつぶやいていた。俺は少し赤くなったが結衣に見られないようにした。

離れの一軒家の部屋に案内されると、一旦女将さんは「又挨拶に来ます」と部屋を出て行った。

私はひろくに少し嫉妬気味に「女将さんになんて言われたの?」って言う。ひろくんは「結婚したんだね」って言われた。

「実は彼女と俺は大学時代の同級生で、同じサークルに入っていたんだ。彼女は結婚して、ここを継いで2年になるはず」って答えてくれた。

実は女将さんが言ったことはまったく違って、結衣には秘密だが「ひろきくん、可愛い奥さんじゃない。もう! 堅物がどうしの?」って言われたんだ。

女性に関して堅物で通っている俺が、どう見ても二十歳以下しか見えない彼女（奥さん）連れだから、そんなことを言われても無理は無い。

しかも結衣は大人びた服装をしても、童顔の彼女は二十歳以下しか見えない。そりゃそうなんだって奥様は16歳なんだ。

結衣は「ふうん」って言ってなっとく? してくれた。

お部屋から外の景観はすばらしく、どこを見ても感激するばかりだ。

ひろくんは「お風呂に入ろうか」って言った後。「ここは個室の家族風呂だよ、夫婦なんだから一緒には入ろうか？」なんて追撃を掛けたので、私は舌を出し「いやです。べー」って私は浴衣を持っ
て、さっさと一人で入りに行った。

俺は冗談でお風呂の一緒に入ろうと言ったのに。すごく赤い顔をして、あかんべーをしてあわててお風呂に入ってしまった。

ばかなやつ、先に入れば後から入って行くのが出来るのに・・・もっともそんなつもりはないが。

結衣が入って後俺が入って出てきたところで、料理が運ばれ女将が挨拶に来た。

ひろくに女将さんとの関係を聞いていたので、にこやかにお話が出来た。

料理はすばらしく大変おいしくいただいた。女将さんの旦那さんが作ってるらしい、最後に少し顔を出してくれた。

現われた旦那さんは、すごくイケメンでびっくり・・・。旦那さんは女将さんに一言言って調理場に戻っていった。

女将さんと旦那さんは大学時代のサークル仲間だったそうで、おちやらけて、ひろくんにはアタックしたらしい。

もっともその時は婚約者同士だったそうで、ひろくんがあまりにも堅物なので、いじめでアタックしたらしいが見向きもされず不発になったらしい。

食事が終わり夜の散歩に出て夜空を見上げると満天の星空だった。おもわず「きれい！」って言ったら冬はもっと綺麗らしいよ。又来ようといってくれた。

この旅館はなかなか予約が取れないすごく有名な旅館だってことは後で知った。

部屋に帰ると、寝室に二組の布団が寄り添って引いてあった。”ドキ” ってしたけど知らない振りをして、たわいも無いお話をし眠ることにした。

ひろくんと同じ部屋で初めて眠る。心臓がバクバクしている。ひろくんは布団から手を出しそっと私の手を握ってくれた。ひろくんのやさしさにふれた気がした。

少しセンチになり「そっちに言っただい？」って聞くと「うん」って頷いてくれたので、そっとひろくんの布団に入った。

ひろくんはやさしくキスをして抱きしめてくれたけどそこまでだった。ほんわか暖かく眠りに着いた。

結衣が俺の布団の中に入ってきた。キスして抱きしめていると、心

が落ち着く……。結衣が少しあくびをし眠りに入った。

かわいい寝顔を横目に俺も眠りに着いた。

朝起きると、ひろくんが居ない？きょんとしていると、ひろくんが帰ってきた。朝風呂に入っていたらしい。

結衣もどうだといわれ、入ってこようになって思ってた支度をしていると、食事の準備をしようと仲居さんが聞いてきた。

私がタオルを持ってうろうろしていると。仲居さんが「少し遅らしましょう」と言ってくれたのでゆったり朝風呂に入ることが出来た。

朝風呂は又違って格別だった。仲居さんにわががまを聞いて貰いゆったり入らしてもらった。

次の日も同じところに泊まり一緒に布団で眠った。まだ俺は結衣にそこまでするつもりは無い。堅物の理性が勝っている。

でも、ここに無理を言って予約を入れてよかった。女将さんが、かなり無理して空けてくれたらしい。「静香ありがとう」って感謝した。

気分すっきり。二人の関係も近づいて。のんびり気分も上々の二泊旅だった。

後半は裕子が、がんばってチケットを取ってくれたH I R Oのコンサートだ。

ひろくんは朝早くから出かけてしまっ居ない。私は裕子たちとの待ち合わせの駅に向かった。

駅には裕子がもう来ていた。絵美はまだのようだ。しばらくすると「はい」って絵美が駆けてきた。

三人そろったので電車に乗りコンサート会場がある駅に降り立った。コンサート会場に着くと熱気でむんむんしていた。

私たちは受付でチケットを見せて会場に入って行く。座席位置は・・前列から五番目ですごくいい席だ。裕子に感謝だ。絵美と二人して「「ありがとう裕子」」ってお礼を述べた。

H I R Oのコンサートはすごかった。途中でH I R Oが私に視線を合わせウィンクしたように見えた。

周りの子は「「「キャー!!!」」」って大声を上げて喜んでいる。

私は頭に？が浮かんた「私に？」どうして？裕子たちは判らなかつた様だ。それでもみんなにつられて、盛り上がった。

私は裕子たちとハイテンションになり、コンサートが終わってから

も、H I R Oの歌を口づさみながら岐路についた。

家に帰ってくると、まだひろくんはまだ帰っておらず、2時間後に疲れて帰ってきた。

私が、がんばって作った夕食を食べてくれて、ボタン急で寝てしまった。「何して疲れたんだろう？」疑問符を浮かべながらも片付けて眠りに着いた。

俺は結衣から「友人の速水がチケットを申し込んだ」って聞いたから。裏から手を回し俺の判り易い座席のチケットを速水に送った。これで結衣の位置がわかる。

途中で目を合わせウインクすると結衣がキョトンとした。「かわいいやつ！」さらに元気が出て、後半さらにテンションを上げてコンサートをこなした。

結衣のがんばった食事である程度の回復はしたが、久々でテンションをあげすぎた為。疲労が出、ボタン急と寝てしまった。

私たちのゴールデンウィークが終わった。

学校が始まるといつもの追っかけが始まった。これはこれで困っているが・・・。

それでも私たちは旅行の日から時々一緒にベットで寝るようになったので安心感がふえた。

主婦は大変

主婦は大変

今日はマンションの会合があり管理人さんを含めて、半年に一回のお話し合いをすることになっている。

ひろくんは仕事で出られない為、私が出席するんだ。高校生だけど主婦してるから会合も出席しなくっちゃいけない。

まず管理業者の酒向主任が挨拶をする。後は各階の代表住人から挨拶する。

私も「30階の葵です」って挨拶をした。皆は、たぶん兄妹だと思われるんでいるんだと思う。

内容はごみの分別収集・建物の保全・周囲環境への配慮などを話しあいを行った。

どこでも出たがりおばさんが居るもので、2Fの210号室の多治見婦人が色々と切り回す。管理業者の酒向主任はたじたじだ。

当然、私はこんな集会には一度も出たことが有る訳がない。決められた内容を記憶するので精一杯だ。意見など出るわけが無い。

ごみ収集の管理不手際や周辺の木々の管理など住居人トラブルなど、一括管理方式なので余り関係ないと思っていたのだけど・・・。

なにやら不具合などあるようなんだって。

入学式以来、出たがりお婆さんの多治見婦人とは会う事、毎にいろいろお話をしてくれる。

あそこのケーキ屋はおいしいとか、あのピザ屋はちょっと味が濃目だとか、話すことに、ことかかない。

ショッピングセンターなどで会うと30分ぐらいは時間をとられる。又主婦が集まる会合いいわゆる井戸端会議にも半強制に参加させられている。

いくら家計を預かっているとは言え、若干16歳では話について行ける理由が無い。ただただ聞き手一本になる。

家事・炊事・洗濯・近所付き合い・ETC・・・

「ふう」 新米主婦は大変だ。

他校との交流会（前書き）

危ない前兆です。

他校との交流会

他校との交流会

白鳥学園は毎年。学年ごとに一クラスを選び隣近の学校と親睦を図るため交流会を行っている。

今年は、私たちのクラスが選ばれた。交流相手は隣町の西邦高等学校だった。ここは男子校で余り評判はよくない。

ほかの学校などとは仲良く円満な関係が気づけているのだけど。なぜか西邦とは相性がよくない。

「あゝあ、なんで選ばれたのだろうか？」たいへんになりそう。

里美（視線）

葵先生の視線がどうも結衣に集まっているような気がする。

いろいろがんばって葵先生を私のものにしようと、努力はしているのだけど（手弁当や・色仕掛け準備室に行くときは、必ずブラウスのボタンは上の二個は必ず外しブラを見えるようにして。スカートを折り返し短いのをさらに短くし見せパンもはかずに、ちら見せしているのに）ぜんぜん相手にもしてもらえない。

準備室に来る人のほとんどは部屋に入る前で必ずスカートを短くしている。その中でも、私が一番短くしていると言うのに……。視線を向けようもしない。

葵先生が授業のミニテストや授業中の回答当てなど結衣を見る回数が多いような気がする。苗字が一緒だけど。

結衣は関係は無いよ、なんて言ってるけど、何か秘密でもある様な気がする。

いい具合に私たちのクラスが親睦に選ばれたので、西邦の人を利用して結衣を調べる計画を立てようと考えた。

交流会はクラスの半数が西邦の人と入れ替えを1週間ごとに行い、お互いの親睦を図る事になっている。

最初の一週間は結衣や薫たちと一緒に西邦高等学校で一週間交流会をする。

私が西邦に行ったときの隣の席にチャラ系の人が居た。その人はクラスでも少し浮いている人で、声を掛けると簡単に載って来た。

名前は山田英二っていう人で結衣の行動を調べたいと言うと「面白そうじゃん」って、ひとつ返事で引き受けてくれた。

山田英二（視線）

俺は白鳥学園の上野って言うやつに声を掛けられた。俺はクラスで浮いた存在でほとんどの話しかけられることは無い。

久しく、女と口を聞いていなかったの、すぐ話に乗った。話は窓際にいるめがねを掛けて髪が長く小柄な俺ごろみの女の素性が知っていたってことだった。

なぜって聞くと、上野の好きな奴とめがね女との関係を調べてほしいらしい。OKするとメアドを聞いてきたので教えてやった。

交流会が終わってしばらくすると、例の女からメールが届いた。明後日学園から帰るのを後をつけてくれって話だった。

眼鏡の女をつけてゆくと電車に乗って行く。俺は組の車で即けていたので追うことができなかった。

次の日は俺に用事があり、翌日は女がデパートの下着売り場に入ったので、つけることができなかった。

当然、見失ってしまい、数日たっても、あれやこれやで女の家までもたどり着くことができなかった。

そのうち夏休みに入り例の女は長期で出かけたようで見つけることができなかった。

里美（視線）

その時私は山田君を利用し、ひろくと仲のよい人たちを排除すべく計画を立てる。その一番手として、結衣の気になる行動を調べようとするが……。

山田君に連絡を取り行動を調べてもらおうとした矢先に夏休みが来た。結衣の私生活が分かるかも……。

しかし、なぜか山田君の話では長期に出かけているのかどこにもいないって話だった。

私は幸か不幸かストーカーされなかったみたいだ。

すぐ夏休みに入り結衣がひろくんの実家で夏中過ごすことで、山田君は彼女の行動を調べることが出来ないまま夏が終わってしまうって感じのラッキーのようだ。

しかしその為、次の行動に移る機会を里美たちは狙っていた。そしてみんなの忘れていた頃に次の事件が起きる。

私は、交流会が終わったあたりより、おかしい視線を感じることがあったが、ひろくんと仲のいい為のやっかみ？と勘違いし、ひろくんに知らせなかった。

私は苗字が同じ（当たり前だが）のせいで、ひろくに好意を持つ人からいじめもどきを受けていた為。

大きな危険に気が付かなかった。でも、いじめもどきと言っても実害はほとんど無く冷たい視線や呼び出しでのお小言ぐらいで危険意識が薄かった為に・・・。

この危険信号を見落としたのが、後で大変なことになるのであった。

他校との交流会（後書き）

記憶しておいてください。

長い夏休み「はじめまして結衣です」

長い夏休み「はじめまして結衣です」（ひろくんの両親と）

今、ひろくんが彼の実家に向かって車を進めている。昔はよくひろくんの家で逢っていたはずなのに結構緊張している。

ひろくんがあと15分ぐらいで着くよって言われていつそう心臓がドキドキしてきた。

どうやって挨拶しようって考えているうちに、ひろくんが大きな屋敷に入っていた。

玄関で車を止めると、すこし覚えがありそうな綺麗な女の人が出迎えてくれた。

女の人はやはりひろくんのお母さんで、ひろくんは「お袋、ただいま。結衣を連れてきたよ」って紹介してくれた。

私は「結衣です。お招きありがとうございます。もっと早く来なければならぬのですが申し訳ありませんでした」って挨拶した。

お義母さんは「まあ、結衣ちゃん大きくなってますます可愛くなっただね」って両手を握ってきた。

私は、お義母さんに背中を押されて玄関に入ると、ひろくんのお父さんが出迎えてくれた。私は「結衣です」って頭を下げた。

お義父さんは「おお来てくれてありがとう、ひろきがわがママを言

っているんじゃないかな」って言ってニコニコしている。

私は「そんなことはありません。いろいろ手伝ってもらってます」って答えた。

少しドキドキが少し収まったようだ。リビングへ行き、現在のお話と昔のお話で花咲いた。

お義母さんは私のことを”可愛い可愛い”の連発で「ひろき！奥さんを夏休みの間少し貸して貰うわよ」って宣言した。私どうすればいいんだろう？

夕方お義母さんと一緒に夕食を作った。

お義母さんは「結衣のお母さんより何も出来ないって言ったけどそうでもないわね」って言われ、ひろくんの為に努力ことが認められた気がした。

お義母さんと私の両親とはツーカーの仲なので、言っていることは、うそでは無いのはリビングのお話で判っていた。私は、はにかみながら「うれしいです」って答えた。

結局、私は夏休みのほとんどを、ひろくんの実家で過ごす事になってしまった。

そのおかげで、私の料理の腕はかなりUPした・・・と思う。お母さんに教えてもらっていない、その他の家事も一緒に教えてもらった。

花嫁修業？・・・もう奥さんだからそうは言わないけど同じような

ものだもの……。でもお義母さんの嫁の教育は楽しく一杯勉強になった。

あとはクラスメイトとは映画を見に行く程度で、夏休みの、ほとんどはお義母さんに振り回された。でもひろくんの両親は私を実の娘のように接してくれる。

がみがみ怒られたり、頭をなでてほめられたりした。本当にいい義両親だ。ひろくんも安心してか、例の仕事に出かけているようだ。

私はよくお義母さんに、大きなデパートに連れて行かれ一杯いろんなものを買ってもらった。

お義母さんは「娘がようやく出来てうれしいわ」って喜んでくれた。でも私は、いろいろ着替えさせられ、着せ替え人形にさせられてしまった。

どうもこれが後に続く予行練習だったようなのだった。

夏休みの中盤。私はお義母さんに連れられ、分けも判らず某プロダクションの写真スタジオに連れて行かれた。

おろおろしているとお義母さんが私をスタイリストに連れて行き、スタイリストさんに「よろしく」ってどこかへ行ってしまった。

スタイリストさんは「私はスタイリスト担当の粥川有希ですよろしくね」って言った。私は、ばたばたと着替えさせられメイクするとスタジオに連れて行かれた。

スタジオに行くと青い垂れ幕の前に連れて行かれて、ここに居る様にいわれた。そしてカメラマンさんが私にポーズの指示をする。

お母さんが総監督をしているらしい。

カメラマンがお義母さんの指示により、私に命令し、いろんなポーズをさせられ、私を写すため次々とシャッターを切っていく。

私はストロボの中いわれた通りにポーズを取らされている。

私は、めがねを獲られストロボの光で周りが見えなく、いわれる通りにするしかなかった。又着替えも何回か着替えさせられもうわけがわからない。

撮影が終わり着替えるとお義母さんが「結衣ちゃんありがとう助かったわ」って家まで一緒に帰った。あわただしかった一日が終わった。

後でひろくに言うと、ひろくんがお義母さんに理由を聞きにいった。

俺は結衣に言われて、お袋のしたことを聞きに言った。

実はお袋は俺たちの教会での写真を見て、今度立ち上げる雑誌ジュジュのモデルにしようと、俺たちが来るのをてぐすね引いて待っていたって打ち明けた。

結衣の撮影したモデルの写真データーを見せてもらったが、めがねを掛けて普段着の結衣とは別人のようで余りにも可愛くびっくりした。

お袋は「元がいいからどんな衣装でも似合うでしょ？これからは”ジュジュ” 専属モデルよ、反論は無しね！」って宣言された。

お袋は言い出したら梔子でも動かない。諦めるしかなく「あまり結衣を引っ張りまわさない様に」って言うのが精一杯だった。

どうやって結衣を説得しよう・・・俺は頭を抱えた。

ひろくんにモデルの件を言われ、私は「ええ」って言うことしか出来なかった。

翌日お義母さんに「昨日はありがとう。これからよろしくね」って言われ、私は苦笑いするしかなかった。

夏休みの後半に、もう一度モデルをやらされて、あわただしくマンションに戻った。楽しかったけど大変でもあった夏休みだった。

さらには秋には白鳥学園のパンフレット作成に制服モデルもやらされた。

この制服モデルが私に災難？をもたらすとはこの時点では何も考えられなかった。

ひろくんのツアーと私の小さな親切

ひろくんのツアーと私の小さな親切

俺は結衣がお袋と仲良くなっているのをチャンスに、結衣をお袋に預けてツアーを行うことにした。

この夏は教師と・芸能活動と・旦那さんの三役の内、おろそかになっている芸能活動にメインをしたかった。

運よく、お袋と結衣が仲良くして結衣を手元から離さない。結衣はお袋のおもちや状態だ。

まあ昔から結衣を娘にほしって耳にたこが出来るぐらい聞かされたので、今回の実家訪問で現実になったから結衣には申し訳ないが・・お袋に捕まってほしいので都合がよかったが余りの溺愛ぶりに少しは結衣が可愛そうにも思えた。

今がチャンス実家訪問中に夏休みツアーを決行しようって計画だ。

事務所の社長は大変喜んで押さえてあった会場の確認をして、すぐミニライブツアーを計画した。

地方には申し訳ないが大都市のみのしかも夜は開催しないという変則ライブを開催することになった。

基本は結衣が一番なのだ。そして夜は結衣が心配するかもしれないのでトンボ帰りできる場所を選んだ。

かなり芸能生活を抑えていたので各地でのライブはファンにとって大喜びで大変盛況の内ミニライブは終了した。

どこに行っても多くのファンに囲まれ、ライブの楽しさを体で感じた。今回のツアーだった。

ドラマの話しも、もち上ったが時間的に無理だったので断らざるを得ない。ただラジオなどのゲスト出演などは少しずつ続けることにする。

久々に黄色い声を聞いて気合が入り充実したライブをこなす事が出来た。

少しはお袋に感謝かな、結衣の相手をありがとう。

私は、ひろくんが出かけている間にマンションに用事が出来た為一度戻ることにした。

マンションの前までくると勢いよく車が出てきた「危ないな」って思っていると、勢いよく出てきた車を避けようと、オートバイが「キー」って音を立てスリップしマンションの入り口に向かって転んできた。

オートバイに乗っていた人が足を抱えて蹲って痛そうだ、私は駆け寄り声を掛けたが痛くて返事が出来ないみたいだ。

救急車を呼ぶべく119に電話を掛けているとマンション内から多治見夫妻が出てきた。事情を話すと旦那さんが俺が警察を呼ぼうって携帯から電話を掛けてくれた。

私は救急車が来るまでの間にライダーさんの擦り傷の手当てをした。結構痛いらしく「う・う」って唸っていた。

肝心の勢いよう出てきた車の持ち主は車は降りて来たがおろおろして何も出来ないようだ。

多治見婦人が「あ、あなた15階の西川君のところの透君じゃない？」って言うと、ようやく口をきいた。

「はい、そうです」「車で出かけようとして道路に出たら、急にオートバイが・・・」

救急車が到着しオートバイのライダーさんを乗せて病院に向かっていった。私は部屋に戻り用事を済ませて下に降りると、警察が来て多治見夫妻が相手をしていた。

目撃者って言うことで私が説明をして後は西川君にも現場確認してその場の処理は終わった。

多治見夫妻が西川君に「透君お見舞いに行ったほうがよいよ」って言ったけど、彼は中々行動を取れなかった。

私は傷のことが少し気になったので「多治見夫妻に皆さんで行きましよう」って西川君をフォローすべく多治見夫妻を誘った。

「乗りかかった船ね」って多治見婦人は言い、旦那さんに車を用意するように言った。旦那さんは苦笑いをして車のキーを取りにマンションに入った行った。

多治見婦人は西川君の肩をたたいて自分の車を車庫に戻してっていつて出かける準備を整えた。

旦那さんがワンボックスカーに乗って現れ全員が乗り込み救急病院に向かった。

途中で西川君にお見舞い用のフルーツを買わせ、私は花束を購入して病院に向かった。

病院に着いて受付で多治見婦人が「先ほど交通事故で運ばれた人はどこに入院してのでしょうか？」って言うのと、どなたですか？って聞かれたので西川君を指差して関係者ですって答えると。

「外科病棟の202号室で名前は江口さんです」って教えてくれた。全員で202号室に向かうと・・・202号室名前は江口正・・・さんネームプレートを確認すると中から「きゃー」って声が聞こえてきた。

中に入ると看護師さんが赤い顔をしてお尻を押さえつつ中から出てきた。中に入ると江口さんと思われる人が罰の悪そうな顔をしてこちらを向いた。

多治見さんの旦那さんが「元気よさそうですね」って言ってメンバ―を説明すると、江口さんは左足を指し麻酔が効いてるし「骨折してる、熱が引くのを待ってギブスだ」って答えた。

西川君はお見舞い品を置き頭を下げ「申し訳ありませんでした」って謝った。江口さんは「ふん・・・」ってそっぽを向いた。

そうすると多治見婦人が「そんな事言うもんじゃありませんよ」「せっかく見舞いに来ているのに」しかも私を前に押し出し「こんな可愛い子も来ているのに」言ううと

江口さんは私をちらりと見て赤くなりそっぽを向いた。私は「葵です、早くよくなって下さいね」って言って持ってきた花束を花瓶にさした。

たいした話もせず、病室を後にした。マンションに帰ると西川君の両親が待っており、お礼を言われた。多治見夫妻は中に入り私はひろくんの実家に戻った。

実家に着くとお義母さんが心配して玄関まで迎えに来てくれた。連絡が遅くなったことを詫び事情を説明したら「親切したね」ってほめてくれた。

この親切が後になって・・・。

ハッピーバースデーひろくん

ハッピーバースデーひろくん

今日は9月6日日曜日ひろくんの誕生日なのです。

私は、この日のために、私は出来るがぎり一杯の準備を整えた。

まず手始めに誕生日プレゼントにGUCCIのキーホルダーを購入する。これはネットで探した一品物でひろくんも絶対気に入ると思う。

次はお義母さんに教えてもらったひろくんの大好きな料理を作る。

実は夏休みに必死に覚えたお義母さん直伝の家庭料理なので肉じやがや野菜炒めだけど味付けが難しく大変だった。

だって味付けがラフで適当なので私の味覚をフルに使い習得した料理で、今回の出来は改心のできばえだと思う・・・。

そして最後には薫に教えてもらった手作りケーキなのです。いやがる薫を拝み倒して教えてもらった。自分自身ではうまく出来た自信作のつもり。

準備万端整え後はひろくんが帰ってくるのを待つだけだ。

俺は事務所で誕生日ランチの準備をしている。

夜は結衣と一緒に食事をするのだが、昼はファンクラブの選ばれた27人と誕生会することになっている。27人は俺の年分だ。

ホテルの部屋を貸しきって記者も交えて会を行う。結婚式後の披露宴みたいな会場だと思えばいいと思う。当然花嫁はいない。（当たり前か！）

司会役のマネージャーの白石さんが始めに挨拶する。「今日はHIROの誕生会に来てくれたファン代表の皆様ありがとうございます、最初にHIROから一言お願いします」

俺はまず周りを見渡してファンの一人ひとりに視線を合わせ微笑む。

「今日は私の誕生会に出席をいただいて、ありがとうございます」
頭を下げた後ファンの前にある名前を書いてあるプレートを読んでゆく。

「庄田 由紀さん・鈴木 七海さん・木村 彩乃さん……最後に杉田 愛美さん来て頂いてありがとうございます、これからがんばりますので応援をよろしくお願いします」

白石さんが「それでは庄田さんから一言ずつコメントをお願いします」

「庄田 由紀ですHIROくん誕生日おめでとうございます、これからがんばってください」ってプレゼントを貰う。

「鈴村 七海です……」次々に挨拶をしていく。その後昼食をとりながらファンと雑談する。

やはり一番は、なぜ芸能活動を少なくしたのかに話がゆく、俺は「充電時間を貰っています」って答えてごまかすしかなかった。

食事が終わると、白石さんが「ファンの皆様ありがとうございます、誕生日ケーキのろうそくに各自火をつけてもらう様お願いします」ファンがつけた火をハッピーバースデーの歌と共に俺が吹き消して、各ファンにケーキを配って……ファン感謝誕生会は終わる。

まったく毎年思考を凝らした誕生会を開催してくれる。

けど今回の企画がことのほか良かったようで次の年も同じ企画で行うことになった。

家に帰ると結衣が、がんばってくれている様だ。ピンポン玄関を開けると結衣が俺の胸に飛び込んで来た。

結衣が「ひろくん遅いよ」と言っって手を引っ張られ家の中に入る。

結衣の笑顔が可愛い「やはり結衣の笑顔を見るのがいちばんだな」って思う。

結衣は何処で知識を得たのか、定番の「お風呂にします？それとも食事にします？」って言った。

俺は「一緒にお風呂」っと答えたら真っ赤になってうっ向いた。

「ごめんごめん冗談だよ、とりあえず汗を流してくる」って言ってバスルームに向かった。

まずはシャワーで汗を流してさっぱりしてダイニングに行くところ、ブルに俺の好きな物ばかり並んでいる。結衣の力作のようだ。

「うまい！」思わず声が出る。結衣は会心の笑みだ。

この味はお袋の味と同じ様だこんな味の料理が出来ようになるなんて、きつと大変な努力をしていたみたいだな、俺は味わいながら夕食を済ませた。

私は次のサプライズを用意する。薫に教えてもらった手作りケーキをリビングに運んでろうそくを立て火をつける。

照明を落とし誕生日の歌を歌いながら手を叩く、ひろくんが吹き消すと「お誕生日おめでとう」ってキスをした。

俺は積極的にキスしてくれたから、うれしくて真っ赤になってしまった。心の中で「結衣ありがとう」を繰り返した。

どこで習ってきたのか、誕生日のケーキも口当たりがよい。結衣の努力が身にしみる。

そして私は最後にこれどうぞってプレゼントを渡す。

俺は「今日はすごいね」って受け取って中を開けるとキーフォルダーが入っていた。

俺の好みで、すぐ気に入って早速I S Fの鍵に取り付け、結衣に

見せた。

「丁度いい具合だよ、ありがとう」って今度は俺からキスをする。

俺は冗談で「最後のサプライズは？」ってバスルームを見ながら、タオルを肩に乗せる。

結衣は真っ赤になって「まだむりです」って首を横に振った。

俺は「冗談・冗談」って言ってゆったりお湯に浸かるべくバスルームに向かった。

でも二人の中はどんどん近づいているのを感じる誕生日会だった。もちろん一緒にベットで熟睡した。

私は「ハッピーバースデー もの ひろくん」って言って頬にキスして布団にもぐったら、「ありがとう」って抱きしめてくれた。

「おやすみなさい・・・」夜は更けてゆく。

体育祭は私が主役？

体育祭は私が主役？

夏休みも終わりこれから体育祭に向かって練習をする。

体育委員の渡辺さんがメインにクラス委員である青山君と私で進行を努めメンバーを決めて行く、この学校は個人戦が少なく団体戦が主におこなうんだ。

種目は短距離・リレー・障害物競走・借り物競争・男女ペアの二人三脚などの定番が多い。

なぜか女子のダンスや男子の機械体操まである応援合戦も得点のうちだそうで、しかも中学生と合同でおこなうユニークなシステムになっている。

一年生は中学3年生と二年生は中学2年生と三年生は中学1年生とペアを組む、結構大変だが楽しいらしい。

体育委員の渡辺さんとクラス委員の青山君が次々に選手を決めていく。

クラス委員は進行をやらなければならないので通常は参加しないがあっちこっちのサブにはなっている。

それでも私は短距離と二人三脚は出なければならない。私って小さいけど（身長149cm）以外と足は速いんだ。

この足のおかげでチカンから何度も逃げたことがある。

100メートルを12秒台後半から13秒前半で走ることができる。さすがに大会に出る選手までは行かないが……。

私たちは結構遅くまで練習をする。私たちは、いつも片付けなどで一番最後になってしまう。

体育委員の渡辺さんとクラス委員の青山君そして私の誰か一人残って変わり番に先生に帰りの挨拶をする。

今日は私だ。職員室に入ると田中先生が居ない、きよろきよろしているとB組の田石先生が「あなたはどのクラス？」って聞かれたので「一年E組です」って答えると。

田石先生は「田中先生は用事があり先に帰ったから、副担任の葵先生に連絡しなさい」少し考え「たぶん準備室に居るはずですよ」って教えてくれた。

準備室に着くと扉を叩く。トントン「葵先生はいらっしゃいますか？」言うのと、中から「おーい入れ」って聞こえ、「失礼します」って私は中に入った。

中はひろくしかおらずパソコンに向かってなにやら打っていた。

顔を上げて「結衣か、どうした？」私は「今日は終わりましたので連絡に来ました」って先生に言う口調で言うと。

ひろくんは立ち上がり部屋に鍵を掛けると「終了の連絡ご苦勞様・・・これで邪魔者はいれない」突然頬にキスされて「そこに座ってて、

終わったら一緒に帰ろう」ってソファを指差して言った。

私は「誰かに見つかったちゃうよ」って言うと、まだ少しかかるから、そのころには誰も居なくはずだから大丈夫って、又パソコンに向って仕事を続けた。

ひろくんの言ったとおり、帰るころには生徒は全員いないし先生もほとんどの人が帰宅していた。

ひろくんは堂々と、私は誰かに見つからないようにドイドキしながら車のところに向かった。

私たちは誰にも会わず車にたどり着き、ひろくんの車で帰路についたが、時間も遅くなったので途中遠回りしてファミレスで食事をしてから帰ることにした。

ファミレスに入るとき、私は学生服ひろくんはスーツで入ったけどあまりじろじろ見られる様子はなかったので少し安心して食事をした。

それからは、私が連絡係りのときは、ひろくんが居残り、田中先生に終了を伝えた後でも、私は準備室に寄り、一緒に帰ることがしばしばあった。

一緒に帰れることで、プチデート？体育祭の練習もいいかな？なんて思いながら、運転するひろくんの横顔を見ながら思った。

俺は結衣が連絡係りのときは極力学園に来る様にして一緒に帰った。こんな機会でもないとなかなか一緒に帰れない。

今日は体育祭です。

生徒会の運動部実行長が宣誓を行う。最初は学年別短距離走だ。私は高校一年女子の部に出場する。

私の番が回ってきてステートラインに並ぶ。

用意ドン スタートは遅れたがぐんぐん加速してゆく。裕子たちの声援を受けながら一番でテープを切る「やったー」E組に向って手を振ると皆が手を振ってくれた。

女子学年別一位なので決勝の100m走女子の全体の部に出場が決まる。

次々と種目が進み、組み体操の時間になる。これは男子が行う結構ハードだ。うちのクラスも順調にプログラムを進める。組んでいる一番上に上がった青山君が両手を挙げる。

「あ！」下に居る日比野君がバランスを崩すと、青山君が崩れて落ちる。どうも落ちたときに足を挫いたみたいだ。

びっこを引いて医務室に運ばれていった。医務室に行くと青山君が申し訳なさそうに「御免、足挫いた二人三脚代理探して」って手を合わせた。

私は青山君とペアを組み二人三脚出場の予定だったんだけど。あわ

てて相手を探さなくっちゃならない。私は「うん分かった、大事にしてね」って言ってクラスに戻り相手を探した。

運悪く都合のいい人は二人三脚前後に出場が決まっており相手は誰も居ない。

困っておろおろしていると、ひろくんが「どうした」って聞いてきたので先ほどの事情を話した。

ひろくんは「わかった代わりに俺が出てやるよ」って言って出場者リストを変更しにくれた。

私は思わず「日比野君GOOD・JOB」って思ってしまった。青山君ごめんなさい。

競技が始まる前に慌てて、ひろくと足をつなぎ二人三脚の練習をした。いち・に・いち・に・・・スムーズに走れる、息はピッタリだ。（やっぱ夫婦なんだって思った）

二人三脚はリレー形式で私たちはアンカーを勤める。里美が羨ましそうにこちらを見ている。

二人三脚リレーが始まり私たちは足をつないでバトン位置で待機する。周りからの視線が痛い。各所から冷たい視線を浴びる。

競技のスタートだ、E組は3位から5位の間をうろうろし、私たちに”たすき”が渡ったときには5位だった。

がんばれーの声援でいち・に・いち・に、と声を掛け走り始める。私たちは相性がよく、ぐんぐん加速し皆を次々に抜いていく、そし

て最後の直線で一位を走っていたA組をかわしゴールする。

ばんざい一位だ！！二人でガッツポーズをした。ひろくんのファンの視線は痛いけど、ひろくんと一緒に走れてよかった。

残りの私の出場は短距離女子全体の部になる。各学年のトップが走り全員で六人でスタートだ。いわゆる女子の一番を決める競争だそうだ。

スタートラインに並んで用意ドン一斉にスタートを切る、今度はいいスタートを切れたぐんぐん加速するけれど隣の選手が私の前でさらに加速して離れていく。

ゴールしたときは3メートルぐらい離れてゴールしたけど何とか2位に入ったなんと3位とは0.3メートル差でぎりぎりだった。

一位は国体代表の3年生の小澤 舞選手だった。私は皆に「善戦したね」っていわれた。小澤先輩は全国でもトップクラスのスプリンターなんだそうだ。

最後に男女別リレーで全競技は終了だ。これには私は出場しない。

各競技の1・2・3位まではちよつとしたメダルがもらえる、私は1位が2個2位が一個もらえた。ひろくんも私と一緒に出たので1個貰った。

私はメダル立てを購入し二人のメダルを飾った。とくに二人三脚のメダルはペアメダルでよい記念になった。

次の週に学園に行くと上級生に呼び出され、校舎の裏へつれていかれ、先生と一緒に走った二人三脚の件で「おまえ、調子こいてんじやなわよ」って暴力は受けなかったけど怖い目で脅された。

いじめ？かな・・・暴力は受けなかったので、ひろくんには心配しない様に黙ってしよう。

文化祭は危険がいっぱい。

文化祭は危険がいっぱい

体育祭の後は文化祭なのです。

クラスでの出し物を決める。みんなの意見は？・・・コスプレ喫茶・メイド喫茶・ホスト喫茶・ホラー喫茶・・・ほか無いの？みんな喫茶店ばっかじゃない。

ようやく出た意見は、焼きぞは・たこ焼き・たい焼き・金魚すくい・・・・縁日じゃん！

もう皆出来るものの意見を出そうよって意見を募る。

すると里美が立ち上がり「まかせて！このクラスは女子が多いからメイド喫茶にしよう。私が衣装を調達するよ」って言った。

男子全員と女子の半数が衣装調達発言に「メイド喫茶に決定！！」って言って、すぐ決まってしまった。

青山君が「では1年E組は、メイド喫茶で決定します」って宣言した。

あとは人数配置です男子は店の擬装と厨房及び写真係りとレジ係りです。女子は2／3がメイド店員、1／3は料理がうまい人が厨房担当です。

女子で喫茶の定番料理が出来る人は手を挙げてください。って言うと

4人が手を上げた。薫さん・森川 理可さん・後藤 絵美・佐藤 由美さんが立候補した。

「どなたかもう二人ぐらい居ませんか？」って言う。「私余り得意じゃないけどって」佐伯 レナさんが手を上げてくれた。

「もう居ないですか？」と言っても誰も上げてくれなかった。

じゃ「私やります」手を上げて、私も厨房に入ることにしようとしたが、里美が、「あなたはめがねメイドよ」って言って厨房は駄目って宣言されてしまった。

私は大きなトンボタイプのめがねをしている。うなだれると薫さんが「結衣は両方だね」って言われ、皆が拍手したので決まってしまった。「あああ」・・・。

一緒に見ていた、ひろくんが少し薄ら笑いをしたのが見えた。私は心の中で「もう、バカバカ!!」って思った。

弘子のB組は田石先生をメインにホスト喫茶だって、後クラスは定番のおばけ屋敷やたこ焼き屋さんなどを行うらしい。

中学と高校が合同で行う結構色取りどりで、外部に開放される日曜日は結構人気がある。

青山君が男子にきばきと店内の擬装部品を作るよう指示をする。里美さんはメイド係りのメンバーのサイズをチェックする。

クラス一丸になって文化祭に向かって進めていく、文化祭二日前に

そろった衣装は黒・赤・白色の基本色とした、ひらひらした衣装だ。里美さんが配って皆で着ると、全員がかなりミニタイプのスカートだ。なぜか私のは他の人と比べスカート丈が短いのでかなり恥かしい。男子が口笛を鳴らす。

里美さんが胸を張って男子に向かって「かなり萌えでしょう」って、ちょこんとひざを曲げ、しなを作った。

さらに「私はこれで、葵先生にアタックだ!!」って右手をを上げ高々に宣言した。

私は、心の中で「それは困るやめてほしい」って願った。

文化祭が始まった。初日は学園内だけ翌日は外部に開放される。

私の初日のスタートの仕事は裏方さんなのです。

サンドイッチやホットケーキを作る。エプロンを着て注文に応じて作っていくが、午前中は飲み物の出が多く比較的暇だった。

先生たちがよく現われて、メイドさんたちと一著に写真を撮っている。

スタートは順調に切るが昼に近づくとも食べ物の注文が殺到する。厨房は戦場になる男子は余り当てにならず、薫を筆頭にてんやわんやだ。

2時ぐらいになると楽になる。私はメイド服に着替えて店内に出る。するとすぐ石田先生に捕まり、飲み物の注文をとると一緒に写真を撮られた。

次々に先生たちがきて、なぜか私を指名し写真を撮ってゆく。そして、ひろくんが顔を出しに来た。店内のメイドのほとんどがひろくんに集まる。

里美は午前と昼の部で終わりなのでもう着替えていた。里美はひろくんの前に行き「先生来るのが遅い！！ちゃんとそこで待って」ってあわてて又着替えに行った。

その間に皆はひろくんとツーショットを取り捲りしていた。私と一緒に写真を撮ろうとしたときに、あわてて着替えた里美が飛び込んできた。

里美は私の前に立ちはだかり、次は私って先生の腕に自分の腕を引っ掛けた。私はともかく横入りされたので他のメイド役からブーイングが出た。

里美は、そんなことは無視して腕を組んで、ニコニコと、ひろくんとツーショット写真を無理やり撮った。

その後私と撮ったが、ひろくんが耳元で皆に聞こえないように「家で一杯撮ろうね」って囁いた。私が赤くなると皆に「「あゝ赤くなってる！」「」ってからかわれた。

初日の反省会でお昼時の厨房の人数の強化を決め初日を終わった。メイドの服は各自で管理することになり、全員が家に持って帰って

いった。

案の定、家に帰ると私はメイド服に着替えさせられ色々なポーズの写真を撮られた。もちろんその写真データはお義母さんと私の両親にメールで送られた。

返事は……。恥ずかしく書けない。「うううう……」

二日目

今日は学園の外部への開放日です。

白鳥学園の文化祭は近所でも人気があり、近所の人や他校の生徒も一杯来る。中でも私たちが行う、メイド姿の女子高生は人気抜群で店内（教室内）はあふれて廊下まで並んでいる。

特に隣町の男子校の生徒や男子大学生も一杯来ている。受付の男子が入場制限しているし写真係りの人もてんてこ舞い状態になっている。

私は午後の部だったけど接待不足で香奈や智里たちと一緒に早めにメイドをやることになってしまった。

お客さんの中に隣町の生徒の一人が態度がやたらとでかく、あっちこっちのメイド役の女子生徒にちょっかいを掛け捲って迷惑を掛けていた。

学園の生徒の奥川君や西森くんも一緒になって騒いでいる。もう止めようがない。

私が先生を呼ぼうと教室を出ようとすると、態度の悪い隣の男子高校生に腕をつかまれた。

「きゃー」私はうずくまってしまった。

その男子高校生はちらつと里美に視線を送り私に被いかぶさり耳元で「ちよっとぐらいいいだろう」って胸を触ろうとした。

私は胸を腕でガードしてさらにちじこまる。そして大きく悲鳴を上げた「きゃー！ー！！」

悲鳴しか出ず声が出ない「ひろくん、たすけて」心の中で叫ぶのが精一杯だった。

その時ふつと被いかぶさっていたのが無くなる。そーっと見上げると、ひろくんが男子生徒の襟の後ろをつかんで引き剥がしていた。

男子生徒はぐつと立ち上がって「おまえ俺を誰と思ってつかんでるんだ。俺は山田組の山田英二だぞ」ってすごんだ。

そんなことは無視して、ひろくんは腕をひねり上げ教室を出て行き、生活指導室に連れて行って、指導担当の勝村先生に引き渡した。

男子生徒が教室を出るときに里美が「チッ」って舌打ちしたのが見えた。

いつの間にか奥川君や西森くんは居なくなっていた。うまく逃げたらしい。

後で聞いたんだけど山田組って土建業を隠れ蓑にしている暴力団だ

そうですね。もちろん彼は停学になったそうだ。

舌打ちしてたけど里美って繋がりが有るのかしら？

私はブルブル震えてその場所から動けなかった。裕子や絵美が抱き支えて保健室に連れて行ってくれた。

保健室で鎮静剤を貰って飲んでいると、田中先生とひろくんが来てくれた。田中先生は「大丈夫か？少しは落ち着いたか？」って聞いてくれた。

私は「まだ少しドキドキしています」って答えると、田中先生は「落ち着いたら帰るか？」って聞いてきたので、私は「葵先生が教室に居てくれたら大丈夫です」って答えた。

折角の文化祭だもん最後まで居たいよ……。田中先生はひろくんの顔を見て悩んでいた。

ひろくんが「いいですよ私が教室内に居ましょう用心棒かな又帰りも同じ方向ですのでしばらくは私が送り迎えしましょう」って提案した来た。

田中先生は少し考えて、「分かりました、私が理事長にお話をしてきます。たぶん騒ぎが収まるまで、葵先生にお願いすることになると思います」と言って、理事長室に向かった。

ひろくんは耳元で「たぶん送り迎えになると思うよ」と言った。私は気分が落ち着くと教室に戻り又メイドを続けた。

文化祭が後半の中盤あたりで田中先生が「理事長に連絡しましたの

で、今日からしばらく葵先生と一緒に通学の行き帰りをしてください」って私に言い、ひろくんに「彼女の通学の面倒をしばらくお願いします」って伝えてた。

ひろくんは「了解しました」「葵 結衣さん、しばらく私が通学の面倒を見ますので安心してください」って皆に分かるように私に向かって話をした。

その後は大きなトラブルもなくスムーズに進んだ。里美は「みんなの衣装あげるから個人で持って帰ってもいいよ」っていったので全員が持ち帰った。

もちろん私も持ち帰ったというよりもひろくんに持ち帰らされた。もちろん家で着させられるためだ。そして時々ひろくんにメイド姿を披露することになる。

俺は結衣に時々メイドさんになって貰っている。かわゆい結衣は真っ赤になりながらメイドさんをしてくれる。秋葉のメイド喫茶の流る理由が少しは分かったような気がした。

満足・満足！！！当然一杯写真を撮って結衣と俺の両親にデータを送る。お返しの返事が楽しみだ。

後は文化祭で起きたトラブルが続かなければいいのに・・・。

ストーカー？

ストーカー

文化祭が終わってからひろくんと一緒に通学している。あんなことが遭ったばかりだから最初はおっかなびっくりだ。

もしものためにしばらくの間、各出入り門にガードマンを付けるそうだ。

ひろくんと一緒だから里美の視線がきつい、でも理事長の公認だから仕方が無い。ほかの友達からは羨ましがられて冷やかされた。

しばらくするとひろくんがいつもの道を通らず違う道を走り始めた。「どこに行くの？」って言う。「少し寄り道」ってひろくんは答えてくれたけど……。

その日から学園から帰るとき色々な道を通って家に帰ったり時にはひろくんの実家にも寄ったり泊まったりした。

そんな寄り道が何日か続いた後事件が起きた。概要はこうだ。

ひろくんはいつもはそんなにスピードは出さないのに今日は高速道路をかなりの勢いで飛ばしている途中に、ハンズフリーでどこかに電話してから少し走ると高速を降りていった。

ETCを通過すると警察が検問をしていてひろくんが一旦停止して警察にお話をしようとした時に突然後ろの黒塗りの車かが追い越しを行い警察を振り切ろうと蛇行運転をした。

なぜか振り切ることが分かっていたように警察隊が大勢居て、しっかりガードされていたのであっさり捕まった。私の頭は？が飛んでいた。

後で真相を聞かされゾツとした。実は文化祭での出来事がきっかけで私に襲い掛かった男子高校生の命令で私をストーカーしているって事だった。

一人歩きをしていたら誘拐されていたかもしれなかったらしい。

つきの日に、ひろくんは「大丈夫きちんと話をつける。任しと言って」
と言ってどこかに出かけていった。

俺はまず警察へ顔を出し事情を聞いた。やはり山田組の連中で運転手の真壁信吾とカメラ係の野市小太郎の二人組で山田組の若の命令で後を付け回したと白状したそうだ。

警察が山田英二を呼び出そうとしても、雲隠れしたようで呼び出しに応じなかったそうだ。まったく困ったやつだ。

俺は色んな公演でお世話になった飯沼組の親分を訪ねる事にした。飯沼組は公演などする時に地元などに色々便宜を図ってスムーズに公演を進めてくれる頼もしい人だ。

山田組みたいに土建業を隠れ蓑にしている暴力団でなくテキ屋的な

存在で色々な所にネットワークを持っており頼もしい組織だ。もちろん暴力団関係にも顔が広い。

今回申し訳ないが結衣の事件でお願いをすることにした。

飯沼組の事務所に行くと、若い衆の蔵本くんが顔を出してきた「あれ？ 葵さん今日はどうなされました」俺は「武さん居ます？」って言うのと。

蔵本くんは奥に案内してくれ組長室の前で「社長、葵さんがお見えです」って言うのと、中から「おお、入ってくれ」って声が聞こえ蔵本くんがドアを開けて

中に入るように手を差し出した。俺は「ありがとう」って中に入っていた。中に入ると武さんがこちらに来て手を出して握手を求めた。

俺「しばらくぶりです、武さん」

武「しばらくぶりだね、仕事抑えてるんだって？」

俺「ええ、私事であまり活動が出来なくなっていました」

武「今日はどういうことで？」

俺「すみません、今日は俺の嫁さんの件でお願いしたいことがあります」

武「ええー、お前いつ結婚したんだ？ それでもって用事とは？」

俺「結婚は4月に相手は幼馴染これは内緒でお願いします」「用事とは、嫁さんが山田組の若に目を付けられているので、とりあえず警察は介入してもらっています・・」

「あの組は警察を無視する輩が多すぎますので、ご足労おかけしますが口利きをお願いしたいのですが」

武「わかった、葵君の頼みだ聞かないわけには行かないだろう、内の横山・桜井コンビに調査・対処させよう」

「詳しい話は彼らを呼んでお話しよう」って電話掛け始めた。

俺は部屋に入ってきた2人組に事情を説明し、頭を下げてお願いした。彼らは和やかな顔をして快諾してくれた。

これでひと安心だけど用心することには越したことが無い。一人になっただけで用心棒をお願いしよう。

しばらくすると寄り道をするのがなくなった。クリスマスソングが佳境に入ったころ、自分ひとりで通学できるようになった。

でもなんとなく視線を感じるような・・まあいいか!!

彼の正体は・・・

彼の正体は・・・

12月の初旬お義母さんが立ち上げたファッション雑誌“ジュジュ”が発売になった。

発売前から女子高生の間でうわさが広がっていたらしく、初日からすごい売れ行きらしい。私のクラスの由美も朝一で買って来たらしく大勢囲んで雑誌を見ている。

横目で表紙を見ると「えー私が写っている・・・」おもわず口をふさいだ。皆口々に私の写真を見て「このモデルの子可愛いね専属の新人のモデルさんだって」

「名前は・・・」「うーん・・・書いていないよ、なんていう人だろう？」皆誰だろうって思いをはせている。いくら見た目がずいぶん違うとはいえドキドキだ。

昼休みに親友の弘子が私の教室に来てこっちに来てって呼び出されちゃった。一緒についてゆくと屋上へと向かった。弘子の左手には例の雑誌が握られている。

屋上につくと弘子はこちらを向き雑誌を見せにニコって笑った。

今日は曇りでこの時期でも日差しがあり暖かいと少しは誰かが居るのけど少し肌寒く誰も居ない。

弘子が私に微笑し「説明してもらいましょうか」私の写真を指差し

私の目を見た。

弘子は小さいころから私を知っているの、写真を見て私とすぐ気づいたそうだ。

私はまだひろくんとの関係を知られる訳にはいけないので、歩いていたらスカウトされたって嘘をついた。そしてこんなすごい雑誌だとはぜんぜん知らないとも言って、弘子をあきれさせた。

弘子は呆れた顔をしながら「あんた、こればれたら大変でしょう？仕方がないなあ、黙っててあげる、ん・もう天然なんだから・・・」

結局この件はちよつとしたきっかけで・・・。

ひろくんは谷竹先生から忘年会の誘いがあった。むげに断ることが出来ないで結衣にメールを入れることにした。

「先生方に忘年会に誘われた一次会で済むとは言えないので、先に寝ていいよ」って送った。結衣からは「わかった無理しないように」って返事が返ってきた。

場所は駅前の居酒屋で行う。ここは料理も結構うまいんだ。結構大勢で盛り上がり一年のクラス担任たちで2次会へ出かけた。

格安のクラブで愚痴に言い合いだ。とくに竹谷先生は年齢も高く独身なので女生徒に不満たらたらだ。

感心よい生徒の名前は数人しか出てこない。その中に結衣が混ざっていた。

「おお、がんばっているんだ」って陽気になって少し深酒になってしまった。タクシーでマンションまで帰り千鳥足で玄関まで向う。

セキュリティをアンロックすると、玄関が開いて結衣が心配そうに覗いてきた。リビングに座り結衣から水を貰って飲んだ後、頭を？き揚げめがねを外して・・・不覚にもその場で眠りに落ちた。

ひろくんが帰ってきた。セキュリティが解除されたので、あわてて玄関を開けると、かなり酔ったひろくんがいた。千鳥足でリビングに向かい「水」って言ったので持っていくと、ぐいっと人飲みしソファで寝てしまった。

そのままじゃ風邪を引いちゃうって思い、毛布をもって掛けようとしたところで・・・ひろくんの顔を見ると、あれどこかで見たような・・・。

そういえば出合った初日以外にめがねを外しているひろくんを見た事が無かった。ひろくんがめがねを外している時は私も外していて視力の悪い私はまじまじに顔を見た事が無かった。

「ううんあれ？この顔ってHIROじゃない!!!」 「なんでひろくんがHIROなの？」

事情を聞こうと、ひろくんを揺らして起こそうも完全に眠って起き

そうも無い。仕方が無く毛布を掛けて部屋を暖かくして、寝ることにした。

私はドキドキ興奮して余り眠れなかった。

俺は包丁の音で目を覚ました。あれれ、俺こんなところで寝たっけ。ソファーから起き寝ぼけ眼でめがねを探す・・・。「あれれテーブルの上に無い」ふいにキツチンのほうを見ると、結衣がこっちを向いてめがねを手にかけていた。

結衣は「めがねをチラチラさせ、ひろくん説明してもらえろ？」って言うてきた。何をいうのかな？ふと頭に手をやると髪の毛が73になっていない。

ばれた？昨日不覚にも正体をさらして眠ってしまったらしい。俺は覚悟を決め結衣に説明することにした。リビングに結衣を呼び、あの向き合いに座り、こうなった経緯の説明を始めた。

まず結衣の近所から引っ越してからの話からはじめる。引っ越してから町を知ろうと周辺を徘徊していると、事務所の人に声を掛けられた。

けど面倒だったので断ったら、どこで調べたのか母さんを説得して・・・最初は強引にやらされたんだけど。H I R Oをやっているうち

に芸能活動が徐々に好きになって今に至ったんだ。

結衣をだましていたことは「ごめん」って頭を下げた。顔合わせのとき結衣が気がつかなかったので余りびっくりさせたらって思ってた。
。。

まあ、すこしは、いたずら心はないことはなかったけど教師をやることになったので、生徒たちに対してだます練習のつもりもあったんだ。だけど結衣への気持ちは変わらないよ。

俺は芸能界で活躍中のHIROであることを結衣に話したので。これからは家の中では普通に居られる。

たぶん結衣は分かっていると思うけど、学園でばれると大変なことになるので「そこのところよろしく頼む」って立ち上がりもう一度頭を下げた。

結衣は「もう」って立ち上がり俺の胸の辺りを両手で軽く叩いた。

「私がHIROを好きって分かっているって騙したんだ」とんとなん」と叩くと、ひろくに抱きしめられた。

俺は「だますつもりはなかったんだ。こんな俺だけど結衣を愛してるよ」って抱きしめキスをした。結衣はてれて赤くなり・・・かすかにうなずいた。

私は、好き（ひろくん）好き（HIRO）と二つ好きが重なった。
（はあと）

あとで、ひろくんのめがねを掛けたら度が入っていなかった。「なんだ・・・こんな落ち？」

クリスマスイベントは？

クリスマスイベントは？

今回は結衣の意見を尊重しよう「どこが良い？」って聞くと間をおかず「水族館が良い」って返事が返ってきた。夕食は夜景の綺麗なレストランには予約は入れてある。

Y市に大きな水族館があるからそこに行くことにした。

私はひろくにクリスマスのデート先を聞かれたもちろん私の大好きな「水族館」って即答した。

去年はひろくに頼りっぱなしなので今年はプレゼントにだいぶ前から昔お母さんに教えてもらったマフラーを編むことにした。

毛糸の購入はおせっかい小母さんの多治見婦人に聞くことにした。一言言うと多治見婦人は水を得たように一杯しゃべってくれる。

言ったその場からすぐに婦人行きつけの手芸店に案内され、あれやこれやとアドバイスをくれる。もちろん一番聞きたいのはプレゼントの相手だ。

手芸店の店員さんに店長さんに多治見が来たって伝えて言うと、店員さんがあわてて奥に行き小奇麗な人を連れてきた。

多治見婦人は私を前に押し出し「この子一緒のマンションに住んでいる葵ちゃんって言う高校生可愛い子でしょう」

「彼氏にクリスマス用のマフラーを編みたいって言ってるからアドバイスをお願い」

店長の神谷です多治見ちゃんとは同級生なの「あなたって多治見ちゃんが時々話す子ね、いつも言うとおりの可愛い子ね、彼氏に合うアドバイスをさせてもらおうわ」って言うてくれた。

私は店長さんに色々アドバイスを貰い赤・白・黒の三種類の毛糸を選んだ。

さすがに高校生なのに旦那さんについて言ったらとんでもない事になりそうで「彼氏」について、ひろくんには言わなかった。

いきつけの手芸店で顔利きのようで網目に詰まると的確なアドバイスもしてくれる。おかげでクリスマスまでには十分間に合った。

クリスマス当日

結衣は朝からうきうきでお弁当作りをがんばっている。開園時間に合わせてマンションを出るようにする。クリスマスソングが流れる町並みを通り過ぎ高速へ向かいY市へ向かう。

大きな渋滞も無く開園少し前に駐車場に到着するが意外と車が多い。クリスマスのかイイベントが行われるらしい。1BOXタイプが多

いので親子連れかな？

園内に入るのに少し列を並んだ。パンフレットを結衣に預けて「結衣の好きなところに行こうよ」って声を掛けた。

結衣は頷くとパンフレットを開き真剣に見始めた。ぶつぶつぶつ・・。

最初はここってパンフレットに指を示す。そこにはペンギンの森って書いてあった。結衣は俺の腕に手を回し引張り気味で目的地のほうに向かった。

それからは結衣が示す場所を次々と回っている間にランチの時間になった。

俺たちは魚の見える休憩場所で昼食をとることにした。場所がいいのか家族連れやカップルで一杯だ。

俺が場所取りをしている間に結衣がロッカーへお弁当を取りに行く、さすがに国内有数の水族館だ施設が充実している、お弁当用のロッカーも完備している。

俺は見つけたスペースで結衣を待っていると、左手に大きいバスケットを持って右手で手を振りながらこちらに歩いてくる結衣を見つけた。俺も照れくさいけど右手を上げて答えた。

結衣の今日のお弁当は気合の入りまくりだ。いつもの学園でのお弁当とは比べ物にならない。いつのまにすごい弁当を作るようになったんだろう、学業や主婦に忙しい中頑張り屋の結衣に頭が下がる思いだ。

結衣のおいしいお弁当をゆっくり食べる、どれもこれも俺の好みに合わせて味付けがしてある、たまに結衣が頬を染めた笑顔で俺の口におかずを運んでくれる「あ〜ん」どうもそれがやりたいらしい。

仕方がなくお付き合いする、周りを見るとやはりカップルが同じようなことをしている。

食べ終わり「結衣、ご馳走様めっちゃおいしかったよ」って言うとき頬を染めてにつこり笑った。

俺は思わず抱きしめたいのを必死で我慢して頬にキスをするだけにした。結衣はますます赤くなり両手を頬に当てた。

昼食が終わり午後から又水槽を回ることにする。途中冬のイベントがあるらしくそれに合わせる様に見学することにした。

2時半にペンギンの森でペンギンショーが始まるらしい。2時過ぎにペンギンの森に向かうと結構混んでいた。

前のほうを見ると2箇所だけ席が空いているところを見つけた。親子連れとの間だ。俺たち親子連れに「そこは空いていますか？」って言うとき「どうぞ空いていますよ」って言われ、そこに座ることになった。

イベントが始まる。ショーの途中でトレーナーさんがどなたか一緒に参加してみませんか？って呼びかけると、ひろくんが私の腕を取って上に上げ「やります」って答えた。

後で数人も手を上げたがトレーナーさんは結衣を指名した。結衣は

「え〜」って顔をしたらけど、俺が背中を押してステージに上がるように即した。

結衣は少し頬を染めながらトコトコとステージに上がってトレーナーの指示にしたがってペンギンと遊んだ。俺はカメラマンよろしくシャツターを切るが、演技が可愛いのか皆がシャツターを押ししたりムービーを取っている。

結衣の写真は両方の親に送ったが、結構気に入られた。後でお袋の筋で聞いた話だが結衣のペンギンと遊ぶ動画がネットにUPされていたようでかなりの人気だったらしい。

そういえば今回の結衣の格好はファッション雑誌の”ジュジュ”での写真の格好に比較的近い。どうもあっちこっちから視線を受けていたようだ。余り結衣が目立つと俺もやばい気をつけなければ・・・。

水族館めぐりも終わり夕食の為にレストランへ向かう、道中やはり疲れたのか結衣はコクリコクリと居眠りを始めた。結衣の寝顔を見ながら安全運転でレストランへ向かった。

結衣はレストランに着く少し前に「う〜ん」って目を覚ましたみたいだ。俺は「姫君もうすぐ目的地です」って言うのと頬を染めて軽くうなずいた。

クリスマスの最後は夜景の綺麗なレストランでディナーをしてから、プレゼントのイヤリングを渡す、去年プレゼントした物の色違いで結衣によく似合っている。

今回は結衣からも俺にプレゼントがあるらしい。頬をピンクにしな

がら袋にラッピングされたものを両手だ差し出された。袋を開けると三色の手編みのマフラーが入っていた。

ちょっと網目が不揃いだけの心のこもった暖かいプレゼントだった。「どこで編んでた？」って聞くと「部屋でこっそり」って言ったので表で堂々として出来るって楽しみになった。

プレゼントの交換やで二人で盛り上がったクリスマスになった。

学園へマフラーをしていくと里美が目ざとく手編みなのを見つけて女子生徒たちに「だれから？」って言い寄られたけど、「秘密」って言い通した。

女子生徒の何人かは俺に渡そうと手編みのマフラーを持ってきたようだが、マフラーをして現れた俺を見て何人かは諦めてくれたようだけど、里美を先頭に数人が俺に渡すべく持って迫ったが「生徒から受け取るのはまずい」って石田先生に聞いていたので、断固拒否した。

先生って結構大変だ！（竹谷先生に言わせると羨ましくて仕方がないらしい）

どうのこうのでクリスマスイベントは終了した。

秘密のお正月

秘密のお正月

クリスマスイベントも終わり今日は大晦日私たちはひろくんの実家に数日前よりお邪魔している。

もちろんひろくんはマンションや実家ではラフな格好をしている、いわゆる“H I R O”の格好とほぼ同じだ。私に芸能活動を話してからはのびのびしている。

学園でのひろくんとはまったく違う、もちろん結婚は秘密だけど超ラブラブ状態だのびのびひろくんを見て。

心の中で「かっこいい！！私この人と結婚までしているんだ。夢のよう、裕子たちに恨まれそうだ」・・・。

ひろくんの実家では当然私は嫁な訳で当たり前のようにお義母さんのお手伝いをする。

正月前なのでお義母さんとキッチンで御節料理の最後のしあげを手伝っていると、お義母さんは「将来ここのキッチンはあなたの物よ」って次々に料理方法を仕込まれていく。

夏休みにずいぶん教えてもらったけど普段の料理とは違い「ふう、大変だ」私はお母さんに任せっぱなしでろくに手伝いもしなかったから、しどろもどろだ。

ちょっと遅いけど夏と一緒に花嫁修業のつもりで頑張った。

お義母さん（視点）

結衣はいつも私が教えることに関しては真剣そのもので接してくれる、私は嫁でなく娘として教えている、よくぞ息子と結ばれてくれたと頭が下がる、よほど結衣の両親の教育がいいのか、純粹の一言だ。

近所だったときから結衣ちゃん性格のよいことは分かっていたけど、やっぱり嫁として来てくれたのは正解で。実際結衣ちゃんでもよかったと心から思う「やっぱ私も娘も生んでいれば良かったかも・・」

てきぱきと正月料理が出来上がる。結衣ちゃん大好き。

食事が終わると皆で畳の居間でTV観戦する。今年は赤組の勝ちだ。紅白の結果を見てから近所の神社に初詣に全員でかける。歩いていく途中に近所の方たちと出会う。

お義母さんが私をひろくんのお嫁さんだと皆に紹介すると皆さんが「ひろきくんのお嫁さん？可愛い子ね、ひろきくん大事にしないと駄目だよ」って口々に言う、ひろくんは頭を掻き、私は頭を下げてばかりだ。

皆で氏神様にお祈りをして家に帰った。近所には私がひろくんのお嫁さんだと認識されたみたいで嬉しかった。

夜が明けて元旦、ちょっと遠いところへひろくんとお宮参りに行く為にお義母さんが着物を着付けしてくれました。髪もアップし少しは大人に見えるかな？なんて……。

結婚してるけど若いから振袖で良いんだよって、お義母さんが見立ててくれた振袖はきらびやかだった。

ひろくんは私の着物姿を見て……顔を赤くした。

俺…結衣の着物姿を見てめちゃ可愛いじゃないか又一段と惚れ直してしまった。

お義母さんが色々支度をしてくれたけどやはり魂胆があつたみたい。

なんてことはない又お義母さんにスタジオに連れていかれ、やはりおもちやにされてしまった。

それでもひろくんがお義母さんを説得して私を連れ出しようやく目的の初詣に行くことが出来た。

当然ひろくんは変装をしている。いわゆる先生の格好だ。それでも私に合わせて着物を着ているのでカッコいい。

ひろくんの腕に捕まりながら並んで歩いていると、前のほうにクラスメイトの薫と隣にカッコいい男性が一緒に並んでいた。

どうも鳳さんのようだ、しかもそのもう少し左となりには絵美とその彼氏らしい人も居た。

この神社は学園とは結構離れているけどカップルが多いみたい。神社の由来を見ると「やっぱり」ここは縁結びの神様が宿っているそうだ。

よくみるとあっちこちには、ほとんどアベックばかりだ。私たちは学園の人たちに見つからないように、早めにお参りを済ませ、帰ろうとしたとき、さらに知ってる顔を又見かけた。

隠れて見るとクラスメイトの白川部君とその彼女？がいた。よく見ると彼女にも覚えがある・・・中田 綾香ちゃんだ。たしかあの子はクラスメイトの中田君の妹のはず体育祭で見たことがある。

たしかクラスメイトたちは中田君をシスコンってはやし立てていてからかっていた覚えがある。この神社、結構学園の人が多い。私たちは早々にひろくんの実家に戻った。

人手の多いところは気をつけなきゃって感じたお宮参りでした。（
秘密・秘密）・・・。

バレンタインは嫌いだ

バレンタインは嫌い

今日はひろくんに渡すためのチョコケーキ作りをクラスメイトの薫の家にお邪魔してる。

メンバーは私と裕子と絵美のいつもの三人でこの時期は薫におんぶに抱っこで、頭が下がる。

薫の家のキッチンはお母さんがお菓子作りが趣味だけあって道具も一杯そろっている、薫はテキパキ作業を進める。

私と絵美はついて行くことが出来ない。「薫もう少し遅くやってよ！　ついて行けないよ」私たちは根をあげた。器用な裕子も薫にはついていくのが精一杯だ。

薫は「もうそんなんでは彼氏に嫌われるよ」って笑った。そしてペースを落としてくれた。

私は赤くなり、裕子は「まだ告白してないから良いもん」って頬を膨らました。

薫の熱心な指導のもと、私はバレンタインのチョコプレートケーキ定番中の定番ガトー・ショコラを完成することが出来た。

薫はハート型のチョコケーキで裕子と絵美はクッキー・ブラウニーをつくった。

私たちは「薫ありがとう感謝感謝しかありません」ってお礼を言いながらも

「来年もよろしく」ともお願いした。薫は苦笑しながら「仕方が無いわね」って言うてくれた。

バレンタインデーの2月14日は平日で、ひろくんは授業があるので早めに学園に出かけていった。

俺は学園に着く早々に上野に待ち伏せされた。教員用駐車場にとめると。後ろ手にチョコを持った上野が駆け寄ってきた。

どうも一番乗りを狙っていたようだ。俺に向かって両手で包み紙を差し出して所で、A組の竹谷先生がゴルフに乗って職員用駐車場に入ってきた。

谷竹先生が降りてきてこちらを見ていたので、とりあえず俺は受け取ることにした。実は先週にB組の田石先生に対応を聞いていたので・・・。

田石先生いわく「無碍に断ると授業などに影響がで易いので、受け取ったほうがいいのですが、出来ればどなたかが見ている状態で受け取ったほうが無難です」って教えてくれていた。

だから俺は丁度谷竹先生が着たので、上野さんより受け取ることに

したんだ。

今日は極力単独にならないようにしようと心がけたが皆は俺が一人になるのを狙って渡そうとするみたいだ。それでも廊下や準備室で次々と生徒が現れてチョコを渡される。

渡してくる女子生徒は全学年に渡っており中学生からもかなりの人数から渡された。俺の席の準備室の角はチョコで一杯で今にも崩れそうになってしまった。

チョコを直接貰うのは久しぶりで悪い気はしないが受け取るたびに結衣の顔が浮かび苦笑するしかなかった。帰りに車に積み込むとトランクだけでは入りきらず後部座席も一杯になってしまった。

家に帰ると結衣があきれ顔で出迎えてくれた。大量のチョコも山を見て「どうするの？」って聞いてきたので、中のカードを抜いて知り合いのボランティアに委託する。まさかこんなになるなんて・・・。

俺は「チョコは家の冷蔵庫の中に入っているやつだけで十分だし、それしか正式には受け取らない残りは全部義理」って冷蔵庫に指を指して言ってやった。

案の定結衣は真っ赤になって食事の準備を始める。

私は冷蔵庫の奥に見つからないように隠しておいてたガトー・ショ

コラを見られてしまっていたので。赤くなり、そそくさとキッチンに向かって食事の準備を始めた。

今日の食事は寒い日にすこし暖まる、湯豆腐をメインにした和食にした。実はこのレシピは以前ひろくんが連れて行ってくれた旅館の女将さんに教えてもらった料理だ。

実はひろくんに内緒で旅館を出る前に女将さんと電話番号とメールアドレスを交換していて時々メールなどで交流がある。もちろんひろくんは知らない。女将さんとの秘密の交流をしている。

女将さんがパソコン通信でデータを送ってもらっていて家庭用のレシピなどいろいろアドバイスをくれる私にとっても大切なお友達なのです。

私が料理の腕を上げたのは女将さんのレシピも一役買っている。

食事の後の休憩中に見つかってしまったガード・ショコラをデザートに出した。ひろくんは「おお、おいしく出来てるね」って言うて口に運んだ。教えてくれた薫に感謝だ。

食べ終わったところで私はプレゼントの品を後ろ手に持ってひろくんに両手で差し出した。

「はい・これも」って、それは悩みに悩んで選んだチェック柄のネクタイだ。受け取って中を見て、ひろくんは「ありがとう、あす早速つけてゆくよ」って言うてくれた。

あとは大量に貰ってきたチョコに入っているカードを向き取りボラ

ンティアに委託できるように纏めた。それだけでも二人で3時間ぐらいかった。

それでも全部チョコ関連でよかった。物が入っていたら処分に困るので助かった。

私は「ブツ・ブツ・ブツもうこんなバレンタインデーなんて嫌いだ！！」って大量にあるチョコの山に向かって嘆いた。結構部屋を占領している。

俺はカードの中身を読み、過激な内容が無いのを確認して「ほっと」した。俺も結衣と一緒に考えが浮かんた。結衣はテーブルのカードの束を見てあきれた顔をした。

来年は何とか断る方法が無いかと・・・真剣に考えなければ。

もう・・・事務所に来た分は白石さんに丸投げしよう！！byひろき・・・。

後日裕子に「バレンタインの成果は」って聞くと、裕子は笑顔で顔を崩し両手で丸を描いた。私たちは手を握り合い「裕子おめでとう」って祝福をして皆で盛り上がった。

ひな祭り

ひな祭りは・・・

2月26日にお義母さんに実家に来るように言われ一人でひろくんの実家に行き玄関の呼び鈴を鳴らすと・・・。

お義母さんが勢いよく玄関の扉を開けると私の腕を引っ張り中に入るとぐんぐん私の手を引っ張り日当たりのよい和室の前に連れて行かれた。

お義母さんが引き戸を開けると、眩いばかりのすばらしい雛人形が飾ってあった。私は頭の中は？でいっぱいだ。

お義母さんは笑顔で「ようやく娘ができたから飾ってみたかったの」「これは結衣ちゃんのために特別に作ってもらった物で」

「人間国宝の大塚 正美さんをお願いしてかなりの時間を掛けて製作してもらった物なの」・・・「きれいでしょう」

横にある立てに「葵 結衣さんへ 大塚 政美 作」って書いてある。

あまりにすばらしい出来のようで私には勿体無い。お義母さんに「私には勿体無いです」って言う。

お義母さんは「私が好きでしたことなの近所にお披露目するから来週のひな祭りの日に又来てね」言って「今日は予行練習なの」って着物に着替えさせられ・・・。

段々飾りの前でいっぱい写真を撮られた。「うーん やっぱこれが目的？」

すこしは近所の人に声が掛けてあるらしく、しばらくすると数人が人形を見に集まってきた。よく考えてみれば人形でなくどうも私を見に来ているようだ。

近所の方から人形でなく私に質問が飛ぶ。

名前は？ お年は？

私「結衣です」 「16歳です」

皆私の歳を聞いて目を白黒させてびっくりしている。

ひろくんのお嫁さんだね、本当？

これはお義母さんが答えた「もちろんひろきのお嫁さんですよ、しかも現役女子高生なの、羨ましいでしょう」私の横で肩を抱いた。

私は恥ずかしくて、体中が真っ赤になった感覚になってしまいました。

ご近所さんは口をそろえて「「奥様は16歳で女子高生」」・・・
・「ひろきくん羨ましすぎる」

「しかもこんなに可愛くて礼儀正しいなんて・・・家の娘どもに言
って聞かせなきゃ」って口々に言っている。

わたし猫かぶっているのに、ご近所さんの娘さんたちに悪いわって心で思った。

その後どこの高校？って聞かれたので「白鳥学園です、高校からの転入組みです」って答えたら、ご近所さんはなぜか納得している顔をしている。

そこでお義母さんが、まあまあそれくらいにしてお茶しましょう、結衣ちゃんよろしくねって皆で応接室へ移動した。

キッチンで夏休みにお義母さんから教えてもらった紅茶を入れてワゴンで応接室へ向かい来てくれた人に振舞う当然着物なので淑やかな仕草になる。

皆お義母さんに向かって口々に「おしとやかな娘さんでいっぱい我慢できるわね」って言われお義母さんはニコニコで機嫌がいい。

皆さんが帰った後に「結衣ちゃんご近所さんのお相手ご苦労様です。今日はありがとうね」って言われた。

夕食前にはひろくんが迎えに来てくれて家族で食事をした後で一緒に帰った。ひろくんは「お袋の相手ご苦労さん、結衣のおかげでお袋の機嫌がいい。ありがとう」って抱きしめていっぱいキスしてくれた。おかげで疲れが飛んだ。

ひろくんの横で寝ながらひな祭りの日はどうなってしまっただろうって今からドキドキになってなかなか眠れなかった。

よくよく考えてみると私は小さな雛人形しか飾っておらずそれも小学生ぐらいで飾らなくなってしまった記憶がある。明日裕子たちに

聞いてみよう。

月曜日に学園で裕子たちに聞いてみるとほとんどの人が飾るのは小学生までのようでも由美さんの家はいまだに飾っているそうで、皆でひな祭りの夜に片付けるので大変だそうだ。

むかしお母さんがこんなことを言っていた「ひな祭りを超えて飾ってあるとお嫁に行きそびれる」って言う話だ。そういえば私の家は3月3日の夕食前にお母さんが片付けた記憶がある。

だから私ってこんなに早く嫁入りしたんだって納得？　しようと考えた。

バタバタしているうちに3月3日になってしまった。今日はひろくんと一緒にひろくんの実家に帰る。義両親は当然のごとくてぐすねを引いて私が来るのを待っている。

実家に着くと早速お義母さんに私の為の専用の部屋に連れて行かれ、予行練習できた着物よりもっときらびやかな着物を帰させられて、ひな壇の前に連れて行かれた。

あれ？　見たことがある人がカメラを構えている、それにレフ板を持った人も数人照明もついている一瞬ここはスタジオ？　って錯覚しそうだ。

お義母さんはカメラマンと何か打ち合わせをしてから私のところに来てから「結衣ちゃんすこし特集用に撮るからよろしくね」ってひな壇の前に連れて行かれた。

カメラマンがパシャ・パシャ・パシャやたらとシャッターを切るポ

ーズも注文が多い。私は「少し？ってどんな位？」頭の中は？でいっぱい。

一時間以上撮影は続きようやく終了の挨拶になった。ひろくんはそんな私を見て苦笑続きになっている。

応接間で休憩していると、撮影道具がばたたと片付けられ、今度は・・・やっぱりご近所さんが一杯集まってきた。私はお義母さんと一緒に隣で一人ひとりに挨拶をする。

10人以上居る様ですごい事になりそう・・・。

全員が揃った所でお義母さんが私を紹介する。「皆さんこの子がひろきのお嫁さんです、温かく見守ってください。皆さんよろしくお願いします」私は「結衣と言います、ご近所の皆様よろしくお願いします」

ひろくんが「俺の嫁さんをよろしく」って全員で頭を下げて挨拶をした。

皆さんも「こちらこそよろしくね、余り固くならないように」「それにしても年末に少し見ただけだけど本当に若くて可愛い子なのね」「葵さんも本当によい子を貰ったみたいで、お幸せに」って皆さんからお祝いの言葉をいただいた。

今日の会はひな祭りだけでなくご近所さんへの挨拶でもあったんだ。でも一杯お祝いの言葉を貰いうれしかった。

この後皆さんで雛井籠をいただいてお開きとしました。雛人形はすぐ片付けずしばらく飾るんだって、だって早くお嫁に行かないよう

に？だって。

もうお嫁に来ているのに、ここから出て行かないおまじないかな？
へへへ・・・。

私たちは夕食をいただいて帰路に着いた。後日撮った写真はお義母さんが私的目的に使うそうだ。

大人のひな祭りが終わった。結構疲れもした休日になった。

大変なホワイトデー

大変なホワイトデー

俺はなかなか一緒に出掛けることが出来ないので、この機会にデートのイベントを計画することにした。

まずは駅前で待合わせして映画館へその後、結衣のショッピングに付き合っ次はブテックでドレスに着替えをし予約してあるホテルのレストランで夕食をし一泊する計画でお返しは愛情たっぷり予定だ。

今日はひろくとホワイトトデートをする事になっている。恋人のように待ち合わせから始める。

まず駅前でひろくと待ち合わせデートに合せ可愛い服に着換えて待合わせ場所に向かう最近ではデートなどの時は余り好きでないコタクトで出かけるようにしている。

駅前で待っていると知らない人が一杯声を掛けてくる。

「君、一人？僕とお茶しない？」目鼻だしが綺麗な男の人たちが色々言ってくる。

こういう人たちは大の苦手で私は小さくなり断りの「連れが来ます」なんて言えなくて「早くひろくん来ないかな」としか考えていない。

俺が結衣を迎えに行くと何人かの男に声を掛けられているようだ。ナンバ中に俺が声を掛ける。

「結衣！おまたせ」って結衣に近づくとなンパ野郎どもが散って行った。今度は代わりに俺が女性より視線を浴びることになる。

手を繋いで駅前の駐車場まで歩いて行くと私は「あ！ひろくんが最初に来たときの車だ」この車の中の正面には木の模様があって暖かく好きなんだ。

白い小さなスポーツカーに乗り込み最初の目的地へと向かった。目的地は映画館もある郊外の大きな多目的ショッピングモールで映画を見てから結衣の好きなウインドウショッピングに付き合う予定だ。

俺は久々のお気に入りの愛車に結衣を乗せ気分上場で思わず自分の持ち歌を口ずさんだら、結衣がニコニコしてこっちを見ていた。

俺はぼつが悪くなり思わず口を押さえて、洋楽を流すことにした。

結衣は「HIROの歌をすぐ横で生で聞いたのに」って少し頬を膨らました。

俺は苦笑いするしかなかった。そんなこんなで目的地に着くと目指す映画館へと移動した。

映画内容はこの日に合わせたようなラブストーリーものを見ることになる。俺も案外涙もろいから結衣と二人して涙を流しながらエン

ディングを迎えた。

映画が終了し今度は結衣の好きなウインドーショッピングに付き合うこととする。ここのショッピングモールは日本一大きく多種多様の店舗が軒を連ねる。

話ではとても一日では回ることが出来ない広さだそうだ。結衣は目を輝かせ俺の手を握りあっちこちに連れ回された。

結構疲れ気味で結衣の相手を務めていると、専門店街で流行ファッションのイベントが行われたいた。

私は何かな？ってイベントを除くとイベントを開催している女性店長に私の手を強引に引っ張られ店の奥に連れて行かれた。

私たちが変な顔をしていると、店長さんが「貴方たちイベントの街角モデルのお願いできないかしら」って聞いてきた。

そして「貴方たちって結構歳が離れているようだけど恋人同士？」って聞いてきた。

ひろくんが私の腰に手を回し「私たちは夫婦です」「モデルの件は辞退したいですが・・・」って答えてくれた。

店長さんはかなり驚いた顔をして「彼女幾つ」って尋ねたきた。私は「16歳です」って答えると、店長は目を白黒させびっくりしていたけど、モデルの件は折れることなく。

店長さんは「そんな事言わないでお願いします」って大きく頭を下げて「イベントを盛り上げるためお願いします」ってさらに周りに

居るスタッフたちも全員深く頭を下げお願いしてきた。

私はそう言うお願いに弱く、ひろくんの顔色を伺って「どうしよう」って顔をした。

ひろくんは苦笑して「結衣の好きにしていよいよ」って答えてくれた。

ひろくんはHIROだとされると大変なので辞退し私は雑誌モデルの件もありお義母さんに電話して確認する事にした。

お義母さんに電話すると店の名前を聞かれた。店長に店の名前を聞くと「ファッション 小峰」って教えてくれたので伝えると、急にお義母さんが店長さんにならなくなってしまったので携帯を店長に渡し「お義母さんから話があるそうです」って言った。

電話が変わると店長さんは初めはかしこまっていたけど、すぐにこやかな顔になり笑いながら話を続けている。私の頭は???だらけになっている。

店長さんから携帯を受け取りお義母さんと話をする。「そこは雑誌のスポンサーのアンテナショップなのデート中悪いけど少しモデルお願い」ってお願いされた。

お義母さんをお願いされたので私だけは引き受ける事にした。

店長さんは大喜びで「貴方だったの“ジュジュ”の丸秘モデルって」言っって早速店の奥のフィットルームに連れて行かれファッション衣装に着替えさせられショー会場へと連れて行かれた。

私は写真モデルは少しやったけどショー会場でウオークはやった事

がない。店長さんもそこは心得ているらしく正面でポーズを取るのみにしてくれたけど、店長がマイクで「ジュジュの専属モデルが今回特別出演してくれました」なって言うからイベント会場はてんやわんやに成ってしまった。

私は数着替えてステージに立った後、裏口から分らないように店を出た。周りの視線が怖くて早めに切り上げて車に戻った。

ひろくんは「ご苦労様、お袋のわががまを聞いてくれてありがとう」微笑んでくれた。その顔を見て少しは疲れがとんだ気がする。

次はお義母さん行きつけのブティックに向かい、ひろくん指定の衣装に着替える予定のはず。

行きつけのブティックに着きひろくんが店長にお願いすると私は店長に手を引かれ奥に連れて行かれ、着た事もない淡いパール色のパーティードレスに着替えさせられてひろくんの前に立たされた。

肩が大きく開いて背中も大きく開きヒールも高いもので結構恥ずかしい。私は「ひろくん私にこの衣装私には合わないんじゃないかな？」って尋ねると。

店長さんが横から声を出し「年齢にあわせて選んでいます、よくお似合いですよ」って鏡の前に私を立たせて、私とひろくんに言った。

ひろくんは私に「結衣そんな事はないよ、すごく似合ってる」って言うてくれた。私は顔が暑い、たぶん真っ赤だ、又お化粧も大人用にしてくれたため見た目以上に大人びて見える。

私はこの格好でひろくんが予約したホテルに向かった。ホテルに着くとドアマンが車のドアを開けてくれる。

ひろくんはキーを渡し手をつないで一緒にホテルへ入ってゆくフロントで予約した葵ですってひろくんが言うと言えどマネージャーが「お待ちしておりました、案内いたします」って案内人に連れられ会場？でなくなぜか控の間に案内された。

扉を開けるとあれれ？なぜお義母さんが居るの、実はこの会場の催しはお義母さんが私のモデルのデビューの為に開いてくれたお披露目パーティーも兼用されいたのだった。

ひろくんがディナーを予約したのを知って併せて私のモデルのデビューもやっけてしまおうって考えたらしい。私何も聞いてないよ・・・。ひろくんも苦笑している。

おろおろする私に最低限のレクチャーをしてくれる。

モデル名は“白鳥 葵” 年齢は16歳 住いや特定できるものはすべて不詳もちろん結婚しているなんて言っちゃ絶対駄目って念を押された。

お義母さんが「もうそろそろ会場へ行きましょう、ひろきエスコートよろしく」って言うのと、いつの間にかひろくんがHIROの格好をしている。私が目を白黒させているとひろくんが「白鳥 葵ちゃん行きましょうか」って手を引いて会場へと向かっていった。

私は「ひろくんそんな名前で呼んで・・・」なんて少し頬を膨らました。

会場に入ると目が見えないぐらいのフラッシュが焚かれた。「パシユ・パシユ・パシユ・・・」

思わず私はひろくんの手を強く握った。思ったとおり記者会見をするらしい。椅子に座ると、お義母さんが「雑誌“ジュジュ”の専属モデルをやって貰っている“白鳥 葵”ちゃんです。このような場所は初体験ですので時々モデルをお願いしているHIROにエスコート役をお願いしました」私は立ち上がり頭を下げた。

記者からの質問が飛ぶ。

葵ちゃん“ジュジュ”発売以来カリスマ的に人気がありますがどう感じていますか？

私「びっくりしています信じられません」

モデルになったきっかけは？

私（お義母さんにいわれた通りに）「町を歩いていたときに（お義母さんを指して）この方にスカウトされました」

色んな質問が飛ぶそしてやはり・・・。

葵ちゃんは恋人はいますか？

私「やっぱりきたか恋人はいません」（だって恋人はいないけど旦那様はいるもんね）

好きな人又はどんなタイプが好きですか？

私（横目でひろくんをちら見し）「HIROみたいな人が好きです」（HIRO〓ひろくん（旦那様）だもん）

ひろくんは頭をかきながら「光栄だな、僕も彼女はタイプですよ」
って笑いながら言った。

記者たちは笑いに包まれた。なぜってHIROは女関係はまったくなくその方面はカリスマ的でもある。そのHIROがタイプって言ったのでびっくり笑いが出たわけだ。

お義母さんは私のぼろが出ないうちに会見を切り上げた。後は記者を除いた関係者の顔合わせパーティーが始まる。

各社の出版関係者や有名どころのカメラマンそのほか著名人らが和やかにパーティーが進んで行く。

お義母さんが私を気遣って出席者を厳選したってことらしい。和やかなうちにパーティーは終了した。

お義母さんは「ありがとう」を連発し私たちはこのホテルのスイートルームに入った。

部屋に入ってひろくんが開口一番「結衣ごめんお袋の暴走を止め切れなかった」って頭を下げた。

スイートのテラスでひろくんが「これ、バレンタインのお返し」って細長い赤いケースを渡された。

中を開けるとダイヤモンドがちりばめられているネックレスだった。ふたを開けると、ひろくんが私の首に手を回しつけてくれた。

ひんやりして外のガラスに浮かぶ私の姿を見て「うん、思った通り結衣が付けるとドレスにも合っていて結衣が際立って見える」

肩を抱きひろくに引き寄せられ・・・甘いキスが待っていた。

長い長い時間キスをした後抱き合って幸せを感じていました。しばらくすると「コンコン」「葵様、夜食をお持ちいたしました」って扉を開けると。

ウェイトレスさんがワゴンで夜食とは思われない豪華な食事を運んできた。ひろくんは「結衣、パーティーでは余り食べられなかっただろう？」ここなら気軽に食べられる。

よかった、私舞い上がって余り食事を撮る事が出来なかった。「ひろくんありがとう」ってゆっくり食べさせてもらった。なんて実はひろくんも食べれなかったらしく二人でワイワイしながら食事をした。

ジャグジーふろにはいってからゆっくり寝た。（もちろん、ひろくんと一緒に・・・）

大変だったけど素敵なお返しだった。「ひろくんありがとう」

あぶない春休み

あぶない春休み

終業式に里美さんたちがなにやら打ち合わせをしている。

「葬先・・・住所・・・年賀・・・マンション・・・皆で・・・」

こぼれ聞く話を総合すると。私たちの住所が解りマンションを訪問しようと計画をしているようだ。

住所は先生方に送った年賀状からばれたみたい。何人かの打ち合わせをしているこの中にも知り合いが居るので後でどんな計画かを聞く事にしよう。

終業式が終わり帰り支度をしている時に、私は打ち合わせの中に居た由美ちゃんに声を掛け「由美ちゃん途中まで一緒に帰ろう」って誘ったら「うん、一緒に帰ろう」って返事が返ってきた。助かった道中にどんな計画かを聞こう。

由美と一緒に帰りながら門のところに行くと、弘子が門の柱にもたれて私を待っていてくれた。

そういえば由美と弘子は初顔合わせになる。私はお互いに紹介した。

「こちら小さいころからの親友で白鳥 弘子さん」そして「この人は入学式ではじめに声を掛けてくれた佐藤 由美さん」

お互いによろしくねって握手した。三人で一緒に歩きながら話をすると弘子と由美ちゃんも意外と意見が合い意気投合したようだ。

話が弾んでいるときを狙って話を切り出す「ねえねえ、教室の角でなんか里美たちと何か計画していた様だけどどんな話かな？」って振ってみた。

由美は私の思惑も気にせず、里美の計画を話し始める。内容はこういう話だった。

「えっとね、里美が田中先生に用事があって職員室に居るとき竹谷先生の机の上に載っていた年賀状を見たら葵先生のところから出されたものらしく、葵先生の住所が書いてあったそうで、記憶力のよい里美が覚えてたらしい。そして春休みに皆で先生の家に押しかけ様って計画したの。たぶん里美が一番先生に会いただけとは思いますが私も先生の家は興味があるので一緒に行こうって考えているんだけど」って教えてくれて「家に行く日は3月30日に行く計画なの」とも教えてくれた。

弘子は私たちの関係はまだ知らないから「ふうん、色んな計画を立てるんだ」って気にも留めていないようだった。

私は帰ったら早速ひろくんに相談しなくちゃとんでもない計画に私はドキマギしてしまった。

ひろくんに相談すると「うん・・・」考え込んでしまった。

マンションの部屋は誰が見ても新婚仕様で来たが最後奥さんと住んでいる事がばれればもしかかも私の愛用品が多数あり相手が女子高生だとわかってしまう。

しかもマンションの住人にでも合ったら学園服の私を見ているのでひろくんと学園の女子生徒が住んでいる事がばれてしまう。

雲隠れするにしてもマンションに來られ住人にでも合えば・・・ま
ずい！！。

ひろくんに私たち旅行ってお義母さんのところへ避難したらって言
ったら、ひろくんにマンションの住人に聞かれたらすぐばれてしま
うし、特におしゃべりの多治見婦人なんかに合ったら完全にアウト
になるよって困った顔をした。

そうだ私をよく知っている人をどこかに隔離しようってひろくんに
相談した。

隔離？をれて犯罪？んゝどこかに招待しよう俺の知っている人が
コンサートを開くらしいから、それに招待しよう今度チケットを持
ってくるから説得してくれるかな？

それから俺は知り合いのピアニストの久保田かな子さんをお願いし
てチケットを確保してマンションの住人の説得に当たった。

ほとんどの人は世界的に有名なピアニストのコンサートにひとつ返
事で賛同してくれてコンサートを聴きに行く事にくれた。

行けない人は用事で一日中どこかへ出かけるって話だった。

これでとりあえずマンションの住人に尋ねられても大丈夫のはず。
しかもセキュリティーはこのマンションは完璧のはずで。

このマンションの近くで事件が起きるとある程度収まるまで玄関先にガードマンが張り付く、偶然に左正面奥のマンションで不審者が出たようで今はガードマンが張り付いている俺は少し管理会社へ手を回し彼女たちが来る日まで延長するようにしてもらった。

これで彼女たちはマンション内に入れないはず、私たちはドキドキで由美たちが来る前に皆さんとコンサートへ向かう。

俺は実は結衣に内緒でガードマンの一人を俺の知り合いに頼んである。ある程度内容を話してあるのでうまく処理してくれるといいんだが。

少し早めにコンサート会場に着くと私たちは花束を持って控え室にお邪魔する。コンコン扉をノックすると中から綺麗な声で「どうぞ」って返事が返ってきて私たちは「お邪魔します」って扉を開け何に入った。

中に入ると小柄な私と同じくらいの身長の水の人が真っ赤なドレスを着て椅子に座っていました。

ひろくんは「かな子さん、今日は無理を言ってありがとうございます」って頭を下げたので私もいっしょに頭を下げた。

そして私は彼女に花束を贈った。かなさんは「この人ね、ひろくんのいい人は・・・可愛い子じゃないしかもかなり若そう、あなたって何歳？」って尋ねた。

私は「16歳ですもうすぐ17歳になります」って答えた。

かなさんは「やっぱり思ったより若いわね、お名前は？」

私「結衣です」

かな子さん「苗字は？」

私??「葵ですが・・・」

かな子さん「葵　結衣ちゃん？ひろきくんと一緒の名前なの？」

横からひろくんが「彼女俺の嫁さん、よろしく」って言ったら、かなさんは目を丸くして「えっお嫁さん？結衣ちゃんて奥さんなの？」

私は真っ赤になりうなずいた。かなさんは「ひろきくん、おめでとういつの間に？結婚したのかな、浮いた話などかけらもなかったのに」って笑って言った。

ひろくんは苦笑し、私はもじもじした。ひろくんが時計を見て「かな子お姉さまもうすぐ時間では？」って言う。チラッと時計を見て「そうね・・・ゆっくり聞いてってね、終わったらまた」って私たちに言って控え室を一緒に出て私たちは客席へかなさんはステージへと足を運んだ。

かなさんのピアノコンサートはすばらしく聞きほれてステージが終わった。けど何気にかなさんはアドリブでウエディングマーチを爪弾いて私たちをドキドキさせた。

そんな事をやっているうちに、やっぱり里美さんたちは私たちのマシヨンまで来たようだ。

サイド
里美

駅で皆と待ち合わせをする。メンバーは佐藤 由美・佐伯 レナ・渡辺 佑奈・松田 彩・柴田 杏奈の全員で7人で先生の家に向かう。

レナや彩たちが里美ちゃんと住所覚えてる？ って言うとき里美は「任せなさい」 って胸を張った。

先生のマンションは大体駅から15分位の所にある。駅からの広めの歩道を幅一杯使って歩いてゆく。

春休みなので全員が私服で来ていた。実はこれが功を奏していた誰か制服でも着ていたら私の関係がばれていたかもしてない。

里美はインターネットで調べた地図を持って先頭で歩いてゆくと、不意に立ち止まり「このコンビニを右へ回るとすぐに見えるはず」って歩くのを早めた。

コンビニを曲がって少し歩くと30階建ての綺麗なマンションが見えた、私は地図を見てマンションを指差し「ここだよ」 って言った。皆々「葵先生すごいマンションじゃん」 口々に言う、目的地が見えたのでさらに足早になる、玄関お入り口に着くとガードマンが立っていた。

里美がガードマンに「このマンションに葵先生っていらっしゃいますか」 って聞くと、「お答えできません」 って返事が返ってきた。

玄関で先生の部屋にインターフォンで連絡する「ルルルル」 出な

い。三回位掛けても返事がない。居ないみたいだ。うろろろすると玄関から男の人が出てきた。

里美は「すみません、このマンションに葵って人住んでいますか？」その男の人は「そんなのは分からない」って足早に去っていった。

近くにファミレスがあるみたいだからそこで時間をつぶして出直そうって由美が提案した。里美はもう少し粘ろうとしたけど残りが由美に賛成したので仕方がなくファミレスに向かった。

ファミレスは駅寄りにあり後の打ち合わせをする。全員がケーキ付ドリンクバーを注文しウェイトレスさんに里美が何気に葵先生の写真を見せてここに来るかを尋ねる。

ウェイトレスさんは「カッコいい人ですね」って言って「奥で聞いてきてあげる」って写真を持っていった。しばらくするとウェイトレスさんが戻ってきて「誰も知らないって」写真を返してきた。

実はもしかしてって思ってマンションの近くの飲食店には寄っていない。気遣いが功を奏したようだ。

しばらく時間をつぶしてから再度マンションに向かうしかしインターフォンからは返答はない・・・。又ガードマンから不審者が出たらしいので気をつけるようにとも言われ全員が落胆し重足で岐路に着いた。

私たちはコンサートが終わると会場前でマンションの人と別れてかな子さんの居る控え室へと向かう。マンションの招待客は「久しぶりに、よいコンサートが聞けて楽しかったわ、ありがとうね」って各自ばらばらに帰っていった。

控え室に入るとかな子さんは私服に着替えていて私たちを待っていた。私は「すばらしい演奏ですね、感動しました」って感想を述べた。

かな子さんは「ありがとう、じゃ約束の一緒に食事をしましょう、穴場を予約してあるの」って告げ「行きましょうか」ってさっさと控え室を出て行った。

私はひろくんの顔を見るとひろくんは苦笑して「これがチケットの条件なんだ」って私の手を握って控え室を出た。

ひろくんの運転でかな子さん指定の料亭へ向かう。一見様お断りって小さな立て看板がある小さな料亭へ入っていった。

意外と若い女将さんに案内され個室に入ってかな子さんは女将さんに「おまかせで」って告げ、女将さんが出て行くと、目を輝かせ早速私たちの馴れ初めを聞いてきた。

ひろくと私は顔を見合わせ幼馴染からの話をするようになった。しばらくすると仲居さんが食事を運んできて後で女将さんが食事の説明をしてかな子さんの横に座った。

私たちは頭に？が出る、すかさずかな子さんが女将さんを紹介する。「女将の斉藤 祥子さん実は私と幼馴染で同級生周知の仲なんだ」ニコって笑って「今日はひろきくんを酒の肴にして盛り上がるつも

りでここを選んだだよ」って笑って告げた。

結局二人にいろいろ聞かれ、私たちは酒の肴にされてしまい食事が終了になって料亭を後にした。かな子さんをホテルに送ってから岐路に着いた。

結構疲れた一日だった。帰るとひろくんがどこかへ電話をする。「もしもし、葵だけど山口、今日はどうだった、ん・・・やっぱり来たか・・・それで・・・んありがとう、めんどくさいこと頼んでごめん、埋め合わせはするわ。じゃまたよろしく」って電話を切った。

ひろくんはガードマンの一人の山口って人に状況を聞いたようで概要を教えてくれた。ほぼ私たちのことは判らなかった様だそうだ。

明日由美に電話を入れ探りを入れよう。次の日に由美に電話すると先生はいないし手がかりなしって教えてくれた。

私とひろくんは胸をなぜ下ろした。この手はこう使えないだろうな何かいい方法を間なえなければ・・・俺は頭痛い。

誕生日会は身内で・・・

誕生日会は身内で・・・

今日は4月3日私の誕生日です。私はひろくんの実家へ御呼ばれでひろくんと一緒に朝早く車で向かう。

お義母さんはホワイトでーでのバタバタのお詫びをかねて誕生会を行ってくれるらしい。しかも今回は身内だけで行う予定だそうだ。

どんなだろう？ひろくに聞いてもろくに誕生日会なんてやったことが無いから想像も付かないらしい。

玄関に付くといつもの様にお義母さんが待ち構えている。やはり最初は衣装の着せ替えのようだ。

でも以外や以外シックな薄ピンクのワンピースに着替えさせられたでもスカート丈は短めだ、腰のところにリボン帯があるのでくるつと回るとスカート部が綺麗に開く全身鏡で見ると歳相応のデザインで案外似合ってるかも。

お義母さんは「このワンピースは例のアンテナショップの店長さん妹さんのデザインなの貴女を見て是非って作ってくれた一品物なの」「出来れば早いうちに一度その服を着て寄ってあげて」とも言われた。

そういえばフィットルームで着替えをしてくれた人は店長さんに似ていたからその人かな？そういえば着映えがするなんて歯の浮く台詞を言ってたっけ・・・。

仕度が出来て洋室の今に集まるとひろくんもそれなりの格好をしていた。

お義母さんは「全員集合したから行きましようか」って玄関に向かった。

私は「ここじゃないんですか」って聞くと、「ようやく、祖父母に空き時間が出来たのよ、スケジュールが合わなくて貴方の誕生日に合わせてもらったの出かけるわよ」って普通の車より長い車に乗り込んでいった。

車の中で義祖父母の話を聞く、お義母さんは「本当はもっと早く会わせてかったんだけどお義父さんに会社を任せてから自分の趣味に没頭して、趣味って言うのは写真なんだけどお祖母ちゃんも巻き込んで世界中飛び回ってるんだから、中々合う時間が取れなくてようやく今日時間が取れたって理由なの、これから空港へ言って沖繩へ向かうのよ」

私「えー沖繩？・・・沖繩へ向かうんですか」

お義母さんは「そうなの、波照間島に別荘があるのでそこで誕生日会よ」

お義母さんはうれしそうに言って私の両手を握って振った。

空港に着くと自家用ジェットで一路波照間空港へ向かう約2半時間のフライトになるそうだ。私たちのほか数人人が乗り込んでいる。

波照間空港へ着陸すると大きな車が飛行機に横付けしてきた。中に

は義祖父母も思わしき人が乗っていて、車から降りて私たちを迎えてくれた。

お義母さんが開口一番「お義母さん、ひろきのお嫁さんを連れてきました」私が一番前に押し出された。

私は「初めまして、結衣です」って頭を下げて挨拶した。

義祖父母たちは「貴方がひろきの嫁さんね、写真と同じで可愛い子なので安心したわ御免ねこんなに遠くにまで呼び出しちゃって」

私は「お会いできて光栄です、いつもひろくに頼ってばかりです」って答えた。

祖母はひろくを見て「あいも変わらず元気そうで、ちゃんとお嫁さんを守らないと」って助言してくれた。

家族全員で車に乗り込むと、別荘へと向かった。残りの飛行機に乗っていて人は飛行機の整備の人だって。

別荘に着くと・・・玄関にお手伝いさんが待っていてくれて、食堂に集合すると昼食が待っていた。

和気藹々と和やかに食事が進むうちに祖父母が別荘の裏はプライベートビーチになっているのよう大丈夫だから泳いでらっしゃいって言うてくれた。

私は「でも何も持ってきていないです」って言うとお義母さんが「大丈夫もちろん水着も要してあるわよ、ひろきと一緒に泳いでいらっしゃい」って言うてくれた。

部屋に案内され衣裳部屋を覗くと、ちゃんと水着が用意してあった。でも・・・これひものビキニじゃんはずかいくて着れないよ・・・しばらく固まっていると。

ひろくんが扉の向こうで「おい、どうした」って言ったので私は「もう少し待って」って言って、意を決してビキニを着てその上に大きいTシャツを着込んでひろくんのところへ出て行った。

真っ赤にしてひろくんの所に行くと「行こうか」って私の手を握ってビーチへと歩いていった。

うしろから義祖父母とお義母さんたちが「二人きりにしてあげるから楽しくね」冷やかされた。

波打ち際に打ち寄せる波に足を付けるとちょっと冷たいけど入れない事はない。やっぱ沖繩は暖かいんだ。

二人して海水の掛け合いをやると二人のTシャツは海水でぬれて透けてきた。ひろくんは勢いよく

Tシャツを脱ぐとバシャバシャと海の中へ入っていった。そして「結衣、気持ちいいからこっちへおいで」って腰の当たりまで浸かったところから私を呼んだ。

私は周りを見ただけ誰も居なかったのでTシャツを脱いで海に入っていた。

俺は結衣のTシャツを脱ぐところをみたら中は白のビキニだった。俺は「おうあんがい似合ってるじゃん」って思っ手振った。

二人して水中眼鏡をつけ海に潜ったりして沖縄の海を満喫した。小一時間ビーチで過ごし別荘に戻った。

シャワーを浴びにシャワールームへ行く前に義祖母とお義母さんに捕まりビキニ姿を見られてしまった。お義母さんが祖母に如何です私の見立てです。私のビキニをさした。

祖母は「うんうん、いいね若い子は色んな衣装を着れて、似合ってるよ」私は早く着替えたかった。

シャワーを浴びて着替えようとするとお義母さんが入ってきて私の着る衣装を選んでくれた。たぶん一人では衣装を選びきれなかったと思う……。だってすごい数の衣装がある。

お義母さんを選んでもらった。ドレスに着替えてみんなの待つ部屋へと向かった。

部屋に着くと知らない人も居た私は？周りを見渡すと……。

義祖父母が「身内だけのはずが飛行機を見て知り合いが集まったみたいで……」私はひろくんの横に並んで周りに「ひろきの家内の結衣です」って挨拶した。

それぞれから「誕生日会だっておめでとうございます」男性から「おいくつになれました？」横の婦人が「あなた女性に年齢を聞くなんて」って肘鉄をする。

私は「大丈夫です17歳になりました」って答えると。

全員が感嘆の声を出す「お〜」「え〜」……………。

さる男性から「ひろきくん、可愛い子を貰ったんだね」って言うのとその横の婦人がその男性を突く。

全員が笑いの渦となった。

彼らは私の顔を見るだけのようで私におめでとういいな言いながら花束を受け取ると皆々では又と言って去っていった。

去った後は嵐の後のようにシーンとしたが・・・。

ひろくんが「やっぱり祖父母の連れはすごいや」って少し笑ったので場が和になった。

少しするとメイドさんが「旦那様仕度が出来ました」と告げると。義祖父が「では行きましょう」全員が食堂に向かった。

テーブルには沖縄料理が並び中央に大きいケーキがある。

夫婦6組が丸テーブルを囲んで座り誕生日会が始まる。テーブルには祖父・祖母・お義父さん・お義母さん・ひろくん・私の順で座った。未だ2席空いている。空き席を見て「後どなたが？」って聞くとお義母さんが「時計を見ながらそこは私の祖父母が来る事になっているの」って言いながら「もうすぐ着くはずなんだけど」って言うてるうちにメイドさんがやってきて「進藤夫妻が到着されました」って告げた。そしてドアから「遅くなりまして」って母方の祖父母が現れた。

私は立ち上がり「初めまして、結衣ですよろしくお願いします」って挨拶をした。

進藤夫妻は「そんなにかしこまらなくても」って空き席に座った。

お義父さん側の祖父が「そういえば名前を言ってなかったね」「結衣ちゃんメインで忘れていたハハハ」

「私が父方の祖父で葵 光彦」「私はその妻の明子」「私は母方の祖父で進藤 亮」「その妻の様子」って紹介された。

又皆にされた質問を進藤夫妻に聞かれ同じことを返事した。

終始和やかに食事は進みケーキのろうそくを吹き消してフィナーレを迎えた。

最後に誕生日プレゼントが待っていた葵祖父母はプラチナのブレスレットを進藤祖父母は真珠のネックレスを義両親はティファニーのハンドバックそしてひろくんは腕時計をくれた。どれもこれのすばらしくありがたく受け取った。「皆さん私の誕生会を開いてくださいますのでようしくおねがいします」「ひろくんの奥さんとしてもがんばりますのでようしくおねがいします」でお開きとなった。

お義母さんが疲れてでしょう。早めに床に着くといいわってひろくんと私は早めに引き上げた。

残りは少し遅くまで話し合っていたようだ。私とひろくんは特に精神的に疲れ私なんかはベットに入るやすぐ眠りに入った。ひろくんも私の髪を少しなぜただけで眠りに入っただけらしい。

朝起きると私はひろくんを抱き枕にして寝ていた。ぱっと離れるとひろくんが目を覚ました。私は眠気眼のひろくんにキスをして起き

上がって着替えようとした。

体を起こすとひろくんが引っ張って私を抱きしめてキスして「昨日は一杯あったね」って言って二人で起き上がった。

着替えて下に下りてゆくと皆ちょうど集まったようで夜と同じようにテーブルに座って朝食をとって少し話をしてから岐路に着いた。

帰りは進藤祖父母も一緒に帰ることになった。葵祖父母に別れを告げ空港から飛び立った。

進藤祖父母とも仲良くなり「今度遊び気に来なさい」って言われてしまいました。

私はひろくんと「近いうちに顔を出します」って答えて和やかなうちに空港に着き解散した。

私たちはひろくんの実家によって車でマンションまで帰ってきた。

マンションに戻ると多治見婦人とはったり出会ったので丁度手に持っていたお土産を手渡し沖縄へ少し行ってきましたと告げると。

多治見婦人は「それはよかったね」ってつけて「お土産ありがとう」って去っていった。

マンションの部屋に着くと二人してソファーに座り込んで「大変だったけど楽しかったね」ってひろくに告げると「ごくろうさま」って抱きしめてキスしてくれた。

さすがにこの日は食事を作る気がなくて外食で我慢してもらった。

でもひろくんの元行き着け？の小料理屋で料理も大変おいしかった。

ようやく私の誕生日会がおわった。

二年生 弘子に秘密が・・・

二年生、弘子に秘密が・・・。

今日は始業式又校門のところで桜吹雪にあう「キャー」今年もスカートを押さえる。

弘子と門のところで出会った、一緒のクラスになるといいね、二人で掲示板を見に行った。

2年A組・・・すぐ名前が見つかった。2年A組女子一番”葵 結衣”あっけなくクラス分けが判った。

弘子が「私A組だ！結衣はこのクラス？」ってほかのクラスリストを見ていった。

う・うん 「私もA組みだよ」って答えた。すると弘子が「名簿に無いんじゃない？」って言ったのであわてて弘子の背中を押して。

「見間違いじゃないの、ちゃんと載ってるよ」っていつて背中を押して2年A組の部屋に向かった。

私たちのクラスの担任はイケメンの田石先生だった。もちろん副担任としてひろくんが付く。

出席を取った時に当然“葵 結衣”って呼ばれて返事をする苗字が違うことを弘子にばれた。

始業式後に屋上に連れ出され、弘子が私に「“葵 結衣”ってだれ？ 貴方はたしか紺野 結衣じゃなかったかな？」ってニヤニヤしながら質問してきた。

私は、仕方が無く中学三年の正月からの出来事を説明する羽目に陥った。

弘子は目を丸くして私の話を聞いていた。そして結衣 ちょっと健康保険カード見せてっていったので財布からカードを出して弘子に見せた。

弘子は「ふうん 旦那は葵って言うんだ」って言ってカードを返してきた。

結衣の彼氏に合わせてもらうからねって弘子が言ったので「う、うん」てあいまいに答えた。

すかざず弘子が「今日逢わせてもらうから」って言い切って私をにらんだ。仕方が無く家まで弘子連れてくることになった。

マンションに着くと弘子が「ここなんだ愛の巣は」なんて言ったから、赤くなってしまった。部屋に入りひろくんを待つことにした。

ひろくんを待つ間に、私は本を見ながら夕食を作ることにした。それを見て弘子が「手伝ってあげる」といって、一緒にキッチン立った。今日はとりあえずカレーを作ることにした。

私がスムーズに動き回っていると、弘子が「ちゃんと主婦やってんだ」てきぱきとこなす私を見ていった。

私は「だって一年もたったんだよ」って言うと、弘子は「そんなに私に隠していたんだ」って笑いながら言った。

弘子は私も手伝ってあげるって二人でキッチンへ立った。

トントントン包丁の音「弘子うまい」って言うと、「ふん 中学一年から花嫁修業で鍛えたあるのよ」って胸を張っていった。

私なんかひろくんと一緒になるまでお母さんに頼りっぱなしだった。恥ずかしい（まあ今はある程度できるようになったけど・・・たまにおこげを作ってしまう）

下準備が終わったところでひろくから電話が入った。6時ごろそちらにつくってことだった。

6時半に出来上がるように準備をしてひろくんの帰りを待った。

・・・

・・・

・・・ピンポン 6時丁度に玄関の呼び鈴がなった。

「はい」と言って、玄関にひろくを迎えにいった。

リビングでは、弘子がぐすねを引いて待っている。

ひろくんが玄関で弘子の靴を見て「お客さん？」って告げた。

私は「うん親友」って答えたけど不安一杯になった。そういえば初めてなんだね誰かが来るのは。

ひろくんがリビングに行くと弘子が仁王立ちしているひろくんが「なんだ弘子か」

弘子は「やっぱりひろきさんだったんだ」二人で笑い出した。

私の頭は???だ・・・。

弘子が「ごめん実は確証は持てなかったんだけど、お母さんからうすうす聞きはしてたんだ」

「でも本当に合うまでは確証がもてなくて、これで事実だってことが分かった」

「結衣、よっかね幼馴染で好きだったひろくと結ばれて」私は「あ・・・」あわてて弘子の口を押さえたけど間に合わずひろくに小さいころから好きだった事がばれてしまった。

ひろくんは「ふうくん、結衣も小さいころから好きだったんだ」って言った。

私は「も・・・てことはひろくんも？」私は全身の血液が沸騰したんじゃないかと思うほど体が火照ってしまった。

弘子はそんな私を見て「結衣、本当によかったね」って両手を握ってくれた。

ひろくんは「俺たちもだけど弘子お前もちゃんと居るだろう、左手

の薬指に光っているリンクを貰った人が」

私は「えー」あわてて左手の薬指を見ると確かに輝く指輪があった。
「弘子の相手は？」

弘子は頬を染め「近いうちに合わせる」って言ってくれた。「けど未だ婚約中だよ、結衣は結婚しちゃったじゃない、私は卒業まで待ってからの」

三人で食事をしながら今までの出来事を話した。特に里美の話は弘子が「私も見張ってあげる」って言ってくれた。

そういえばなぜ私たちのことを知っていたんだろう？弘子に聞くと

弘子も秘密が

食事も終わり片づけが済んでリビングで話の続きをする。

「ねえねえ、弘子お母さんから聞いたって言ってたけどお母さんってどんな人」

弘子は苦笑し「私の祖母は白鳥学園の理事長なのちにみ学園長はお母さん」って言ってひろくんのほうを見た。

さらに「ひろくんに教師をお願いしたのはお母さん、だよな“ひろきさん”」

ひろくんは「ああそうなんだ、だけど結衣が学園に入学するのは本当に知らなかったんだ」

さらに「おい 弘子君当然俺たちのことは学園のトップ以外は秘密だってことも知っているね」って弘子に返事を求めた。

弘子は「このことがばれると大変だし、お母さんからもうすす聞いていたから、もちろん秘密は守るわよ」って告げた。

私は「お願いね」って頭を下げた。

ひろくんは弘子に「送ってゆくよ、結衣ドライブかねて送ってゆく支度して」って言った。

弘子は「じゃあおねがい」って私の支度を待った。弘子は制服だけど私は家の中なのでラフな格好をしている。

私は自分の部屋の行き小じやれた格好にすばやく着替えてリビングの戻るとひろくんも準備を整えていた。

エレベーターを降り玄関でひろくんの車を待っていると西川さんが帰ってきた。

私は「こんばんは、そういえばこの前の江口さんはどうされました？」って言う。

西川さんは「こんばんは、又可愛い子と一緒にだね、彼の足はもう直ってマラソンでも出来る勢いだよ」って教えてくれた。

私は「よかったですね、彼女はクラスメイトです」って答えたところ

ろでひろくんの車が現れた。

私は「しつれいします」って頭を下げると、弘子も同じようにし西川さんは「では」ってエレベーターのほうに歩いていった。

私と弘子は後ろに座ってお話をしながら弘子を送っていった。

よく考えてみれば小さいころしか弘子の家に言った事がない。弘子の家に着くと弘子とお母さんに進められひろくと私は少しお邪魔する事にした。

弘子のお母さんからひろくんの教師になって経緯を説明してもらった。

まず担当の先生が寿で辞められてちゃんと次の方が決まっていたんだけどその人が事故で亡くなってしまい急遽ひろくに白羽の矢が当たったって事だった。

すべて上のほうでは決まっていたって事だった。現在中堅の後任を探しているところなの、でも私はそのおかげでひろくと一杯逢えてるのでよかった。

私の両親の転勤や色々が重なってひろくと結ばれたんだ。運命って良いなって思える。

弘子とおかあさんに手を振られ岐路に着いた。

道中でひろくんが「俺も親父に躍らせれたようだけど結衣に逢えてよかった」って言われ

ひろくんに「私もだよ」って言うのが精一杯だった。だって同じ事を考えているんだもん。

私たちはますますラブラブになった（はあと）。

ゴールデンウィークのお泊まり会（1／3）

ゴールデンウィークのお泊まり会（1／3）

今年のゴールデンウィークは飛び石状態で連続した休みではなかったけど前半はひろくんの実家へ後半は皆で薫の家にお泊まり会をする事になった。

ひろくんの実家に着くとお義母さんが私を引っ張って一杯衣装がある部屋に連れて行かれイブニングドレスに着替えさせられ全員で豪華ホテルのパーティーに連れて行かれた。

雑誌”ジュジュ“ 主宰の新作発表会だそうだ。エスコート役はもちろんひろくんだ。このような会へ出る場合は必ずエスコートしてくれる。

もちろんひろくんも広告塔の役目もあるそうだ。この手の雑誌では常識はずれの発行部数で他者のやっかみも多いって話だ。

もちろん結衣はそんな事は知らない。結衣は必ずこういう席では一人にしない。お袋か俺が必ず横に居るようにしている。

実は結衣宛てに色んなオファーが来ているらしいがすべてお袋のところまでシャットアウトしている。

前に結衣が独りになったのを見計らってオファーの話をしてきた人が居たときは結衣自体の認識が甘くわかりませんの連発していた所で、すばやくお袋がフォローに入り事なきを得た。

俺もこんな結衣とのエスコートで周りには女性に対する堅物さが少しは丸くなっているのでは？ってことでその方面の印象も少しはアップしているそうさ。

以前だったら、ドッキリを仕掛けられたときに相手の女の人に懇々と説教してその女優がドッキリを仕掛けたにもかかわらずその気になって説教されたってこともあって、現在の俺が作り上げられている。

私はひろくと居ると色んな人が声を掛けてくるその仲に知っている人が、以前ストリートモデルをやった店長の小峰さんだ。

小峰さんは「結衣ちゃん久しぶり、あの後大変だったのよ。そのとき貴方の着た服はあつと言う間に完売しその後の予約でんやわんや未だにその後遺症が残っているのしかも妹が送って貴方の着た写真を店に飾ったら問い合わせで電話回線がパンクしちゃった。うれしい悲鳴だわ」って楽しく会話した。

小峰さんとの会話に横入りで小峰さんと同じ歳位の人が数名「結衣ちゃん小峰さんの所だけじゃなく私たちの所もお願いできないかな？」私は勝手がわからず「え〜」って顔をしていると、すかさずひろくんが「その話は彼女のマネージャーのあの人に話を通して」ってお義母さんを示した。彼女たちはわれ先とお義母さんに向かっていった。

ほっとしたのもつかの間今度はひろくんに「やあ、HIROその子を紹介して」ってイケメンが話しかけてきた。よく見ると俳優の山口 啓太だ、テレビで見るより一段とカッコいい。クラスメイトの由美のお気に入りだ。

ひろくんは「よお、やつは啓太はしってるだろう彼女は白鳥 葵ちゃん俺はボディーガードこいつ俳優のいま連続ドラマ出演中の山口 啓太」

山口さんは「よろしく」って手を出してきたけど私は「白鳥 葵です」って両手を腿にあわせ頭を下げて握手はしないでいた。山口さんはばつ悪く手を引っ込め頭をかいて「ハハハ、硬いのはHIRO似だね」って笑った。

そして同じように次々と色々な人が挨拶に来た。私は同様に挨拶を繰り返した。

ジュジュの編集長が来て「HIROくん今度は君と結衣のコラボを組みたいんだけどマネージャーさんをお願いできるかな？」ってひろくんの近くにいた白石さんをひっぱて来て三人に言ってきた、ひろくんは「まあ、そのうちに・・・」お茶を濁した。

編集長は「近いうちに良い返事を待っているよ」ってほかのグループのほうに行った。

私はこういうパーティー形式は好きじゃない精神的に疲れる、ため息をつく、ひろくんが外に出て風に当たろうかって気がって会場を離れさせてくれた。

テラスで休んでいると山口さんが声を掛けてきた「あれ、主賓がこんな所にいて良いのかな？」ひろくと私の間に割り込もうとした。

ひろくんは思わず私の腰に手を回し自分の後ろへと私を隠した。「悪いな、彼女はなれていないし、慣れさせたくもない」

山口さんは「結衣ちゃんそんなにつれなくしないで」って又手を出してきた。

ひろくんはその手をぽんと叩く「こんなのがいるので俺がボディガードを引き受けたんだ」って笑ったら、山口さんも「お前がボディガードなら今日の所は諦めるよ」って背中を向けて手を振って去っていった。

しばらくして会場に戻るとお義母さんが「どこに行ってたの皆さんお待ちかねよ」って割腹のよい人がいるところに連れて行かれ、得意じゃない挨拶をする事になる。

その中には私をよく写してくれるカメラマンさんもいてその人からカメラマンの巨匠“藤堂 卓”さんを紹介された。

藤堂さんからは「今度は僕のモデルをやってくれないかな？」って社交辞令？でいわれた。

後から聞いたけど実は社交辞令でもなくお義母さんにかなり強くオファーをお願いしていたらしい。

会が終わる帰宅途中にお義母さんが「結衣ちゃん今日はご苦労さん色々大変だったけどゆっくり休んで頂戴」「これからはあまり今日のような事はしないようにするわ」って言うてくれた。

やはり疲れたのか実家のベッドに入るとあっという間に眠りに着いた。

俺は眠りについた結衣にキスをしてお袋の居る居間に向かった。

俺はお袋に「結衣はあつという間に寝ちゃったよかなり精神的に疲れたみたいだ。出来れば余り大きなパーティーは少なくしてほしい」ってお袋にお願いした。

お袋は「ひろき本当は私もしたくなかったんだけど今回は藤堂さんの口利きなの無碍に断ると支障をきたす事もあるし、モデルの件もあるから彼ならばそれでも良いかも」「彼って以外に口は堅いのよ、女たらしって言うのもまったくのうそだし」

俺は「本当？」って言うと「その通りなんだけど彼は女の子のヌードを撮りたがるから結衣の件はキャンセルだね」ってお袋は言った。

俺はため息をつきつつ部屋に戻って結衣の寝顔を見ながら眠りに着いた。

朝起きると隣に結衣はおらずキッチンに行くと元気な顔をした結衣が居た「おはよう」「おはよう、今日は私が朝ごはんを作ったのよ早く着替えてきて」って結衣がエプロン姿で言った。

可愛い・・・俺はしばらく見とれていたが「おお、」って着替えに部屋に戻って準備した。ダイニングに行くとお袋や親父も席に着いていて「遅い」って言われてしまった。

結衣も腕を上げたので朝食はうまい。結衣はもう一泊し俺はコンサートに出かける。お袋と仲が良いので助かる。嫁姑戦争は無縁なのだ。

次の日私は一度マンションに戻り薫の家にお泊りの準備をして出かけた。

いつも泊まりのコンサートのときはお義母さんをお願いしてお泊りするんだけど、今回は薰さんの所にお泊まり会をするので楽しみだ。一杯お菓子作りを聞こう。

俺は今回、結衣が2泊するって言ったから、全部で3日家を開けられる。余裕があるので地方コンサートを回る事にした。久々の地方コンサートでファンも盛り上がったくれた。

俺としてはファンサービスも踏まえ充実した活動だった。

ゴールデンウィークのお泊まり会（2／3）

ゴールデンウィークのお泊まり会（2／3）

今日からは薫の家でお泊まり会なのもちろん裕子や絵美も一緒にお泊りする但し二泊するのは私だけで後の二人は一泊の予定なんだ。

学校の駅で三人で待ち合わせ薫の家に向かう。一番乗りはやっぱり裕子だった彼女はいつも早い。

私はキャリーバックを引っ張りながら裕子の基に向かう「おまたせいつも早いね」って裕子に言う「私はいつもと一緒だよ人を待たせるのが嫌いなだけだよ」って言った。

集合時間が近づいても絵美が現れない。二人で壁にもたれていると男の人が声を掛けてくる。

「ねえ、彼女どこに行くのお茶しない」私は断るのが苦手だけど裕子ははっきりしている。

裕子は「行き先など関係ないです、お断りします」結構強い口調なので「ちえ」って言いながら離れていった。目立つのか何組かに声を掛けられた。

待ち合わせ時間を少し過ぎてから絵美が現れた。二人して「絵美遅い！」絵美は苦笑して「ごめんゝおまたせ」って駆け寄ってきた。

裕子は「余り遅いからナンパされちゃうかな、なんて考えちゃっ

た」って舌を出した。

絵美は「裕子なんかナンパする人居るの？結衣ならともかく・・・」
裕子は「こら」って絵美の頭を軽くばかりとした。皆で笑って駅の中に入り薫が待つ駅に向かった。

電車に乗って約40分薫の待つ駅に着いた。駅には薫とお母さんが迎えに来てくれていた。

私たちは薫のお母さんに「葵 結衣です・速見 裕子です・後藤 絵美です」「「お世話になります」」って挨拶した。

お母さんは「薫の母です、いつも良くお話しが出るのよ、よろしくね」って大きい車で薫の家に向かう。颯爽と車を操る薫のお母さんってカッコいい。

途中で皆でスーパーマーケットに寄って買出しをすることにする。わいわい皆でワゴンに次々と食材を入れてゆく。

今日は皆で出来るものにしようって薫のお母さんが提案した。
絵美は彼にだせる物がいいなって提案したら。から揚げやハンバーグになっちゃうよって裕子が言った。

薫がいいんじゃない、それだと皆で作れるし皆どうかな・・・。

私はそれでいいよ言うのと皆賛成して作るものが決まった。それに合わせて食材を変更する。

予定は昼はサンドイッチでその後クッキーやケーキを作って夕食はから揚げとハンバーグがメイン料理となる。

薫の家に着く薫の家は旧家なので屋敷は広い。しかしお母さんの趣味に合わせてキッチンが現代風に改築されているので今回の事があっても余裕がある。

客間に案内され荷物を置くと早速昼食のサンドイッチ作りに入る。皆ではさむ食材を作る。

卵料理は私が担当し野菜は裕子でサラダが絵美の担当残りともめは薫が仕切る。

私はまずゆで卵の準備をする。大きななべに水を入れ卵を5個入れてふたをし火にかけるその後卵焼きの準備をするとお湯が沸騰したので中火にしてキッチンタイマーをセットして玉子焼き用の卵を割って入れた容器を2個準備し一方は塩味もう一方は醤油砂糖味の2種類を作成する。

キッチンタイマーが鳴ったので火を止めお湯を減らし水を入れて冷やす。その後卵焼きを作成する。四角いフライパンでサンドイッチに合うように5枚ずつ卵を焼くその後ゆで卵を剥いて卵きりで切って私の担当は終わる。

ほかの人も完成しているようだ。後の仕上げは薫に任せる。

薫はテキパキと具財を挟んで次々と完成させてゆく。さすが料理時自慢の事はある。腕前の順は一番は薫・二番は主婦暦1年半の私・三番手は器用な絵美・ラストは裕子の順のようだ。

もし私が主婦していないなら裕子と同じくらいかもしれない。皆でダイニングに運びお母さんが用意してくれたコーヒーと紅茶で昼食

をとる。

中学時代の話などでランチタイムは進み結構時間をかけて食事をした。メインの恋バナの話は夕食後のお楽しみのようなようだ。どうやってごまかそう・・・。

食後は庭の探索する。昔風で広く池もあるけど現代風のガーデンもある。例によって池には橋が架かっていて高そうな鯉が泳いでいる皆で鯉に餌をやる。

結構鯉はがつっているので餌を投げるとあっという間に集まり食べ始める。結構面白い。

後は草花の観賞をする薫の祖母が花の手入れをし木々は祖父が手入れをしていてどれを見ても手入れが行き届いたすばらしい庭に仕上がっている。

見るだけで結構時間がかかる、いつの間にか夕食を作る時間になってしまった。全員でキッチンに戻りエプロンを着て夕食を作る。

まずは一番料理がうまい薫が統括をしてもらう。

私はたまねぎなどのみじん切り担当し裕子と絵美はハンバーグのひき肉をしっかりとこねる係りで味付けはかおるの担当。

焼くのは全員でかわり順番に焼いてゆく、ソースは難しいので市販品に少しだけ手を加えて作る。

から揚げは私が一口代に切り分けて薫がお母さん直伝のたれに漬け込み裕子と絵美が揚げてゆく。

コーンスープや細々した物もみんなで作ってゆく、六時過ぎに皆完成した。

ダイニングに並べて薫の家族と一緒に食事をする。薫の家族も皆来てくれたおかげで大勢で食事が出来たので楽しいわって和やかに食事が進んだ。

食事が終わり片付けも皆で行い楽しい食事会だった。薫の部屋で食後の飲み物を飲みながら少し雑談し早めにお風呂に入り客間に布団を並べ床に着きながら恋バナすることにする。

最初のターゲットは今年のバレンタインで告白した裕子からだ。

裕子は2年D組の佐々木 将太って子に告白しOKを貰って付き合っている。始めていそう。

野球部に入っていて2年なのにレギュラーだそう。足が速くセンターを守ってるんだって、連休最後に練習試合があるそう。応援に行きたい。真っ赤になりながら話してくれた。

キスは未だだそう。

次は絵美の番で彼女は中学時代から付き合っている彼氏が居る三年B組の岩田 直樹って人で柔道部の副主将をやっているんだって。

春の大会でも個人で五位団体は準優勝したそう。頼もしい彼氏でニコニコしながら話してくれた。もちろんキスまでは済んでいる。

次は私になるひろくんの話は深く出来ないから適当にごまかす事に

なる。とりあえず小さいころからの幼馴染が居て少し歳は離れているけど身近すぎて未だ告白していないから名前はいえないけどうまく言ったらちゃんと教えるって言ってごまかした。

次は薫だ彼女には大学一年の鳳って言う婚約者が居るはずで話が楽しみだ。

薫は最初は親が決めた婚約者だったそうでなんと小学一年からの付き合いで中学に上がると婚約を交わしたそうで相手方の家にも泊りや家族旅行もしている。

高校になってからは二人のデート回数はグーンと増えたらしい。でも小学生のころは恋人でなく遊び友達だったんだけど中学から意識し始め彼が高校に入った時に正式に告白されたんだって。

薫いわくとっても優しい彼氏なんだって、のろけていった。キスはもちろん済みで、後は秘密だそうです。

後は学校の友達の恋バナをしているうちに午前零時近づいてきたので眠る事にした。

「」「おやすみなさい」「」・・・。

ゴールデンウィークのお泊まり会（3／3）

ゴールデンウィークのお泊まり会（3／3）

チユン・チユン鳥の声で目が覚める、起きると薫はもう居なかった裕子と絵美は寝ぼけている。顔を洗いに行くと薫が居た「おはよう」薫も「起きたんだ、おはよう」って挨拶した。

「後は？」って言ったので「寝ぼけてる」って言ったら薫が笑っていた。

冷たい水で顔洗って戻ると裕子と絵美がのそのそと起き出した。「おはよう」って言うと「お・は・よう」って眠たそうに言った。夕べ電気を消してからこそこそ二人で恋バナしてたらしい。眠いのは当たり前だ。

朝食後皆で家の周りを散歩して時間をつぶし昼食後裕子と絵美は薫のお母さんに車で駅まで送ってもらい岐路に着いた。薫と私は近くのデパートへ行き店を見て回った。

途中ファンシーショップで可愛いペアカップを見つけたので迷っているとき薫が「買ったら」ってニヤニヤしながら言ったのだけど値段が高かったの少し躊躇したけど薫が「良いものは長持ちするから少しぐらい高いほうはいいのよ」って後押ししてくれたので購入する事にした。

購入時手持ちが少なかったのでカードにした。カードをしまう時に見られたらしく後で追求される事になる。

薫の家に帰り先日と同じように夕食を作って早めに床に着くと薫が左手の薬指を見せこれ「ねえ実は鳳君にねだって貰ったの、アルバイトで2年かけて稼いで買ってくれた私の宝物なの、結衣のもそうなんでしょうだってその指輪のダイヤモンド本物よ、だって昨日お母さんに再確認したんだもの、そのデザイン私のお母さんのよ、お母さんは実は宝石のデザイナーをやってるの入学式で見たときお母さんのデザインしたものにそっくりだからすぐ本物だと分かったのかなり高価のものよ」

私はびっくりして声も出ない。

「結衣って恋人が居るんでしょう指輪やカードを見れば分かるもの」

「ファンシーショップで使ったカードアメックスのブラックでしょう。普通そんなの持てない物」

私はカードの意味は判らなかつたけど指輪の本物宣言にドキッとして思わず「えゝこの指輪本物なの」って言ってしまった。

薫は「お母さんが見たから間違いない。それより相手は？・・・もう隠さないでよ」

私は観念して「薫、誰にも言わないでね実は私結婚してるの入学式の前に入籍したの私旧姓は“紺野”だったの」

今度は薫が驚く番だかなり大きい声を出す「ええゝ・・・結婚してた！」しばらく無言になってしまった。

大声で薫のお母さんも顔を出した。「どうかした？」薫が無言なので二人の顔を見て頭に？を浮かべて奥に帰っていった。

しばらくして薫が「相手は？」って聞いたきたので、ここまで話したら全部話して協力してもらおうと考え「薫の知ってる人」って言う。

薫が「まさか・・・葵先生？」って言うので私はこくりと頭を縦に振った。

薫は呆れ顔だ。私は「今まで黙ってたけど御免ね」弘子にも言ったいきさつを薫にも話した。

薫は「うんうん」って聞いてくれた。「大丈夫誰にも話さないから」って約束してくれた。

薫ありがとう少し心の痛みが去った。結構人に黙っているのはつらい・・・。

以後薫と弘子に一杯助けてもらう事になる。

朝起きて朝食を薫のお母さんと一緒にしている時、薫が私の指輪の話しをすると、おかあさんが私のもうひとつの秘密を暴露した。

お母さんは「ああ、その指輪の依頼人は芸能人のHIROに頼まれたのなぜそれを貴方が？彼との関係は？」って言われ薫に「どう言うこと」って迫られた。

私は小さくなり「実はHIROは葵先生なの私の旦那さんです」って言うしかなかった。

「「ええええ」」薫親子は目が点でしばらく声が出なかった。

私は赤くなりうつむくばかりだ。しばらくして薫が「ハア、すごい人が私の学園に居るんだ結衣もう隠し事はない？」あきれた顔で言った。

私は手を合わせ「御免もうひとつファッション雑誌の”ジュジュ”って知ってる」って聞いた。

薫は「知ってるわよ私も愛読してるもん、それが？どういうこと？」

私は「表紙のモデルって私なのモデル名“白鳥 葵”って言うのひろくんのお義母さんが雑誌社をやってるの」ってめがねを取って髪を解いて整えて見せた。

「「ええ」」また、薫親子はまた目が点でかなりしばらくの間声が出なくなった。

しばらくしてため息を付きながら薫は「はあ、結衣もう隠し事はないよね」

私は「もう無いよ、これで全部なのこれを知っている生徒は弘子だけよ」

薫は疑いの眼差しをむけたけど。私は「もうありません」って強く言った。

全部話したので心の支えが取れてお茶を飲みながら一服していると、玄関の呼び鈴の音が聞こえる。

薫が「あ、高志朗さんだ（鳳さんの名前）って玄関へ走ってゆくお

母さんは「そんなに慌てなくとも良いのに」って言ったけど聞こえないみたいだ。

居間に高志朗さんを連れてきた。私は立ち上がり「こんにちわ」って声を掛けた。

鳳さんは「あれれ、君は・・・“ 葵 結衣さん” かな？」薫は「高志朗さんって結衣って知ってるの？」って聞いていた。

鳳さんは「体育祭で結構活躍しただろう、三年でも結構話が出ていたよ、俺の知ってるやつが告白しようとしたけど彼女って帰宅部でわき目も振らずに即座に帰るし結構皆に囲まれていたり先生とも居たように話しかけづらかったらしく諦めたらしいし、彼氏が居るって噂もあった」

私は「えゝそんなの全然知りませんでした」

薫はニヤニヤしながら彼に向かって「取って置きの話をしてあげる」って私の話を語り始めた。

鳳さんは「ほんとう？すごいね」って繰り返えし言った。私は困惑した顔をしていると。

薫は「大丈夫、高志朗さんって口は堅いし、学園にも慕っている後輩も多いからいざとなったら皆に味方になるように話してくれるはずよね！そうだよ」って彼に向かって話した。

鳳さんは「葵グループとはつながりもあるし、話の聞く後輩にもいざとなれば話をするよ」って協力を申し出てくれた。

皆の温かい言葉でこれからのことを勇気付けられた。私は「ありがとうございます」って頭を下げた。

二人とも「気にしないで」って言って握手を交わした。鳳さんは薫の耳元で何かささやくとびっくりした顔になりそしてすこし、にやって笑った。

鳳さんが来た理由は私たちと昼食をとり4人で鳳さんが誘ってくれたコンサートに行く手はずになっているんだって。

本当は薫の家族と鳳さんで行くはずだったんだけど薫のお父さんが仕事の都合で行けなくなってしまい。私が付き合うことになったのだった。

今は鳳さんの運転する車の中にいる。ひろくんの車と違い幅が大きいのでハンドルが左についている。後ろ姿にAMGって書いてある。ちよっと音がうるさい。

車は高速道路をひたすら走る結構距離があるらしい。私は朝早かったこともあり、いつの間にか眠ってしまっていた。

薫は（助手席にいた）後ろで眠ってしまった結衣を見て鳳さんに「結衣眠っちゃったみたいびっくりさせるには丁度良いかも」ってニコニコした。鳳さんも「この子にもびっくりさせられたけど、今度はびっくりさせる番だね」って言った。

そんなことを話していることなど判らないままあどけない顔をして眠ってしまった結衣だった。

車は高速を降りあるコンサート会場の裏門の関係者の駐車場に車を

止める。そして薫が結衣の肩をゆする。「おいしい結衣ちゃん着いたよ」

私は薫に起こされ眠い目を開ける。「おはよ、薫・・・」薫もふざけて「結衣おはよう朝だよ」ってからかうと。

私は周りを見て「あ・・・ごめん、寝ぼけてた・・・」慌てて姿勢を正す。鳳さんが「葵さんよく寝てたね」って笑っていった。

私は恥ずかしくなり小さくなって「すみません」顔が赤くなる。「ところでここは何処ですか」って言うのと。

鳳さんが「会場の裏口なんだ。出演者にオフアーが取ってあるから遭いに行こう」って全員で車を降り裏口から中に入っていた。

細い楽屋をを奥に歩いていくとメイン出演者と思わしき大きなドアの前に来る。ドアには”H I R O様控え室”って書いてある。

私の頭の中は???が飛び交う。薫のお母さんがドアをノックする。「コンコン」中から聞いた事のある声で返事が返ってくる。

ドアを開けて中に入るとやっぱり私の旦那さんが居た。ひろくんは私を見てビックリしている。けれど私のことがばれていると思わないひろくんは

「ああこれは渡辺さんいつぞやは無理を言っておりがとうございませす。横に居る二人は娘さんですか?それとその奥は娘さんの彼氏さん?かな」

薫と鳳さんは笑いをこらえるのに必死だ。私は苦い顔をする。ひろ

くんはお客の様子が変なのを感じ頭に？が出ているようだ。

そして薫のお母さんが「HIRO今日はお招きありがとうございます。ございます。ビックリした顔をしないで」お母さんはニコニコしながら「御免ね結衣ちゃんが全部話してくれたのよ」

ひろくんは目が点になっている。お母さんは薫を指し「この子は私の娘で貴女の奥さんと同級生なのよ、貴女に送った指輪で分かっちゃったの」って微笑んだ。

そして鳳さんを紹介する「知っていると思うけど薫の婚約者の鳳高志朗くん、葵グループとも付き合いはあるはずよ」って言った。又色々な秘密などをかかった。

ひろくんは苦笑しながら「そんな関係だったんですか・・・結衣こちらへおいで」って手招きしたのでひろくんお隣に行った。

ひろくんは「結衣がご迷惑をおかけしまして又これからもご迷惑を掛ける事がありますがよろしくおねがいします」って頭を下げた。

かおるたちは「頭を上げてください、そんな事をしなくとも私たちは結衣ちゃんの味方です、こんないい子を守るのって当たり前じゃないですか」って嬉しい事を行ってくれた。

そして少し雑談に入るとドアをノックする音が聞こえ「コンコンHIROさん出番です」ってアシスタントが告げた。

私たちは「じゃ見るほうに回るから」って控え室を出ると、ひろくんが「結衣一緒に帰るか」って聞いてきたので薫の顔を見ると「一緒に帰りなよ」って言うてくれたので、「はい」って答えた。

HIROのコンサートはあいも変わらず凄かった。コンサートが終わり鳳さんの車から荷物を降ろしひろくんの待つ控え室へと向かい中に入るとひろくんではなく

綺麗な人が椅子に座って何かメモを取っていた。中に居た彼女はこちらを振り向き「あら結衣ちゃんもう少ししたら旦那さんが来るから」って言われ、秘密がばれてる・・・私は青くなってしまった。

この人誰だろう? 「あの・・・貴女は?」 おずおず聞いた。彼女は笑って「私はHIROのマネージャーの白石 弘子よ、私は貴女を知っているけど会うのは初めてだよ、よろしくね」

思わず頭を下げて「こちらこそよろしくお願いします」 って言うとき白石さんは笑って「HIROの言った通りで堅い人ね」 ってさらに笑った。そこに

扉が開き私服でさっぱりした格好のひろくんが現れた「結衣お待ちせ、白石さん事務所までよろしく」 って私の荷物を持って歩き出した。

私は慌ててひろくんの後を追った。白石さんは分厚い手帳をハンドバックにしまうと私たちの後を追った。

私たちはマネージャーの白石さんの運転するワゴン車でひろくんの車が置いてある事務所まで送ってもらう。

途中で夕食をとるためにひろくんお気に入りのお店のパスタの店に寄る。店に入るとオーナーが出てきて個室に案内される。オーナーが「久しぶりですね、両手に花じゃないですが」 って言ってきた。

ひろくんは「こら！白石君は知っているだろう、もう一人は俺の奥さんだ」って言うってからオーナーは「えーいつ結婚した、しかもその彼女えらい若いじゃないか如何見ても高校生に見える」ってビックリした。

ひろくんは笑って「当たり前だろう現役の女子高生だよ」って言うたら私は恥ずかしくて俯いてしまった。オーナーは「話は後で聞かして貰うからな」って厨房に向かって帰って行った。

ひろくんはオーナーに「料理はお任せでよろしく」って言った。オーナーは両手を上に丸を作った。

しばらくするとオーナー自らワゴンを押して料理を運んできた。色々なパスタ料理が並んで「どうぞって」言われ皿に選り分けながら食事を取る。

私は思わず「うまい！！」料理はものすごく口に合い美味しかった。オーナーがうれしそうに笑っている。食事が終わりに近づくときオーナーが私たちの事を聞き始めた。

ここのオーナーはひろくんの先輩で昔は良く通っていたらしい。一通り私のことを話してから「では・・・って」店を後にした。

事務所に着き白石さんにお別れを言いマンションの帰る途中でスパーに寄り主婦よろしく食材を購入し帰った。一杯驚かされたゴールデンウィークが終了した。

ひろくんお休みって一緒にベットの深い眠りに着いた。

たのしい？修学旅行

たのしい？修学旅行

もうすぐ高校での最大イベントの修学旅行が近づいてきた。でもその前に中間テストがある。

私たちは裕子の家でテスト勉強をする。メンバーは裕子・絵美・由美・薫・弘子・私結衣で行っている。

薫と弘子は私の秘密を共有するって関係ですぐに仲良くなってしまった。

うまいこと各自が得意分野が有りお互いに教え合いをして勉強した。

裕子は数学が得意だし絵美は古文で由美は国語で薫は英語が弘子は社会が得意でそして私はひろくんの受け持つ物理と情報が得意なのだって旦那様の教えだものなぜかどんどん頭に入る。

それぞれ苦手なものを教えてもらい、得意なものを教える本当によりメンバーが集まってくれた。

おかげで全員の成績がアップした。これで安心して修学旅行にいける。

修学旅行の行き先は沖縄に決まった。北海道と決戦になったが理事長の押しで決定した。

行程は6泊7日のなんと一週間の長い時間だそのうち3日間が丸々自由時間に当てられるけど後でレポートの提出が待っている。

沖縄本島以外への移動もOKなのだがあらかじめ申告が必要でその島には引率の先生も同行（寄り添わないが島内に待機）する。

実は皆には内緒だが私たち自由時間グループは波照間島の別荘への招待の予定なのです。

もちろん引率の先生は私の旦那様です。なんと残りのメンバーの彼氏も同行する手はずになっている。

修学旅行は第一グループを勉強会で集まった6人で形成する。通常の行動時はこのメンバーで移動する。

但し少人数行動は薫・弘子・私だ。裕子たちは少人数グループでなく大人数を形成し行動するそうだ。まあその中には彼氏がいるのでそうしたいようだ。だって少人数は同姓しか駄目で大人数は男女混合が出来る。

やはり彼氏彼女がいるようで何組かの大人数グループが出来る。私たち三人は関係ないので少人数で行動することで別荘へ行く計画を立てた。

二年になって里美は別のクラスになったのでこの計画は里美には漏れなかったがひろくんの後をつけ様としたらしい。

初日は那覇空港へ降り立った後第一の目的地の首里城の見学とひめゆりの塔とひめゆり平和祈念資料館での平和への祈りをささげて各自ホテルで泊まる。

私たちの部屋はジュニアスイートルームに追加ベットで私と弘子と薫の三人で泊まる、大体はツインか3〜4名で気の合うもの同士が

一緒に泊まる。由美ちゃんも誘ったがほかに友人が居たのと自由行動時にばらばらになるので三人にとどまった。

隣の部屋は裕子たちでお互いが行き会って楽しく過ごした。就寝前に弘子たちに背中を押され私だけがひろくんの部屋に遊びに行った。

二人は「黙っててあげるからお泊りしておいで部屋を追い出された。私は皆に気づかれないように遠回りして携帯で連絡しひろくんの居る部屋に向かった。

コンコンとするとドアがすっと開き手を引っ張られ中に入った。「きゃー・・・」抱きしめられ口を口でふさがれた。後で「大きな声を上げると気づかれちゃうよ」って囁いた。

私は真っ赤になり縦にうなずいた。ひろくんは人気があるので見学中はほとんど近くに寄れない。密会でゆったり過ごし日にちが変わったあたりで私は弘子たちのところへ戻った。

こそっと戻った私に二人は「なぜ？戻ってきたの？」って言われてしまった。しかも次の日同じく戻ろうとしたら中から鍵がかかっていてメールに「戻ってきちゃ駄目お泊まりしなさい」って・・・ひろくんの所に戻るしかなかった。

ひろくんの部屋の戻り「追い出されちゃった」って言うひろくんは「二人に感謝しなきゃ」って私を抱きしめてきた。結局後の2日間はひろくんの部屋におとまりとなった。

後で聞いたけど里美がひろくんの部屋を訪ねるべく探索したらしいんだけどさすがにスペシャルロイヤルスイートには来れないようで石田先生たちに聞きまわっていたらしい。だってひろくんの部屋に

行くには専用のエレベーターが必要でしかも専用のカードキーが無ければ乗ることができない。私はあらかじめ自分の部屋とひろくんの部屋の兼用のカードキーを受け取っているので乗降可能なので行き来できる。

このホテルは鳳グループが経営しているってことでかなり便宜を図ってもらっちゃった。薫の彼氏（鳳）さんありがとう。

各クラスごとに分かれて沖縄を皆で楽しむ。私たちのクラスの行動は西表島への渡って体験学習を選択した。黒糖づくりや星砂の浜めぐり内浦川のカヌー体験など楽しい日を過ごした。他のクラスは沖縄本島周辺の離島や石垣島など各所に分かれて体験学習をする。里美のクラスは本島周辺の離島めぐりで私たちと大きく離れているので心配は無くなった。

そして最後のイベントのグループ行動になる。ホテルの玄関で引率メインの石田先生が皆に訓示する「今日からはクループ行動に入ります。各自提出したプランに乗っ取って節度ある行動をお願いします。何かあるときは必ず引率者又はここで私が待機しますので連絡を忘れないようにしてください。以上自由行動に移ってください」

皆が「「はい」「」」って自由行動に移る。私たちはタクシーで空港に向かう全体の1／3ぐらいは本島から離れる。その2／3は空港から次の島に移る。

私たちはひろくんの自家用ジェットで波照間島へ向かう。空港の特別待合室に入ると鳳さんとカッコいい知らない人が一人居た。その人に弘子が親しく話しかける。そしてこちらを向いて「皆紹介します。私の婚約者で新條 要さんです」新條さんは私たちに「初めまして、新條です今回はお招きありがとうございます」って挨拶した。

薫は「あれ、新條さんてSGKグループの跡取りじゃなかったですか」って聞いた。

新條さんは「よく知ってるね、その通りだよそれにしてもBIGなメンバーが集まったもんだね」って笑っていった。

そう、私の旦那さんは葵グループの跡取りだし、薫の婚約者は鳳グループのやはり跡取りだし弘子は白鳥グループの孫考えて見れば凄いメンバーでなぜ私が・・・なんて思う事がある。

メンバーが揃った所で自家用ジェットまでワゴン車で送ってもらう。全員乗り込み出発だ。

この時実は里美が後を付けてきていたらしいなんと仮病でグループ行動をキャンセルしひろくんの後を付けようとしたらしい。

ホテルから空港まではうまく着けていたが私たちが特別室に入ってから影で隠れて見張っていたらしいがさすがに私たちが自家用ジェットで移動するなんて思っていないから見失ったらしい。くわばらくわばら・・・。

さすが自家用ジェット20分ぐらいで波照間空港に着く祖父母は出かけていて居ないのだが私たちの為に世話係が残って世話をしてくれる事になっている。

昼食はお願いしたが夕食は私たちで作る予定で材料をお願いしてある。まず空港から別荘まですぐ行って割り当ての部屋で着替えプライベートルームに繰り出す。もちろん男女別じゃなくカップルでの部屋割りになっている。女性陣は部屋に入るとき皆赤い顔で入っていた。

ビーチの浜にはあらかじめパラソルが立てられテーブルや椅子なども用意され快適そのもので過ごせる。

私は誕生日のときに着たビキニでひろくんとおそろいのTシャツを着て弘子はさらに大胆な赤いビキニにストローハットとガウンって姿で薫は意外と色は地味な花柄ワンピースなんだけど腰にパレオを巻き結構背中が開いていてセクシーな姿で現れた。全員手をつないで現れたので含み笑いが出た。

軽い昼食後全員で海に入って楽しんでたち女性人は早めに引き上げ夕食の準備に取り掛かる。

薫はもちろん弘子も料理は得意で主婦の私が一番下手のようでひろくんに申し訳が無い。二人の主導の下に料理を作成する。

出来上がったたら私が男性陣を呼びに行く「はい夕食の準備が出来ましたよ」って声を掛けると「「了解」」って返事が返ってダイニングに現れた。

豪華絢爛の料理が並ぶ薫の腕前は一流のシェフ顔負けだお母さんに鍛えられている。

弘子も負けず劣らずだ。この中では主婦は私一人だけど料理が一番下手なのけどそれでも家事全体では私が一番のもある掃除や洗濯など地味な仕事は薫たちも得意じゃない主婦暦1年半は伊達じゃなかった。

「「いただきます」」和やかに食事が進む男性陣はさすがに食が進む私たちの作った料理の評価しながら次々と平らげてゆく一番

評価が高いのはやはり薫だったでも私が作ったものも評判は良かった。

食事が終わり片づけが終わると皆で雑談に入る、やはり話のメインは私たちになってしまう。

弘子の彼は余り知らないから笑いながら尋ねてくる。一番は大きくなって逢ってからすぐ婚姻届にサインをしたってことだ。正月に逢ってからすぐ同棲したし三カ月後には入籍した私は小さいときも好きだったけど大きくなってからも逢って一目ぼれをお互いにしたようで本人たちもビックリしている状態なので他人から見ればさらに面白く見えるらしい。

お休みの時間になったので各自部屋に戻る。ドアを開けてはいる前に全員で「「おやすみなさい」」って部屋には行った。ラージサイズのダブルベットは寝ごご値が良い。ひろくんとお休みのキスをして手をつないで眠りに入っていた。

つきの日はスキューバダイビングをして過ごした。男性陣はすべてライセンスを持っているので安心できた。はじめてダイビングで見る沖縄の海は綺麗の一言だった。

夜は私たちばかりでなく薫のたちと弘子んたちのなれそめ話をし、て過ごした。

3日目は島巡りをしてから皆が待つ沖縄本島に戻った。皆に「久しぶりだった」って口々に話して修学旅行最後の夜は更けていった。当然またしても私は部屋を追い出されてしまったのは薫たちの作戦だった。

一度里美を見かけたけどめっちゃ機嫌が悪そうだった。ひろくんを見つけたとき駆け寄って腕を組もうとしたけど丁度集合時期で里見の担任の竹谷先生が集合をかけたので事なきを得た。

里美と別のクラスになってよかった。最後にひやっていたけど楽しい修学旅行だった。

魅惑の転校生は外国人

魅惑の転校生は外国人

修学旅行も終わり学園に静香さ？が戻ってきたと思っただけ……又ひと騒動がありそうになった。

7月の1日に珍しく転校生がやってきた。教室に入ると田石先生は「今日は転校生を紹介する」再度ドアを開けて転校生を呼ぶ

「きみ入ってきて」ドアから入ってきた転校生は金髪のイケメン外国人だった。

田石先生が「彼の名は“五十嵐ダニエル”君でお父さんが日本人お母さんがイギリス人のハーフだそうだ。お父さんの都合で来日しこちらの学園に来たそうだが皆よろしく頼むぞ」って言うのと皆で拍手した、クラスの大抵の女性陣は目がハートだ。

ダニエル君は「五十嵐ダニエルです途中からですが皆さんよろしくお願ひします」って頭を下げた。話す言葉は劉著名日本語だった。

由美が一番に声を掛ける「恋人は居ますか？」田石先生は苦笑いだでもダニエル君は「向うでも居なかったよもちろん恋人募集中」って言ったので女性陣から黄色い声が出た。

キヤーキヤー騒ぐ女性陣を尻目に田石先生が「静かにしろ!!」って怒った。

田石先生は私の横の空き席を示し「五十嵐君、君の席は彼女の隣の

です」って私を指した。

ダニエル君は私の横に座るとこちらを見て「よろしく」って微笑みウィンクした。私はそのウィンクにたじたじになってしまった。

田石先生は私に「彼は明後日に教科書が届くからその間見せてやってくれ」って頼まれた。私は「はい」って言うしかなかった。

ホームルームが終わると彼の周りに女性陣が押し寄せたちまち私は追い出されてしまった。ダニエル君は苦笑いしながら質問に答えている。

私は弘子や薫のそばに退避しあきれ顔をした。もちろん弘子たちも同じだ。2時間が終わった後には他のクラスから一杯訪れ彼はみくちゃ状態になっている。

次の授業のチャイムが鳴って先生に怒られて皆が解散するまで席に戻れなかった。これが休み時間すべてに行われた「は〜」ため息が出た。

昼食が始まると私は弁当を持ち弘子たちと一著に校庭へ行こうとする。するとダニエル君に手をつかまれ「おれ弁当無いんだ何処で食事できる？」って聞いてきたら一気に女性陣が集まって我先に彼を食堂に案内しようとする。「私に任せて、案内するわ」「」

しかしそんな声を見無視してダニエル君は私の腕をつかんだまま離さず「君に案内頼むよ」って言われてしまった。女性陣からはさまざまなブーイングだ。

手を離してくれないので私は仕方が無く弘子たちに「御免先に言っ

てて彼を案内してから行くから」ってつげ、しかながなく学食へ案内するはめになった。

彼はしっかりつかんで私の手を離さない。廊下を歩くと周りからの女性陣の視線が痛い私はなぜ？って疑問を持ちながら頭をたれ学食まで案内した。

私は「ここで注文しあそこで受け取って支払いは生徒カードでって説明しその場を離れようとしたが手を離してくれなかった。

ダニエル君は「こういうシステムはやった事がないから一緒にお願いい」って言われ仕方がないのでランチを注文し彼と一緒にテーブルに座って自分の弁当を食べる事にする。

席に着いてすぐ弘子たちに電話する「御免、ダニエル君が判らないって言うから今日は彼と一緒に食べるから」って告げた。

円テーブルだったのであつという間にランチを持った女性陣に囲まれて私は小さくなって食事をする事になってしまった。

彼はニコニコしながらランチを食べている。私も弁当を開き食べ始める。周りに居る女性陣を無視してダニエル君が私につき次と質問する。

ダニエル..「名前は」

私 ..「葵 結衣」

ダニエル..「誕生日は」

私 .. 「ええ・・・4月3日」

ダニエル.. 「何処に住んでるの」

私 .. 「秘密」

ダニエル.. 「家族は」

私 .. 「そんなの答えなきゃ駄目」

ダニエル.. 「うん、おねがい」

私 .. 「駄目」 （だって結婚してて旦那さんと二人なんていえないよ）

ダニエル.. 「じゃ彼氏は」

私 .. 「いる」

ダニエル.. 「えゝいるの？」

私 .. 「ちゃんと居ます！」

由美 .. 「結衣って彼氏居るんだ」 横から口を挟んだ。

ダニエル君の質問攻めにあわてて食事を終わらせさつと席を立って逃げた。ダニエル君はあわてて追いかけようとしたが大勢の女性陣に囲まれ私を追いかける事は出来なかった。

弘子たちの居る中庭のところへ戻り食堂の件を説明すると「「災難

だったね」って同情してくれた。その後私やひろくんもたじたじの付きまといが始まる。

又それだけでなく女性陣からのいじめもどきも始まる私は「なぜ？？」「不可思議なんだ。」

大きないじめじゃないけど上履きの中に砂が入っていたりしたけど横の席にダニエル君が居るので机の中は荒らされなかった。だってそんなことしたら彼にばれちゃうもんね。

引き続き2年生でも学級委員をする青山君が同じクラスだったので、私をかなり助けてくれたおかげで余り大きくならなかった。もちろん彼氏居る宣言も利いている。

私がダニエル君から逃げる・彼が追いかける・それを女性陣が邪魔をする又は付きまとう、ってパターンだ。

なんとか裕子や薫たちに守られる日々が続くが夏休みに入って少し沈静化した。

ひろくんの追っかけられている気持ち判った気がする・・・。

H I R Oのライブツアー

H I R Oのライブツアー

夏休みに入ると私たちはひろきんの実家で過ごす事にする。ひろくんや私の追いかけて防ぐのに彼の実家は絶好の隠れ蓑になっている。夏休みはひろくんの芸能活動が多くするようにしているのでマンションで独りきりになるとひろくんの不安が増えるので実家で暮らすとひろくんも安心できる。

但し私はお義母さんの着せ替え人形と化してしまうのが少しつらい。でも今回はマネージャーの白石さんが了解してくれたので1週間の付き添いをする事にした。私は白石さんの助手ってことすなわちマネージャー助手が私の1週間の肩書きだ。でも実質は何も出来ないただの付き人なんだ。

白石さんがひろくんの実家へ迎えに来る。私たちは白石さんの運転するワゴン車で事務所によってからツアースタートの会場に向かう。

会場に着くとファンが待ち構えている。「「「キャー」」」白石さんやスタッフたちはファンを掻き分けH I R Oを控え室へと向かう。ひろくんが入ってファンが居なくなってから私は車を降り控え室に向かうと控え室にはH I R Oの格好をしたひろくんが本を読んでいた。

私が入って行くとひろくんが「お、来たか」って声を掛けた。私は「ファンって凄いね」って話しかけた。

開演時間が来たので、ひろくんは会場に行った。私はひろくんを待って控え室で待機する。暇をもてあまして携帯でピピピネットサーフィンをする。

突然携帯画面が・・・メールが届きましたって告げた。送信相手は「あ、弘子だ」中身を見ると「ひままの、いまどこ？」って簡単な内容だった。

「いま、ひろくんのツアーの控え室、私今マネージャー助手なんだ」って送信ピ！。

返信は電話だった「もしもし結衣、なに？アルバイトなの」私は「違うよ、一緒にツアーに付いてゆくだけなの肩書きだけ助手にする事でパスを発行してもらうの」って言った。

弘子は「いいな旦那さんと一緒に居れて」私は「良いでしょう弘子も同じように新條さんをお願いしたら」弘子は「私はそこまではむり」二人で「「だよね」」って話して携帯を切った。

泊まりはコンサート会場の近くのホテルのスイートで宿泊する。ホテルのレストランで食事中に弘子からの電話の話をすると思わず苦笑していた。

こんな感じでひろくんとのツアー珍道中だった。もちろんツアーが無いときは近くの観光めぐりもして楽しい1週間だった。

俺は今回の全国ツアーの一部に結衣が同行するのを楽しみにしていた。しかも夜は一緒に眠れるので一晩で元氣回復する。やっぱり結衣がそばだと安心だ。ただ1週間だけなのが惜しかった。

最後の日に突然お義母さんが現れ私を白鳥 葵に変身させH I R Oのコンサートで私をゲスト出演させられた。

コンサートの途中で司会者が私を呼ぶ「今日はスペシャルゲストが応援に来てくれました」

「ゲストをお呼びします」「雑誌ジュジュで活躍しているモデルの“白鳥 葵”さんです」

舞台横にスポットライトが当たる。私は仕方が無く舞台横から花束を持ってひろくんのところに歩いてゆくと客席から拍手が聞こえる。私ってH I R Oのファンでも歓迎されている？私はマイクで「今日はコンサートにお招きありがとうございます。これからご活躍を期待しております」って花束を渡した。

ひろくんは「ありがとう」って花束を受け取り「葵ちゃんも活躍を期待してるね」さらに会場に向かって「皆俺もだけど彼女も応援よろしく！」って言う。

会場からの拍手で一杯になった。私は「ありがとうございます」って舞台裏に下がった。

舞台裏に下がるとお義母さんが「ご苦労様、御免ね、突然ゲスト出演させて」って言った。

私は苦笑して「大丈夫です」って答えた。今日で同行は終わりしばらくはお義母さんたちと暮らすことになる。

でもお義母さんに連れまわされモデルの写真もいっぱい撮る事になるだろうな・・・。

それが次の私とひろくんの仲を大きく変える出来事が起きる。

夏の出来事（1／2）

夏の出来事（1／2）

私がひろくんの実家で着せ替え人形状態になって少し立ってからひろくんのライブツアーが終わった様で帰ってきた。

「ただいまー」私は「おかえりなさいご苦労様でした」玄関先でひろくんが抱きついてきた。

私もひろくんの胸の中に納まって上目遣いで見つめるとひろくんが私の唇を奪おうと……。

「む？」視線が……その先にはお義母さんが「私の娘に手を出さない！！」っていった。

私たちは「えー」……「はー」そんな私たちを見て笑って「早く入りなさい」って居間にくるように行った。

二人で居間に入るとお母さんが私たちの前に企画書を見せて「これ明日の予定だからちゃんと準備するように」って言って表紙をめくった。

“ジュジュとHIROのコラボ葵ちゃんの瞳にキス”私とひろくんは「なに？これって」

お母さんは「実は結衣ちゃんにCMのオファーがあってしかもその挿入歌をひろくんと一緒にとってことなの」

私は即座に「むり・絶対無理です」って首を横に何回も振った。ひろくんはあきれ顔だ。

そしてお義母さんは私たちに楽譜を見せ「この音楽よ」ってデジタル再生機をONにした。

軽やかな音楽が流れるひろくんが「これって、まさか根津木 大輔さんの作曲？」（根津木さんはカリスマ作曲家でCM音楽の大御所だ彼の歌は100%ヒットする）

お義母さんは「もちろん根津木 大輔さんなのだってこの話は彼から持ち込まれたのよ。もちろん作詞は彼お抱えの秋野 祥子さん、凄いでしょう」

私は理由が解らない。ひろくんはビックリして目を白黒して口が開きっぱなしだ。

さらにお義母さんは続けていった「彼を断ると色々大変なのよ知ってるでしょ絶対悪いお話じゃないから」って両手を合わせ私たちを拜んだ。

ひろくんは覚悟したように私の肩を抱いて「わかったよ、お袋その話受けるよ、結衣諦めよう」って私にあきれ顔で言った。

ひろくんは私を奥のオーディオルームに連れてきて音楽データーをセットして楽譜を見ながら口ずさんでどんな歌かを歌って見せた。

2回目は私も一緒に口ずさむとひろくんが上手いことハモってくれる。

「うん、心に入る音楽と歌詞だね」って私が言う。ひろくんが「どうやって調べたんだろうこのパートと音程や幅って結衣にピツ足し。」

結局夜遅くまでひろくんと歌の練習をする事になってしまった。はっと時間を見ると夜の11時になっている私たちは明日もあるからもう寝ようかって言ったので私たちはお風呂に入ってひろくんのベツトで一緒に寝た。

だってひろくんが居ないときはお義母さんに捕まって必ず隣に寝かされるんだもん……。

つきの日の午前中又オーディオルームでひろくんと練習をしてからCMの撮影スタジオへと向かった。

スタジオに入り「おはようございます」スタジオ内の人に挨拶をすると奥からちょっとカッコいい男の人が現れた。

「葵ちゃんようやく来たね」って男の人が言う。ひろくんが「根津木さん、お世話になります、妻の結衣です」ってあっという間に私が結婚している事を暴露した。

根津木さんは「こら、ひろきそんな事はもうお前のお袋さんから聞いているぜ」「せっかく口説こうと思ってたのに」おまえら親子は……って笑って握手を求めた。

私は握手しようと近づこうとするとひろくんが私の前に割って入り両手で根津木さんの手を握って「お世話になります」って挨拶した。

根津木さんは「おまえ、ここまでする？」笑って言った。そのあと

お義母さんが現れて「根津木さんあんまりいじめないでくださいな家の可愛い娘なんだから・・・」って笑いながら入ってきた。

根津木さんは「洋子さんにはかなわないな」って「じゃ行こうか」ってスタジオへ向かいかけた。

「まってゝ」って女のお人の声が振り向くとモデルさん？って凄く綺麗な人が駆け寄ってきてひろくに抱きついた。

私は「やゝ」あわててひろくんの元に近寄る。ひろくんは「様子さん、やめてくださいよ」って様子さんの肩をつかんで引き剥がした。

そして様子さんは私を見て「可愛い」って私にも抱きついた。私はわけが分からず固まってしまい見動きが取れない。

お義母さんが「様子さんは可愛い子が好きなのそう簡単に離して貰えないよ」って笑いながら私とひろくに言った。

私は「たすけてひろくん」って小さい声で助けを求めた。そして、ひろくんは「秋野さん、俺の奥さん返してくださいよ」って嘆願した。

けれど彼女は私の手を握って「やゝだ」って衣装室へ連れて行かれた。そしてなぜか秋野さんが私の衣装を選び始める「貴女を見てると創作意欲が湧くわ、そして貴女って着せ替えがいがあるのね」って言いながら次々と私に衣装を合わせようとしている。

そこにお義母さんが現れ「そうなのよ、この子って着せ替えがいがあるのよ」って一緒になって衣装を選び始める。

私はがっくりうな垂れなすがままになった。一時間以上かってやっと衣装が決定した。

俺はスタジオでイライラしながら結衣を待つ。プロデューサーは「彼女が気に入ったらあきらめな」黙々と準備をしている。

やっと結衣が現れた「可愛い」めっちゃ可愛い・・・可愛い衣装と合いあまって可愛さ倍増になっている。少女のような大人のような微妙な感じで・・・。

スタジオ内がざわつく、そこをお袋が「ハイハイ」ってを叩きながらスタッフに開始を即す。

私はチャラ系の衣装を着させられ恥ずかしくて下を向いているとひろくんが私の手を取ってセットの中に入っていったセットの中のブランコに座るとひろくんが私の後ろでスタンバイすると監督さんの隣にスポンサーさんと根津木が現れ。私たちを見つめてきた。

監督さんは「彼女をよく説得したね10年に一人出るかで無いかの逸材だよ」って根津木さんに言っている。

スポンサーさんと後ろに居る秘書と思わしき人は慢心の笑みを浮かべている。そして「彼女は？」って根津木に尋ねた。

根津木さんは「ジュジュって雑誌知っていますか？」って尋ねている。すると「その雑誌なら娘がよく読んでいるらしく居間のテーブルに在る物を見たことがある」って私を見つめてきた。そして「そういうえばその雑誌の表紙の子によく似ているようだが」って根津木に尋ねた。

根津木は「彼女ですよ。名前は“白鳥 葵”って言って私たちにも評判が良いんです」って答えた。

すると「白鳥 葵って娘たちからよく聞く名前だ。そうなのか彼女がそのモデルなんだ」彼は後ろの秘書向かって「柚木くん悪いけど色紙を手に入れてきてくれ。彼女にサインを貰いたい。娘たちが喜ぶ土産が出来る」

秘書さんは「はい、分かりました」ってスタジオを後にした。

私はそんなやり取りが合ったなんてことは露も知らず。ただCMの撮影演技を聞いているので精一杯になっている。

CM内容は私がブランコに乗ってひろくんが少しゆすりながら二人で根津木作曲の歌を口ずさむ企業のイメージCMなんだって。

練習をすると数回でなぜかOKが出た。そして本番が・・・足元にドライアイスのスモークを張り巡らし撮影がスタートする。

スタジオに音楽が流れ撮影開始する順調に始まるけど最後でひろくんが耳元で「結衣可愛いよ」なんて言うもんだから最後で赤くなり下を向いてしまった。

その直後、監督さんが「カットOK」なんて言うもんだから私は赤い顔を思わず上げた。

そんな私に監督さんが「葵ちゃん、さすがだね根津木の指名だけある本番一発で決めるなんて」って言った。

私は思わず「えっ？」って頭に？マークを浮かべる。さらに監督さ

んは「葵ちゃん最後の下にうつむくシーンは最高だったよ」褒めてくれたけどさらに？マークがでる。

実はひろくんは最後のシーンを監督さんや根津木に聞いていたけど自然を出すために私に黙っていたって事らしい。

しかし最後の演技なんてもう一回は絶対出来ない最後に近づけば先に反応が出てNG連発になるはず。

監督さんが私たちの演技の動画を再生して皆で見ると周りのメンバーは感心しきりだ。その時スポンサーさんが「白鳥さんご苦労様でした」って言って秘書さんから受け取った色紙を私に渡し「悪いけどこれを私の娘にとって書いてくれないかな」って言ってきた。

実は私はサインを書いた事がない。「ごめんなさい私書けないんです」って告げた。横に居たひろくんが色紙を受け取り「私が書きましょう」って書き始めた。

そして「娘さんのお名前は」って聞いた。すると「HIROくん悪いね、彩乃と真央って言うんだ」って告げると二枚にさらさらと書き私に渡し「ここに普通に書いてあげて」って言った。

私は「やっぱ書くの？」って言うところひろくんが「くづし字は書かなくていいから普通に名前を書くように書いてほしいよ」って言うてくれたのでひろくんが空けてくれた場所に名前を書いた、慎重に”白鳥 葵”って・・・。

スポンサーさんは満身の笑みを描いて大事に受け取った。そして「葵ちゃんファーストサインをありがとう」って告げた。

その後音楽スタジオに入り挿入歌を二人で歌うひろくんが横に居るので安心してスムーズに声が出るCMソングなので普通の歌でなく短いのでボロが出ないうちに終わる。

良かったこれで終わりだって思っていたら根津木と秋野さんに打ち上げの食事に誘われてしまった。

そして根津木さんが用意した乗る所の長い車いわゆるリムジンに乗って根津木指定の料亭へ行く事になった。

夏の出来事（2／2）

夏の出来事（2／2）

根津木さんの車は大通りを離れ細長い路地をゆっくり進み始めた。
根津木さんが「もうそろそろ着くから」って告げると。

少したってから車がゆっくりになると旧家のような和風建築の前に止まった。

私たちは車を降りて玄関の暖簾をくぐると和服のよく似合う女将さんと思われる人が出迎えてくれた。

「あら、根津木さん今日はずいぶん早いすわね」って微笑んだ。

根津木さんは私を指し「彼女の出来がすばらしくすぐOKが出たのでこんなに早くなっちゃったよ」って頭を掻きながらさらに「予約時間よりずいぶん早いけど大丈夫かな」って女将さんに尋ねた。

女将さんは「大丈夫ですよ、いつもの部屋は貴方の為の部屋みたいなものですから」って言い「皆様どうぞこちらへ」ってその部屋に案内された。

部屋に入り全員が座布団に座ると女将さんが「本日は扇屋へお越し頂いただきありがとうございます」って頭を下げ挨拶後さらに続けて「当店の女将の鈴と申します。いつも根津木さんにはひいきさせて貰っています」って告げた。

根津木さんは端から順に「葵グループの副社長の”葵 洋子さん”

隣の可愛い彼女は”葵 結衣さん”隣のH I R Oの奥さん隣はもちろんH I R O君で次は知ってるはずの秋野くん”って紹介した。

女将さんは疑問な顔をした「H I R O君の奥さん?・・・」根津木さんは「あ・・・それオフレコ。ついでに彼女は別名”白鳥 葵ちゃん”」ってさらに付け加えた。

女将さんは私のほうを見て「あ・・・貴女ってファッション雑誌のジュジュって言うのの表紙モデルじゃないですか」って言う根津木さんが「あれ、女将さんそんな雑誌見るんだ」って告げた。

女将さんはいっこり微笑み「失礼ですわよ私でもそれくらいは読めますわよ」って笑ってけど「実は親戚の子が持っているのを見て私もほしくなったの初版から全部ありますわよ」って告げると。

お義母さんが「ありがとうございます。その本は私が企画しましたの。ティーンが主なターゲットだけど企画によってはもう少し年齢をあげたほうがよいのかしらね」って今度はお義母さんが話し始めた。

女将さんは「是非お願いします。書店で購入時にすこし躊躇いが出ます」告げるとお義母さんは「良いお話が聞けました。企画を練ってみますわ」って微笑んだ。

女将さんが世間話で盛り上がっているところをかなり若い女性の仲居さんが生ビールと食前酒を持って現れました。そしてひろくを見るなり「あ」って小さな声を上げ女将さんに注意された。

しかしさらに私を見て思わず「葵ちゃん」って言ってしまい女将さんは苦笑してしまい「すみません」って私たちに頭を下げた。

そして二人で出て行っただのを見て根津木さんは「たぶんこってりしかられるんだろうな・・・」私たちは苦笑するしかなかった。

根津木さんは「仕事も順調でしたし、乾杯をしましょう」って仲居さんの持ってきたビールで乾杯しようとして「結衣ちゃんはウーロン茶でね」って乾杯の音頭をとった。

「今日のご苦労様でした。では乾杯」って美味しそうに根津木さんはコップのビールを一気に飲み干した。ひろくんとお義母さんは1／4ぐらい秋野さんは半分ぐらいを飲んでグラスを置いた。

しばらくすると女将さんと数人の仲居さんが料理を運んでテーブルの上に並べ料理の説明を始めた。なにやら季節の魚や野菜などの会席料理で聞いてもほとんど判らない。

ハモ落しやすすきのあらいの魚料理と夏野菜の創作料理ってことだけは聞き取れた。ビールで盛り上がる大人を尻目に黙々と食事した。どれもこれも美味しく結構な量を食べることが出来た。

ひろくんは秋野さんに捕まって管を巻かれている。お義母さんと根津木さんは営業？の話で盛り上がっている。後で聞いたんだけど秋野さんが私を何とかしようとしていたらしいけどひろくんが食い止めていたってことらしい。秋野さんは酒癖があまり・・・らしい「ひろくんありがとう」

私がトイレに行くとき女将さんに声を掛けられ「ごめんなさい、内の若い仲居が貴女を見て舞い上がったらしくて」って頭を下げてきた。ファッション雑誌”ジュジュ”は凄い人気で発行するたびに増刷し

ているんだそうでそれだけ私の顔も皆に判るってことらしい。

私は「大丈夫です、気にしていません」って答えた。すると女将さんは「皆に内緒なんだけど」ってすまなさそうに三枚の色紙を差し出して「従姉妹の娘が貴女の大ファンで本当はいけないし女将失格って事なんだけど、私と従姉妹の娘とさっきの仲居の分なのだけどお願いできないかしら」って言って手を合わせた。

サインなどスタジオで初めて2枚書いただけなんだけど、どうしようって迷っていると後ろから「結衣ちゃん俺からおねがい」って声が聞こえ振り向くと根津木さんが立っていた。

仕方が無く「ジュジュ（はあと）白鳥 葵って書いて宛名を聞いて＊＊さんへって何とか書き上げ女将さんに手渡した。

女将さんはものすごく喜びいつの間にかさっきの仲居さんが女将さんの後ろに居て深々と頭を下げた。私は恐縮しきりだ・・・。

部屋に戻るとひろくんに「結衣、遅いよ」って抱きしめられ叱られた。

根津木さんも帰ってきて「秋野さんが前後不覚になる前にお開きにしましょう」って千鳥足の秋野さんを肩で支え待たせてある車まで運んだ。

いつの間にやら白石さんが車に乗ってリムジンの後ろで待機していた。私たちは根津木さんにお礼を言って白石さんの車に乗り込み岐路に着いた。

騒がしい夏の出来ごとだった。

新婚旅行はシンガポール？（準備編・前半）

新婚旅行はシンガポール？（準備編・前半）

ひろくんの実家からマンションに帰ってきて一息ついていると、ひろくんが「結衣の両親に元気な顔を見せに行こうか」って言った。

そういえば一年半以上両親に逢っていない。私はそう簡単に逢いに行けないしお父さんも忙しいらしい。時々電話で話す程度でやはり少しは寂しい。

私は満身の笑みで「うん、ありがとう」ってひろくんに抱きついて言うより胸の中に飛び込んだ。

ひろくんは私を抱きしめてくれ「実は、もう旅行の予約は入れてあるんだ三日後から一週間の予定だよ」って教えてくれ、やさしく甘いキスしてくれた。

それからの二日間は両親への頼まれ物や旅行の準備でばたついた。

一日目は両親への頼まれ物を購入するためにショッピングタウンに出かけるんだけど、なんと弘子と薫が付き合ってくれた「弘子・薫、ありがとうございます」。

私はかなり早めに着いてしまいショッピングタウンの入り口で待つことにすると色々な男性が声を掛けてきた。

「彼女一人、俺とお茶しない」私「友達と待ち合わせですので結構です」って告げるすると「待ち合わせ時間は？少しぐらい時間

はあるでしょう、ちよつとそのサテンに行こうよ」ってしつこく言ってくる。

さらに三人組が現れ「彼女、遊びに行こう」って声を掛けてくる。さらに他の二人組が私の手を引っ張ろうと手を伸ばす。

私は「やー」って言いながらしゃがんでちじこまるとさらに一杯の人に囲まれてしまった。

余りの人だかりに警備員さんが駆けつけてくれて、野次馬や周りを囲んでいる人を解散しようとしてくれた。

警備員さんは「すみません、他のお客さんの通行の邪魔となりますので集合はもっと広い場所でお願ひします」って解散を即した。

野次馬さんは解散したけど未だ私の周りには未だかなりの人が居る。さらにその人たちは「てめえ、邪魔するんじゃないよ」って警備員さんに悪態をつきさらに何人かの人が私の手を引いて連れ去ろうとする。

私は、ようやく「いやです」って言うことが出来た。警備員さんは私の顔を見て「あれ？ 葵さん」って声を掛けた。

すると男の人たちは怪訝な顔をして警備員さんをにらんだ。しかし警備員さんは彼らの私をつかんでいる腕を強引に引き剥がし「お客様が迷惑しています。お引き取りください」って大きい体で高圧的に言い、私を彼らから引き剥がしてくれた。

彼らは周りの冷たい視線を感じ「うるせいやつだな」って捨て台詞を残しどこかへ行ってしまった。

私は警備員さんにお礼を言っていると、人ごみの中から弘子と薫が駆け寄ってきた。

「結衣、この騒ぎって貴女だったの？」ひっくりした顔で話しかけた。警備員さんが事情を説明すると、弘子たちは警備員さんにお礼を言って頭を下げた。

警備員さんは気持ちが悪くまで警備員室の奥で休むと良いよって私たちを休憩室へと連れて行ってくれた。

休憩室で座っていると先ほどの警備員さんが冷たい缶入りのお茶を持ってきてくれて「これどうぞ」って渡してくれた。

私たちは「すみません、ありがとうございます」「って受け取ると「君たち白鳥学園の二年生の生徒だろ俺白鳥学園出で大学一年の間宮って言うんだ。いまアルバイト中、その囲まれていた君は一年のとき結構運動会で活躍した“葵”って子だろう」って言うってきた。

弘子が「間宮さんって柔道部の主将をやっていたんじゃないですか」って彼に聞いた。

「おお俺って意外と知られているのかな」頭を掻きながら「そうだよ三年のとき柔道部で主将をやらしてもらった今は稲波って言うのがやっているはず」って答えてくれた。

彼と話をしていると年配の警備員さんが「間宮君、君ってもうすぐ早朝の部は終わりの時間だろうもう良いから早めに着替えて彼女たちに付き合っただらしてやったほうが良いのでは」って言うてく

れた。

間宮君は「君たちさえ良ければ今日の買い物は僕がボディーガード引き受けるよ」って言うてくれた。

私たちは三人で相談しお願いすることにした。「すみません。よろしくお願いします」「って頭を下げた。

又彼は「君たちって可愛いし綺麗だからこれからは余り一人での行動は止めといたほうが良いよ。ところで君たちって防犯ブザーって持ってる？持っていなければ早めに購入を勧めるよ」って助言もしてくれた。

私と薫はそんなもの持っていないけど弘子は持っているそうだ。落ちて着いたらすぐ買いに行こうって薫と話し合った。

私は弘子と薫のおかげでしばらくすると落ち着きを取り戻したので皆で買い物をする為に休憩室を出た。もちろん私たちの後ろには私服に着替えた間宮先輩が付いて来てくれている。

私は弘子たちに予めシンガポールへの両親の頼まれ物の購入を話してあるので、真っ先にと行ってけど間宮先輩の話を思い出し彼に「すみません。防犯ブザーって何処で売っています？」って聞いた。

稲波先輩は「判った。俺が案内するよ」って先頭で歩き始めた。しばらくすると看板に“護身・防犯用具の店 ボディーガード”って書いてある店に入って行った。

中に入って防犯ブザーのコーナーを見ると色んなカラフルな防犯ブザーが並べてあった。

私と薫は「あ……これ可愛い……あれこれも良いかも」って悩み始めた。やはり女の子向けなのでカラフルで可愛い特に小学生向けはキャラクタータイプなんだけど私たちにはちょっと合わないかな。

それでも私たちは定番のキャラクター付きの物を購入してしまった。後で弘子に見せてもらったなら何も無いシンプルなものだった。私と薫は自分たちが買った防犯ブザーを見てお互いに苦笑してしまった。

それから私たちは両親への頼まれ物を書いたメモを頼りに最初のお母さん指定の化粧品屋さんを目指す。ちよっと装飾の綺麗な店舗にお母さんの指定するメーカーを取り扱うショップに入る。

中に入ると綺麗に化粧をしたお姉さんたちがこちらを向いて「いらっしゃいませ。本日はどの様な御用でしょうか」って聞いてきた。

私はお母さんから聞いたメモを店員さんに見せ「この搔いてある物を揃えて下さい」ってメモを渡した。店員さんはメモを見て「判りましたしばらくお待ちください」って店の奥に入ってしまった。

他の店員さんが私たちに「お客様は高校生ですか」って聞いた来たので私たちは「「はい。そうです」」って答えると私に「貴女お化粧ほとんどしていない様だけど本格的にしてみない」って言うてきた。

私は「結構です」って断ると弘子たちが「結衣、そんなこと言わないでやってみたら」って言うので弘子たちに小声で「駄目だって、私がモデルやっていることがばれちゃうよ」って言うのと納得して店員さんに「「結衣はやっぱり止めた方が好いかな」ってあわてて否定した。

どうのこうのしていると店の奥に入っていた店員さんが一杯の袋を持って「お待ちどう様でした。これがお客様の指定の品物です」ってテーブルに広げて説明してくれる。

私は「はい、それでよいです」って告げると店員さんは又きちんと袋に詰めなおした。私は「代金はこのカードで」って黒いカードを差し出した。

店員さんはびっくりした顔で「はい、わかりました」って機械にカードを通し私はシートにサインをすると店員さんが「メンバーズカードを作成しませんか」って言ってきたので迷っていると間宮さんが私たちが遅いので店の中を覗いてきた。

私は「これからまだ回らなければならぬところがあるので又の機会にします」って商品を受け取り皆で店の外へと出た。

表に居た間宮さんが「やはり男は荷物係りでしょう」って私から荷物を取り「次は」って聞いてきた。私はメモを見ながら「次は雑貨屋かな」って言うの間宮さんはそれならこちらだって行き先を案内してくれた。

不意に弘子が「そういえば結衣の両親って何が好きかなあ」って聞いてきた。私は「ん」そういえばどんなだろう・・・「どうして？」って聞くと弘子は「両親の好きなものを一個ずつお土産に持ってゆくと喜ぶよ」って教えてくれた。

私は「うん、そうする」って私は考え始めた・・・・・・。

ふいに私は中学一年のときに小ぶりの財布を送った覚えがあるのを

思い出した。そういえばお母さんはすぐその時に使っている財布と取替え「ありがとう。大切にするね」っていつまでも使っていたはず又お母さんは物持ちか良いのでいまでも使っていてボロボロなのを見た覚えがある。

私は「そうだ、お母さんに財布をあげよう」って弘子たちにどんなのが良いのかを相談した。

すると薫が「私この近くでお母さんの系列の店があり、そこならお気に入りが見つかるよ」って教えてくれた。けど時計を見るともう12時を大きく過ぎていた。

私は「皆 時間も過ぎているので向うに見えるイタリアンレストランでお昼を食べない？ 間宮さんも一緒にどうぞ」って声を掛けた。弘子たちはすぐ賛成してくれたけど間宮さんは「俺は良いよそのハンバーガー屋さんで食べるから」って断りを入れてきた。

弘子が「間宮先輩そう遠慮しないでください。せっかく結衣が誘っていますのに・・・ボディーガードは？」って笑って間宮さんの手を引っ張ってレストランに向かう。

弘子に引きずられながら間宮さんは「ちょっと待ってくれ、今手持ちが・・・」ってポケットの財布に手を当てた。

弘子は「大丈夫、先輩はボディーガードでしょう代金は全部結衣が持つから大丈夫」って繰り返し言った。私は間宮さんには午後からもお願いしなければならぬので「遠慮しないでください、助けてもらったお礼やボディーガードもお願いしていますのでそれくらいは当たり前です」って告げた。

間宮さんはすこし苦笑したが弘子が強引に引っ張るのであきらめた様に弘子に引っ張られレストランに入ってしまった。

店に入るとウエイトレスさんが「いらっしやいませ、何名様でしゅうか」って聞いてきた。私たちは「4人です」って答えると「4名様ですねご案内いたします、こちらへどうぞ」って通りが見える広めの席に案内された。

席は私の右隣に間宮さん私の前は弘子でその隣に薫が座った。間宮さんは少し顔が赤い。不思議に思いながらも皆でメニューを見る。

一番最初に間宮さんがメニューを置いて「俺ランチで良いよ」って言う。と弘子と薫が「間宮先輩遠慮しちゃ駄目ですよ」って再びメニューを手渡しもつと選ぶように即した。

私は「私カルボナーラにしようかな」って言う。と弘子は「私は本日のパスタランチで」ってさらに薫は「私はペスカトーレにしようかな」って最後は間宮さんだけになってしまった。

間宮さんが迷っていると弘子が「先輩は好き嫌いがあります？」って聞くと「べつに・・・嫌いなものは無いけど」って言う。と弘子と薫が「私たちで決めてあげる」ってメニューを見ながら次々と注文した。「ほうれん草とパンチェッタのペネとデミグラスソースのオムライスとゴルゴンゾーラとグリーンサラダそれから食後のコーヒーひとつとレモンティー3つ　かな以上でお願い」ってウエイトレスさんに告げる。

間宮さんは「おいおいそんなに注文して」って言う。と薫が「あれ先輩これくらい食べられないんですか？」って言う。と間宮さんは「そんな事はないが・・・」弘子が「じゃいいじゃないですが」って締

めくくった。

三人で次の行き先を打ち合わせをする。間宮さんは罰が悪いのかあさっての方向を見てため息を付く。そうしているうちに料理が運ばれてきて全員で「いただきます」って食べ始めた。

さすがに運動部のことはある間宮さんは次々と口へ運び私たちが2／3ぐらい食べたところで完食してしまった。

なにげに外を見ると外の通りを歩いている人たちがちらちらと私たちを見ているようだ。間宮さんは顔が赤くなってきた。

間宮さんは「コーヒーが来るまで外でタバコをしてくる」って外の灰皿があるところへ向かっていった。

私たちが食べ終わる頃に間宮さんが戻ってきたところでウェイトレスさんが飲み物を待ってきた。

飲み物を飲みながら今度は薫が間宮さんに話しかける「間宮先輩って鳳さんと同じクラスだったんでしょ」って言うと間宮さんが「鳳を知ってるってどういう関係？」って尋ねた。

「彼とは幼馴染なんですよ、両親とも仲がよくよく遊びにくるし友人の話も聞かされているんです」って薫が答えて、さらに「私、彼に・・・間宮さんのことすこし聞いたことがある」って微笑むと、間宮さんがあわてて「ちよつと・・・例の話はやめてくれ」って言ったので弘子がそれを聞き薫に「駄目だよ隠し事は・・・」にやって笑った。

間宮さんが「その話はもうしないでくれ」って嘆願してきた。しか

し薫は「せっかく隣に思い人が居るんだから」って結局暴露することになった。間宮さんはあわててコーヒーを飲むと真っ赤な顔をして「もう一服してくる」って席を立てて行ってしまった。

私は意味がわからず？を頭に浮かべるばかりだ。弘子は薫に「どういうことかな私にも判る様に説明して」って薫に迫った。

薫は「さっきので結衣には判ると思ってんだけどね」笑って理由を説明する「結衣には彼が言ったんだけど結衣が一年の運動会ですこし目立ったでしょうそのとき間宮先輩が結衣のことを気に入ったらしいの告白するチャンスも窺ったらしいのよ」一気に薫が喋った。

私は「ええ」って驚き。弘子は「ふん」って鼻で笑った。私たちは飲み物を飲んで会計を済まし（もちろん結衣のおごり）レストランを出ると罰の悪い顔をして間宮さんが立っていた。

私は赤くなり弘子は私を肘で突付きニヤニヤしながら「じゃ次に行きましょう」って次の目的の店に向かった。

新婚旅行はシンガポール？（準備編・後半）

新婚旅行はシンガポール？（準備編・後半）

私たちは弘子を先頭に次の目的地の雑貨屋に向かう。並びは先頭に弘子その後ろの右側に私左に薫ですこしはなれて間宮さんが付いて来る。

間宮さんは結構赤い顔であっちこっちよそ見しながらそれでも私たちの後を着いてガードしてくれる。

私は後ろを向き頭を下げ「すみません、私の為に」恐縮すると隣の薫が肘で私を突いて小声で「駄目だよ、そこまで言う」とって言う。と間宮さんが聞いていたようで。

「大丈夫だよ、俺ちゃんと彼女居るから、大学に上がってから合コンでゲットしたんだそりゃ葵さんと比べたら月とスッポンだけどなって頭をかきながら言ってきた。

私は少しほっとしながら目的地へと歩いた。弘子が「あ、あったよ」って小走りに店に走った。そして店の前でワゴン車を引っ張り出し私たちに手を振った。

今度は4人で店に入りお母さんのメモを見ながら次々と品物を入れてゆくかなりワゴン車が満タンになる。弘子が「こんなに一杯どうやって持ってゆくの？」って聞いてきた。

私は「ここの分は送る手はなくなっているので大丈夫」ってレジに持って行った。そしてサービスカウンターで「すみません、この品

物をここに書いてある所に送ってほしいですが」ってお母さんの住所が書いてあるメモを渡した。

店員さんは何気にメモを見て「お客様本当にここでしょうか」って言うてきた。私は「はい、その通りです」って答えると店員さんは慌てて事務所に入って行って中々戻ってこなかった。

しばらくすると店長さんが店員さんと現れ「すみませんが私どもでは海外への発送は行ってはおりません」って頭を下げてきた。

私はそう言うときの為の手はずをひろくから受け取っていた。「ではこの紙に書いてある通りにしてください」って私は紙を渡した。

店長さんは私からメモを受け取ると内容を確認した。メモには購入品リストの明細を添付し、みよこの陵プロダクション 白石 由実加 宛住所** 電話番号** に送ってもらうようにって書いてある。

何のことはないHIROの事務所の住所が書いてあり宛先はマネージャーになっている。私は心で「マネージャさんに丸投げ？」って思った。

店長さんは宛先に？マークを感じながら「お客様、この宛先でよろしいのですね」って言うてきたので私は「はい、それでお願いします」って伝えた。さらに支払いはこれでお願ひしますっていつものカードを出した。

店長さんはカードと私を交互に見てびっくりした顔をする。初めてのところでこのカードを出すとほとんど今回と同じアクションをする。このカードっていったいどんな意味があるのだろう・・・。

間宮さんは私が出すカードを見てびっくりしている。手続きが終わり店を後にすると、薫が海外に送るのって大変みたいだね言った。そのおかげで結構時間がかかり喫茶店でひと息付くことにした。

そして飲み物を待っている時に弘子と薫がこのカードがどんな物かを説明してくれた。薫は「さっき見てたけど結衣って出したカードのすごさを判っていないみたいだね」弘子は「よくそんなカードを結衣に渡すなんてひろきさんって心が広いね」って言った。

私はカードを出し「これってそんなに凄いの？」って聞いた。三人は呆れ顔だ・・・すこし沈黙があって弘子が「結衣、そのカードはねクラス最高のカードでVIPユーザーしか持つことも出来ないんだよ」って言うてきた。

さらに薫が「そのカードって利用制限がほとんど無いって話らしいよ、さらにうわさでは買えない物が無いって噂もあるのよ」って追いつちをかけた。

私はカードの凄さを教えてもらいあわててカードを閉まった。弘子と薫は「ははは。そのカードはセキュリティが高いからビビらなくともいいわよ」言うてくれた。さらに「そのカードには写真があるでしょうほかの人は使えないよ」って言った。

そういえば籍を入れた後で写真入のカードに交換したっけ「私の旦那様って凄いとこの人なんだ」っていまさらながら改めて心の中で思った。

私たちは次の行動の話をする事にする「私お母さんにお財布を送りたいから、薫の知っている店屋に連れて行ってもらえないかな」って言うくと、薫が「OKだよ、その店なら私も顔が利くからいいのが

きつと見つかるわよ」って言うてくれた。

突然間宮さんが割り込んで薫に「そこってネックレスなんか売ってる？」って聞いてきた。薫は笑いながら「もちろんよ、その店のメインは貴金属なんだもん」って答えた。

さらに間宮さんは「薫君の顔で勉強できるかな？」とも尋ねた。薫はくすくす顔で「大丈夫、ちゃんとうまいことしてあげる。でも今すぐ必要じゃないでしょう今日色々見て必要な時期が来たら、ちゃんとしてあげるから」って言うのと、さらに「うんゝ連絡は鳳さんに言えばちゃんと私に繋がるから」って言った。

間宮さんは「彼との関係は？」って薫に尋ねた。もちろん薫は鳳さんの婚約者だ彼女は左手を上げ薬指の指輪をみせ「私と彼とはこういう関係なの」ってことさらに指輪を見せびらかした。

間宮さんは一瞬驚いた顔をしたが「貴女でしたか彼の婚約者って言うのは、彼からはいつもお惚気話を聞かされております。その節はよろしく願います」って頭をちょこんと下げた。

薫はそれを聞いて顔が見る見るうちに赤くなり下を向いて・・・「高志朗さんってどんな事言ってるんかな」ってつぶやいた。

私はいつもからかわれて居る薫が私と同じ状態になっているのを見て少し溜飲を下げた。「・・・えへ・・・」いつも薫にはからかわれているもんね。

罰が悪くなった薫が「もう行きましようか」って席を立ち私たちを即した。弘子は子笑いに「そうしましようか」って席を立った。私と間宮さんは顔を見合わせ同じく席を立ててレジに向かった。

間宮さんが「ここは私が払わせてもらおうよ」って私からレシートを取ってレジでお金を払ってしまった。私は「今日は私の為に皆お願いしてもらっているのに」って間宮さんに恐縮しきりになる。

弘子が私に小声で「こう言う時はおごってもらうの」ってつぶやいて薫と一緒に「「ご馳走様です」」ってお礼を行ったので私も慌てて「ごめんなさい、ご馳走様です」って頭を下げた。

間宮さんは頭をかきながら「じゃ行きましょうか」ってなぜか先頭を切って歩き出した。

ここからは結構距離があるみたいで私たちは間宮さんの後をちょこまか付いて行った。

ごつい男性の後ろをカルガモよろしくついてゆく姿は変に移るのか私たちは周りの人に結構じろじろ見られているようで少し恥ずかしかった。

実はこの時カルガモ状態でなくとびつきり可愛い眼鏡っ子と美女が2人そろって歩いているが目立っていて男性陣の目を奪っていただけだった。

じろじろ見られながら薫の言うジュエリーショップ”サザンクロス”に着き、薫の案内で中に入った。私たちが入ると店員さんが「いらっしゃいませ」って頭を下げてきた。

薫が一步前に出て「渡辺ですが店長さんは居ますでしょうか」って尋ねた。店員さんは「しばらくお待ちください」って事務所のほうに入っていた。

しばらくすると素敵な人が店員さんと一緒に私達の方に歩いてきて「お久しぶりです薫さんお母さんにはお世話になっております」って頭を下げてきた。

薫は「いいえ、こちらこそ」って私たちを紹介する「こちらがクラスメイトの”葵 結衣”さんでお母さんにプレゼントの財布を捜しているのをお願いします。その横が同じく”白鳥 弘子”さんそして彼は私たちのボディーガード役の”間宮さん”」って紹介した。ボディーガードってところで店員さんたちが少し笑いを堪えるのが見えた。

さらに「間宮さんは彼女さんのプレゼントを思案中だそうですのでそちらもよろしく」って言うの間宮さんは真っ赤になって「お願いします」って大きく頭を下げた。

店長さんが「わかりました」って一人の店員さんと呼び「松岡さん間宮さんの対応をお願いします」って告げた。

そして店長さんが「葵さんですね可愛い方ですね」って言いながらお目当ての財布が展示してある場所へと案内してくれた。

手提げバックや各種小物が多数展示してあり目移りがしてまったく選ぶことが出来ない。「うーん」思案しきりだ・・・。

私が余り思案に困っていると店長さんが「お母様のお年は幾つでしょうかが私が年齢にあった物を厳選させていただきます」って言うってくれた。

私は「ありがとうございます。母は現在36歳です」って告げると

弘子が「結衣のお母さんって36歳？なの、海外赴任に付いて行く時に逢ったけどとても30代後半には見えなくて20代後半にしか見えないくらい若く結衣の大きなお姉さんに見えたわよ」って店長さんにアドバイスした。

店長さんは弘子に「わかったわありがとう。そういえば取って置き物があるのよ、少しお待ちください」って倉庫へ品物を取りに行った。

しばらくすると店長さんが数点の財布を持って現れてショーケースに並べて「このような物はどうか」って言われた。

薫と弘子は「凄く、シンプルな割りに素敵なデザインですね」って言う。店長さんが「これは私が直接フランスへ行って買い付けた一品物です。お母様にお似合いのがあると思いますが」って言ってくれた。

私はパッと見たときに右から二番目の財布が気に入る手にとってよく見ると店長さんが「センス良いですね、一応それが一番のお勧めではあったんですがちゃんとそれを選ばれるとは」って褒めてくれた。

他のも見ただけどやはり第一印象の二番目の財布が気になってやはりそれにすることにした。二番目の財布を手にとって「これにします」って告げた。

そして薫に「ありがとう。いい物を見つけられたわ」ってお礼を言った。品物が決まって安心し店内を見回して見ると間宮さんが店員さんにあれやこれやの対応をされているのを見つけた。

私たちは駆け寄り皆で冷やかすことにする。「せんぱーい。どうですか??」振り向いた間宮さんは真っ赤な顔をしていた。

間宮さんは「おお、そっちは決まった?」って聞いてきたので私は「うん、決まった」って告げた。弘子たちが間宮さんの左右に陣取ってあれやこれやといい始める挙句に「彼女の写メ見せてくださいよ」って迫っている。

二人の迫力に間宮さんはポケットから携帯を出して二人に見せると「えゝ可愛い子じゃないですか」薫が携帯を取り上げ私に見せてくれた。

私は携帯のツーショット写真を見て「ほんとう!可愛いじゃないですか」って言うの間宮さんはますます真っ赤になってあわててネットワークスを見て選ぶふりをした。

そんな間宮さんを全員で囲みショーケースを覗きあれやこれやと世話を焼いて困らして喜んだ。

そんな時間も過ぎ私たちは岐路に着くことにした。私はひろくんにメールを送る。「終わったよ、お迎えよろしく(はあと)」

しばらく歩いてショッピング街の出口付近で待機するとメールの着信があり「OK 20分後に着く」って入った。

私は弘子たちに「ひろくんが帰りは全員送るって言ってたのだからここで待ってようよ」って告げた。間宮さんは「わかった彼氏が来るまで一緒にいたげるよ」って言うてくれた。

しばらくどうでもいい話をしているとひろくんの車が見えた私が手

を振るとライトを点滅させ私達の近くに車を止め「おまたせ」って降りてきた。

私は間宮さんもどうぞって行っただけ「俺は自分の足（車）があるから」って私たちがお礼を言うのを振って帰って行った。

私たちはひろくんの車に乗り込み帰路に着く。ひろくんが弘子たちに「ありがとう結衣が迷惑かけて」ってお礼を言ってくれた。

さらに「お礼に、夕食を奢るよ」ってひろくん行き付けのイタリアンレストランに向かった。

店の中に入るとオーナーが現れ「本日はご来店ありがとうございます。す。これはひろきさま美女さんたちをお連れで羨ましいですな」って私たちを奥の個人部屋へ案内した。

ひろくんは苦笑して「じゃお勧めで」って告げ全員が座った。料理が来る間に今日の出来事を弘子たちがひろくんに話すと「結衣、大丈夫だった？」って聞いてきたのでガードマンさんが助けてくれた件を話した。

料理が運ばれ食事をしながらもさらに買い物の話は続く。ひろくんは笑ったり苦笑したりした。ここの料理はあいも変わらず美味しく弘子と薫は彼に連れてきてもらおうって口々に言っておオーナーを喜ばせた。

弘子たちを送ってからマンションに帰った。今日で買い物は全部済ませたので次の日は旅行の準備をすることにし今日は早めに就寝することにした。

次の日ひろくんも休みだったので二人して旅行の準備をして一日を過ごした。明日は両親の居るシンガポールへの旅行に旅たつことになる。

新婚旅行はシンガポール？（到着編）

新婚旅行はシンガポール？（到着編）

私はひろくんの横で目が覚める。今日は両親に会えるんだってうきうきして起きて朝の支度をする。

ひろくんもしばらくして起きてきた「おはよう」「おはよう」ひろくんに抱きつかれて目覚めのキスをされた。

最近はこのパターンが多い。ほとんどは目覚めのキスはベットの上がほとんどだけど私が早く起きて朝食を作っているときもやはりキスされる。私もひろくんのキスが大好き（はあと）。

「おおっと目玉焼きがこげちゃうよ」あわててガスを止めフライパンをコンロから外す「少し焦げちゃった」ひろくに言う「御免・御免」って謝った。

私はダイニングに朝食を並べて「ひろくん出来たよ」って言う少し慌て気味に朝食を取ってから二人で出発の最終確認を行う、そして「じゃ忘れ物ないね」ってスーツケースを持って玄関を出た。

エレベーターを降り玄関を出ると多治見夫妻に会った「お出かけですか？」って聞いてきたので私は「両親のところにあそびに行つて来ます」って告げた。

多治見婦人は「それは、いいわね甘えてくるのよ」って言われ私は「行って来ます。甘えてきます」ってひろくと出かけた。

高速もスムーズで早めに空港に着くことが出来た。空港には白石さんが待っていて私たちはVIPラウンジへと案内され白石さんが手続きをしてくれてVIPセキュリティへと案内さ出国の手続きを行い私たちはファーストクラスへと案内された。

離陸すれば飛行時間は6時間30分で手続きも合わせれば約7時間強で両親に会うことができる。私はうきうきでひろくんのとなりに座り離陸を待った。

離陸してしばらくすると機内食が配られ機内で昼食を取る。機内食は思いのほか美味しくひろくんとおしゃべりしながら楽しい時間を過ごすうちに飛行機は着陸態勢に入った。

夕焼けの空を飛行機はシンガポール国際空港へと着陸して行った。入国審査やセキュリティチェックを終えて待合室へとワゴン車を押して出てゆくと・・・。

お父さんとお母さんが私たちを見つけ両手を振ってアピールしている。私も手を振ってワゴン車をひろくに預けて両親の元に駆け寄っていった。

「お父さん！お母さん！来たよ！！」ってお母さんの両手を握って握手した。ひろくんもそばに来て「お久しぶりです。なかなかこちら来れませんすみません。結衣をお連れしました」って言って両親に挨拶をした。

両親は「ひろきくんこちらこそ貴方に結衣を全部お任せしてありがとう。結衣も元気そうで仲良くやっているようだね」って挨拶した。そしてお父さんが「車を用意してあるから早速行こうか」って用意してある車まで並んで歩いた。

両親が住んでいる家は空港からそう遠くなく十数分で住宅街に入っ
てゆくお父さんが中ほどの家を指差し「結衣あそこがお父さんたち
が住んでいるところだよ部屋数もあるからこちらに居る間は泊まっ
て欲しい」って言った。

家に着くと会社が借りている家は一軒家で部屋数も余っている様で
した。ひろくんが「お義父さんもちろんそのつもりでホテルなんか
の予約は取りませんでしたよ」って告げた。

お父さんはニツコリして「ひろきくんありがとう」ってお礼を言っ
た。私はひろくんから何処にとまるかを聞いていなかったからひろ
くんに「そうなの？」って尋ねると。

ひろくんは「ごめん言うの忘れてた」って頭を掻いて言った。私は
両親の家に泊まれるので思わず「ありがと」ってひろくんの腕にし
がみついた。

お母さんに「結衣ちゃん仲かいわね」って言われすこし赤くなっ
た。お母さんが私たちの泊まる部屋に案内してくれる。部屋はかな
り大きくて寝室には大きなダブルベットが在った。

私たちは荷物をすこし整理してからひろくと私は軽装に着替え両親
の居るリビングへと向かっていると、お母さんがキッチンから私
を呼んできたのでひろくんをお父さんに押し付け私はキッチンへ入
っていった。

お母さんは夕食を作っている真っ最中で「結衣手伝って」私を横に
呼んで一緒に作るようになった。私はお母さんに料理はほとんど習
わなかったけどひろくんのお義母さんにある程度教えてもらったの

でお母さんの説明にも付いてゆける。

お母さんは「結衣だいぶ出来るようになったみたいだね」褒めてくれた。私は「主婦暦一年半以上だもん」て言いつつ正直に「実はひろくんのお義母さんに一杯教えてもらったの」って言うとお母さんは「よかったね姑さんと仲がよくって」って安心してくれた。

私はお義母さんに着せ替え人形状態ってことは伏せてゆこうっと思いい「お義母さんには一杯教えてもらって助かってます」とだけ告げた。

本格的にお母さんと一緒に料理を作るのは初めてで私の足りないところをフォローしてくれて楽しく作ることが出来た。

二人でダイニングテーブルに並べ終わるとお母さんが「皆さんを呼んでね」って私に告げたので私はリビングに居るひろくんとお父さんを呼びに行って「お父さん、ひろくん食事の用意が出来たわよ」って告げた。

二人は「「了解」」って話をやめダイニングに入りテーブルに座った。もちろんお母さんの横にはお父さんでお父さんの前はひろくんですその横が私の席に足るように料理を並べてあるのでそのように座った。

お母さんの「どうぞ」って掛け声で「「いただきます」」「」って食事を始めた。お母さんがこれとこれとこれが結衣が単独で作ったのよ。お母さんがお父さんに教えると一番最初に私が作った料理に手を出した。

お父さんは開口一番「うまい！結衣は、いつの間にかこんな美味し

料理もできる様になったんだね」そう言われ私は「もう主婦暦一年半以上だもん」って胸を張った。

ひろくんは微笑んでお母さんは「結衣はちゃんと主婦業はやっています？」ってひろくんに聞いた。ひろくんは「もちろんですよ。一杯努力もした様ですけど・・・がんばりやさんです」って先生口調でお母さんに告げた。

私はひろくんに褒められ「ほほが暑くなる」お母さんに「結衣顔が赤いわよ」って冷やかされてしまった。楽しく食事が終わり後片付けをしているとリビングからお父さんとひろくんの笑い声が聞こえる。

お母さんは「結衣良かったでしょうひろくと結婚できてお父さんともあんなに和気藹々とお話ができて昔の通りだねひろきくんは・・・」って言ったので私は「うん、ひろくと一緒になって本当に良かった。お母さんありがとう」ってお礼を言った。

お母さんは「ひろきくんと話を決めたのは私じゃなくお父さんなのよ後でお父さんが一人になったらお礼を言っていらいしやい」って言ったので「はい」って返事をした。

片づけが終わってリビングに行くときひろくんが私の学校の話をしていうようだ「結衣って足が速いんですね全学年で2位でしたよ」って言っている。

私は「おまたせ」ってひろくんの横に座ったらお母さんが食後のに緑茶を持ってきてくれた。お父さんが「やっぱり食後は日本茶が一番」って美味しそうに飲んだ。

皆で近状報告をしているとお母さんが「ひろきくんも結衣も長旅で疲れてたでしょう早めにお休みなさい」って言ったので時間を見ると10時になっていた。

ひろくんは「明日から色々スケジュールが一杯なので早めに休もうか」って言うのと両親が「そうしなさい」って告げ私たちは一度寝室へと戻って休む準備をすることにした。

ひろくんは「先にシャワーを浴びてくるよ」ってバスルームに入っていた。しばらくしてひろくんが帰ってくると「結衣も行ってきたら」って言ったので支度をしてバスルームに行ってシャワーでさっぱりし部屋に戻るとひろくんがもうベットも上で寝息を立てて眠っていた。

やっぱり疲れていたんだ。私の瞼にも睡魔が襲ってきているようだ。お父さんへのお礼は次にして私はひろくんの横に入り眠っているひろくんにキスをして「おやすみなさい」ってやはりすぐ眠りについた。

そしてシンガポール旅行の一日が過ぎていった。

新婚旅行はシンガポール？（観光編その1）

新婚旅行はシンガポール？（観光編その1）

まぶしい朝日を浴びて目が覚める。横を見るとひろくんがもそもそと動いて今にも起きそうな感じがして寝顔を見るとひろくんがパツと目を開けた。

私は少しビックリして「おはよう」って言うと「おはよう」って返してくれ私を抱きしめ目覚めのキスタイムになった。

しばらくキスをしてから私は先に着替えてお母さんの朝食の準備を手伝いにキッチンへとエプロンをつけて行った。

キッチンに着くと丁度お母さんも着いたところで「結衣おはよう」「お母さんおはよう」挨拶し朝食に掛かった。

お父さんは和食党だから定番のご飯に味噌汁で、お母さんは味噌汁を作り私は鮭の塩焼きを焼く係りになった。でも紺野家の味噌汁づくりを学べるようにお母さんは動作を口に出して作業してくれる。

葵家とは味噌が違う紺野家はミックス味噌だけど葵家は赤味噌なんだ。お義母さんにもらったレシピ帳を出してきて時々メモする。私は鮭をオーブンで焼くことにする。中を時々覗きながらお母さんの言ってることをメモる。

やっぱりこのノートを持ってきた良かった。お母さんも「ごめんね本当だったらちゃんと花嫁修業を教えてから嫁がせるつもりだったんだけど・・・葵のお母さんが結衣をしっかりと鍛えてくれているよ

うで申し訳ないわ」って謝ってきた。

私は「大丈夫だよ、ひろくんのお母さんって私にいろいろ親切だもん、お母さんも好きだけどひろくんのお母さんも好きだよ」って言うその後ろから当然声が聞こえ「結衣はちゃんと主婦業もこなしていますよ」ってひろくんの声が聞こえた。

お母さんが「もうすぐ出来るからひろくんは座って待ってて、結衣お父さんを起こしてきて」言った。「はい」って寝室に向かおうとすると「お父さんたぶん狸寝入りのはずだから合わせてあげて」って言ったので私は「うん、甘えてくる」ってお父さんがいる寝室に向かった。

部屋の前でコンコンノックする「お父さん、起きてる?・・・」返事が無い。さらにノックするそして「お父さん、起きてる?・・・お父さん入るよ」ってノブを回し中に入る。

部屋は私たちの泊まっている部屋と作りが同じだ。さらに寝室のドアで「お父さん、起きてる?」って確認する。やはり返事が無い。お母さんが言ったとおり狸寝入りかな?

私は「お父さん、入るよ」って寝室のドアを開けて中を覗くとベッドのタオルケットがすこしゆれたのが見えた。やっぱりお母さんが言ったとおりの狸寝入りのようだ。お母さんに言ったようにお芝居に乗ることにした。

ベッドのそばに行きそばで「お父さん、起きて」って言うとお父さんは「うん」って言いながら私の手を握ってベッドの上に引き込んだ「キャー」小さな悲鳴もどきを上げベッドの上に転がり込むと・・・。

お父さんが「わー!!」って私を脅かしてきた。私は「私、結衣だよ。お父さん起きてきて」って言うとおぼつと顔を上げ「おはよう、結衣」って言うてきた。私も苦笑いしながら「お父さん、おはよう」って挨拶した。

お父さんは「結衣、ごめんお母さんと間違えた」って笑った。私は「もう・・・お父さんたら」って手を引っ張って起こした。するとお父さんが「ひろくんにも同じことしてるのかな？」なんて冷やかしてきた。

私はさっさと部屋を出るようにし「早く来ないと先に食べちゃうよ」ってダイニングへ戻っていった。お父さんは「結衣、ちょっと待ってくれ」ってあわてて起きてきて「外で待ってくれ早く着替える」っていった。

すばやく着替えたお父さんと一緒にダイニングに戻った。ダイニングに行くとお母さんとひろくんが雑談していたようで私が声をかけると振り返り「「お父さん、おはよう」って言うてきた。

全員そろって朝食をする。終わりがけにお父さんが「私は今日は離せない仕事があるので出勤なんだ。代わりに案内人を頼んだよ」ひろくんは「そんなに気を使わなくても」って告げたが「だいぶ前にお願ひしていて快く引き受けてくれた。私の右腕の奥村って言う人で気さくない奴だよ」って食事が終わると出社の準備にかかった。

私たちもお母さんに「出かける準備をしなさい」って言われ、私たちの部屋に戻り出かける支度をすることにした。準備が終わりリビングに行くとお父さんは準備を終え私たちを待っていた。

お父さんが時計を見て「もう来るころだな」って言っていると玄関の呼び鈴が鳴った。お母さんが玄関へと行っていると男の人を連れて現れた男の人は「おはようございます紺野支社長」って挨拶した。

私たちも「おはようございます」って挨拶をする。

お父さんは「奥村君おはよう、今日は休みのところありがとう」って言いながら私たちに紹介した。奥村さんは「紺野支社長の下で働かせております」奥村 幸政”です案内は任せてください”って挨拶した。

私たちお父さんに紹介される。この子が私の娘の結衣で隣が旦那のひろきくんだ。って紹介するとひろくんが「娘婿の葵 ひろきですよろしく願います」私は「妻の結衣です。願います」って挨拶した。

奥村さんは「娘さん若いですね」って言うとお父さんは「うん、現役的女子高生だからな」って言うのとビックリしていた。さらに「あれ、娘さん私どこかで見たような気がします」が・・・」って頭を悩ませた。

さらに「ん・・・旦那さんってHIROによく似ているって言うかそっくりなんだけどまさか本人なんてことはないですよ」って言うとお父さんが「そのまさかだよ」って告げた。

奥村さんは「家内がファンなんです、後でいいからサインもらえます？」って言うてきた。俺は「サインはいいけど結婚のことは秘密なのでよろしく」って告げた。

奥村さんは「わかりました。サインはよろしくお願いします」って言うとともに「ここは結構日本人の赴任者や観光客も一杯いますすこしは変装された方が・・・」ひろくんはポケットからサングラスを出して掛けて「これでいいかな？」って言うのと「いいと思います」ってつけ「では案内します」って玄関へ向かった。

玄関ではお父さんを迎える車と私たちの車と2台あった。私たちは白いコンバチブルだった。私たちを後ろの席に乘せ奥村さんは「出発します」って車を発進させた。

奥村さんは「手始めにシンガポールと言えばマライオンでしょう。そこに向かいます」って告げた。来る前にすこしは下調べをしたけど役に立つのかな？

しばらくするとマライオン公園に着いた運転手さんを残し奥村さんの案内で像を見える場所へと案内され「これがシンガポールの像徴ともいえる伝説の動物マライオン（頭がライオンで体が魚）の像です。

奥村さんは「ここで写真を撮りましょう」って撮影ポイントに私たちを案内しカメラを構えカメラマンよろしくバシャバシャとシャッターを切っていた。

ひろくんは私の腰に手を回したり後ろから抱きしめたりカップルが取るポーズで一杯記念撮影をしてもらった。

公園を一回りしてから次の場所へ移動した。次はセントーサ島のあんな巨大なマライオンを見に行く近くに行くと「ひろくん大きいね。えっと高さは37メートルだったはず」って話すと奥村さんが「お嬢さんよく調べましたね。ここの像は中に入ることが出来ますよ。

せっかくだから中にも入りましょう」って公園の入り口に車を止めた。

像の足元についてチケットを買って中に入る大きいので中にエレベーターがあるこれである程度上がってから階段で上に昇るそうだ。エレベーターに入ると一緒に日本人のカップルが3組乗ってきた。

新婚旅行のようで全員が恋人つなぎで手をつないでいる。ひろくんの脇を肘でちよんとついたら私にもちゃんと手をつないでくれた。奥村君は見てみない振りでガイドを装っている（案内してくれているのでガイドって言うてもかまわないと思うけど・・・）

エレベーターを降りてから階段で上へと昇る。階段が狭く格好きつい上がりきると頭の上に出たように見晴らしがいい。ひろくと眺めていると日本人カップルの一組が私たちに声を掛ける。

「あのーもしかして貴女は白鳥 葵さんじゃないですか」って聞いてきた。私はビックリしてしまっただけで顔をしかめた。でもひろくんがフォローしてくれた「結衣っていつも間違えられるんだ。まあ僕としては嬉しいんだけどね」って言うてくれた。

するとほかのカップルも寄ってきて「私たちも思ってたけど違うんだ」って話してきた。そして「あなたたちもハネムーンですか」って聞いてきたのでどう答えようと思ったらやっぱりひろくんが「もちろんハネムーンですよ」ってカップルつなぎの手を見せていった。

ほかのカップルがひろくんに「奥さんお若そうですね十代かな」なんて言うてきた。皆さんそれなりの歳のようでもいかにもって感じなのだけど私だけは浮いているように若く見えるようだ。

ひろくんが「もちろん十代ですよ」って言うと旦那さん全員が「うらやましい」なんていったので男性人全員に奥さんたちに肘鉄砲が飛ぶ「「ゴホ」」ひろくんと私は苦笑いが出る。奥村さんは笑いをこらえるのに必死だ。ばつが悪く後ろを向く。やはり奥さんが女子高生なんて言えないよね。

後はたいした話しめせずゆっくり降りていって下で皆と別れた。ハネムーンカップルと別れた後奥村さんが「道理で結衣さんを見たことがあるはずなんだ。モデルをやっているんですね。確かどこかの企業CMに出演しているはずですね」って言ってきた。

私は「奥村さんってここにいるの長いですよなぜ私ができるんです？」って聞くと。奥村さんは「インターネットですよ。人気の動画はすぐにアップロードされますからね」って言い「しかもそのCMの再生回数は以上に高いですよ」って情報源を教えてくださいました。

私たちは顔を見合わせて「インターネットに流れているんだ」ってビックリした。

奥村さんは「こちらは熱帯ですから大きい昆虫が一杯いますよ」って昆虫館に連れて行ってくれた。

バタフライって言うだけのことはあって中に入ると一面蝶で一杯になっている。すぐききれいだ。後は世界の昆虫やシンガポールの昆虫たちが標本で展示してある。ひろくんは昆虫は好きみたいで熱心に見ていた。なにげに「結衣との子供が男の子だったら昆虫採集やりたいな」って言った。

私は赤くなり「そうだね」ってしか言えなかった。私とひろくんの子供・・・「赤ちゃんいいな」なんて思った。まだひとつになって

いないのに……。恥ずかしくて体中が暑くなってしまった。
ひろくんは私を覗いて「結衣？どうした？」って言ってきた。私は
下を向いて「しらない！」って顔を隠した。

奥村さんは「もうすぐ昼ですから昼食にしましょう」ってつげて島
にあるホテルのレストランに連れて行ってくれた。レストランは中
国式で予約席へと案内され色とりどりの中華料理が出てきた。

高級食材のツバメの巣やふかひれなどでテーブルに並ぶひろくんは
「美味しそうだな」って言うのと奥村さんが「ではいただきますよ」
って言うのと二人で「いただきます」って言って食べ始めた。

二人で「美味しい」食が進むけど私はもうこれで一杯」って箸
をおいた。ひろくと奥村さんは未だ食べれるようだ。私はジャス
ミン茶で休憩する。

二人が「もう駄目」って箸をおくとテーブルの料理はほとんど
無くなっていた。ひろくんたちもお茶で一服する。

その後近くにある水族館アンダー・ウォーター・ワールドを見ることにした。日本でも少ない水槽の
トンネルがある凄く長くたくさんの魚が泳いで圧巻だ。さらに熱帯
の色とりどりのお魚が舞っていて竜宮城のようにも見える。

ここの水族館はスキューバダイビングも出来る様だ。私は沖縄で一
度やったので今回はパスすることにした。タッチプールでひとしき
り遊んでからギフトショップでお土産を買って水族館を後にした。

島の周辺は観光スポットが一杯で回っているうちにお母さんたちが
待っている時間になってしまった。

奥村さんは「後は又明日にしましょう」って帰宅することにした。
「又明日はレーザーショー、ソング・オブ・ザ・シーを予約してあります。結構綺麗で気に入ると思います」って告げたので楽しみなった。

帰るとお母さんが「お帰りなさい。どうだった」って聞いてきたので「よかったです」って答えた。奥村さんは「又明日迎えに来ます」って帰って行った。

今日もお母さんに夕食を覚えてもらうお母さんは「明日はお父さんも休みだから皆で出かけましょう」って明日の約束をした。

昨日同様にダブルベットでお休みなのだけど今日は昨日と逆で私が先に寝入ってしまった。「おやすみ、ひろくん・・・」

新婚旅行はシンガポール？（観光編その2）

新婚旅行はシンガポール？（観光編その2）

シンガポール二日目の朝今日は家族で観光めぐりなの楽しみで早く目が覚めた。もっとも昨日は早く寝たしまったので寝覚めはばっちりなの。

横で眠るひろくんにモーニングキスをして起こさないようにそっとベットを離れて朝日を浴びにバルコニーへと向かう。バルコニーへ出て両手を挙げ背筋を伸ばす。

ふいに後ろから抱きしめられた。「結衣、おはよう」ひろくんが起きてきた。私も「おはよ・・・」唇をふさがれた。

甘いキスの後「私、朝食の準備するね」って着替えてきつちんに行った。今日はお母さんは未だ起きてきた居ないようだ。私はお母さんが何時もするように朝食の準備に掛かる。

2／3ぐらい出来上がったときに後ろから声が「結衣ちゃんありがとう今日は早かったんだね」言ってきた。私は「今日は私が全部作るわ。任せて」って言う「結衣じゃお願いね」ってダイニングの椅子に座って私の作るのを見守ってくれた。

朝食がほぼ出来上がるとお母さんが「皆を呼んでくるね」って呼びに行った。男性陣二人がニコニコで現れる。「「おはよう」「挨拶しながら食事が並んでいるテーブル周りに座ってお父さんが「結衣、これ全部一人で作った？」って聞いてきたので私は「うんもう私だって主婦ですからね」って少し頬を膨らまして言った。

全員で「いただきます」お父さんは開口一番「ひろきくんこれなら安心だな」ひろくんは「前にも言っていたのですが結衣は主婦業もこなしていますよ」って言うてくれたので私は赤くなってしまった。

お母さんも「結衣は一人前の主婦だね」って言うてくれた。食事が終わり出かける準備をしていると玄関から「おはようございます。奥村です」って奥村さんが今日も迎えに来てくれた。

玄関に行くと奥村さんの隣に女の人が立っていた。女の人が「あ！本当に白鳥 葵ちゃんだ」って言うのと奥村さんが肘で女の人を突き「舞華」ってしかって「妻の舞華です」って紹介してくれた。

舞華さんは旦那さんより頭半分背が低いけど可愛い方でTシャツとデニムのミニスカートを履いていて活発そうな感じでした。ひろくんが「今日もすみません」って現れると奥村さんの制止も振り切ってひろくんに両手で握手をしてはしゃいだ。奥村さんは「すみません今日は同行するって言うことを聞かないものですから」って謝ってくる。

ひろくんが「そんなことはないですよ。大勢のほうが楽しいですよ」って言ったのでさらに奥さんは舞い上がってしまったようだ。

奥村さんは「すみませんね、家内が一緒に行きたいって言うものでって恐縮しきりになっている。私たちは全員で苦笑した。

お父さんが「出かけましょう」との号令で全員が奥村さんの乗ってきた大きい車に乗って第一の目的地チャイナタウンに向かった。

町の入り口で車を降り歩きで各所を回ることにする。スリ・マリア

マン寺院などの寺院めぐりやチャイナタウン・ヘリテージ・センタ―でお土産を手に入れる。

観光スポットを回っていると必ず新婚カップルが居てこちらを見てひそひそと話したり時には「白鳥 葵さんじゃないですか」って声を掛けられる。

もちろんそのつど、ひろくんが否定してくれるんだけど・・・いちどツアーの団体に囲まれたときはどうしようかと思った。この時はなんと奥村さんの奥さんが私の腕をつかんで「この子私の親戚なんだけど皆に似てるって言われるけどそんなでもないよ」って完全否定してくれた。後でひろくんのサングラスを借りた。

そしてスミス・ストリートホーカーズで昼食をとることにした。日本風で言えば屋台村って呼ぶのがピッタリで色んな食べ物屋さんで一杯なのでどれをえらぶか困ってしまう。

お父さんによると夕食時はもっと凄いらしい。私とひろくんはあまりごみごみしているところは得意じゃない。夜はちゃんとしたレストランに予約が入れてある。

B級グルメを堪能してから次のスポットに移る。夜にはレーザーショー、ソング・オブ・ザ・シーに予約が入っているのである程度早めに向かうことにする。

もちろん遅めの時間で予約してあるので先に夕食のレストランで食事をする名前はジャンボシーフード ウォーターフロンって言うそうだ。今回はシーフードがメインだそうだ。ここは奥村さんの奥さんお勧めのところでお母さんも気に入っているレストランの一つなんだって。

全員でテーブルを囲み美味しくいただく私の横には奥村さんの奥さんが座ってツアー客に囲まれた話をする。舞華さんは「人気がある」と大変だね、日本では大丈夫？」って聞いてきた。

返事は「私あまり目がよくなってこんなときはコンタクトなんだけど普段は丸めがねで髪も左右で三つ網で居るので皆判らないみたいですよ」って言う。「ふくん普段から変装しているんじゃないんだ」って少し笑った。

奥村夫妻は仲がよい。色々聞くと奥村さんと奥さんの舞華さんの馴れ初めは奥村さんの友人の歳が離れた妹さんだったそうで舞華さんが中学生のときから付き合っていたんだって。奥村さんの転勤が決まってから急遽プロポーズしたら舞華さんからOKがもらえたので慌てて挙式し新婚旅行兼用でここに赴任したって話してくれた。舞華さんは22歳だそう。なんと歳の差は8歳もあるそう。でも私たちは11歳も歳の差がある黙ってしよう・・・。

どうのこうのしている内にレーザーショーの時間が近づいてきたので店を出てショー会場上へと向かう。奥村さんが「ここです」って予約席までたどり着くと・・・私は「この席ってものすごくいい場所みたいだけどよく取れましたね」って告げると奥村さんが「家内のコネなんです、妻は地元 của サークルに積極的に入っていてそこからの伝達ですよ」私もだいぶ助かっています。って告げると舞華さんがほほを染めて「赴任生活をエンジョイしているだけです」ってうつむいた。

ショーが始まる。噴水にレーザー光線を当てたウォーターショーで水のスクリーンに映し出す幻想的なショーで日本ではこれだけ大々的なショーは見られない。私たちは楽しさを堪能して岐路に着いた。

家に着くとひろくんが奥村夫妻に「すこし待っててください」って2階の部屋に行った。すこしして戻ってくると手には色紙を持っていた。もちろんサイン入りだ。

ひろくんが「結衣ちゃんこれにサイン追加して」って私に手渡した。舞華さんの瞳が光る私は受け取り練習しているサインをHIROの横に書いてゆく。そして舞華さんに「どうぞ」って進呈した。

舞華さんはニコニコで「ありがとうございます」って頭を下げた。私は「いいえ私なんかたいした事有りませんから」って恐縮して言った。

奥村さんを玄関で見送ると私たちに舞華さんが大きく手を振りながら帰っていった。次の日はひろくんは家で作詞を行い。私はお母さんとショッピングに出かけてのんびりとすごして今度は隣国のマレーシアの観光をすることにする。

シンガポールからはマレーシアへは陸路で簡単に行けるそうだ。今回は奥村さんは会社なのでなんと奥さんの舞華さんが案内役を買ってくれた。昨日の一件で親しくなったので知らない土地だから案内役は大変助かる。

朝、奥村さんと奥さんが一緒に来てくれて奥村さんはお父さんと一緒に会社へ出かけ私たちは舞華さんの運転する車で三人で出かける。しばらく走るとなぜか住宅街に入って行くと手を振る女の人がいる。舞華さんはそのところで止まると、女の人が助手席に乗り込んできた。私たちは「???」って思っていると、舞華さんが「彼女、森実加さん。こちらに来てから知り合った某企業のやはり赴任の奥さんで以前マレーシアにすこし住んでいたの、私よりずっとよく

知っているのをお願いしちゃった」って言うとな森さんは「いいこの話を聞いて私の方こそ強引にお願いしちゃったんですよ」って笑いながら言った。

よく聞くと舞華さんが企業サークルで知り合った中だそうで森さんも舞華さん同様に気さくな方のようにで案内役をお願いすることにする。

ひろくんが「森さんでしたね案内よろしくお願いします」って言うのと「こちらこそ強引に押しかけたのに・・・しっかり案内しますのでこちらこそよろしくお願いします」って言うてきた。

ひろくんはサングラスをしていてH I R Oだとは判らない様だけど森さんは私をじっと見て「貴女もしかして白鳥 葵さんじゃないですか」って言うてきた。

私はため息を付く「はぁ・・・判ります？」って質問した。森さんは堰を切ったように話し始めた「やっぱりそうなんだ、私たちは各企業の奥様サークルで日本からの雑誌などを回し読みするのだけどあなたのモデルしているジュジュって雑誌すごく人気が高いのよ、しかも私の旦那はパソコンに詳しくてインターネット回線を通して日本のテレビを見てるのあまり知らないのだけど彼の実家から送られてるんだってその中で私の会社のCMにあなたが出ているのをよく見たから身近に感じちゃってけどびっくりしちゃったこんなところで出会うなんて」って一気に喋ってきた。

私は最初のうちは解ったけど後のほうはさっぱりであいまいに返事をした「そうなんですか、いろいろされているんですね・・・」ひろくんは解ったらしく「結衣、人気があるね」ってウインクしてき

森さんの案内でマレーシア観光は楽しくすごすことが出来た。充実した一泊二日の旅だった。

マレーシアからは昼ごろ帰ってきてシンガポール最後の夜はお母さんと一緒に寝ることにした。実はひろくんが進言してくれて実現した。「ありがとう。ひろくん」

補足…赴任者が家族に日本のテレビを見させてあげようと日本の実家などにテレビ受信のパソコンなどを買いインターネット回線を使って奥さんや子供向けの番組を送っているのは本当です。

インターネットが発達していない時代はビデオ録画テープを日本から送ったり出張者に持ってきてもらって皆で回し見していたそうです。

新婚旅行はシンガポール？（帰国編）

新婚旅行はシンガポール？（帰国編）

マレーシアを昼ごろでてお母さんの待つシンガポールへと帰った。
今回は森さんのおかげで楽しい旅になった。

早めに帰ったのはお母さんと一緒に夕食の食材を購入し色々教えて
もらう為なの、だって明日にはもう帰国しちゃうんだもの最後はし
っかり甘えるんだ・・・ひろくんの公認なんだもん。

お母さんのおかげでお義母さんからもらったレシピ帳も紺野家の分
がだいぶ増えた。ひろくんの為にがんばろう。

夜はお客さん用の部屋でお母さんと一緒に夜遅くまでお話をした。
ひろくんと我的生活や色々な相談を一気に話たので心が軽くなっ
てきた。

ひろくんの心使いがありがたい。空港へはお父さんたちが半休を取
って送ってくれた。さすがに別れ際には目に涙が出てきたけど瞼の
上に乗せて我慢して笑って手を振って別れた。

成田空港に着くと、ひろくんが携帯に電源を入れたとたんに着信が
あった。「ん・・・白石さんだ」通話を押して「もしもし白石さん
どうしました？」って問いかける。

白石・・・「ひろきくん今何処？」

ひろき・・・「今飛行機を降りたところ」

白石…「良かった・・・ゆっくりきて、しかも税関を出てから普通に出ないでそこでまっついていてください」

ひろき…「どうしたんです？」

白石…「ハワイに行っていた、悠斗がその後の便で来るのよ、出口には一杯芸能記者がいるのよ」

ひろき…「悠斗？・・・あいつどうしたんだい？」

白石…「彼が恋人と帰国するって話なの、どうも記者会見もあるらしいんだけど、このままだと巻き込まれ結衣ちゃんの事がばれちゃうかも知れない・・・」

ひろき…「えー・・・とりあえずVIPルームに隠れるか」

白石…「だめ・・・その横に会見場があるのよ、テレビカメラも入っているから、絶対近寄らないで」

ひろき…「判ったS－VIPルートを使うよ、出たら連絡する」って携帯を切った。

ひろくんは困惑している私に「俺に任せて」って言って、どこかに連絡し始めた。

ひろき…「あ、葵ですけど荻野さんをお願いします」って電話を始めた。

しばらくして「荻野だけど葵君？」

ひろき…「葵です、お世話になります。今空港に居るのですがS－VIPルートの手配をお願いできませんか？」

荻野…「ん、悠斗の件か・・・判ったすぐ手配するから税関の手前で待っていてくれ」

ひろき…「すみません、よろしくお願いします」って携帯を切った。

ひろくんは「携帯漏れて聞こえていたろう、空港内は悠斗の追いかけてごった返しているらしい」って言ってきた。

（悠斗って言うのはひろくんと一緒に芸能人でひろくんの次に人気がある人でひろくんが芸能生活を抑えているのをいいことに勢力を伸ばしている人だ）

私は「どうすれば・・・」っておろおろだ。ひろくんは「大丈夫、ある人に連絡したからしばらくすると迎えに来てくれる」って言うてくれた。

ひろくんの言うとおりにしばらく待っていると制服を着た人たち3人が私たちを目指して近寄ってくる。私はドキドキする。

すると中央の見栄えのする人が「よお・・・葵君久しぶりだね、あれ横の彼女は」って話しかけてきた。

ひろくんは私を紹介する「荻野さん今日はすみません。彼女は家内です」って頭を下げてきたので、私は「結衣といいます。よろしく願います」って頭を下げた。

荻野さんは「ひろき、可愛い子を捕まえたな」って言われたので私は恥ずかしくなっていました。

残りの二人の人が私たちの荷物を運んでくれ一般が通れない通路を案内してくれて無事外に出られた。私たちが「ありがとうございます」って分かれようとする。

荻野さんが「ひろき！ひとつ貸しな」って別れを告げて去っていった。ひろくんが後姿に「わかりました」ってつげると白石さんの運転するワゴン車が横付けされて白石さんが降りてきた。

荻野さんが白石さんに連絡してくれていたようだ。ひろくんの知り合いは親切な人が多い。

私たちはそそくさと乗り込むと白石さんの「お帰りなさい」でほっとした気分になった。二人で「ただいま」って返した。

そして白石さんは車を出した。高速に乗ってから白石さんは「行き先はどうします？」って聞いてきた。ひろくんは「飛行機内で食事したから軽いものを・・・結衣どうする？」って私に聞いた来た。

私は「うーん・・・屋台のラーメンが食べたい」って言った。すると二人は少し笑いながらひろくんは「うんいいアイデアだねそうしようでは白石さんお願いします」って告げると白石さんは「OK いいわよ、私の行きつけの場所があるの」ってそこに向かった。

私は白石さんっているいろいろ知っているんだしかも行き着けなんてびっくり・・・。

そして車は住宅街の近くの公園へと車をつけた。公園の駐車場を利

用して店を開いているんだって、駐車場には数台の車が止まっている。そこに白石さんは横付けすると「到着しました」って私たちに降りるようにドアを開けた。

白石さんが屋台に近づき屋台のおじさんに「中華そば三つ、卵入りでね」って注文してから近くのテーブルに陣を取った。

しばらくすると目のクリっとした可愛い中学生らしい女の子が「お待ちせしました。熱いので気をつけてください」ってテーブルに並べていった。

白石さんは「香奈ちゃんありがとうね」ってつげ私たちに「さめないうちに食べましょう」っていただきますの号令と共に食べ始めた。

屋台なんて子供ころしか言った事がない久しぶりで二人で顔を見合わせ少しにやつとして食べ始めた。「おいしい」って二人で言う屋台から「ありがとよ」って声が聞こえた。

私は「懐かし夜鳴きそばの味なのね、ところで彼女知っているようだけどお知り合い？」って聞くと白石さんは「彼女中学2年なのそして私のアパートの隣の住人なのよ」って教えてくれた。

食べ終わって少し休憩していると香奈ちゃんが私に「あのー白鳥葵さんですよ」って色紙を持って近づいてきた。白石さんは「やっぱばれたのね」ってつげ、さらに「結衣ちゃんおねがい書いてあげて」って私にお願いしてきた。

ひろくを見ると縦に首を振って笑っている。私は「ひろくんてもう・・・」って言って色紙を受け取りつたないサインを書くことになる。

書き終わり「どうぞ」って渡すと「ありがとうございます」って大きく頭を下げて屋台の奥に入っていた。

親父さんが顔を出し私たちに「すみませんね」って頭を下げと言った。私のサインで良いなんて恐縮しきりだ。

白石さんは「白鳥 葵ちゃんてティーンには絶大な人気があるのよ」って私に告げた。私は「困ります。そんなことは・・・」って困惑してしまった。

白石さんは親父さんに勘定を払うと「帰りましょうか」って車に向かった。車に乗り発進すると香奈ちゃんが手を振って送り出したくれたので私も車の中で軽く手を振った。

家に向かう途中にひろくんが「屋台の中華そば美味しかったな、結衣ちゃん又行こうか」って言ったので「うん、いいよ」って私も答えた。白石さんは「ひいきにしてやって下さい」ってお願いされた。

マンションに着くとたくさんの荷物を白石さんも手伝ってくれて運び入れた。白石さんが「では明後日って帰ろうとするところをひろくんが「ちょっと待って」ってつげ包み紙を渡し「これお土産」って渡した。

白石さんは「え！私に？・・・すみませんね、ありがとう」って受け取って手を振って帰っていった。

私は「ひろくん、今回は気を使ってもらってありがとうございます」ってあらためてお礼を言うと、ひろくんは「たいした事ないよ、又時間が出来たら会いに行こう」って言うてくれた。

私はひろくんに飛びついて「ありがとう」って言うと、ひろくんも抱きしめてくれ、お互いに・・・唇を合わせた・・・・・・・・。

夏休みの新婚旅行？が終わりを告げた。

盛大な誕生日会？（準備編1／2）

盛大な誕生日会？（準備編1／2）

長い夏休みが終わりを告げるとすぐひろくんの誕生日がやってくる。始業式の日には私は弘子たちをお願いをした。

今私はひろくんの誕生日プレゼントを探しに弘子たちとショッピングモールに来ている。弘子たちをお願いしたのはこのことだ。

今回は夏休みの件（お母さんへのお土産での集合時の事件）もあり予め以前にお世話になった間宮さんに警護お願いしてあるので私たちに声を掛ける人は居ない。

しかも間宮さんの彼女も一緒に考えてくれるそうで助かりそう（御免ね、ひろくんいい考えが浮かばない）・・・。

でもそんな私たちを遠めでにらんでいる人が居るのに気づかなかつた・・・。

今より一週間前・・・。里美サイド

私は葵先生を私に振り向かせる為取り巻きと子分をファミレスに集め作戦会議を繰り広げる。メンバーは以前葵先生の自宅を訪ねて行ったメンバー（由美を除く）と以前事件を起こした山田君の子分の西森と奥川とさらに私の足の野呂がメンバーで男連中は私の全員パシリに使っている。

私の調べによると葵先生は九月に誕生日を迎えるらしい。私が竹谷先生に色目を使って聞き出した情報だ。色ボケ親父なんてちよいともなんだ。スカートを短くしてすこしパンチラすれば、こそこそと私のスカートの中を覗こうと体制を変える。そこですこし胸チラしお願いしたら簡単に教えてくれた。中年親父ってスケベなんだから！！。

そして、どうも葵先生と結衣はなんらかの関係があるように思える。修学旅行などはまさにそんな感じだったけど後はつけられなかった。葵先生の住所は調べられたが結衣の住所は個人情報管理がしっかりしていて調べることは難しく手に入らないので先生との関係はわからないままなのだ。

私は皆に「私が葵先生をゲットできるよう協力すること！」って全員に強要し具体的な作戦を考える。

？葵先生の行動を調べる。これは男子に任せる。とくに野呂はバイク乗りだから先生の車の後を付けさせるのに都合が良い。

？結衣の行動も調べる。これは私たちで後をつけることにする。

？後は既成事実をいかに作るかだ・・・もちろん目撃者は多いほうが良い。

野呂に葵先生の車を付けさせるがうまいこと付けられないらしい「こちら野呂何やってるんだい」って私が怒っても「すみません。なぜか知らないうちにまかれちゃうんですよ」って嘆いていた。

私も結衣の後付けるんだけど電車を降りてからいつも素敵なおば様が迎えに来ているらしく後を付けられない・・・仕方がなく私の足（野呂）をいつも降りる駅に待機させ後を付けることにした。

今日も結衣の後を付けるといつもの駅に降りず違う駅に降りると大きなRV車に乗ってどこかに行ってしまった。今日も失敗した・・・彼女の行動が読めない・・・。

私は懲りず次の日も後を付ける。今日はいつもの駅だ。私は待たせてある足（野呂）に結衣に見つかからないように先回りしヘルメットを受け取り追跡の準備をする。

やっぱりいつもの女の人が迎えに来ている。小母さんが結衣に軽く手を振り「結衣ちゃんこっち」って言っていると結衣が「お義母さんいつもすみません」って一緒に車まで歩いてゆく・・・。

私は「お母さん」？？？親子には見えないんだけど、何気に聞こえた言葉ですこし情報を得た。彼らは赤いスポーツカーに乗って走り始める。追跡開始だ足（野呂）に「後をつけて」って私は彼の腰に手を回し振り庇護されないようにする。

赤い車はかなりのスピードで市街地を走ってゆくがその後を必死で

追いかける。しばらく走ると郊外型のショッピングセンターへと車を止め二人して入っていった。

私はあわててバイクを降り二人を追う降りた際に「電話するから駐輪場で待っているように」って足（野呂）を残した。二人に見つからないように距離をとって様子を伺うと二人は食材を購入しているようだ。

二人は仲良く何かをしゃべりながらショッピングカートに食材を入れていく。ふと「今日は何を作るんだろう？」なんて思う・・・おとと慌てて妄想から首を横に振る。

二人は仲良くレジに並んで会計を済ますと出口に向かって歩き出した。私は慌てて電話を掛ける「野呂！準備をして」って告げて少し離れて後を追う。

結衣たちは出口を出て赤い車のほうに歩いてゆく、私が出口を出るとバイクが横付けされるそして「どうぞ」ってヘルメットを渡してくる。ヘルメットを素早く被り追跡の準備をするとかけて赤いスポーツカーが駐車場から出てゆくのを発見する。

私は「つけて」って言って彼の腰に手を回す。彼は「わかりました」って素早くバイクを発進させ後を追いかける。赤いスポーツカーは自動車専用道路をぐんぐん飛ばして走る。

そしてトラックの間をスラロームのように走り私たちを振り切るがごとく走るとバイクも同様にスラロームし追いかけるが結衣の乗った車が大きなトラックを追い越したとたんに車が居なくなってしまう・・・その時彼が「やられたさっきトラックを追い越してから素早く専用道路を降りて行かれたと思う」って唸った。

私は「ち・・・」舌打ちした。次の日も同様な感じでまかれてしま
う私は「ばれているのか・・・な」困った。

でも次の日は休みで私は先生へのプレゼントを購入する為に郊外の
ショッピングモールに出かけると結衣たちを見かけた。慌てて携帯
で足（野呂）を呼び出す。

その間結衣達を見つからないように後をつけた。

ひろくんサイト

夏休みが終わり学校が始まる。俺が帰ると後ろからバイクがつけて
いる様だ、なにせ俺は後を付けるパパラッチたちには敏感なのだ、
しかし今回はパパラッチやゴシップ記者ではないような感じなんだ
がいやな感じだ。

俺はいつもの振り切る技で車を操りバイクを煙に巻くがバイクに乗
っているのは内の学園の生徒のようだ結衣になんかあるかも・・・
だが結衣に言うとは心配するから黙っていよう。

今年も例年と同じく事務所がファン相手に誕生日会を行うんだが今
年は日曜日じゃないが側近の日曜日に行うんだ。いつものホテルに
俺の年齢分の28名を招待して行われる。

でも本当の誕生日はちゃんと結衣が祝ってくれるはずだ。今年はどんなプレゼントかな今から楽しみで自然に笑顔になる。ファンから「キヤー」って悲鳴やため息が聞こえた。

そんな声を無視して最後に別れの挨拶を行う「皆さん、本日は私の誕生日会に来て頂いてありがとうございます。これからファンの皆様に愛されるようにがんばりますので応援をよろしくお願いします」って締めくくりファンの誕生日会が終わる。「芸能生活も大変だ！」

お義母さんサイト

今日は結衣ちゃんと息子の誕生会の打ち合わせで駅まで迎えに行く。駅前の駐車場にフェラーリを置くと駅前まで結衣ちゃんを出迎える。手を振ると彼女も手を振って駆け寄ってくる。

やん・・・結衣可愛い・・・やっぱり結衣をお嫁に貰ったのは大正解だったわ。

結衣ちゃんを乗せショッピングセンターへと走らせると不審なバイクが後を付けてくる私は??? けどこんなやからには慣れているから買い物の後でまいちやおうっと。

結衣ちゃんと久々に一緒に食材の買い物が出る。結衣と野菜などの選び方や結衣のお母さんから教えてもらったと言うレシピを見な

から食材を購入するがやはり女の子と一緒にいい。

紺野さん・・・結衣ちゃんを大事にするね。

私は夏休みが終わってもひろくんの誕生日が控えているので忙しい。誕生日までは弘子やお義母さんとの打ち合わせで一度たりとも真直ぐにマンションに帰ってことが無い。

これが効をしているみたいで助かったみたいって言うのは後でわかった。

今日は弘子の婚約者の新條さんが迎えに来てくれる。私はシンガポールのお土産を持って新條さんの車に乗り込む大きい車だった後ろに450hって書いてあった。

この車すごく静かなんだ。新條さんに「この車静かですね」って言うとな新條さんは、ニヤって笑って「この車、弘子君のお気に入りなんだ」って告げた。私は「弘子ってこういう車が好きなんですね」って尋ねたら、「彼女はSUVが好きなんだ」って答えさらに車を加速させた。

新條さんの知り合いの装飾を主にしてくれる会社に連れて行っただけだった。店の名前は村瀬装飾店って名前だった。

店に入ると40歳前後のいかにもって感じの男性が現れた。新條さんは「村瀬さん、この前お話した件で本人を連れて来ました。彼女が依頼人の葵 結衣さんです」って私を紹介してくれた。

私は「葵 結衣です。今回はお義母さんに頼まれて飾り付けの打ち合わせをお願いに参りました」って頭を下げた。店の主人さんも「村瀬 徹って言います。話は彼から承っておりますのでいい思考じゃないですか、引き受けさせてもらいます」って挨拶をしてくれ、私はほっと肩の荷が下りた。

村瀬さんは「奥の部屋で打ち合わせしましょう」って私たちを奥へと案内した。奥の部屋に行くと中学生らしい女の子が机にすわっらパソコンで何かをしていた。

村瀬さんは「綾乃悪いけどコーヒーを入れてくれないか」って言う
と女の子が顔を上げ「うん、パパ……」って言った瞬間固まっている。

「綾乃どうした？」って固まっている女の子に話しかける。しばらくして……「白鳥 葵さん？」って私を見て言った。私は「あ……」
「そういえば私は車の中で三つ網をはずしてしかもすこしめがねが緩んでいたのて今はかけていないので車を降りる前にコンタクトにしたんだ。」

新條さんが苦笑していると後ろから声が聞こえた「綾乃ちゃんその通りだよ彼女がジュジュ専属モデルの白鳥 葵ちゃんだよ」って声が……私は声のほうを見ると「弘子……もう来たの」って声を掛けた。

弘子は「早めに用事を済ませたから特急で来ちゃった」って笑顔で笑った。女の子が「弘子お姉さん言ったこと本当？」って尋ねてきた。弘子が「本当だよ」って告げると女の子はあわてて「村瀬 綾乃です」って頭をペコッと下げて「お父さん飲み物用意するね」っ

て奥に入っていった。

村瀬さんは「すみませんね、おてんぼうなもんで」って頭を下げた。私は「いいえ、活発で明るいいい子じゃないですか」って綾乃ちゃんを褒めてあげた。

いすに座って打ち合わせを始めていると綾乃ちゃんがお盆に飲み物を持って現れた。「はいどうぞ」って飲み物が置かれる。

コーヒーが置かれる中、私の所はミルクティーが置かれる・・・私が頭に??を描くと綾乃ちゃんが「葵さんてミルクティーが好きなはずですよ」って微笑んだ。

私が「え?何で知ってるんです」って聞くと「ジュジュにプロフィールが書いてあるんです」って答えてくれた。

あれれ私そんなこと言ってないけど・・・。私は思わず「あ・・・お義母さんだ」って言ってしまった。

綾乃ちゃんは「お母さん?」って首をかしげたけど、さらに「私は来年白鳥学園に転入するの、白鳥先輩よろしくお願いします」って私に頭を下げた。

すると弘子が「白鳥は私、彼女の本名は葵 結衣って言うの、けど何で結衣が白鳥学園って事知ってるのプロフィールにも無いはず」って尋ねた。

綾乃ちゃんが「学園のパンフレットに乗っていますよ」って隅にあるデスクからパンフレットを持ってきた。

弘子がパラパラとめくるそして「あ……これ結衣じゃん」って制服の説明の処を開いて見せた。私も覗き込む……「！思い出した。それってお義母さんに去年撮影したんだ」って思い出した。

綾乃ちゃんが学園の話で盛り上がりそうとしたときに、村瀬さんが「おい、彩乃今日はそんな話できてくれたんじゃないぞ」って言う綾乃ちゃんは少し舌を出して「ごめんなさい」って奥に入っていた。

村瀬さんは「学園に入ったらよろしく」って苦笑し本題に移った。「場所は葵さんのパーティールームで良いんですね」などの打ち合わせ、実はひろくんの誕生日パーティーを盛大にやろうって計画なの。

打ち合わせが終わり車でマンションに戻る途中弘子が「結衣、明日は？」って聞いてきたので「明日と明後日はお義母さんと食事や詳細の打ち合わせだから明々後日はお願いね」ってプレゼントの買い物付き合いの確認をした。

弘子は「大丈夫、薫もちゃんと付き合ってくれるって言ってたしボディーガードも頼んであるし」って笑った。

盛大な誕生日会？（準備編2／2）

盛大な誕生日会？（準備編2／2）

里美サイド

現在私は結衣達の後を付けている。女4人男1人で行動しているようだ。しかも男の人は屈強な体格をしているし、もう一人の知らない女の人が腕を組んで歩いている。

かなりの視線は彼女たちに注がれているから、私は見つかりにくいけど一応気をつけて後を付けるとオープンカフェへと入って行った。

しばらくすると手下の男どもがやってきた。

私は「野呂は待機してて、西森と奥川は「彼女らが出てきたらさりげなく声を掛けて目的の探りを入れて」って命令した。

野呂に買いに行かせた缶ジュースを飲んでいると結衣達が出てきた。私は「今よ」って西森たちの背中を押した。

俺（西森）は里美に突かれ仕方がなくカフェの入り口へと歩いてさも見つけたように声を掛ける「よ！ 葵さん」って声を掛ける。

彼女らが俺たちを見ると白鳥さんが「あれ、西森君と奥川君じゃないどうしたの」って聞いてきた。

俺たちは「ゲーセン」って答えて「あんたたちは？」って聞いた。

渡辺さんが「私たち結衣の買い物のお付き合いよ」って教えてくれた。

「何を買うの？」って聞くと葵さんが「だめ恥ずかしいから・・・」って教えてくれなかった。

男と一緒に女の子の人が「勝負下着」なんて言うものだから、彼女たちが「何言ってるんですか」って真っ赤になりながら否定した。

俺たちも「え〜」ってびっくりすると女の子の人が「冗談冗談」って笑った。

くそ・・・からかわれた！！俺たちは「へん・・・！！じゃあな」ってその場を離れ里美に報告する。

里美が「あんた達役に立たないね」って一括されたので俺は「そんなもんしるか！」って里美を無視してゲーセンへと足を運んだ。

西森たちと別れた後、彼女たちは繁華街を歩きジュエリーショップ”サザンクロス”へと入っていった。

少ししてから店の中に入ると彼女たちは奥の部屋に案内されたよう。最後の男の人がドアの奥に入っているのが見えた。

私はさすがに野呂と一緒にでは罰が悪い早々に店を後にする。

外で2時間以上待っても出てくる気配が無い、私はあきらめて野呂を帰し先生のプレゼントを探しに他のところを回ることにした。

結衣サイド

私は間宮さんの彼女さんにお茶でもしながらどんなのにするかを決めましょうってカフェに向かった。

中に入り奥の席に座ると正式に挨拶する。

まず間宮さんが彼女を紹介する「彼女は木村 麻美さんで正嘉大の二回生」って言うと、麻美さんは「悟の彼女やってます木村 麻美ですもちろん一つ上だから尻に引いてます」って笑いながら挨拶した。

私たちは「白鳥学園の二年生で葵 結衣です」「同じく白鳥 弘子」「私は渡辺 薫」って挨拶した。麻美さんは「皆さん綺麗な人ね特に結衣ちゃんは可愛いわね」って間宮さんを肘で突いた。

間宮さんは困惑した顔をする。さらに麻美さんは私に向かって「あんたどこかで見たことがあるような気がするけど・・・」って悩んでいる。

私は苦笑し弘子と薫はお互いに顔お見合わせ「ふふふ・・・この話は後で」って先送りした。

そして麻美さんは「贈り物の相手はどんな人」って私に聞いてきたので、相談相手だから、私は正直に「誕生日プレゼントです相手は私の旦那さんで今年で28歳になります。学園で教師しています」

って言うのと麻美さんは一瞬固まった。

「えー・・・貴女結婚してるの？高校生でしょう、しかも通ってる学園の教師？・・・まるで小説じゃん」って少し大声を出した。

弘子が”貴女結婚してるの？”って言ってところで慌てて唇に人差し指を縦に当て「しー」って制したので、後は声が小さくなったが店内の客の何人かは振り返って私たちを見た。

そして「へえー今日は旦那さんの誕生日のプレゼントを貰うんだ。後で馴れ初めでも聞かせてね」ってにやけて言ってくれた。

麻美さんは私に「どんなプレゼントかを考えている？」って聞いてきた。私は「ぜんぜんです」ってうな垂れた。

麻美さんは「それは困ったわね、定番ではネクタイとか財布かな・・・」ってあごに手をやって思案する。

「あ・・・先生なんでしょう。ジャージなんてどう？」って言うてきた。

私は「運動系じゃないから着てないよ」って言うのと「そうなんだ・・・」考えに詰まった。

麻美さんは「忘れてた、予算は？」って聞いてきたので、私は片手を出すと、麻美さんは「え・・・五千元？」って言ったので「ううん、五万円以上は十分にあるの、多少の予算オーバーは大丈夫」って告げた。

だって、お母さんに会ったときに「これで」って誕生日用にお小遣

いをくれたんだもん。

麻美さんは「すごい・・・予算は十分ね」って目を丸くした。そして「かっこいいネックレスでも買いますか」って言うと、弘子や薫も賛成してくれた。

薫が「じゃあ、サザンクロスだね」って行き先が決定した。

全員が飲み終わり店を出ると同級生の西森君と奥川君に会った。ゲーセンに行くらしい。

私たちは彼らと別れてジュエリーショップ”サザンクロス”へと向かった。

前回と同じく店員さんに薫が「渡辺ですが店長さんは居ますでしょうか」って尋ねた。

横の方に居た店員さんが「あ、貴女はこの前の・・・私が呼んでくるわ」って、最初に逢った店員さんに前回逢った店員さんが言ってお奥に入っていった。

すると奥から以前逢った店長さんが「お久しぶり本日はどうなされました？」って聞いてきた。

薫は「一柳店長すみませんが今日は結衣の旦那さんの誕生日プレゼントを選びに来ました。

一柳店長は「えー旦那さん？・・・貴女たちって高校生じゃなかったって」ってビックリした。

薫は私の左手を店長に見せて本当だよって告げた。

店長が「あ・・・これって渡辺デザイナーさんの一番のお気に入り
のデザインじゃないですか、なぜ貴女がそれを・・・」

薫が「まあそれは後にして、今日の予定は男性用のネクレスなの
よろしくね」って言うのと、店長は「はい、薫様、奥のお部屋にど
うぞって全員を案内した。」

奥のVIPルームで店長が「ではご相手の年齢や感じをお伝えくだ
さい」って言うので、私は「えっと」って言うところを薫と弘子
が「彼女の旦那さん芸能人のHIROそっくりなんです」「なん
てハモって言うので私は顔が真っ赤になってしまった。」

麻美さんや一柳店長は苦笑して店長が「わかりました」って部屋を
出て行った。

麻美さんが「結衣ちゃんの旦那さんてカッコいいんだ」って言う
てさらに弘子たちが「本当にそっくりなんだ」なんて言うから慌て
て薫たちに「ちょっと！」ってあまりしゃべらないように彼女らを制
した。

しばらくすると店長が数十点の品物を持ってテーブルに並べた。さ
らに三点ほど私の前に出し「これが私のお勧めなの」って開けて見
せた。

ずらった並べられた物を見る限り確かに店長のお勧めが良さそうに
見える。

私は三点の中の第一印象が良い一番シンプルなデザインを選んで手

に持つと、店長が「あら、いいセンスしてますね。そのデザインは薫さんのお母さんなのよ」って言った。

薫が「そうなの？」って言うのと店長が「はい」って告げる。私はそのデザインが気に入る「これにします」って店長に告げた。

薫が「ありがとうね、お母さんのデザインを選んでくれて」って言うのと私は「ううんだってこれが一番気に入ったんだもの」って告げた。

もちろんお値段は予算内だった。

麻美さんも「並んでいる中で一番ね」って言うてくれた。

しかし私のプレゼントが決まっても、これは彼に合うかな？なんてとっかえひっかえ作品を見てわいわいしたので結構時間がかかってしまった。

私はありがとうって頭を下げてお礼を言ってた。店長が「お買い上げありがとうございます」って私たちは店を出た。

弘子たちと別れて駅に行きお義母さんの元に向かうことにする。お義母さんにプレゼントを預けるために。だって家に置くとひろくにばれちゃうから・・・。

準備万端後は誕生日当日で行うだけだ。ひろくんの誕生日は学園近くの上水道の工事が有り半休なんだ私は終わるとすぐお義母さんの元に駆けつけた。

玄関の横には村瀬装飾店と野村電気工事って書いたワゴン車が2台

止まっていた。

玄関に入って「お義母さん、ただいま参りました」って告げながら入ってゆくと、怒鳴る声が聞こえる「こら！ 亀ちゃんそこは違うだろう」って言う声が聞こえる。

奥に行くとき村瀬さんが何か指示していた私は「ご苦労様です」って挨拶すると、村瀬さんが「お！ 結衣ちゃんだったっけ今準備してるから危険だから近寄らないように」って告げた。

後ろでお義母さんが「結衣ちゃんこっち」って手招きした。私は「はーい」って返事をしてお義母さんの元に向かった。

お義母さんはダイニングに昼食を準備していた「結衣ちゃん手伝ってね」って私にエプロンを渡してくれた。

エプロンは私専用の可愛い刺繍が入っているピンクのエプロンを掛けてお母さんを手伝う。

お義母さんに言われた通りテーブルに並べる「結衣ちゃん全員で6人だからね」って六人分の料理を並べる終わると、お義母さんが「村瀬さんたちに食事が出来たのでここまで案内してね」言ったので、私はエプロンをはずし村瀬さんがいる部屋の呼びに行った。

私が「村瀬さんお食事の準備が出来ましたのでダイニングまでお越しください」って言うとおお 了解 おくい皆食事休憩だぞ」って告げると、中から「了解」って返事が返ってきた。

全員が私の後ろを付いてダイニングまで来ると、村瀬さんが「紹介がまだだったね」って職人さんたちを紹介し始めた。

「まず俺の横の隣から片腕の高坂 斎君そして長女の玲奈その隣が電気工事の野村 誠司さん横が亀沢 和男君」って紹介してくれた。

私は「本日は私の為にありがとうございます。よろしく願いします」って挨拶すると、野村さんが「今日は盛大な誕生日会だね、お兄さんのかな？」って言ってきた。

私がばつが悪く下を向いていると、お義母さんが「誕生日の主役は私の息子よ、彼女は息子の嫁さんなのよ」って言う全員が目が点で固まった。

それでもいち早く立ち直った玲奈さんが「貴女ってコスプレでのしてるの？その制服白鳥学園そっくりだけど・・・」なんていうもので、私は思わず「コスプレじゃないです現役です」って言って「あ！」真っ赤になって顔隠した。

お義母さんが「その話はおいおいに、先に食事をしましょう」って皆にいすに座るように即した。

村瀬さんが「昼からも結構一杯作業が有りますので食事をいただきますしょう」って率先して座ってくれた。

私はお母さんは6人分だよね5人しかないけどって不思議に思っているとお義母さんが「結衣ちゃん玲奈さんの隣ね」って「皆さん家の嫁も一緒にお願いします」なんていうので私は「お義母さん」って叫んでしまった。

私は「すみません」って言いながら一緒に食事をするようになった。

「いただきます」って全員で食事にかかる。一人用なべを開けると湯豆腐が入っていた私がおいしそうって顔を近づけるとめがねが汚いらしく曇ってしまった。

私は眼鏡をはずしてレンズを拭いていると隣の玲奈さんが「貴女って見たことがある」ってつげ頭をひねっている。

皆が食べていると大きな声で「ああ・・・貴女ってファッション雑誌のモデルじゃない」って言うてきた。

私はすこしうつむいて「はい」って答えた。亀沢さんが「ふんゝたしかに可愛いね、のむさん」って言ったら野村さんは「そんなの興味ねえ」って言うて黙々と食べ始めた。

村瀬さんが「そういえば綾乃が何か言ってたな」って言うて玲奈さんが「なにお父さんなぜ妹が知っているの？」って尋ねると。

「ああ家に一度来たからな」って告げると「午後からも大変だから」ってあわてて食事を進めた。

玲奈も私に「あとで聞かせてね」って食事を進めた。そして食事が終わりすこし休憩中に玲奈さんとお話した。

玲奈さんは専門学校のデザイン科で歳は二十歳でデザインの勉強にお父さんの手伝いをしているんだって。私は綾乃ちゃんに話したぐらいの話をお話した。

休憩が終わり皆さんは又部屋に戻って作業を行っている。私はお義母さんと後片付けを行い部屋の装飾ができるのを待った。

盛大な誕生日会？（本番）

盛大な誕生日会？（本番）

二時ごろに電気工事が終わったようで野村さんと亀沢さんが部屋から出てきて「村瀬君俺たちは先に返してもらおうわ」って言うってから「奥さん、我々は引き上げます」って私たちに挨拶し帰った行った。

お義母さんは「ご苦労様でした」ってお礼を言うので私も一緒に「ご苦労様でした」って挨拶すると野村さんが「旦那さんによろしく」って言いながら帰って行った。

部屋を覗くと佳境に入っているようで全員が慌しく作業を進めていた。

玲奈さんがこちらを向き「結衣ちゃんあと少しだから」って又作業を進めた。私は「よろしくお願いします」ってお義母さんの元に戻った。

しばらくしてから、お義母さんと飲み物を準備していると「準備できましたよ」って村瀬さんが言ってきたので、私たちは早速部屋に見に行った。

私は「すごい！普通の（一般から見れば凄く大きい）部屋がパーティー会場になっている」・・・。

お義母さんは「さすがに村瀬さんね、ここまでの装飾は貴方しかできないわね、ご苦労様一服してください」と言ってリビングに案内した。

私はリビングに飲み物を用意する、そして飲み物を飲みながら村瀬さんより部屋の作りを説明してもらおう電装品など各種の仕掛けを話してもらおうが難しくて判らない。

でも玲奈さんが残ってフォローして貰えるので安心なのだそうだ。

その後ケータリングの人たちが料理の準備をする。私は制服のままなのでお義母さんに着替えをするように言われて二階でシャワーを浴びてからひろくんの部屋に入った。

「えーっと・・・今日はこそっと買った勝負下着でがんばるつもりなんだ。パーティードレスに着替えると、お義母さんの元に行って、髪形とお化粧をしてもらおう、普段はほとんどメイクしないのでこんな時は、お義母さんに頼ってしまう。

お義母さんは快く引き受けてくれるって言うか・・・お人形さん状態にされる。

でも、これで少しは大人びて見えるかな？・・・。

リビングに行くと玲奈さんもドレスに着替えていた。

玲奈さんは「奥に隠れているから着替えなくていいって言ったのに絶対駄目って言われ仕方が無く着替えた」って苦笑した。でも玲奈さんとってもドレスが似合っていた。

五時半ぐらいで来客者が訪れるもちろん弘子や薫たちも婚約者を連れて集まってくる。招待者は20人ぐらいだそうだお義父さんの関係がメインだそうだ。

ぶぶぶぶぶ・・・ひろくんからメールだ。

里美サイド

今日は先生の誕生日なの私は先回りして先生のマンションで待ち伏せする。マンションの向かいの喫茶店で先生の帰りを待つことにした。

時刻は三時を少し回っている。私は紅茶を飲みながら見張る事にする。少しするとレナと佑奈が現われ三人で待つことになった。

先生の話をしながら時間をつぶす・・・・・・んんんんん出入りはあるんだけど先生が中々現われない・・・・レナが痺れを切らし「私、帰る！」って帰って行った。

しばらくすると佑奈ももじもじし始める。私は思わず「帰れば！」ってがなった。佑奈はびくつとして泣きそうになる。

しばらく一緒に待ったが、私は佑奈に「もういいよ」って告げると、慌てて帰って行った。

店の閉店まで（８時まで）待ったが先生は帰ってこなかった。表であと一時間待ったが現われず結局あきらめて帰ることにする。

帰る途中にナンパ野郎が声を掛けてきた。「よお・・・その姉ちゃ

んどこ行くの？」って言うてくるので「うるさい！邪魔しないで」
って振り向くと、そこには西邦高等学校の山田君がいた。

山田君は「何だ、お前か・・・」ってユーターンして去ろうとした
時、私は「ちょっと待って」って声を掛けた。

ひろきサイド

今日は俺の誕生日だ。学園は半休だが俺の授業は無いので、学園に
顔を出してから陵プロダクションの事務所向かい事務処理を行って
から、誕生会を行う実家に直接向かう。

事務所を出る前に結衣にメールする”今からそちらに向かう、到着
予定はたぶん7時ぐらいだと思う”ってメールした。

私はひろくんからのメールの内容をお義母さんに伝える。

お義母さんは「丁度いいぐらいに時間に来れそうだね」って準備を
進めている。私手伝いますって言うけど、お義母さんが「着替えが
終わっているし貴女は準主役なの大人しくしていなさい」って手伝
いを断られた。

私はひろくんが帰ってくる所を見れる二階のテラスでひろくんを待つことにした。時計を見るともうすぐ7時になる・・・ヘッドライトを点けた白い車が車庫のほうに現れた。

「あ・・・ひろくんの車かな？」って降りるところを見るとやっぱりひろくんだった。私はテラスから手を振るとひろくんも私を見つけたように手を振り替えてくれた。

あわてて玄関にひろくんを迎えに行く。パタ・パタ・パタ 玄関に行く途中でお義母さんに「ひろくんが帰ってきました」って告げ、玄関に急ぐ。

お義母さんが後ろから「そんなに慌てなくてもひろくんは逃げていないよ」って笑っていった。

玄関を開けるとひろくんが立っていたそして「ただいま」って言う。私は「お帰りなさい」ってひろくんに抱きついた。「ごほん」後ろで咳払いが聞こえる・・・。お義母さんだった。

お義母さんは「結衣、ひろきを着替えさせてね」って早く二階に行くように指示した。

私たちは慌てて二階のひろくんの部屋に行き、私はひろくんの着替えの準備をする。そしてひろくんはシャワーを浴びにバスルームへと入っていった。

しばらくするとひろくんが腰にバスタオルを巻いて出てきた。私は「着替えはここです」って告げて部屋を出て行き廊下で待つことにする。

ドアを開けて出てきたひろくんはカッコいい。私は、主役と一緒
腕を組みパーティー会場へと向かう。

村瀬さんの施工した会場へと入ると、照明が当てられてみんなの拍
手に包まれる。

私たちは玲奈さんに案内され主役席に案内される。どうも司会進行
を玲奈さんにお問い合わせしたようだ。

そしてひろくに玲奈さんが「挨拶をお願いします」ってマイクを
手渡した。

ひろくんが「皆様お忙しい中、私の誕生日祝いと妻の結衣のお披露
目にお集まりくださり、ありがとうございます」って一緒に頭を下
げた。

そしてマイクを私に渡してくれて、小さな声で「適当に一言言え
ばいいよ」って言った。

突然マイクを渡されたので、少し固まってしまった。気を取り直し
「妻の結衣です。皆様よろしくお願いします」ってしか言えなかつ
た。

玲奈さんにマイクを返すと次の行事となる。食事は立食形式にして
あるので食事をしながらの挨拶になる、一番最初に義両親が私たち
に「おめでとう」と言いつつ、お義母さんが「今日は貴女のお披露
目も兼ねているの宜しくね」って微笑んだ。

私は複雑な顔をする……。お義母さんが私の肩をポンと叩いて「

もう・・・そんな顔をしないで」って言った。

お義父さんの会社関係の人が次々に挨拶をしてくる。ひろくんが「これは笹岡専務さん、妻の結衣です」って紹介する。

専務さんが「ひろきくんおめでとう。又可愛い奥さんを貰ったね」って言いつつ私に向かって「奥さん、ひろくんを支えてやって下さい」って言われた。

私は「一生懸命支えますので、ご助言をお願いします」って返事をした。専務さんは「これで、葵さんは安心だ」って笑って言った。

最後に弘子や薫がやってくる「ひろきさんおめでとう」「結衣は社交界デビューだね」ってからかわれた。

そしてケーキが準備される、私は「やっぱやるんだ・・・ろうそくの吹き消しを・・・」ってひろくんを肘でこついて笑った。

この時点でひろくんは皆にかなりお酒を飲まされかなり赤くなっていた。

やはり玲奈さんの合図で照明が消され、ひろくんがケーキのろうそくを吹き消す、ケーキが配られて徐々に会社関係の人は「お先に失礼します」って帰って行った。

弘子たちも「私たちもそろそろ引き上げます」って言ってひろくんに封筒を渡し「これ皆の誕生日プレゼント結衣と一緒に行ってね」って手渡した。

ひろくんは中身を見て「ありがとう」そして「結衣これ預かって」

渡された。ひろくんはお酒でかなりきつそうだ。

玲奈さんが「そろそろお開きにしましょう」って誕生会を終わらせる。

お義母さんが「ひろきだいぶ無理したようだね、結衣ちゃんお部屋に連れて行ってね」って言ったので、私はひろくんに肩を貸しひろくんの部屋に連れて行った。

ベットに座らせるとひろくんは「水」って言ったので、冷蔵庫からミネラルウォーターを出しコップに注ぎ手渡すと、一気飲み干し「少し横になる」って言ってベットに横になる。

私がコップを片付けて戻ると寝息を立ててもう眠っていた。

私は「えー・・・もう寝ちゃったの今日はひろくんと一緒になろうと思っていたのに」って私は頬を膨らましたけど寝顔がカッコいいのでキスだけにどめた。

ひろくんの上着とネクタイを脱がせ、上にシーツを掛けてお義母さんが居るリビングに行った。

私は「お義母さん、ひろくん寝ちゃいました」って告げると、お義母さんが「ひろきはがんばり過ぎたみたいね、でも今日でお義父さんの会社関係にも顔見世したから、これから色々宜しくね」って言うてきた。

私は「わかりました」って返事をして、ひろくんの元に戻ろうとすると、お義母さんが「今日は残念だったね」って少し笑って言った。

私は赤くなって無言でひろくんの元に戻った。

私はシャワーを浴びて寝間着に着替えひろくんの横で眠りに着いた。

ひろきサイド

俺はいつも間にか眠っていたらしい。横を見ると結衣が静かに寝息を立てていた。

結衣を起こさないようにベットを出てシャワーを浴びてさっぱりして再び眠りに着いた。朝起きたときには結衣はもう隣に居なかった。

ダイニングに行くとお袋と結衣が楽しそうに朝食の準備をしていた。俺は「おはよう」って声を掛けた。

盛大な誕生日会？（本番）（後書き）

誤字脱字を指摘されちゃいました。

もちろん私が悪いんですが、出来る範囲で修正をします。
基本内容は変更ないです。

陸上大会への練習（補欠の私）

陸上大会への練習（補欠の私）

二年生での体育祭は、可も不可もなくスムーズに終わった。成果は学年女子短距離の一位の金メダルと女子総合三位の銅メダルだった。

私は体育祭での走りのおかげ？で、陸上大会の短距離100メートルの選手・・・ではなく補欠要人に選ばれてしまった。

おかげで、帰宅部してたけど、臨時の陸上部員にされてしまった。体育祭では学年総合三位だったんだけど、二位の人との差が小さかったので体育担当の杉本先生が独断で決めてしまったんだ。

代表選手の二人がトラブルの無い限り、私の出場は無いのだけど・・・。

そして、女子短距離に選ばたのは去年の一位だった”小澤 舞”先輩の妹で一年生の沙瑛ちゃんが一位だった。

しかも二位はスタートを失敗して私と僅差だった、沙瑛ちゃんの双子の沙希ちゃんだった。

陸上の選手に選ばれた人たちは、放課後残って大会に備えて練習をすることになった。

「あゝん、家事が疎かになっちゃう・・・」って、ひろくんに嘆いた。

でも、ひろくんは「いいよ、結衣はガンバって練習をこなして不意に備えて、がんばれよ」って言うてくれた。

練習を始めてみると双子の二人と私との差は、やはりそれなりにあった。それでも、ひろくんに背中を押してもらっているので練習にはがんばった。

放課後グラウンドに集合し、準備体操から始まり、さらに走る為のUP運動に入る。私は本格的にUP運動をやった事がないので、杉本先生の指導の下でUPを行った。

本格的にUP運動をすると、体の隅まで関節が動くみたいで、早く走れるような感じだ。でも筋力トレーニングを多く取り入れたので疲れたのか、思ったほどタイムは伸びなかった。

でも小沢姉妹はぐんぐんタイムを伸ばした。中学でもかなりやっていたらしいんだって、当然差がついて当たり前だった。

土曜日の練習のとき、杉本先生が昼食を奢ってくれたことになった。選手全員で先生の行きつけの定食屋に向かう。

学園からだいぶ離れたところにある”北海道食堂 十勝”って所に入っていた。

「いらっしやい！先生、今日は又たくさん生徒を来て来ましたね」元氣な大声で背の高い奥さんが声を掛けた。

先生は「こんにちは奈緒子さん、今日は陸上大会の選手を連れてきたんだ。全員に十勝定食を16人前、宜しく野郎の分はご飯大盛りで」って注文し「皆、すわったすわった」って席に着くように言っ

た。

菜緒子さんと言われた女将さんは、奥の厨房に向かって「あんた、十勝定食 16人前！ 特急で」って言うってお冷の準備に掛かった。

私は小澤姉妹と一緒に座って食事出てくるのを待った。厨房を見るとかなり太った親父さんが慌しく動いて作っているようだ。

女将さんが全員にお冷を配ろうとして準備を始めていた。かなりの量のようなので私は奥さんに手伝いを買って出た。

女将さんは「わるいね、じゃ半分お願い」って一杯お冷の入ったコップが乗ったお盆を渡された。私はテキパキとお冷を配り始める。

コップを置いた際に「結衣ちゃん、ありがとう」とか「葵さん、ありがとう」って言うてくれた。

奥さんが「結衣ちゃんって名前だね、結衣ちゃんお手伝いありがとう」ってお礼をいわれた。

しばらくすると、女将さんが両手で定食が乗ったお盆を次々と運んできた。もちろん私はそれも手伝った。

最後には旦那さんが私の所に定食を持ってきて「手伝ってくれて、ありがとう。おまけ付きだよ」って、皆とは一品多いウーロン茶の缶が乗っていた。

皆は「結衣って良いな」なんて言うのと、奥さんが「手伝ってくれた御礼よ。皆も手伝えばよかったのに。ははは！！」って豪快笑った。

定食屋の親父さんは先生と同郷（北海道）だそうで、名前は多田って言うんだって、奥さんの方がかなり身長が高く凸凹コンビのおしどり夫婦だそうだ。

全員で「いただきます」っていただくと、思いのほかボリュームがあって美味しい。この店はよく学生たちが多く来るようだ。私たちに他にも他校の制服を着た学生さんたちもいる。

突然、女将さんが、他校の制服を着ている彼に「こら！！加藤君、以前から”たまねぎ”を出しちゃ駄目だっていつてるのに。言うことを聞かないんだから、血液がどろどろになるよ」って叱っていた。

加藤って言われる人が「僕、たまねぎがまったく駄目なんです」って涙を流し謝っていた。一緒に食べている人が「誠、だから俺も前から言ってるだろう。食べなきゃ駄目だって・・・」って追い討ちを掛けていた。

可愛そうに、彼はますます落ち込んでいた。

私は、たまねぎってすごく美味しいのに嫌いな人がいるなんて不思議だった。たまねぎが嫌いな人っているんだ・・・。

私たちが全員食べ終わると、先生が「今日は俺の奢りだ」って会計を済まし、定食屋の親父さんに「ごちそうさん」って定食屋を後にした。

私は思いのほか美味しかったので、そのうち一度はひろくんと来ようなんて考えた。

練習が遅くなると家が遠い女子生徒は先生が送ってくれるのだけど、他の選手に比べ私だけが方向が違っている。メンバーも先生の車は定員一杯で窮屈だ。

全員を先生が送ると、道順がよくなり先生も私も家に着くのがすごく遅くなってしまった。

その事があった後、ひろくんが偶然を装って帰る時間あたりに現れ「杉本先生、彼女だけ方向違いのようですね。私は一緒の方向ですので送って行きましょう」って先生に告げた。

先生は「葵先生、申し訳有りませんな、そういえば以前事件があったとき送り迎えてらしたんですね。本来は私が送らないといけません、お願いできますでしょうか」って言ってきた。

ひろくんは「お安い御用ですよ。私に任せてください」って告げると。杉本先生は「では、お願いします。園長へは私が連絡いたします」って頭を下げた。

私は思わず、心の中で「やった!!! ひろくんと一緒に帰れる」って万歳した。それからひろくんが家まで（同じ家だもんね）送ってくれるようになった。

私は手抜きをせず、練習をこなしていたので、だいぶ筋肉疲労が溜まったようで、すこし足取りが重くなってきた。

そんな折、ひろくんはいつもと違うところに向かって車を進めていた。私は「いつもと違う道だけど、どこに向かっているの？」って尋ねた。

すると、ひろくんは俺の知り合いの所、もうすぐ着くよ」って答えた。

そして車は雑居ビルの地下駐車場に入っていた。車を降りてエレベーターに乗るとひろくんが10Fのボタンを押した。エレベーターを降りて通路を進むと”エステティックサロン北原”って書いてあるドアに着た。

ひろくんはドアを開けて中に入っていたので、私も後に続いた。受付で「葵だけど、弥生さんいる？」って聞いた。

受付のお姉さんは「しばらくお待ちください」って言って奥に入っていた。

しばらくして白い衣装を着た綺麗なお姉さんが現れ、ひろくんを見ながら「お久しぶりね」って言って私を見ながら「この子ねひろき君を射止めた人は」って微笑みながら言った。

ひろくんは「その件は後で、今日は結衣をよろしく」って私の背中を押した。

お姉さんは「そうね、じゃこっちへ」って私を奥に案内した。歩きながら「自己紹介を忘れたわ。私は”北原 弥生”って言うの、彼とは高校時代の同級生よ」って言った。

私は「葵 結衣です、ひろくんにはここの事は何も知らされていないいいですが・・・」って言う。 「あら、ひろき君ってなにも説明しなかったの？」って笑った。

そしてロッカールームに連れて行かれ、「これに着替えて」って、

紙袋を渡された。中にはフリーサイズのビキニとバスローブが入っていた。

着替えてから別の部屋に連れて行かれると、狭いベットが置かれ、そこに寝るように言われた。どうもエステをするようだ。私は初めてで勝手がわからない。

弥生さんは「エステだけじゃないわよ」って笑った。そして「貴女、陸上やってるんだって、手足なんかパンパンになってるんでしょう。今回は筋肉疲労を取るのが目的よ、エステはおまけよ」って言った。

そして、弥生さんと助手のお姉さんが、私の体を揉み解し始めた。

最初はすこし痛かったが徐々に心地よくなり、睡魔に襲われ眠ってしまった。「結衣ちゃん終わりましたよ」って言われて目が覚めた。

体がすごく軽い、弥生さんたちに「体が軽いです。ありがとうございます」ってお礼を言った。

服に着替えて待合室に戻ると、ひろくんがソファに座って転寝をしている様だった。

次の日は体調がすこぶるよく、もちろんタイムも自己記録を更新した。でもやはり小沢姉妹には敵わない。やはり身長差が大きいと思う、彼女たちとは20センチ近く差がある。

そんなこんなで、陸上の練習をした。大会までは一ヶ月弱ある。大会は文化祭の翌々週から始まる予定になっているだ。

陸上に選ばれたから、文化祭はパスしようとしたら。

文化祭実行委員より「貴女は強制参加です。もちろんあなたのクラスは去年と同様にメイド喫茶です」って言われてしまい。しかも「これは学園長の意向でも有ります」。

なんて言われてしまった。昨年私たちが行ったメイド喫茶がすこぶる評判だったために学園の周りから要望が出たって事らしい。

ひろくんに相談したら、「わかった、交渉する」って、学園長に話したらしいが、逆に説得され、私に苦笑いで「結衣、ごめん無理だった」って手を合わせた。

私は「えー」ってうなだれた……。けど私は頼まれるとあまり嫌だと言えない性格なので、気合を入れなおすことにした。

でも文化祭には・・・とんでもない事件が待っていた。

モデルがばれた？

モデルがばれた？

今日は杉本先生が陸連に用事があるので、陸上の練習はお休みになった。

弘子と薫が「結衣、今日は一緒に帰れるね。一緒に帰ろう」って言うてきたので、私は「うん、一緒に帰ろう。久しぶりだもんね」ってOKの返事をした。

学園を出て三人で一緒に歩く……。薫が「結衣、練習はどう？」って聞いていた。

私は「結構きついよ。足なんかパンパンだもん」って言う。弘子が「結衣は杉本先生に気に入られているもんね」って言うので、私は「そんな・・・違うよ」って答えた。

でも弘子は「いくら体育祭の出来が良かった・・・。小澤姉妹とはタイム差は結構有るはずだもんね」って言いつつ「杉本先生って結衣を見る目が他の人とは違うもんね」ってからかう。

私は、少し頬を膨らまし「そんな事無いもん」って、少し怒ったように言った。二人は「はははは」って笑った。む・・・からかわれた様だ。

少し坂になっている駅への道を歩いて行くと、弘子が指を指して「危ない」って声を上げた。

パツと見ると、ベビーカーがお母さんたちのお話をしているところから離れ、坂を下っている。さらにベビーカーは走行中の車に向かった進んでいる所だった。

お母さんたちが弘子の声に気がついて振り向いたけど、固まったように動けないみたいだった。

私は、とっさにガードレールを飛び越えベビーカーを助けに走った。

キーって車が急ブレーキをかける。そして薫と弘子が目を覆う・・・。

私は一瞬遅かった。ベビーカーをつかんで引つ張った瞬間に、ベビーカーのハンドル部分と車が接触し、ベビーカーは私の手から離れしまった。

しかしベビーカーは回転しながらも遠心力なのか、奇跡的に赤ちゃんが飛び出てきた。

しかもラッキーなことに赤ちゃんは私の胸に向かって飛んで来たので、私は慌てて受け止めた。もちろんベビーカーはその後ガードレールに当たって大破した。

赤ちゃんが飛び出てきたのは、椅子型でなく乳母車形だったので引っ掛かりが無く、うまい具合に飛び出てきたみたいだった。本当にラッキーだった。

私は、その場でしゃがんでしまい、今までの出来事に呆然として震えが来た。

その後停止した車からビジネスマン風の小父さんが出てきて、私が赤ちゃんを抱いているのを見てビックリしていた。

実はこの時赤ちゃんをキャッチする際に赤ちゃんの手が私の眼鏡に当たりそのショックで眼鏡が飛んで大破してしまった。

車のブレーキ音やベビーカーの大破する音を聞きつけ、生徒や野次馬が一杯集まってきた。

もちろん生徒の中には女子中学生も居たので私の眼鏡の無い顔も見られたようだ。

薫が救急車と警察を呼んでくれて、私と赤ちゃんは一応確認のために病院へと向かった。

救急車が到着し、赤ちゃんを抱いてお母さんが乗り込みその後私が乗った。弘子は行き先を確認しがてら、私の鞆を持ってきてくれた。

救急車はサイレンを流しながら走り始め、十数分後には病院に着いた。赤ちゃんのお母さんが医師に事情を説明する。

赤ちゃんは念のため、レントゲンを取るようだ。私は特に外傷も無いので問診と腕の具合を見るだけで終わった。

後で聞いたけど赤ちゃんは無傷で健康って事だった。

そして弘子がひろくんに電話を入れていたくれてたので、後で病院まで迎えに来てくれた。

その間に、偶然に病院に取材していた新聞記者がいて、私の行動を記事にした。もちろん写真入で……。

当然、後で警察官が事情を聞きに現われた。私は、結局二回同じ話を話した。

もちろんその後で全学園集会が開催され、私は感謝状を貰った。この事で私は一躍時の人になってしまった。

しばらくすると、私が教室に居るときに他の学年やクラスの人がちらちらと見に来ているようだ。

赤ちゃんを助けた人を除き見に来てるのかな？って思っていたら、少し違うようだった。

どうも、新しく高校に入る新入生や学園の中学生三年生に配られた学園の高校用パンフレットと新聞に載っている写真を見比べたらしい。

又それが父兄・兄弟を通じて全校に判ってしまったみたいで、私を見に来る為のクラスの見学……って事になったみたいなんだ。

どうも私が学園の制服モデルをやっているのが判ってしまったようだ。けれど誰一人として私に直接は聞いてこないで黙っていることにした。

その時は私の制服モデルが大人気になっているとは思わなかったんだけど。後で聞いた話では、学園の高校用パンフレットがネットで高値で取引されているらしい。

この事は後で村瀬装飾さんの娘さんの綾乃ちゃんが入学してきて、彼女が私に教えてくれた。

この結果、私は追っかけまわされることになってしまった。そして、しばらくは男子生徒の告白が・・・毎日続いた。私は放課後に陸上の練習をしているので、ほとんどは昼休みに呼び出しを受ける。

某男子生徒「結衣ちゃん僕と付き合って」

私「ごめんなさい。私はこれなの」って左手の指輪を見せる。

某男子生徒「えっ・・・うそっ」って泣きながら去ってゆく。

私は「弘子・・・薫・・・」って助けを求めるけど、苦笑いされるだけだ。でも告白時に私の肩をつかんだり乱暴な態度を示すと、いつの間にか現われて「あんた、そんな事していると勝村先生に言うわよ」ってけん制してくれた。

生活指導の勝村先生を持ち出すと、ほとんどが「ちえ」って舌打ち

し去った言った。

男子生徒の告白が少なくなると、今度は三年生や一年生の女子から、妹やお姉さまになってコールが出てさらに困ってしまった。これには弘子たちも困ってしまったようだが・・・。

でも本当は、私のほうが一番困ってるのに・・・。

でもこの事では、ひろくんが私を守ってくれたので、ニコニコだったけど・・・。このことを里美にしっかり見られ、憎悪の対象が私に向かっていたのを見逃した。

そして・・・・・・・・。。

とんでもない文化祭!! (準備編1/2)

とんでもない文化祭!! (準備編1/2)

「あゝん」今回の私たちが文化祭での出し物はコスプレ喫茶になっちゃった・・・。

クラス委員長の澤田君の考案だなんて、強引に決められちゃった。多分全面的に私を利用しようとの魂胆が丸見えになっている。

澤田君は「今年は歴代売り上げNO.1をめざすぞ!」って、握った片手を挙げた。

澤田君サイド

俺は学園長に呼び出しを受けた。内容は・・・「澤田君、これを見て」ってテーブルにこぼれそうになっている手紙の山を見せた。

さらに学園長は続ける「手紙の内容はあなたのクラスに居る”葵結衣”って子に、今度の文化祭も去年と同様に同じ事をやって欲しいって言う嘆願書なのよ」

俺は、意味が判らず「はあ?」って言う。

さらに続けて学園長が「澤田君、去年の一年E組の喫茶店の盛況って知ってるでしょう。それがアクシデントで彼女の出番が少なくなり大勢の人からブーイングが出たのです。又私どもの学園ホームペ

ージの投稿欄にもザーバーがパンクするぐらい書き込みがあるのよ。彼女にメイドをとってね。」

俺は「それで私にどうすれば？ 良いんでしょうか」って尋ねる。

学園長は「そこで澤田君。貴方がクラスの人に去年と同じようにメイド喫茶をするように働きかけて欲しいのよ」って言ってきた。

しかもその話はほとんど強制って事らしい。でも俺は案外いいかもって思い、衣装は学園長持ちって事を条件を出した。

学園長は俺が引き受けるって解かると「衣装や予算は私に任せなさい」って言われた。もうやるっきゃない！！

結衣サイド

今年も私はメイドをやることになっちゃったんだ。

それはクラス委員長の澤田君の強引とも言える一言で始まった。

澤田君は「皆、今年は俺の独断でメイド喫茶をすることにする。この話は学園長の意向でもあるし、このクラスには誰かさんが居るから、売り上げ歴代最高記録が狙える。」って言う。

この学園の幻ともいえる最高の売り上げは、十年前に男子二人と女子一人がメインになって起こした。”ホスト喫茶”が歴代の売り上

げがダントツの一位らしい。

私が制服のモデルをやったりファッション雑誌の”ジュジュ“でもモデルをやっていることが皆にばれちゃったから、2日目の一般開放日には山のように人が訪れると思う。

インターネットや生徒の家族の口コミが多いって話らしい。(澤田君 談)

当然、私は売り上げアップを名目に強制的に接待役とコスプレ写真撮影をやらされることになることが決定されている。

A組は去年E組のメンバーは3割ほど居るが、初めての人も多い。やはり昨年と同様に役割分担を決めてゆく。

私は、嫌がる弘子と薫をメイドに推薦した。私は渋る二人に「貴方達がやらないと、私は欠席します」って爆弾発言で脅した。

彼女たちはクラスの人からのブーイングで・・・二人は「結衣、あんた貸しだからね」って何とか引き受けてくれた。

でも私は、憂鬱そのもので、何とかならないかなって、ひろくんに相談するも「こればかりは無理・・・あきらめるしかない」って両手を挙げた。

ひろきサイド

文化祭前に俺は学園長に呼ばれた。学園長室に行くと柔道部顧問の中島先生と主将の稲波 武君それと副主将の岩田直樹君と一緒に居た。

そして、俺は学園長に手紙の束を見せられた。学園のサーバーは俺が管理しているので書き込みが多いのは解かつてはいたが・・・。

学園長はこれらの期待を裏切ると学園運営に支障が出る恐れがあるって言われた。俺も結衣のサポートをお願いされた。

学園長は去年の事件を踏まえて、結衣のクラスに柔道部の護衛を付けるって話だった。

顧問の中島先生は二人によりしく頼むと彼らは快諾してくれた。但し主将の稲波君だけは結衣とのツーショット写真をいの一番にお願いしていた。

そういえば岩田君は結衣のクラスの親友の後藤さんの彼氏のはず、案外違和感なく警護が可能かもしれない。当然、俺も時々顔を出すことにする。

又結衣の開く店の周りはさりげなく運動部たちを配置し不測の事態に対応するようにしてくれたようだ。学園長の気配りに感謝する。

文化祭への準備が始まる。

私は二束のわらじでてんやわんや状態になったちゃた。

今回の衣装は学園持ちらしく予算が豊富でなんと私たちが着ている制服のデザイナーがデザインするって事らしい。

どんどん大げさになっていくみたいでちょっと怖い。しかも衣装合わせもあるらしい。衣装合わせはメイド役の代表三人が行うことになった。

メンバーは意の一番に私が選出される。残りのメンバーは澤田君が「葵ちゃん残りのメンバーは貴女が選んでいいよ」って言うてくれたので、私は弘子と薫について決めようとしたら。

薫が「結衣、その日は絶対駄目」ってきつく言われた。なぜ？って聞くと、真っ赤な顔をして「彼氏の誕生日」って小声で教えてくれた。

変わりは由美にお願いすることにした。由美に話をするのと二つ返事で了解してくれた。

そして、某日。私たち三人は授業を半休して学園長指定のデザイナーの元に向かう車の中にいる。

ドライバーはなんと”ひろくん”だ。何故かと言うと車で通学している先生の中で余裕（暇）があったのはひろくん一人だけだったんだ。

ひろくんの車に乗る際に三人とも後部座席に乘ろうとしたら弘子が「後ろが狭くなっちゃうから結衣あんたは助手席に座りな」って言うてくれた。

だから、ひろくんの助手席に乗ることが出来た。由美が何か言うかになって思ったけどひろくんの車に乗っただけで舞い上がっているように助かった。

ひろくんは学園長から受け取ったメモを見ながら行き先をナビにセツトしてから、「出発します」って車を出した。

行き先は”コウノ・ジュン デザインスクール”って所だそうだ。ひろくんは大きなビルの地下駐車場に車を止める。全員が降りて地下のエレベーターで受付のある階を押す。

ひろくんが受付で「すみません。白鳥学園の葵 ひろき です。校長にお会いしたいのですが。」って告げる。

すると、受付の綺麗なお姉さんが「お待ちしておりました。横のエレベーターで15階へ行ってください。上には連絡しておきます。」ってすこし頭を下げた。

ひろくんは「ありがとう」って頭を下げてエレベーターに向かう。ひろくんが受付から離れると、受付嬢の二人が顔を見合わせて小声で「かっこいい先生だね」言うのが聞こえた。

15階でエレベーターの扉が開くと、ばっちりミニスカートのスーツを着こなしている秘書さんと思われる人が迎えてくれた。

エレベーターを降りると、彼女さんが「白鳥学園の皆様お待ちしておりました。私、秘書をしております」桜井 美幸”です。校長がお待ちしております。お部屋に案内いたします」って私たちを部屋に案内した。

部屋に案内され中に入ると、いすに座っていた女の人が立ち上がり「ようこそ、お待ちしております」って挨拶をしてきた。

ひろくんは「お世話になります」って頭を下げ、そして私たちを紹介する。「彼女たちが、代表です。右から白鳥 弘子・葵 結衣・佐藤 由美 です」って告げた。

私たちは「お世話になります。よろしくお願いします」って挨拶した。女の人は微笑みながら「学園長からお話しは聞いております。私は校長をしております」河野 純”といいます。」って自己紹介された。

さらに、「弘子さんに結衣さんに由美さんね。貴女達にはデザイン選びもお願いしますね」って言った。そして私をじっと見て「結衣さん貴女眼鏡をはずしてくれる」ってお願いされた。

私は、わけが判らず「はあ？」って言いながらも、眼鏡をはずした。すると河野さんが「思ったとおり・・・貴女」白鳥 葵さんですね」って言った。

すると、由美が「やっぱり・・・あの噂は本当だったんだ」って私を見ながら話した。弘子とひろくんは苦笑し、私は恥ずかしくな

り下を向いた。

河野さんは「余計なことを言っちゃったかな」ってすこしすまなさそうな顔をした。

そして本題に入る。河野さんがデザイン画を並べて「この中から、一人ずつ一点を選んでね」って机の上に二十枚以上はあると思われるデザインを並べた。

私たちは、デザイン画を見て「「すごい。この中から選ぶのですよね」「ってハモって言った。

河野さんは「自分で着たいって思うものか、それとも友達に似合うものかを選ぶといいと思うよ」ってアドバイスをくれた。

私たちは、目移りしながらデザインを選んでゆく。私はシンプルなデザインの三点をまず選択した。弘子は派手なデザイン二枚と普通のものを一点選んだ。

由美は豪華絢爛きらびやかな物を三点選んだ。弘子と由美の一点はかぶっていたので、まず八点に絞り込んだ。

そして、由美が弘子とかぶっていたデザインを私に見せて「結衣はこの衣装ね。かわいいでしょう」って言った。弘子も賛同し苦笑する私をしりめにまず一点が決定した。

弘子が自分で選んだ普通のデザインと私が選んだデザインを比べて、私が選んだシンプルなものを選び「私これにするわ」って言うのと、私が「えーそれは私が着ようと思っていたのに」って告げると・・・。

弘子と由美が「「あんたは、”これ”」」って最初に選んだデザイン画を見せた。

私が「それなの〜」って言うと、弘子が「結衣が着るものは、私が選ぶの！　だって薫に頼まれたんだもの」って強く言った。

さらに「結衣が私たちを巻き込んだでしょう」って言われ・・・。
私は・・・シユンとした。

さらに追い討ちをかける様に、河野さんが「そのデザインは葵さんに似合っているわよ」って言われてしまった。

残り一点は選んだ二枚の中間ぐらいのデザインを選んで、三点のデザインを選んで河野さんに渡した。

河野さんは選んだデザインを見て「貴女たち、いいセンスをしているね。特に佐藤さん、貴女って私のデザインの事務所に来る？」って言われ、由美のテンションが最高潮になった。

由美が「良いんですか・・・私って実はコスプレイヤーなんです。結構自分で作品を作っているんですけど」って言う。

河野さんが「佐藤さん、一度その衣装を着た写真を見せてもらえないかな」って話が盛り上がって行った。

私と弘子は顔を見合わせて「由美ってコスプレするんだ・・・」ってビックリした。

デザインが決定したのでお礼を言って帰ろうとすると。

河野さんが「貴女たち採寸してから帰ってね。場所は10階で行うから」桂木” って子を尋ねてください。そして仮縫いは三日後です同じ時間をお願いします。」って言われた。

私たちは「はい。わかりました。よろしくお願いします」って部屋を後にした。そして採寸してから帰路に着いた。

とんでもない文化祭!! (準備編2／2) (前書き)

あけまして おめでとうございます

とんでもない文化祭!! (準備編2/2)

とんでもない文化祭!! (準備編2/2)

今、私たちは杉本先生の車でコウノ・ジュン デザインスクールに向かっている。

今日は仮縫いの日なの。なぜ、ひろくんじゃないかって言うと、ひろくんは例の事務所に行っているので今日は変わりに杉本先生が送り迎えをしてくれる。

しかも車はワゴンタイプで大勢が乗れるのでおまけが着いて来た。

おまけって言うのは前回来る予定だった薫と澤田君が同行しているんだ。しかも澤田君は自前のカメラを持参している。

私たちの衣装の写真を撮るためだって言って本格一眼レフのデジタルカメラを持参してきた。

スクールに着いて受付で話をするとう10階に行くように言われ全員でエレベーターに乗って10Fのボタンを押した。

10階に着くと前回採寸してくれた桂木さんが私たちを待っていてくれた。

「こんにちは」って挨拶する。桂木さんは「白鳥学園の皆さんですねお待ちしておりました」って答えてくれた。そして私たち三人を仮縫いの部屋に案内してくれた。

部屋に入ると9人の仮縫いスタッフの皆さんが私たちを待っていてくれた。一人に付き三人が対応してくれるらしい。

私には一之瀬さん・林さん・吉川さんが担当してくれる。一之瀬さんがチーフだそうで後はお針子担当の林さんと練習生の吉川さんがやってくれるんだって。

私はゴスロリ調のメイド服でフリルが一杯使ってあってしかも結構スカート丈は短い。

私たちは制服を脱いで下着姿になるとブルマタイプのフリルパンツをはかされその上に衣装を着る。

レースの重ね着衣装を着てからさらにデザイン画に合わせて色とりどりのレースのパーツを着けて服は完成を見る。後は装飾パーツでフリルのカチューシャやガーター式網タイツなどを履いてやっと完成する。

私が一番色々な装飾があるので最後になってしまった。当然一番シンプルな弘子が一番で時間が余ったようで薫も着ているようだった。

薫の衣装は弘子と由美の中間ぐらいの衣装にしていた。

仮縫いが完成すると、男性陣が入ってきて品評する。澤田君が「一番似合っているのはやっぱり葵ちゃんだね。ねえ先生」って杉本先生に同意を求める。

さすがに先生は「どれも甲乙つけがたいね。でも・・・一番は葵君かな」って・・・結局私がターゲットになってしまった。

澤田君が「すみません。皆に見せるために写真を撮りたいのですが」
って桂木さんをお願いをした。

桂木さんは「もちろんその為の場所を確保してあります。このビルの12階に写真用のスタジオが在ります。そして、そちらにカメラマンが待機しておりますので、そちらにまいりましょう」って言うて移動するように言うてきた。

私たちは本格的なスタジオで写真を撮るようなのでビックリしてしまった。

澤田君がカメラを見せ「そこで、私も撮影しても宜しいのでしょうか」って尋ねた。

桂木さんは「一度カメラマンに聞いて見ますが多分よいと思いますよ」って言うてくれた。

12階に着くとスタジオが有りA・B・Cの各スタジオがあるらしく扉に書いてあった。

私たちはCスタジオに案内された。桂木さんが「ここは小規模の個人撮影に使用するところです。」って扉を開けた。

中には髪の長い綺麗なお姉さんがカメラの調整をしていてスタッフと思わしき若い男の人が舞台をセットしていた。

桂木さんがお姉さんに声を掛ける「中森さん。モデルを連れてきました」って告げる。

お姉さんが顔を上げて私たちを見て「待ってましたよ。今日は、かわいこちゃんばかりだね」って笑っていった。

澤田君が桂木さんに一言を言うと、桂木さんが澤田君を指し「この子も写真を撮りたいっていつてるけど良いかな？」って尋ねてくれた。

中森さんは澤田君のカメラを見て「最近の子はいいカメラを持っているね。まあ私の撮影する間で撮りなさい」って言うてくれた。

澤田君は「ありがとうございます。でもこのカメラは親父の物を借りてきたんです。私の個人のものではないです。」ってつげ、さらに「貴女は新進の女性専用の写真家の中森 順子さんではありませんか」って尋ねた。

中森さんは「そんなたいそな名目はないけどその通りよ」って教えてくれた。

澤田君は「親父が大変良い目をしてるって言うてました」って言ううと、中森さんが澤田君の顔を見て。

「貴方って、山岳写真家の澤田 緒啓さんの息子さん？」って言ううと、澤田君が「親父を知ってるんです？」って話が弾む。

中森さんが「貴方お父さんに良く似てるわね。でもなにいつてるんです。私より貴方のお父様の方が有名よ」って告げた。

私たち女性陣は「「えゝ澤田君のお父さんって有名な写真家なんだ」ってびっくりした。」

中森さんが「貴方なら一緒に撮りましょうか」ってスタッフに「シンクロ持ってきて」って小さな箱を澤田君に手渡して「これをカメラにセットして」って言った。

澤田君が自分の持ってきたカメラにセットしてシャッターを数回切るとシャッターに連動してスタジオのフラッシュが同期して光った。

中森さんが「澤田君、結構慣れてるね」って告げると、澤田君が「土日に親父が居ないときにはお袋のスタジオの手伝いさせられていますので・・・。」って苦笑いした。

そして中森さんが「始めましょうか。一番手は慣れている葵ちゃんかな。」って私が呼ばれた。

とりあえずモデルの経験がある私が一番手に撮影することでその場に慣れてもらうのが目的らしい。

セットの前に立つと、中森さんが「葵ちゃん。視線をカメラにすこし微笑んで」って言われた。

私は、以前の撮影を思い出しポーズを採った。中森さんは「さすがに、慣れてるね。やっぱモデルやってるとポーズがいいよ」って褒めてくれる。

私は、「そんなことはありませんよ」って、恥ずかしくすこし赤くなかった。

バシャ・バシャ・バシャ 結構枚数を取ると「次は澤田君ね」ってカメラマンが変わった。

澤田君もプロみたいになっちゃッターを切って行った。

ある程度写したところで、又中森さんに交代し「佐藤さん葵さんの横に並んで」って今度は二人での撮影になった。

ある程度二人で撮ると、私はセットから離れて由美ちゃんだけで撮影が進む。どうも慣れない三人を慣れさせる為に私を絡めて撮影するようなのだ。

もちろん弘子や薫のときも同様に行われて、当然私の出番が多くなつた。最後に四人で撮影し終了した。

全員でお礼を言うと、中森さんが「澤田君。貴方のデーターをコピーさせてくれないかな」って言ってきた。

澤田君は「俺の？・・・たいした事ないですよ。でも別にいいですよ」って、カメラのメモリーカードを渡した。

中森さんは「ちょっと待ってね」って部屋の隅にあるパソコンでデーターをコピーした。

その際にちらり見したようで「結構良いのがあるみたいよ。やっぱりセンスがいいね。」ってメモリーカードを返してくれた。

そして「編集したデーターは学園長のほうに送るから」って言って手を振って隣の部屋に入ってしまった。

私たちは着替えた部屋に戻り、衣装を制服に着替えて皆さんにお礼を言って岐路に着いた。

実は着替える際にお針子さんたちが、私に色紙を渡しサインをねだって来たので私は苦笑しながらサインした。

次の日にはもうデーターが届いていて皆で見ながら各自が着る服を選んでそれぞれの衣装の数を先方に連絡した。

一番人気があったのは結衣の衣装なんだけど。いざ自分が着るって思うと二の足を踏むようで・・・。

由美の衣装が一番人気があった。次は弘子で最後は私のだった。でもクラスの中の三人は私と同じ衣装を着てくれることになった。

衣装が決まって、意識が上がり全員が一丸になって文化祭に進んだ。

文化祭（二日目）

文化祭（二日目）

今日は土曜日。文化祭の一日目が始まる。もちろん一日目は学園関係者だけで行うことになっている。

この日の結果で次の日曜の一般公開に向けて備える計画を練り直すことをするんだ。

流行っていないクラスは修正を施して、次の日に備えて、流行っているクラスは商品の補充やお客さんの流れをスムーズにするように工夫を凝らす。

もちろん私たちのクラスも同様にするんだ。店が終わった後に全員で対策を考えるために反省会を行うんだけど・・・。

私たちは朝早くから準備を整える。男子生徒は女子生徒よりかなり早く登校して教室の擬装を行うんだ。でも中には女子の一部は早めに着て手伝いをする。

私たちは女子は男子が準備してくれた隣の教室でメイド服に着替えをする事になっているんだ。

もちろん窓には遮光カーテンを施し、入り口のドアは二重にして着替えを見られないようにしてある。

教室の中にはハンガー掛けが用意しており、そのハンガーには全員

分の衣装が掛けてある。

現在は前半の部の人でゴった返している。でも衣装を製作したスクールの練習生の人を手伝いをしてくれるので凄く助かる。

練習生の人は、ほとんどの人が私たちのお姉さんぐらいの年齢で、皆、和気藹々と和みながら着替えをしている。

でも私だけは、なぜか仮縫いした一之瀬さん・林さん・吉川さんが専属で着替えを手伝ってくれる・・・っていうか、私はほとんど立っているだけ状態だけだった。

着替えた順に隣の喫茶店に擬装した教室へと帰ってゆくと、教室に戻ると男子生徒から感激の声が上がる。

実行委員の澤田君が「こら！お前ら早く準備をしないか」って怒る。

裏方担当の男子生徒は「ちえ」って舌打ちしながら裏方の準備に戻っていった。

学園長が見守る中、白鳥学園の文化祭が始まる。やはり一番人気は私たち二年A組のコスプレ喫茶が集客が多いって言うか・・・多すぎる。

教室の前の廊下がお客さんでゴった返している。収拾が付きそうもない。学園長さんが頭を抱えてしまった。

今回、私は裏方は免除？になっているって言うか、料理を作るのはやらしてもらえないんだ。

皆に「貴女はは喫茶の看板娘だから出ずっぱりで宜しくね」って言われてしまい。私は前後半とも全部店に出ずっぱりとなってしまった。

「あーん、どこへもいけないよーん」って心で泣いた。「休憩時間に抜け出して絶対遊びに行つてやるんだ」ってもちろん心で誓った。

さらに今回の男性陣は料理上手が多く裏方は充実した状態で料理の不得意者が人員整理に当たるように配置した。

でも今回は人員整理が追いつかず、先生に相談して昼の少し前から余裕のある運動部からのある程度の応援者をお願いして、何とか整理が付く状態になった。

もちろん運動部の人たちが人員整理の応援者を決めるのに熾烈な争いをしていたのは私の知るところではなかった。

でも大きな騒ぎはなかったのは、柔道部からに助っ人の用心棒さん二人がにらみを効かしてもらったおかげの様だった。

次の日も来てくれるらしい。しかも今日は無理らしいが明日の公開日はひろくんもほぼ一日中張り付いてくれるんだそうだ。

一日目なのに、あまりにも大勢の人が押し寄せたので、食材から写真用紙まで次の日の分まで食い込んでしまった。

慌てて明日の分の追加の手配しなければならなくて、実行委員の澤田君はてんやわんやになってしまった。

しかも彼は写真係りもやっていたので、慌てて明日の応援を頼んで

いた写真部に急遽応援を依頼して急場をしのいだ。

メイド喫茶の内容は・・・。

まず廊下の長蛇の列に並んで順番を待つ、出口から人が出て行くとその分だけ入店が出来る。

店に入ると空いているメイドさんにせりふを言われる「お帰りなさい。ご主人様」って席に案内される。

メニューには飲み物と食べ物がありそれを注文してから好きな衣装を着たメイドさんと一緒に写真を撮ることができる。

もちろん個人を指名することは出来ない事にしてあるんだ。でないと特定の人に集中する恐れがあるので、ひいきができてすこししか選ばれない人が可愛そうだ。

その後飲食した後でプリントした写真を受け取って店を出る。これが一連の流れなのだけど、もちろん私が着ている衣装の人氣が一番高いので長蛇の列になる。

私と同じ衣装を着た沙織なんかは写されるのが好きみたいで「私が、思った通りなのだよ。ラッキー」って喜んでいたけど。もう一人の佑香は逆でため息ばかり付いていた。

私たちの列が長すぎるのか、あきらめて他の衣装に変更する人もかなり発生した。

私は午前一回午後二回の休憩を取らしてもらった。お昼の休憩で制服に着替えて、こそつと抜けでしてよそのクラスを覗こうとしたら、

私の周りに大勢が集まり身動きができなくなってしまった。もちろん澤田君に怒られたのは言うまでもない。

今回の衣装はすばらしい出来で、しかもどの衣装も評判が良く、どの衣装着た子も皆引っ張りだこで、ごった返した写真撮影となちやた。特に私なんかは接待がほとんど出来ず、大半を写真撮影に費やす事になってしまった。

その為一日目が終了後。通常はクラス内だけで行う対策会議を、学園長やお手伝いしてくれた運動部などを交えた、緊急対策会を開いて、明日の一般公開の対策を練る事になってしまった。

澤田君が説明に「今日一日だけの来客は私の想定の3倍ぐらい来てしまいました。明日はどれぐらいの集客なのか予想がつきません。」ってうな垂れた。

人員整理をしていた、横屋君が「現状では明日はたぶんお客さんの整理は不可能に近いと思います」って追い討ち話をする。

悩んでいた学園長が「場所を変更して体育館を使いましょう。ここならばかなりの集客が可能のはずです」って提案してくれた。

澤田君は「場所は良いですが・・・配置や擬装が難しく飾り付けのパーツや人員も足りなく思います」って悩みを告げる。

少しの沈黙の後、演劇部の部長さんが「飾り付けのパーツやパーティーションは私たちが供給しましょう。学園長、学園の備品も供給お願いします。人員は運動部さんでお願いするのが良いのでは？」って提案してくれた。

運動部の人たちも「その案に賛成だね。時間がないからすぐに取り掛かろう。」って腰を上げた。

学園長が笑いながら「その案で行きましょう。園もバックアップします。」って学園長のGOサインで、拍手が起きる。

実行委員の澤田君が「皆さん。よろしくお願いします。」って頭を下げた。私たち女子生徒の大半はほとんど規模が大きくなる事でビツクリし声が出ない。

弘子と薫が私を肘で突いて小声で「さすがに、白鳥 葵ちゃん効果だね」って冷やかす。私は苦笑するしかなかった。

学園長の「では、皆さん明日の公開に向けて頑張ってください」って会を締めくくった。

総動員で体育館をメイド喫茶にする様に作業を進めた。特に男子生徒の働きが凄いい、後で御褒美があるらしい。

いつの間にか学年を超えて一杯人が集まり、夜遅くまで準備を行い。何とか体裁を整えることができた。

もちろん帰りはひろくんに送ってもらって帰った。途中の夕食をファミレスで取る、奥さんなのにこの所夕食が作れなくて申し訳ない。

でも、ひろくんに励まされて明日も頑張ろうと気合が入った。

危険な計画

危険な計画（里美編）

私は偶然に以前に結衣の事をお願いしたことのある山田君に出合った。

先生を追ってからのマンションでの帰りだった。最近は私の味方や子分も減ってきて、中々結衣と先生の中が探れない。

切羽詰ったところに偶然にナンパしてきたのが彼だった。彼の噂は聞いていたが、背に腹は帰られない。

最後の望みを彼に託すことにして、去ってゆく彼に声を掛けた。

怪訝な顔をして振り向いた彼に「お願いがあるの。」って微笑みかけた。

彼は「お前の話はろくな事がないからな」って又去ろうとする彼の腕を掴んで「見返りは私だから・・・」って告げる。

彼は私の体を舐める様に見て「じゃ行くか」ってホテル街に向かって歩いた行った。私は意を決して彼の後を付いて行った。

ベットの上で彼と話をすると・・・彼は先生に多少の恨みがあるようだが結衣には興味があるようだった。

私にとって実に丁度都合がよいみたいだ。彼をけしかけて何とかしよう。すると・・・。

彼はなんと誘拐計画を立て、すぐ実行を行うように、自分の組の自分に電話を掛けて命令した。

私は事が大事になってゆく中で「結衣には先生を絶対渡せない」って心に強く思った。

しかし、彼の子分が動いた途端に何人かが捕まってしまった。彼曰く「どうも、飯沼組が俺たちを見張っているようだ」って困った顔をした。

彼は、「飯沼の野郎はいつも俺たちのすることを邪魔をする。」って半分切れかけて飲みかけのグラスを床に叩き付けた。

私は、結衣が陸上の選手に選ばれたことを彼に告げると。彼女の状態を探るのにもっと慎重に行動を探るように子分に伝えた。

結衣が陸上会の補欠選手に選ばれたので夜遅く帰るようになったので。

これがチャンスと誘拐しようとした所に、またまた後を付けられていた飯沼組の人にまたも捕まり最終的には警察に突き出されて逮捕され、さらに人数が減ってしまった。

彼は「飯沼のやつら絶対に結衣と何かあるはず」ってあごに手をやって思考した。

私も、結衣の行動を探るたびに邪魔が入る状態に、結衣はどんな人脈があるのかが訳がわからない状態になってしまった。

彼の子分が捕まったときは、結衣の情報を流した私にも何らかの事が来るのかとビクビクしたが、彼が守ってくれたようだ。

でも、最近学園での私は、かなり浮いてきてしまい。居場所が少く無くなってしまった。先生が私から遠ざかる・・・。

彼も子分の逮捕でかなりカリカリしている。組も壊滅状態に近い・・・。

私たちは文化祭に的を絞り。結衣を陥れるべく最後の計画を立てた。

文化祭（二日目）

文化祭（二日目）

文化祭が二日目の朝を迎える。今日は学園が一般にも公開されるんだ。今年は例年に比べ一般客が非常に多いと思う。

初日は学園内だけど廊下に整理する人が必要だったけど、外部に開放になる2日目はどうなるのか想像もつかない。まあこれは澤田君の受け売りなんだけど……。

去年のこともあり。門にはプロの警備員を配置するそうだけど、構内には入れないどうするんだろう？

私はいつもより早めにマンションを出ることにした。エレベーターを降りたところで、以前に交通事故での骨折事件があった西川さんと江口さんに出会った。

私は「おはようございます。」って頭を下げる。西川さんが「おはようございます。」ってニコって笑う。そして江口さんが「おーっす」って右手をすこし上げた。

西川さんが「あれれ。葵ちゃん今日は制服なんて着て？学校は休みじゃないの？」って問いかけた。

私は「学園で文化祭があるんです。もし暇があったら遊びに来てください。」っていうと。

江口さんが「どこの学校？」って聞いてきたので、私は「白鳥学園

です。今日は一般公開します。時間は10時からですので……」
って言った。

江口さんは怪訝な顔をして西川さんの耳元で何か言っていた。すると西川さんが私に「葵ちゃんは何をやるのかな。」って聞いてきた。
私は「メイド喫茶です」って言って赤くなって下を向いた。西川さんは「結衣ちゃんは、さぞかし可愛いメイドさんになるんだね。誘惑や危険が一杯あるようだから、気をつける様に」って言うてくれた。

私は可愛いメイドさんに反応してぽっと赤くなって後の言葉の、誘惑?・・・危険?・・・文化祭をやるだけなのに何で?疑問のまま「はい。気をつけます。」って返事をして分かれた。

学園に着くと薫と弘子が「よ!。主役の登場ですね。」ってからかった。私は、苦笑いしつつ「うんもう、そんな事言って・・・おはよう」って返した。

そして弘子に手を引っ張られ、薫には後ろから押されて、ステージが代わった為に私たちは変更会場の体育館へと向かった。

体育館に入ると「あ・・・凄い。」って思わず声を上げた。もう移設が終わっていて、しかもエリアが拡大されている。

中に入ると最終準備をした人たちが一斉にこちらを振り向き、女子は「結衣!おはよう」男子は「主役のお出ましだよ」って皆が私に手を振った。

わー恥ずかしい。穴があったら入りたい気分で真っ赤になっていく

のが判る……。私は頭を下げて挨拶をした「皆さんおはようございます。」

そんな私を弘子と薫が背中を押して更衣室まで運んでくれた。ドアをノックして入ると、一之瀬さん・林さん・吉川さんが私を手薬煉を引いて待っていて、私は手を引っ張られて奥につれていかれた。

奥に行くとなんと桂木さんも居てくれてビックリして、慌てて挨拶をした。桂木さんは「凄いことになっているみたいね。だから私が手伝いをお願いされたのよ。」って軽く笑っていた。

私が「すみません」って謝ると。桂木さんが「そうね、貴女が一番の原因だもんね。」って苦笑しまくりだった。

そして次々に入ってくる彼女たちをテキパキと指示して着替えを進めていた。私がボーとしていると一之瀬さん・林さん・吉川さんが私をあつという間に制服を脱がされて着替えに入った。

数分後一之瀬さんの「はい。できあがり。」の言葉で自分が着替え終わったのを認識した。そして「今日は昼の休憩もこの衣装でね」って言われてしまった。

しまった昨日抜け出したことで大変だったことで念を押されたようで「へへへ」って苦笑して「今日は抜け出しません」って言った。

更衣室を出ると、ひろくんと学園長がなにやら話をしていた。私が出てきたことを学園長が見つけると、こちらに近づいて「貴女。葵結衣さんですわね。今日は大変でけどがんばってくださいね。」って言われた。

私は「がんばります」って返事をした。

その時、澤田君が現れて「葵さん。カメラテストするから、その撮影場所に来てくれないかな」って言ったので、私は「うん。いいよ。」って場所に向かう。

撮影場所に来ると、澤田君がひろくんに「先生。すみませんが彼女の横と一緒にテストをお願いできませんか？」って言ってきた。

ひろくんは「俺なんかでいいかな？」なんて言いながら、私の横で撮影に応じるように並んだ。私は思わず「ラッキー」って心で思ってた笑顔が出た。

澤田君が「葵さん。いい笑顔だね。先生じゃー寄り添って」って言いながらテスト撮影を始めた。もちろん、ひろくんは私の肩に手を置いて撮影に応じた。

すると、写真部の人たちが集まってきて「俺たちも彼女でテストをさせてよ」って私たちを写そうとすると、周りにいた女の子たちが「結衣だけずるい。私たちも撮ってよ」ってポーズをとり始めた。

澤田君が写真部の人たちに「悪いけど彼女たちを撮ってあげて」って言ったので、しぶしぶ彼女たちでテスト撮影をし始めた。

よく見ると絵美が彼氏（岩田君）と一緒に寄り添って撮影をしていた。澤田君がテストを終わると、横から稲波さんが「おい。澤田君。俺と葵さんとの撮ってくれよ」って言ってきた。

澤田君は私に「いいかな？」って聞いてきたので、私は「いいですよ」って答えたら、稲波さんが私の横に来た。澤田君は「では撮り

ます」って数回シャッターを切った。

すると他にも人が現れて「俺も一緒に撮ってくれよ」って言うだけけど、澤田君は「テストはお終い」って言って、私を撮影場所からはずしてくれた。

横に居た学園長さんが「貴女って人気があるのね」って言われてしまったので、私はポット赤くなってしまった。

テスト撮影が終わると、澤田君が「皆！！そろそろ始まりの時間だから配置について」って皆に言った。皆は「はい」って言いながら配置へと向かった。

学園長さんが「皆さん。がんばってください。」って声を掛け園長室へ戻っていった。

そして時間も10時となり文化祭二日目スタートする。

実に学園始まって以来の出来事が……。それは開門前に一般の長蛇の列が出来たって事だった。開門と同時に一杯の人が入ってくる。

もちろん目当ては二年A組のメイド喫茶で一番の目当ては私らしい。30分も経つと体育館の中の待合の列は一杯になってしまった。

昨日のうちにあっちこっちに声を掛けて整理をお願いして人たちも必死で列を乱さないように頑張ってくれている。

もちろん私たちメイド要員は店舗が広くなったので初めから全員出勤で事に凶る。入り口で「お帰りなさい。ご主人様。」って声が絶え間なく続く。

2ショット写真の指名が一番多い私たちの衣装は撮影で手一杯で店舗を手伝うことも出来ない。

集客の決め手は。コウノデザインスクールの衣装の出来とファッション雑誌ジュジュのメインモデルの私らしい。目も回る忙しさなので結構疲労が溜まる。

さらに皆は一時間ごとに5〜10分の休憩をもらえるんだけど、私はお昼の40分と午後の一回の5分の休憩しかもらえないらしい。「あ〜ん。ひろくん助けて・・・。」って心の中で叫ぶ私だった。

私たちの文化祭は一般の人を入れるから、通常は学園の周りの人たちと交流会がある学校ぐらいがせいぜいなのを、今回はそれに加えて結構遠くの知らない学校の人たちや、なんと学園始まって以来のテレビロケでの内部の撮影があるらしい。（以前に一度だけ学園前で文化祭での催しのテレビロケがあったらしい）

忙しくて、いつの間にか私の昼の休憩時間になった。皆はいったん着替えて食事の後で学園内を回ることが出来るんだけど・・・。

私は昨日の事件で澤田君からきつくお叱りを受け外出を許可されなかった。休憩用のスタッフルームにはいると、思わず笑みがこぼれた。「先生も休憩ですか？」なんと、ひろくんがいた。

ひろくんは私が入ってくると、手を上げて「ここが空いているよ」って、ひろくんの隣を示した。私は「はい」って答えて、ひろくんの隣に座った。

ひろくんの前には他のクラスからの差し入れが一杯並んでいる。澤

田君が顔を出し「葵ちゃん。悪いけど休憩時間をすこし短くしてくれないか」って言われる。

私は思わず頬を膨らまして「えゝ私だけ？」って拗ねる……。澤田君はそんな私がわかってるかのように「いいや。メイドさんはおろか全スタッフの休憩時間の短縮をお願いしているんだ」って苦笑した。

そして私の前に「はい。スペシャルランチ」ってカルボナーラスパゲティーが置かれた。さらに「これは葵ちゃんの為に渡辺さん（親友の薫）に特別にお願いして作ってもらったんだ」って言った。

私は「うん・もう・・・」あきらめの顔をする。澤田君がさらに「学園NO，1の先生にもお相手をお願いしたんだよ」って、澤田君は「葵ちゃんの執事役をお願いします」ってひろくんに告げた。

ひろくんも調子に乗って「まかせておけ」って言って、自分の前の差し入れを示して「お嬢様どれからお召し上がりします」って微笑みながら告げた。

私は、苦笑し休憩中のスタッフからは笑いが出た。「結衣。よかったね先生が執事役なんて」ってからかった。

ひろくんが耳元で「甘えていいよ」って囁いた。私は開き直って、ひろくんにカルボナーラを食べようと「スプーンとフォーク」って命令した。

ひろくんは「はいお嬢様」ってスプーンとフォークを渡してくれると、皆から冷やかしが出た。そんな中、私は赤くなりながら食事を進めた。

昼食が終わり早めに戻ると弘子が「遅い」って笑ってからかう。又大忙しの撮影が始まった。

そして私の午後の休憩をとる時間に事件が起こった。

帽子にサングラスのお客さんが突然メイドさんを突き飛ばす。男性スタッフが倒れたメイドさんに駆け寄り「お客様」って言うと、突然にお客さんが私を見て「葵 結衣だな。てめいのおかげで!!」って言いながら光るものを持って私に突進してきた。

私は光るものを見た瞬間慌ててあとづさるが、すぐ後ろの壁に当たり思わす固まる。そして「やゝ」って声を出し思わず目をつぶる。

周りから「キャー」って悲鳴が聞こえる。恐る恐る目を開けると絵美の彼氏の岩田さんが倒れており腹部にはなんとナイフが刺さっていて周りには血がにじみ出ている。

なんと岩田君が私をかばってくれたようだ。刺した張本人はビビってナイフから手を離し逃げ出した。そこに稲波さんが駆けつけて犯人を投げ飛ばす。

丁度出口付近にいた、ひろくんも駆けつけて犯人を取り押さえる。さらに携帯を取り出して119に電話を入れる。「こちら白鳥学園です。救急車をお願いします」って告げた。

絵美が泣きながら駆けつける。澤田君が慌ててナイフを抜こうとすると、ひろくんが「抜いちゃいかん!!」って制止する。慌ててナイフから手を離す澤田君……。

岩田君が絵美に「葵ちゃんは？」って聞くと、絵美は彼の手を握り「無事だよ」って告げると、彼はすこし微笑んで意識を失う。

しばらくして救急車が駆けつけて岩田君が運ばれて行き、絵美が同乗して病院に行った。

犯人は稲波さんによって連行されていた。呆然とする私を、ひろくんが私の腰に手を回しスタッフルームまで連れて行ってくれた。

澤田君が事の収集に当たる。

とんでもない文化祭になっちゃった・・・・・・・・。。

文化祭（その後）

文化祭（その後）

呆然とした私の肩を抱きながらスタッフルームまで連れてきてくれた。ひろくんは「結衣。大丈夫か？」って聞いてきた。私はしばらく何も答えることができずただ呆然とするばかりだった。

そしてはっと気づき「彼は？・・・絵美の彼は？」って言いながら、ひろくんの胸の中に泣き崩れた。「うううう・・・」。

私はかすり傷一つ負っていない。絵美の彼氏がかばってくれたんだ・・・。彼のお腹に刺さったナイフから赤い血がにじんでくるのを思い出し又ひろくんの胸にしがみついて泣き崩れた。

ひろくんは私の頭をなでて「大丈夫。彼は必ず助かる。」って言って私を抱きしめてくれた。

遠くでサイレンのことが聞こえた・・・・・・・・。。

一方。体育館の会場では・・・。

澤田君がひろくんの指示により、岩田君の倒れていた場所を確保するように、周りに衝立を追加して現状を確保した。

学園長が慌てて現場に駆けつけて指示に当たると、騒然としていた会場にも静かさが戻る。

学園長は各責任者に「文化祭はただいまをもって中止いたします。」って伝えた。そして出入り口に居るガードマンに指示してお客さんを学園外へ出ないよう指示をした。

救急車が去った後、今度は警察官が到着した。稲波君が犯人を警察官に引き渡す。思わず警察官が「お前は・・・山田組の若じゃないかこんな所に居たのか」って手錠を掛けて連行されていった。

さらに刑事さんが現れて、学園長に事の事情を聞く。私の所にも女の刑事さんが尋ねてきたが、泣き崩れている私を見て困った顔をすると、ひろくんが「申し訳有りませんが後日にお願いします」って告げた。

刑事さんは「わかりました」って答え、頭を下げて返っていった。

園長室では、刑事さんが稲波さんや澤田君に事情説明を聞いていた。外ではお客さんの身分確認を行っている。夜になる前に学園内に潜んでいて山田組の子分が3名ほど見つかり逮捕された。

救急車で運ばれている中では絵美が意識がない岩田君の手を握り「直樹君・・・」って大粒の涙を流す。

病院に着いて彼がストレッチャーで運ばれている間もちろん手を離すことはなかった。救急の医師や看護師達は、最初は由美の衣装にびっくりしたが（この時結衣と同じタイプのメイド服を着ていた）すぐに気を取り直し診察室へと運んで行った。

部屋に入るときに、看護師さんの杉崎さんが絵美の肩を支えて「こ

こは任せて頂戴。貴女は彼の無事を祈ってね。でも今日は長寫先生が当直だから大丈夫よ」って彼女を待合室に連れて行く。（長寫先生は外科ではNO，1の腕らしい）

そして彼女の衣装のどす黒い赤色を見てはっとするが「あなたの名前は」って聞く。絵美は「後藤 絵美です」って小さく答える。

看護師さんは「私は 杉崎 真弓って言うの、さっきの人は、彼氏？ かつこいいわね・・・彼の名前は」って言う。絵美は小さな声で「岩田 直樹君」って絵美の頬が少し赤みを帯びた。

手術中のランプが点灯している中、少しずつ杉崎さんが緊張を解いてくれる。文化祭の内容や彼との出会いなどを話し少しは落ち着いてきた。

でも・・・手術時間が結構長い、もう三時間以上掛かっているようなのです。

「後藤さん」って呼ばれる・・・あ・・・澤田君達だ。澤田君に学園長さらに結衣や葵先生まで来てくれた。

学園長が看護師さんに「お世話になります。彼は安否は・・・」て尋ねた。彼女は「救急担当の杉崎です。今担当している先生は当医院のNO，1の腕です。安心して任せてください」っていった。

しばらくすると、手術中のランプが消灯する。中から手術着を着た男の人が現れた。

その人が開口一番「おや？ここはメイド喫茶かな？」って言う。杉崎さんが「長寫先生！」って睨む。

長瀧先生が「真弓ちゃん損な顔をして睨まない。」って笑いながら「手術は無事成功しました。ナイフがかなり危険なところに刺さっていました。刺さったまま搬送した為大きく出血することを防いだようです。」って告げると。

全員がホット安堵の顔をする。先生が続けて話す「でも何方かですか。ナイフを抜かないように指示した方は？良い判断でしたな」って言う。

おもわず澤田君が葵先生の方を見ると、葵先生が少し苦笑いする。

岩田君が運ばれてきてさらにICUに運ばれる。絵美が慌てて後を追う。

先生が「多少出血が多かったのでは。意識がないですが数日もすれば意識は戻るでしょう」って言った後、去った行った。

全員でICUに向かうと、岩田君の両親も駆けつけてきた。学園長が両親に「このたびは、ご子息に傷害事件が起きまして、私の監督不行き届きでした。申し訳ありません」って言って、深々と頭を下げる。

岩田君の両親は無言で頭を下げた。そして澤田君が事情を岩田君の両親に説明する。

医師に説明をもう受けている両親はICU内でメイドの服を着て手を握っている絵美を見つけて「後藤さん。息子に付き添ってくれてそうね、ありがとう。後は直樹が目覚めるのを待つだけだから、迷惑かけるから帰っていわよ」って言うってくれるが、絵美は「彼が目

覚めるまでここに居ます」って涙で目を腫らした状態で両親に訴えた。

両親は二人で顔を見合わせ、困った顔をする。ひろくんが「彼女に任せてやってください」って両親を説得すると、私も澤田君も同調した。

両親は夫婦で相談してお母さんが「貴方は会社があるから帰ってください。私と後藤さんで見守ります」って告げた。

皆で打ち合わせをして、二人を残して帰宅することにした。

私とひろくんは絵美の自宅によって彼女が彼と一緒に病院で泊まる話をして、絵美の着替えを持って病院へと引き返した。

絵美の両親は彼と結構深く付き合っていることを知っているらしくスムーズに泊まりの許可が出た。

病院に居る絵美に着替えを渡すと「結衣。ありがとうね」って言われる。私は「ごめんなさい。私のせいで岩田君がこんなになっちゃって・・・」って言うのと。

絵美は「彼って正義感が凄く強いだよ、結衣でなくても一緒よ」って言うてくれた。岩田君のお母さんが微笑んで「結衣ちゃんって言うのかな絵美ちゃんの言う通りよ。気にしないで」って言うてくれた。

私とひろくんは「失礼します」って頭を下げてその場を離れた。

帰ってゆく途中で、岩田君のお母さんが、絵美に「彼女って可愛い

わね。先生もカッコいいし」って話すのが聞こえた。

帰宅途中にひろくんの携帯に連絡が入り、学園長から「明日より三日間の休校を決定しました」って連絡が入った。

岩田君を刺した犯人は以前に私にちよっかいを掛けた、西邦高等学校を退学させられた山田君って事だった。

なんと山田君は学園の一人を仲間にして講堂の道具置き場に隠れていて、私を捉えるべく現われたらしい。

さらに山田君は覚せい剤にも手を出していたようで警察でも捜している状態だったらしい。これで山田組も壊滅に持ち込めるって話だった。

山田君を手引きしたうちの生徒は、なんと里美らしいって事だった。最近あまりひろくんにも、まとわり着かずあきらめたと思っていたところのこの事件だったので私はひっくりした。

彼女は職員会議に掛けられるって事だった。彼との仲が焦点でかなり、やばいらしい「彼女はたぶん自主退学するのではないかな」ってひろくんは言った。

ひろくんは「俺はたぶん会議が多くなるから、送り迎えは俺がするから、俺の実家に泊まってほしい」って言われる。

まだ一発逆転を狙って山田組が動いてるって事だった。私は「うん。わかったよ」って返事をした。

そして、しばらく間、ひろくんの実家に泊まる為の準備を整えた。

明日は実況見分があるそれが終わった後で送ってもらう予定なのだ。

絵美サイド

「キャー」っと悲鳴が上がる中、私は直樹君に駆け寄った。結衣をかばって、なんと腹部にナイフが刺さって居る。

「直樹君」って声を掛けると彼は結衣の無事を確認した後、私の腕の中で意識を失った。

じわじわと腹部から血がにじむ、おろおろとすると澤田君がナイフを抜こうとするが先生の掛け声で抜くのを辞めた。

しばらくすると、救急隊員が現われて直樹君を運んでゆく、私はあわてて後を追い「私が付き添います」って救急車に乗り込んだ。

救急車内で息も絶え絶え呼吸する直樹君を見て涙が止まらない「死なないで」って心の中で叫ぶ。

実は犯人が一番最初にナイフを向けたのは私だった。私と結衣は、ほとんど同じ衣装を着ているので、最初は勘違いしたようだ。

私に刃を向けようとしたが人違いしたようで突き飛ばされた。その後結衣を見つけて彼女を刺そうと近づいたところを直樹君が結衣の前に立ちふさがったのだった。

病院に着くと救急の入り口にドクターや看護師さんたちが待ち構え

て、すばやく治療室へと運んで行った。

看護士見習いの杉崎さんが私の相手をしてくれた。結衣達も駆けつけてくれた。結衣の顔を見ると派手に泣いていたようで目の周りが大きく腫れている。

後で着替えるときに私も鏡を見ると、結衣と一緒に、かなり目が腫れていた。私は両親に電話で直樹君に付き添うって無理やり説得した。

彼の両親も私が付き合っていることを知っているので無理をお願いして、付き添っていいようお願いをする。

私の必死のお願いに彼の両親は折れてくれて、彼のお母さんと一緒に付き添うことになった。

彼は三日間眠り続けて三日目の朝に、私が手を握っているときに、目を覚ました。開口一番は「絵美。おはよう」だった。

私は、真っ赤になり、最高の笑みと涙を浮かべて直樹君の顔を見て「おはよう」って言った。・・・その後あわててナースコールを押した。

結衣と葵先生は毎日見舞いに来てくれた。目が覚めてからは土日のどちらかには顔を出してくれた。結衣と先生って仲が良いようだ。

見舞いに来る結衣は病院内でも可愛いって評判で、見舞い来ると何処ともなく人が集まってくるようだ。私と直樹君はいつも苦笑の連続になる。

結衣が「メイドの衣装のクリーニングが出来上がったから絵美のお母さんに渡した置いたよ」って言ったのを聞いた直樹君は「絵美ちゃん。お願いがあるんだけど」って言う。

「なに？」って聞くと、なんとメイドさんの服を着て看病して欲しいって事だった。私は「傷が治ってから」って真っ赤になって言った。

絵美サイド終わり

私が落ち着いたところで事件の経緯を聞かれた。私はほとんど訳が解らないので代わりに、ひろくんがしっかり説明してくれたからあまり聞かれることはなかった。

私は身代わりの岩田君が気になり、ひろくんになるべく病院に連れてもらうことにした。

直樹君が三日目で目を覚まし意識が回復したらしい。おもわずほっとして少し胸の支えが取れた。

山田組は今回の事件で最終的なダメージを受け、解散に追い込まれた。里美は謹慎処分になったが結局自主退学することにしたらしい。

私たちは直樹君のお見舞いによく行ったが、直樹君は人気があるのか一杯人が病室を訪れる。直樹君と絵美は苦笑するばかりだった。

事件発生して二週間後にマンションに戻ってきた。そして、ようやく学園が正常に戻った。

平和なひと時

平和なひと時

文化祭の大会から三週間がたった。学園は平和を取り戻し、平凡に時が過ぎてゆく。

陸上大会への出場は今回の事件で、補欠だった私は出場を取りやめた。でも小澤姉妹はこんな事件の中、短距離で一位二位を独占し全国大会への出場を決めた。

やっぱり私のかなう人たちじゃなかったんだなんて思った。

変わったことは、毎日こぼれるくらいの手紙が私の靴箱に入っていることなんです。どうも里美が、有形無形に私に皆からのアプローチにブロックを掛けていたらしく、あまり気づかなかったが、里美が居なくなっって一気に溢れて来た様で困惑しきりだ。

私が一人一人に断りの手紙を書いていると、後ろから声が「結衣はマメだね」って弘子が私が書く手紙を覗いて言った。

私は「だって、皆さん丁寧に書いてあるし、申し訳がないんだもん」って頬を膨らまして言う。

それを横目で見ていた薫が「それが、結衣の良い所だもんね」ってからかった。授業開始のベルとともに先生が教室に入ってきたので、私は慌てて手紙を机の下に閉まった。

今日は土曜日。いつもだと、ひろくんは陵の事務所に行くんだけど、今日と明日はお休みなんだって、久々にひろくんと長い間一緒に居られる。

私が昼食を何作ろうかと悩んでいると……。ひろくんが「お昼は外食しようか、それもたまには変わったところで」って私に言う。

「うん……。」私は何気に、パツと閃く。「ひろくん。あのね、前に陸上大会の練習をやっていた時に行った食堂があるの、そこに行きたい」ってお願いした。

ひろくんは「それって、何処？」って聞いたので、以前行った食堂の話をする。「店の奥さんや旦那さんも親切でとっても旨い定食があるのよ」って言う。

「そこって、たぶん十勝って言う店じゃないかな？ 旨いって聞いたことはあるけど一度も行ったことが無いんだ」って言ったので、私は「うん。そのお店だよ。ポリウムがあって本当に旨いんだから」って言うと、ひろくんは「OK。昼はそこにしよう。おでかけの準備をして」って言ったので、私は慌てて準備を整えた。

私はラフなポロシャツにチェックのミニスカートにカーデガンって格好に着替えて、ひろくんの車で向かう。

私が「あの角を曲がるとすぐだよ」って、ひろくんに告げる。そして、お店の前に着くと駐車場が無い……。

私は「ひろくんちょっと待てて、私聞いてくる」って車を降りて店の中に入って行った。

「いらっしゃい」って、景気のいい掛け声で女将さんが挨拶した。私は「すみません。お店の駐車場ってありますか？」って尋ねる。

即座に「無いよ。内の店には学生がメインだからね」って返事が返ってくる。私は、思わず「え〜」って言ってしまふ。

女将さんが「あれ？あんたは・・・結衣ちゃんだね」って言う。私は「はい。白鳥学園の葵 結衣です」って答えると。

女将さんは奥の厨房に向かって「あんた。家の所空いてるよね」って尋ねると、奥から「お！空いてるよ」って返事が返ってきた。

女将さんが「あんたは特別。この先に私んちがあるからその所にとめな」って言うてくれた。私は「すみません」ってひろくんの元に戻り駐車する場所を教えた。

駐車場に止めて二人で店の中に入ると、女将さんが、ひろくんを見て「いらっしゃい。あれ？結衣ちゃんの彼氏ってカッコいいね」って言われた。

私はもちろん、赤くなった。しかもその言葉に店のお客が反応し全員が私たちを見つめられ、さらに赤くなった。

女将さんが「その角が空いてるよ」って角の合い向き合いの席を示された。席に着くと女将さんがお茶を持ってきてくれて「なんにする？」って聞いてきた。

私は「十勝定食二つ。私はご飯少盛で」って言う。女将さんが奥に向かって「十勝二つ。一つはご飯少で」って言う、奥から「了解」って声が聞こえた。

出来上がりを待っていると、女将さんの大きな声が「加藤君!! あんた又たまねぎを出して」って声が聞こえた。

私は「あれれ・・・以前にも聞いたことがあるような・・・」それから方を見ると、見覚えがある人が小さくなっていた。

ひろくんが思わず「くす」って笑った。そして「女将さんて体育会系だね」って私にこそつと言った。私は思わずうなずいた。

運ばれてきたお盆には以前と一緒にお茶の缶が載っていた。それは私とひろくん両方共だった。私が疑問の顔を見ると、女将さんが「貴女には家の旦那から彼氏には私からだよ」って、ひろくんにウィンクした。

ひろくんは「すみませんね。」って笑みを浮かべると、女将さんが「いい男は、微笑むとさらにいいね」ってさらっと言う。

十勝定食は以前と同様に美味しかった。もちろん、ひろくんも満足したらしい。「ごちそうさま」って店を出ようとすると、女将さんが「又来てね」って言われたので私は「又来ます」って店を出た。

ひろくんも「美味しかったよ。又来ようか」って言ってくれた。

この後、ショッピングモールへ行って色々買い物をして半日を過ごした。明日はテーマパークに連れて行ってくれるって言うてくれた。

テーマパークは思いのほか楽しく、ひろくんととのデートが楽しめた。帰りに岩田君の居る病院にテーマパークのお土産を持って尋ねると、

彼は順調に回復しているらしく、絵美が楽しそうに迎えたくれた。

彼らの両方の両親に付き合いを認められ、けなげ？に看病する絵美は「彼、大変な怪我をしたけど、そのおかげでお互いの両親にも付き合いも認められたし、彼を独占で来ちゃったし、怪我の功名？かな？」なんて思っていたより元気なので、私の胸のつかえがどんどん無くなってゆく。

彼は12月中旬には退院できそうで、絵美は「クリスマスに間に合う」って喜んでいた。クリスマスイブの夜は二人で過ごすんだって（しかも、お互いの両親の公認だって）、絵美は頬を染めて、教えてくれた。

月曜日が始まる。学園で靴箱を開けると又手紙の束が・・・いつもの平和な時間が過ぎてゆく・・・。

クリスマスの前哨戦

クリスマスの前哨戦

私は久しぶりに前に住んでいた近くのケーキやさんに足を運んだ。

シャルドンって言うケーキ屋さんだけど、ここは併設のカフェがあつてケーキセットが食べられるんだ。

昔はよく友達と一緒に紅茶を飲みながら色々だべって過ごしていたんだけど、結婚してからはずんぜん行けなかった。

なぜって言うと、ひろくんが急遽仕事が入り、暇になっちゃて、テレビを見ていたらケーキ番組が有って、急にケーキが食べたくなつてよく知っているシャルドンを思い出し電車を乗りついて来ちゃったんだ。

久々のシャルドンのケーキに舌鼓を打って食べていると、肩を叩かれた。

振り向くと・・・制服姿の菜緒子たちが立っていた。菜緒子達は「結衣。久々だね、元気してた？」って聞いてきた。

私は「お久しぶり。もちろん元気だよ」って話した。菜緒子は「こっちの広いほうに座ろうよ。向こうでの話も聞きたいし」って、4人が座れる丸テーブルのほうを示した。

私は中学の旧友に会ったので、皆で積もる話に花が咲いた。佐織が「結衣。今何所に住んでいるの？前を通ってら違う人が住んでいた

よ」って聞いてきた。

私は「今は○×に住んでいるの、白鳥学園に近いから楽チンなんだ」って言うと、今度は裕未が「結構離れちゃったね。だからぜんぜん見かけなかったんだ」って言った。

私は「菜緒達って青葉台高校だね、どうそちらは」って聞くと、菜緒子が「私たちの高校は青葉中学出身が多くて、あまり中学と違和感がないの」って苦笑いした。

菜緒子たちが4人掛けのテーブルを示して「こっちで一緒に話そうよ」って、二人掛けに座っている私に言いながらも、ウエイトレスさんに「この子もこちらにします」って告げた。

ウエイトレスさんが飲み物とケーキを持ってきてから、さらに話に花が咲いた。当然女の子が集まれば恋バナしかなく、あっという間に私が皆に告白って事になっちゃった。

菜緒子が私の左手の薬指の指輪を見て「結衣。その指輪って年季が入っていない？その指輪って卒業式のときにしてのでしょう。」って指輪をしてるのを見つけて、私の告白タイムが始まっちゃった。

私は皆に「クラスの皆には内緒ねって言って、実はこの指輪は婚約指輪なの」って言葉に、菜緒子たちは、大きな声で「「え〜・・・」って言うと、お客さんたちが一斉に私たちを見た。

でももう結婚してるって事は伏せないと、とんでもない事になりそう・・・。

大声を出した為にお客さんの冷たい視線を受け、私たちは罰が悪く

なり「すみません」って、頭を下げた。そして佐織が「いつ婚約したの？」って聞いてきた。

私は「・・・三年生のお正月なの。彼は小さいころの幼馴染なの」って答えた。

菜緒子が「三学期の始業式ときにはもう婚約してたんだ。だったら車に乗せてもらった彼が婚約者だったんでしょ」ってニヤニヤ笑いながら言う。

私は赤面して「ごめんなさい。あの時はうそをついちゃった。その彼なんだ」って言うのと、菜緒子が「やっぱり。私の思ってた通りだったんだ」って私を肘でつついた。

私は「へへ・・・」って苦笑いをした。裕未が「いいな、結衣の彼氏一度見たんだけどカッコいいもん、私の彼もそれ位カッコ良かったら良いんだけど」って愚痴った。

裕未は中学のときからの付き合いの彼氏で両親とも公認らしい。裕未に話を振ろうとしてけど又戻って、佐織が「裕未はわかってるか良いの、結衣。ちゃんと話して。彼とはどこまで行ったの？」って聞いてくる。

私は「キスまでだよ。」って答えると、全員が「うそおっしやい」って、突っ込まれる。

さすがに、結婚して一緒に住んでるなんていえないから「私たちは清い仲なんだ」って剥けて言うのと、疑いの目で見られたけど、菜緒子が「結衣はたぶんそこまでだね」って断言するように言った。

菜緒子達は全員が現在彼氏が居るって話だった。横に座っている菜緒子の紙袋を見ると毛糸が見えた。私は「あ・・・菜緒子って何か編んでるの？」って言うのと。

前に居る佐織が「マフラーだって・・・彼氏にクリスマスプレゼントなんだって、休み時間や昼食後なんか一生懸命に編んでる」って菜緒子をからかう様に言った。

私も「えー菜緒子も彼氏が出来るとこんなになっちゃうんだ」って言う。菜緒子は頬を膨らまして「佐織や裕未だって去年渡してたじゃん」って言い返しながらも私を見る。

私は少し笑いながら「私も去年マフラーを編んだんだ」って言うと、全員で「定番だね」って言い合った。

「裕未や佐織は今年はどうするの？」って聞くと二人そろって「「内緒」」って言われちゃった。

さらに「でも、ジュジュのクリスマス企画が取りやめになっちゃったから大変だったんだ」って言う。

「どうして？」って私が聞くと、「メインモデルにアクシデントが遭った様で・・・それで企画がなくなっただって」って教えてくれた。

私は「皆。ジュジュを読むんだ」って言うと、皆は「当たり前でしょう、ジュジュを愛読するのは乙女は必修よ」って言いながら「結衣は読んでないの？」って振られた。

思わず「読んでるよ」って答える。（実は、お義母さんが送ってく

るけどあまり真剣に読んでないし、最近は読んでなくリビングに置きっぱなしだ」ばつが悪い。

そして二人は「結衣は自分の体にリボンつけて、はい。プレゼントっていえば」ってからかわれちゃった。

真っ赤になる私を見て、三人が「「結衣。本当にやる気？」」「ってビックリした。

「へへへ」思わず考えた私は罰が悪くなり下を向いて小さくなった。そんな私を見た佐織が「そんな仲なんだ」ってあきれた顔で行った。全員で笑って、又逢おうねって別れた。帰る途中、ひろくんへのプレゼントのことを考えていると携帯が鳴ってきた。

ひろくんかな？って見ると、なんとお義母さんだった。「もしも」って出ると、お義母さんの元気な声が携帯からこぼれる。

「結衣ちゃん。今何処？ 今から迎えに行くから場所を教えて」って矢継ぎ早に話してきた。

私が場所を言うと「その場所を動かないで」って言って通話か切れた。

しばらく道端で待っていると、男の人が声を掛ける「ねえ。彼女、誰待ってるの？俺と付き合わない」って私の手をつかむ。

私は左手を見せて「私、結婚しています」って指輪を見せると、男の人は「いいじゃん、不倫しよう」って私を引っ張ろうとする。

突然。その男の手に綺麗な手がかんで私の行動を守る。「え」思わず手の持ち主を見ると、「お義母さん」だった。

お母さんは「その手を離してくれる」って男の人を冷たい目で睨む。男の人は慌てて私をつかんでいた手を離す。そして怪訝な顔をしてお義母さんを睨んで、お義母さんの掴んでいた手を振り払おうとした。

「わ・・・」男の人があつと言う間に空中で一回転して地面に倒れこんだ。「この子は、私の大事な娘なのよ。あんたみたいな悪い虫は退治してあげる」って腕を捻り上げた。

「う・・・助けてくれ」って男の人は悲願した。お義母さんは、笑みを浮かべ「もうこんなことは、二度としないことね」って腕を放す。

「ちえ・・・おぼえてろ」って舌打ちし捨て台詞を言いながらその場から慌てて逃げ出そうとした男の人は、駆け出したとたん大男の胸にぶつかり大男の腕がむんずと男の人を掴んで捕まえる。

男の顔から血の気が引くのが解った。大男は「奥様。しばらくお待ちください」って言って、ナンパ野郎を軽く抱えて路地に入っていた。

「結衣ちゃん。遅くなってごめんね」ってお義母さんは言いつつ「車で待ちましょう」って一緒に車に乗った。

しばらくすると、運転席に大男さんが乗ってきて「お待たせしました」って車を走らせた。お義母さんが「彼は。私の運転手兼ボディガードなの大林くんって言うの」って教えてくれた。

大男の人は「大林です。お嫁さんのボディーがーとも兼務したしますので、以後お見知り義理をお願いします」って挨拶してくれた。

私は、何も判らず「結衣です。お願いします」ってとりあえず挨拶した。

「結衣ちゃん。又アルバイトよろしく」ってニコニコしながら言う。私は「はあ・・・」としか答えなかった。

やっぱり・・・車は写真スタジオの地下駐車場に入ってゆく。三人でエレベーターに乗ると、お義母さんが「今日はバレンタイン特集なの、いつものようによろしくね」って言われる。

お義母さんには、いつも突然に拉致される。ここしばらく無かったのは文化祭の出来事を傷かったの事のようなのだ。何気に「クリスマス特集はお流れになっちゃたもの、今回は気合を入れるわよ」って肩をたたいた。

撮影はもちろん順調に進み、マンションまで送ってもらった。

別れ際に、お義母さんから「これ。今までの分全部入れてあるから」ってカードを渡された。そして「流れちゃった企画書。参考にね」って封書を渡してくれた。

マンションに入ってから勉強机の上に企画書の封筒を置いてから、夕食の準備に取り掛かった。

ひろくんと夕食を済ませ「私、宿題するね」って自分の部屋に入って、お義母さんに貰った、企画書の中身を見ることにした。

月間ジュジュ、クリスマス企画って表紙に書いてあり中身を見ると、彼とのクリスマスの過ごし方やプレゼント企画と渡し方など一杯書いてあった。

私は、プレゼント企画の部分をめくって真剣に読み始めた。

クリスマス大作戦の計画

クリスマス大作戦の計画

私は、お義母さんから貰った企画書のプレゼントのところを何度も読んで、ひろくんとクリスマスの過ごし方の作戦を練ることにした。

そして、ひろくんに「今年のクリスマスは私が企画するから24日と25日は空けておいてね」ってお願いした。

すこし驚いた顔をしながらも「結衣。解ったよ、今年は結衣に任せる」ってひろくんが微笑んだ。

早速一生懸命考えてた計画を実行することにした。まずはホテルのスイートルームの予約の電話を入れる。

予約には遅すぎたようで私が考えるところはすべて予約で一杯だった。「後は高級ホテルしかなかった。うーん。予算が・・・」そして。

あっと思い出した。お義母さんからカードを受け取ったんだ。いくら入ってるかな？っと思ってATMで確認すると、目が点になった。丸が異様に多い。一・十・百・千・万・・・残高は一千万円を超えていた。あわてて、お義母さんに電話を掛ける。

ルルルルル。三回目のコールでお義母さんが出る。「お義母さん。結衣です。この前いただいたカードですが・・・こんなに貰ってよ

いのですか？」って聞いた。

お義母さんは、笑いながら「結衣ちゃん。これでも少ないほうよ、学生だから少し抑えさせてもらったけど、本当だったらその金額の倍以上はあげてもいい位よ」って笑う。

思わず「は～・・・」ため息が出た。でもこれでホテルのレベルアップが出来る。お義母さんに「ありがとうございます」ってお礼を言って電話を切った。

一生懸命あっちこっちに、電話を掛け捲ると、一箇所だけ空いていた。あわてて予約を入れた。思わずガッツポーズが出る。

空いたいたのは鳳グループが経営している超高級ホテルだった。かなり予算オーバーだけど何とか予約が取れてよかった。

私が電話を掛けた少し前にキャンセルが入ったらしい。ラッキーそのものだった。

そしてひろくんへのプレゼントの購入とディナー最後に出してもらう手作りケーキの特訓だ。ケーキは薫に頭を下げまくって教えてもらうことにする。

学園で薫に話しかける「薫ちゃん。お願いがあるんだけど」って、彼女の前で両手を合わせて頭を下げる。

薫は少し苦い顔をして「結衣がそんなお願いって事はどうせとんでもない話でしょう」って苦笑いする。

「おねがい！。クリスマス前までにケーキの作り方を教えて、とび

っきりの凄いやつを」ってさらにもお願いをする。

それを聞いていた、他の女子も慌てて薫の周りに集まって薫にお願いをし始めた。薫がさらに苦笑する「結衣がこんな所で言うから、とんでもない事になりそうだよ」ってため息混じりに言った。

「薫・・・って言うことは、OKって事だね」って薫が引き受けてくれるようで、ホッとする。皆で「よろしくお願いします」って頭を下げた。

弘子が「薫クッキングスクールの開催だね」って薫の肩をたたいた。すこし落ち込みを見せる、薫だが・・・「よし！！私について来い」って気合を入れた。

週三回。薫の家でケーキ作りに励む。薫の怖い声が飛ぶ「結衣。そんなんじゃ駄目！！最初からやり直し」「薫ごめん。もう一度やり直します」

薫のお母さんが「薫。あんた厳しすぎよ」って助け舟が入る。

薫の厳しい特訓で、12月の中旬にはどうにか格好が良いケーキを作成することが出来た。後は本番に臨むだけなの、自分で勢いをつける”がんばれ！！結衣”。

そして空き時間に手編みの・・・へへへ。今帽子を編んでいるんだ。なぜ帽子かって言うと、1月の終わりに学園でスキー研修があるんだ、最初はひろくんの、後から私のも編むんだ。もちろん御揃いのね。

帽子って言うのは裕未が彼氏に編んでるらしく、冬休みに一緒にス

キーへ行くんだって、そのアイデアを頂いちゃった。

でも裕未も試行錯誤であまり旨く編めないらしく、ケーキやさんで会った数日後に連絡を取ったら、半分投げ出し状態だったらしい。

逆に私に泣きつかれちゃった。私は去年多治見夫人から教えてもらった、手芸店の神谷さんを二人して尋ねることにした。

学園が終わり裕未が指定する駅で待ち合わせをする。丁度この駅からバスで15分ぐらいと所にお店があるので丁度よかった。今回は多治見婦人を通さず直接連絡したけど、すぐ多治見婦人に連絡が入り「もう・・・水臭いわね」って結局仕切られた。店で待ち構えているらしい。「ふっ・・・」。

駅前で裕未と待ち合わせをしていると、大学生と思われる人たちから声が掛かった。

「君。ひとり？ その制服は白鳥学園だね。ちょっとお茶しない」
って数人に囲まれる。柱を背に下を向く私・・・。

その時「結衣？」って声が。顔を上げると佐織が居た。男の人たちは佐織にも「あんたは、青葉台だね、彼女と知り合い？ 折角だから二人とも一緒にどう？」って佐織のも声を掛ける。

佐織はあわてて私に駆け寄り二人して固まる。そして裕未と菜緒子も現われると、相手も丁度四人で一人ひとりが私たちの手を引っ張ってゆこうとする。

一番気が強い菜緒子が「辞めてください」って手を振り切る。「よお・・・ねえちゃん威勢がいいね」ってへらへら笑い出す。

私は手首を掴まれて黙って下を向いて引っ張られないように抵抗するだけだった。そのうち一人が佐織の手を大きく引っ張ると「キャー」って佐織が悲鳴を上げた。

その時間き覚えのある声で「こら！お前たち。彼女たちが嫌がつてるじゃないか」って声がした。

顔を上げると「あ・・・間宮さんに稲波さん」って言うと、彼らは私たちを掴んでいる手を振りほどいてくれた。

男の人たちは「てめえ、邪魔するなよ」って凄んできた。間宮さんたちは私たちを背中に回し「嫌がるナンパなんかやめときな」って諭すが・・・。

そんな説教も無視して、男の人の一人が間宮さんに襲い掛かる。でもあつという間に腕をひねられ苦痛に顔をゆがませる。

間宮さんは私たちの方を見て、ニヤって笑った。私は「間宮さん。すみません」って言う。

男の人の中の一人が「え・・・お前は間宮・・・」って言うと、他の二人が「まさか・・・都大会優勝の間宮5段？」って言う。

間宮さんは男の子たちを睨んで「お前たち。いい加減に、女の子の嫌がるナンパはやめろって言ったろう」って低い声で、諭す。

彼らは、口々に「やばいよ、やばい」って、最後には、この場からあわてて足早に逃げ出した。

人だかりが出来ていた駅前に騒ぎが収まったことで皆がばらばらに足早に解散して行った。

そしていつもの駅前の風景に戻る。私たちは間宮さんたちに「ありがとうございます」って頭を下げた。

間宮さんは「葵ちゃん。待ち合わせは、どこかの店の中の方が安心だよ」ってアドバイスをくれた。

世間話をしようとするところに、後ろから声が掛かる「結衣ちゃん」って、女の人の声で呼ばれる。

振り向くと「あ・・・神谷さん、どうしてここに？」って、聞いた。

「用事で駅前に来てただけで、ごめんね。少し前から見てただけど・・・びびっちゃった。でも貴女って頼もしいボディガードが居るのね」って笑って言った。

裕未たちも、神谷さんの話に同調する。「「そうそう、結衣って凄い人と知り合いなんだね」」って言う。間宮さんと稲波君が困惑する顔をした。

彼らは、照れた顔をして「俺たちは、もう行くわ。気をつけろよ」って二人は手を振って離れて行った。

神谷さんが「一緒に行きましょうか」って歩き出すと、私たちは「はい」って返事をし、神谷さんの後を付いて行った。

歩いている途中、何気に菜緒子が「結衣。あんたさっき、葵って呼ばれてたね。どういうこと？」って尋ねてきた。

私は、心の中で「しまった」って思い。私が苗字が変わって事がばれちゃった・・・どうしよう、困った。

困った顔で下を向いて歩いていると・・・ショーウィンドーのマネキンに私が着た事のある衣装を着たマネキンが立っていた。

ピン。私はある考えが浮かんだ。「菜緒子。横のウィンドーを見て」って言うと、菜緒子は横を向いた。

「あ、これね。ジュジュの表紙でモデルが着ていた衣装だね。」って、菜緒子と言う。

私はさらに、「モデルの名前知ってる？」って言うと、「当たり前じゃん。白鳥 葵 っていうんだよ。」って言ったので。

「そのモデルって・・・実は、私なんだ」って言ったら、菜緒子は、大きな声で「えっ・・・う・そ・・・」って啞然として私を見た。

菜緒子が、あまりに大きな声を上げたので、周りの人にじろじろ見られる。キョトンとする裕未を尻目に慌てて、神谷さんのあとを追った。

でも菜緒子には「後で、じっくり聞かせてもらってからね」って言われてしまい、「わかった」って私は、菜緒子にモデルの件の話を約束させられた。

でも、モデルの話で苗字が変わったことをごまかす算段を考えた。しばらく歩くと、私たちは、神谷さんの手芸店に到着した。

神谷さんが店の中に入ると、店員さんが「社長。お帰りなさい」って、頭を下げた。神谷さんは「留守中は変わったことは無かった？」って聞くと。

店員さんの一人が「変わりはないです」って返事をした。神谷さんは、後ろに居る私たちを見て、「今日は手芸教室は空いてるわね、彼女らと使うから何かあったら連絡して頂戴」って、私たちを、奥の部屋に案内した。

私たちは、少し頭を下げながら、神谷さんの後に続いた。奥の部屋に入ると、多治見婦人が待ち構えていた。

多治見婦人は開口一番「結衣ちゃん。遅かったのね」って、笑いながら言った。

神谷さんが「彼女たちは、駅前でナンパされていたのよ」って遅くなった理由を代わって言ってくれた。

多治見婦人は「結衣ちゃんは可愛いからすぐナンパされちゃうね」って、からかった。そして「今年は、なんにするの」って尋ねてきた。

私は、「今年は帽子の予定です。他の友達も同じなんです。でもこの彼女はマフラーなのよね」って佐織向かって言った。

佐織は「どうせ、私だけ彼氏ができるのが遅かったんだもんね」って少し頬を膨らまして言った。

「まあまあまあ」ってたしなめる神谷さん。私たちは全員「くすくす」って笑い始めちゃった。

「さあ、始めるわよ」って神谷さんが号令をかけた。菜緒子達は紙袋から毛糸を取り出し、網掛けを神谷さんに見せた。

私は、毛糸の色選びからなので、一度店内居に戻って選び事にした。配色は去年と同じにして御揃いにする事にした。

赤・白・黒の三種類の毛糸で店員さんが帽子を編むのにいいぐらいの太さの毛糸を男の人の頭に合う分を出してきてくれた。

教室に戻ると、菜緒子達がアドバイスを聞きながら真剣に編んで居た。神谷さんが手順をきちんと教えてくれる。

私も、真剣に編み物に集中して編んで行った。一時間位したところで、神谷さんが「今日はこれくらいにしましょう」って終わりを告げた。

私たちは、神谷さんにお礼を言って店を出ようとすると、多治見婦人が「結衣ちゃん。家の旦那が迎えに着てるから乗せてってあげる。」って言うてくれた。

「でも・・・迷惑じゃないです？」って遠慮すると、神谷さんが「駄目だよ、一人で居ると、又ナンパされちゃうよ。乗せてもらいなさい」って言う。

菜緒子たちも「結衣は、そうしなさい」って命令されちゃった。「多治見さんでは、お願いします」って多治見夫妻と一緒に帰ることにした。

菜緒子達は、佐織のお兄さんが迎えに来るので、それに乗って帰る

そうだ。帰り際に菜緒子が「例の話は後日ね」って別れた。

当然、後日菜緒子に呼び出されて、モデルの話をさせられた。でも苗字と名前が混合して私が苗字が変わったことはばれずに済んだんだ。

やっぱり神谷さんのアドバイスは的確で思ったよりスムーズに綺麗に出来上がった。「ひろくん。喜んでくれるかな・・・」

クリスマスイブの夜（その1）

クリスマスイブの夜（その1）

今日はイブなんだけど、ひろくんは朝から仕事があるんだって、だ
いぶ前から決められていたらしく2時ぐらいいまで掛かるらしい。こ
っちにとっては好都合だった。

ひろくんが出かけた後、慌てて、ケーキ作りに取り掛かる。薫から
教授を受けたレシピを見ながら作業を進める。

薫の家で一度作ったので、何とか午前中にはケーキを作り終えた。
そして少し早めに昼食をして、タクシーを奮発して予約してあるホ
テルへと向かった。

ホテル内に入って、受付に向かう途中に横から「葵さん」って声を
掛けられる。「え？」横を向くと、見覚えがある人が立っていた。

そして「葵さん。今日はどうしてここに？」って聞いてきた。「え
っと、鳳 高志朗さんですよ。」って確認する。

「光栄だね。ちゃんと名前を覚えてもらっていて」って、微笑んだ。

「今日は、ここに予約を入れたのですけど、食事の後にこれを出す
ようにお願いがあつて・・・」ってリボンに包んだ白い四角い箱を
見せた。

鳳さんは「それ何？」って言ったので、真っ赤になりながら「手作
りケーキです」って答えた。

「ひろきくんが喜びそうだね」ってフロントに行って、マネージャーさんを呼び出した。

私は、マネージャーさんに厨房の入り口まで連れて行かれて、ここで待つように言われる。

少し待つと、中から高い帽子をかぶったカッコいい人が現われた。彼は私を見るなり「白鳥 葵ちゃんだね」って言われて、キョトンとしちゃった。

そして「本日のスペシャルは君だったんだ」だとも言った。私の頭の上で????が飛んでいる。

「ハハハ。眼鏡を掛けても判るよ。ジュジュのモデルさんだね。パーティーで一度見たよ。HIROと一緒にだったね。」って言われる。私は、パツと赤くなってしまった。

「それかな?手作り品は」って、私の持っている箱を指した。私は「失礼なのはわかっていますがディナーの最後にこれをお願い出来ませんか?」って、頭を下げる。

料理長さんは「マネージャーから聞いてるよ。中を見ていいかな」って言ったきた。「お見せできるできばえではないのですが・・・」って、とりあえず手渡す。

彼は、リボンを解いてふたを取る。にこつと笑って「いい出来じゃないですか、素人離れの出来ですよ」って褒めてくれた。

「大事に預かります」って再びリボンをすると、私のケーキを持っ

て厨房に戻って行った。私は「お願いします」って頭を下げた。

マネージャさんに今一度ディナー後の約束をお願いして、一度マンションに戻ることにした。私は鳳さんとマネージャーさんに見送られて、帰路についた。

マンションに帰ると、私はひろくんと私の一泊分の用意を整え、ひろくんからの連絡を待つことにした。

そして三時前にひろくんより携帯が入った。「結衣。終わったよ、何処で待ち合わせする？」って聞いてきた。

「駅前のロータリーで」って答えると、「了解。着いたら連絡するよ。それまでは必ずマンションに居るように」って強く念を押された。

私は、待ち合わせではないとも早めに着いて、待ち合わせでナンパされちゃうから、「必ず相手を待たせるようにしろ」ってこの前のナンパ事件でひろくんからお達しは出ちゃった。

私は、素直にひろくんからの連絡を待つことにした。

ひろきサイド

今日はクリスマスイブだ。今回は結衣が仕切ってくれているんだ。俺は午前中は事務所に用事があるのでマンションを早めに出た。

結衣の文化祭以来、芸能活動は完全に休止状態になっている。今日

は活動をどうするか、の打ち合わせでマネージャーと社長のお話し合
いだ。

マネージャーの白石さんは「HIRO。あんまり活動が少ないから、
私が新人を引き受けなければならなくなっちゃたじゃない」って愚
痴を言う。

でも社長は、お袋とのつながりがあるのである程度は無理を言っ
ても、目をつぶってくれる。

結局は俺が結衣への心配で、もうしばらくは休止することにした。

「白石さん。申し訳ない」って頭を下げた。

白石さんは、呆れ顔で「わかったわ」って、苦笑いをした。

帰り際に社長から「春休みぐらいに奥さんと、もう一回CM取りを
したいが、考えておいてくれ」って言われ、「わかりました」って
答えると、「奥さんの説得は任せる」って、手を合わせるまねをし
てから、「よいクリスマスを」って言われて事務所を出た。

車にエンジンをかけてから、結衣に電話を入れる。「結衣。終わっ
たよ、何処で待ち合わせする？」って入れると、「駅前のロータリ
ーで」って、答えた。

待ち合わせをするとすぐにナンパされるらしい。結衣が心配でたま
らない。思わず「了解。着いたら連絡するよ。それまでは必ずマン
ションに居るように」って強く念を押した。

「さて行くか」って、レバーをDレンジに入れて、軽くアクセルを
踏んだ。

ひろきサイド終わり

携帯電話が鳴り始める、携帯を見ると「ひろくん」だ。慌てて通話ボタンを押し「もしもし」って話しかける。

「もうすぐ、駅のロータリーに着く。来ていいぞ」って、ひろくんから電話が入った。

私は、ひろくんが初めての彼氏だし、すぐ同棲してあつという間に結婚しちゃったから、待ち合わせてのデートはしたことがなく、待ち合わせに懂れているんだ。

本当は、私が先にいて、ひろくんを見つけて手を振りたかったんだけど、「絶対に駄目」って却下されてしまった。

仕方がなく、私が待っている、ひろくに駆け寄るって事であきらめることにした。

電話が掛かってきたので、戸締り確認と玄関に鍵をかけてマンションを出た。

ガラガラガラ、私は、泊まりの衣装を入れたウォーキングバックを引きずりながら、駅へと向かう。

今日は、お義母さんから貰った、ホワイトカラーのワンピースに白

色のコートを羽織って、しかもめったにしないお化粧までした。もちろん眼鏡でなくコンタクトで髪も大人びた風に少し巻いてみた。

駅に近づくにつれ、なぜか視線が痛い、なにげに横を向くと男の人が慌てて視線をずらす。あれれ？「まあいいか」って、駅のロータリーで待つ、ひろくんの元に早足で進んだ。

駅のロータリーが見えるところまで来ると、車を降りて私を待つ、ひろくんの姿が見えた。

私が手を上げて、ひろくんに知らせようとする前に、私の前に同い年ぐらいの女の二人組みが行く手をさえぎって「あの・・・白鳥葵さんですよ」って、聞かれた。

私は、一瞬ビク・・・ってしたけど、「ええ」って答えた。すると彼女たちは「握手してください」って右手を出してきた。

戸惑いながらも、握手すると彼女たちは感激で目を潤ませて「これからも、頑張ってください」って励まされちゃった。

さらに少し進むと何人かの女の子たちに囲まれてしまった。全員に握手をすると、思わずため息が出た。

何気に、ひろくんの方を見ると、苦笑しているひろくんが見えた。慌てて「用事がありますので」って、ひろくんの元に駆け寄る。

ひろくんの元に駆け寄った私は言いたかった言葉（恋人を待たせたときに言う台詞）を言った。「ごめんなさい。待たせちゃって、ずいぶん待たせてごめんなさい」って、頭を下げた。

下を向いた私は、ニヤニヤしながら心の中で「これを言いたかったんだね」って思った。でも本当はひろくんを待って「ううん。そんなに待ってないよ」って言いたかったんだけど、それは諦める事にした。

ひろくんは私の持ってきたウォーキングバックをトランクへ積み込むと、助手席のドアを開けてくれた。

「ありがとう」って言って、車に乗り込むと、ドアを閉めてすばやく運転席に乗り込み、車をスタートさせた。

そして「奥様。行き先は？」って、聞いてきた。私は、今日泊まるホテルの近くのテーマパークの名を告げた。

このテーマパークは恋人たちの為にあるようなテーマパークで一度行って見たかったんだ。

チケットを見せて、中に入ると大勢のカップルでにぎわっていた。私は、ひろくんの手を引っ張ってテーマパーク内を一杯回った。

あたりが暗くなる。時計を見ると17時を過ぎていた。「ひろくん。あのホテルを予約してあるの」って、クリスマスイルミネーションに輝くホテルを指差して言った。

「いいところが取れたみたいだね」って、ひろくんが微笑むと、体が火照って胸がキュンって締め付けられる思いをする。

「がんばって、電話したんだ」って、胸を張って言った。「行きましょう」って、ひろくんの手を握って出口に向かって歩き始めた。

ひろくんも私が握った手をしっかり握り返してきた。心臓がドキドキして思わず早歩きになっちゃった。

ホテルの玄関に付くと、ベルボーイさんが私たちの荷物を持ってフロントに案内された。

フロントに「予約していた、葵ですが」って告げると、「葵 夫妻さんですね。予約受けたまっております。この書類を記入ください」って言われ、書類に記入した。

マネージャーさんからカードキーを渡され「ディナーは19時です展望レストランへお越しください」って言われ、ベルボーイさんに部屋まで案内された。

私は、ビクビクでベルボーイさんの後を歩く。でも、ひろくんは余裕たっぷりになっていた。こんな高級ホテルは初めてでオドオドしちゃうけどひろくんは慣れているみたい。りんとしてカッコいい。

部屋に入ると、超豪華だった。予約を入れた部屋はロイヤルスイートでも一番いいスペシャルスイートの部屋だった。この部屋しか空いていなかったんだけどね。

私たちは、早速着替えて、展望レストランへと向かった。私は、お義母さんに「これにきなさい」って、言われた真っ赤なパーティードレスを着た。背中が大きく開いてかなり恥ずかしい……。必死で大人びるような化粧をした。（お義母さんに教わったように）

ひろくんは軽いジャケットを羽織っているだけだけど・・・かったいい。HIROと先生の間ぐらいの感じで、着替えて出てきたときはカッコよすぎてしばらく固まった。

ひろきサイド

俺が、着替えて待っていると、結衣が着替えて出てきた。結衣はなんと真っ赤な衣装を着て現われた。普段は子供っぽいが今回は少しは大人びた格好だった。

やばい・・・思わず抱きしめたくなってしまった。今日は結衣が仕切るんだ・・・おとなしくしよう。

「いきましょう」って言う、結衣をエスコートして展望レストランへと向かった。

ひろきサイド終わり

ひろくんに「いきましょう」って告げると「エスコートは夫の役目だからね」って、手を握って展望レストランまでエスコートしてくれた。

レストランに入り「葵です」って告げると、ウェイターさんが窓際の予約席に案内してくれた。

ウェイターさんが椅子を引いて、私たちが座ると「本日は当レストランをご利用いただきありがとうございます。お食事を用意いたしますがワインはどんなされますか」と聞いてきた。

思わずひろくんの顔を見ると、すこし笑って「私は、もうが妻は飲めないので代わりの物を」って言うてくれた。

「解りました。しばらくお待ちください。今夜はピアニストの久保田さんがディナーに合わせてピアノを奏でますので、お楽しみにしていってください」ってウエイターさんは、頭を下げて戻っていった。しばらくするとワインと私用のウーロン茶を持って来た。そして料理が運ばれて食事をはじめてからすこし経ってから、司会の人が挨拶をしてから久保田さんを紹介しクリスマスに合わせたメロディーを奏で始めた。

食事が終わり、ピアノの音を聞いていると最後の一曲が終わり、久保田さんが礼をしたので皆で拍手を送った。終わりの挨拶をした久保田さんは舞台を降りて、私達の方に歩いた来た。

開口一番「お久しぶりね。ひろきさんと結衣さん」って微笑みながら「すこしお邪魔していいかしら」って話しかけてきた。

「「お久しぶりです」」「問題ないです。お座りください」ってひろくんが告げると、「ありがとうね」って久保田さんがウエイターさんの引いた椅子に腰掛けた。

私は「前は、急なお願いをありがとうございました」って、頭を下げた。「いいわよ、そんなこと。私は白鳥 葵のファンだからね」ってウインクした。

久保田さんとはばらくお話をした後、三人してレストランを後にした。出口で「では、また」ってお別れし、私たちは部屋に戻った。

クリスマスイブの夜（その2）

クリスマスイブの夜（その2）

部屋に戻った私たちは、ピアノの調べの余韻で二人ともソファで座り込んでいた。

クリスマスにピアノの調べは私たちの心に深く入り込んだ、ひろくんが「さすがに、久保田さんだね」っていうので、私も思わずうなずいた。

コンコン・・・ドアをノックする音は聞こえ「葵様。お届けものです」って女の人の声が聞こえた。

ひろくんがドアまで出て行って、確認する。ウエイトレスさんがワゴン車に私がお願いした箱を載せて運んでくれた。

ひろくんはすこし変な顔をしながら招き入れていた。ウエイトレスさんが引き上げた後、私が「へへへ」って、照れた顔をして箱を開けた。

どう見ても、シェフが作ったとは思われないケーキを前にして、ひろくんが「これって、結衣の手作りだね」って、満面の笑みを浮かべてくれた。

「ちょっと、不細工だけど・・・」って、精一杯の笑顔で答えた。

私はケーキをカットし紅茶とともにリビングに並べた。そして「味には自身があるんだ」って胸を張った。

顔を赤らめ「だって、ひろくんの好きな味に合わせて作ったんだもん」って心で語った。

そして二人並んで、窓から見える夜景を見ながら私の作ったケーキのデザートを食べた。もちろん、ひろくんは「おいしい」って言うてくれた。

そして「はい。クリスマスプレゼント」って言って、手編みの帽子が入った包みを渡した。

包みを開けたひろくんは「ありがとう」って早速かぶって見せてくれた。「よし。今度の学園のスキー学習でかぶろうかな」って満面の笑みも浮かべてくれた。

ひろくんからは、チョットとお洒落なブランド物のハンドバックだった。今私が持っているバックはお父さんが中学の入学祝兼誕生日プレゼントに貰ったもので、ずいぶん活躍したけど、だいぶくたびれているし、今の年齢からはすこしおさな目になっちゃていた。

「明日からはこのバックを使うね。ありがとう大事にするわ」って、お礼を言った。

でも今持って居るバックは宝物入れ行きにしよう。心で「お父さんありがとうね」ってつぶやいた。

私が、後片付けを行っている間に「ひろくん、先にお風呂に入っ
ね」って先に入ってもらった。

私は一大決心とともに、バスルームで念入りに体を洗って新しく買

った勝負下着を着てベットルームに入っていた。

普通では絶対着ないスケスケの紐のようなスキャンティーと股下0センチのベビードールを着て、上にガウンを羽織ったんだ。

ベットルームにはひろくんが、ネットブックでパソコンを操作していた。私が入っていくと「ごくろうさん」って言ってパソコンをたたみ、照明を落としてくれた。

ガウンを脱いで、素早くひろくんの横に滑り込む。ひろくんは「今日は楽しかったよ」って抱きしめてキスをしてくれた。

でも、抱きしめたときに私が着ているものを感じたようでビクッて反応した。普段はパジャマしか着ない私が薄いものしか着ていないので、私の決心がすぐわかったようだ。

ひろくんが私の目を見つめてきた・・・私は、真っ赤になりながらコクンと縦に首を振った。

甘い甘いキスとともに私たちはひとつになった・・・ひろくん大好き！！

朝まだ暗いうちに目を覚ました私は身動きがとれずすこし体をよじった。なんと私はひろくんの抱き枕状態になっていた。しかも二人とも何も着ていない、夜のことを思い出し体中が熱くなる。

体をよじったことですこし隙間が出来たけどすぐに抱き寄せられて寝言を言われた「結衣・・・愛してるよ」そういわれた、私は真っ赤になって固まる・・・。

でも、抱いてもらっている感触が心地よく、しばらくしたら又眠りに入ってしまった。

二度寝した私が目を覚ましたときは、もう明るくなっていて、ベッドの横には、ひろくんはもう居なかった。

キヨロキヨロするとシャワーを浴びていたらしく、ひろくんが頭をタオルで拭きながら現れて、「おはよう」って言ってきた。

私も「おはよう」って言いながら体を起こすと、ひろくんがニヤつてした。起きた拍子でシャツが落ちて上半身裸の私がひろくんの目に止まる。

「キャー」慌てて、シャツで体を包んで、「エッチ」って言ってひろくんを睨んで頬を膨らます。

笑いながら「結衣もシャワーを浴びてきたら」って言われ、シャツで体を包みつつシャツを引きずりながら、バスルームに向かった。

向かう途中で抱きし締められて甘いキスをされると、すこし腰砕けになった。ひろくんが腰を支えてくれたのでへたり込まなくてすんだ。

ひろくんが「一緒にはいるうか？」なんて言ったので、慌てて首を横に振ってバスルームに駆け込んだ。

シャワーを浴びて、きつちりと目を覚ます。服を着てリビングに戻ると「朝食に行こうか」って言ったので、「うん」って、元気よく返事をして、ひろくんの腕に捕まりレストランに向かった。

朝食には少し遅い時間だったけど、結構人がたくさん居た。カップル・夫婦連れ・親子連れ三者三様でニコニコしている。

カップルのほとんどが皆眠たい顔をしていた。私たちも思わず一緒にアクビがでた。昨日の夜を思い出し顔が赤くなり下を向いた私だった。

朝食を取っていると、昨日ケーキを渡したシェフが現われて、挨拶をしてきた。「昨日のケーキはどうでしたか？」って、ニヤって笑った。

ひろくんが「しゃれたことをするんですね、オーナーの心遣いに感謝します」ってお礼を行った。

「いいえ。このアイデアは奥様からです。このアイデアを生かそうと奥様にアイデアを使う許可をいただきましたくお願いに参りました」って告げる。

私は思わず「????」だった。そこにマネージャーが現われ、今回のオプションに付いてのアイデアの話を少ししてから、「事務所でお待ちしております」って言われた。

朝食を終え、しばらく休憩してから、ひろくんと一緒にマネージャーさんの元へ向かった。

内容はイベント用に手作り品などを持ち込み出来るアイデアでケーキなどはシェフが実地指導して手作りするって事だった。

発端はケーキを持ってきてくれたウェイトレスさんの「良いな手作りなんて、思い出に繋がるけど……でも私はケーキになんか造っ

たことが無いし・・・」って発言が元になったらしい。

こちらは、無理やり持込を頼んだぐらいで恐縮していたのに、ビックリした。「どうぞご自由に」って言うと、恐縮し「来年から、お菓子作りなど手作り教室を始めますので、参加ください。もちろん参加費は無料にいたします」ってマネージャーさんから言われる。

「ありがとうございます」ってお礼を言って、フロントでチェックアウトしホテルを後にした。

マンションに帰る途中に遠回りをしてスーパーに寄って腕を組みながら食材の購入をしてカップルぶりを発揮してマンションへと帰っていた。

しばらくぶりの二人での買い物に心がウキウキして、マンションに帰ってもルンルンの私だった。

マンション付近ではひろくんと腕をつなぎながらの買い物なんかは到底無理だから、遠くのスーパーに寄って貰って正解だった。

夕食は二人して一緒に作って楽しく過ごせた。

クリスマスのイベントが終わった。身も心も繋がったクリスマスイブだった。

白い恋人たち（お誘い編）

白い恋人たち（お誘い編）

クリスマスから私たちは毎日一緒にベッドで寝るようになった。

ひろくんが横に居るせいでほんわかと眠りに入れる。でも寝始めは二人ともきちんと寝てるんだけど、朝目を覚ますと、なぜか私は抱き枕状態になっている。

でも心地よいので、時々私は私も抱きつくことにしている。

夕ご飯が終わり、ひろくんとリビングでテレビを見ています。「結衣。電話だよ」ってテーブルの上に置いた私の携帯が光っている。

相手を見ると、中学時代の菜緒子からだった。「もしもし。菜緒子。珍しいね」って電話に出た。

菜緒子「結衣。今いい？」

結衣「うん！いいよ。今丁度テレビを見てるところなの」

菜緒子「クリスマスはどうだった？ちゃんと渡した？」

結衣「もちろん渡したよ」

菜緒子「如何だった、彼の反応は？」そんなことを言われたが、ひろくんが横に座っているので、言えない。

結衣「へへへ・・・」あいまいに答える私。

菜緒子が小さな声で「彼。そばに居るの？」

結衣「ううん・・・居ないよ」こう答えるしかなかった。

菜緒子「両親とじゃあんまり大きい声で言えないね。でも喜んだ？」

私は、ひろくんを見て、赤くなりながら「めっちゃ喜んだよ」って答えた。

菜緒子「良かったじゃない。今度会わせてよ、皆で合同デートしようよ」

結衣「菜緒子。本題は？」菜緒子はいつも違う話をして中々本題に入らない。

菜緒子「御免・御免。結衣、アルバイトしない？」って聞いてきた。

結衣「アルバイト？・・・」って私は、ひろくんの顔を見ながら言った。

携帯を聞いている反対の耳に、ひろくんが「内容と期間を聞きなさい」って言うてくれた。

結衣「アルバイトってどんなの。それと何時からどのくらいやるの？」

菜緒子「御免。最初に言わなきゃね。内容はペンションの手伝いで、期間は28日から3日までなんだ。正月で忙しいんだって」

結衣「ペンションの手伝い？」

菜緒子「そう、手伝いなんだけど、実を言うとね、お母さんの従兄弟が長野のスキー場でペンションをやってたんだけど、改築して大きくしたんだ」

「でもね、正月に旨くアルバイトが集まらなくなっちゃって、私に助けを求めた、って言うのが理由なんだ」

結衣「ふう〜ん。菜緒子の親戚ってペンションやってんだ。アルバイトって何するの」

菜緒子「うん。交代制らしいんだけどメインはウェイトレスなんだって、ゲレンデの横に立っているから、改築した際にレストランを大きくしたんだって。売店もあるので、売り子さんにもなるんだよ。でもね、空いた時間はスキーしてて良いんだって、結構空き時間が有るらしいよ。しかも仕事は3日までだけど5日まで泊まって良いんだって」一氣にまくし立てた。

「裕未や佐織も手伝ってくれるんだ、しかも、終わった後、皆彼氏に来るんだって、結衣も彼氏を誘って行こうよ。」って誘ってくれた。

結衣「う〜ん。聞いてみるけど・・・」私は、ひろくんが気になりすぐに返事が出来ない。

菜緒子「結衣。頼んだよ、絶対にね」って念を押した。

結衣「聞いてみるけど、駄目だったら御免ね」

菜緒子「がんばって、説得してね。いい返事待ってるから、じゃあね」

結衣「ううん・・・」電話を切った。

ひろくんが「どんな話だった」って聞いてきたので、菜緒子の話をそのまま話した。

「結衣。どうしたい。アルバイトやって見たいかい」って聞く。

私は、旧友との話が楽しく「一回ぐらい菜緒子たちとアルバイトしてみたいな」って答えた。

少し考えて、ひろくんは「これも勉強かな・・・友達に彼氏も一緒なんだろう、3日あたりに俺も行ってあげるよ」ってOKを出してくれた。しかももしか来ってくれるので、菜緒子に自慢できる。

私は「ありがとう」って答えた。

「そういえば、結衣ってスキー出来る？」って、ひろくんが聞きました。

「少しぐらいは・・・小学校のときにお父さんが何回か連れて行ってもらったよ」って答えたら、「俺が教えてやるよ。それまでは変な虫を近づけるなよ」って言う。

「はあ・・・なに？変な虫って」って聞くと、ひろくんは苦笑して「もう良いよ、諦めた。はじめから一緒に行こうか」って言うてきた。

「やだよ。菜緒子たちに恥ずかしいもん。菜緒子たちの彼氏と一緒に
の日で良いよ」って断った。

次の日に弘子に逢って、アルバイトの話をしたら「良かったじゃない。
旧友と遊んできなさい」ってお姉さま的な発言で背中を押され
た。

一緒に映画を見た後、ファミレスで一杯長話をした。

もちろん、待ち合わせは弘子を待たせてしまった。（ひろくんの約
束だもの）でも、よく事情を知っている弘子は笑って許してくれた。

アルバイトに行くとお正月に、ひろくんの実家に行けなくなるので、
お正月に來れない事を話をする為にひろくんと実家に向かった。

お義母さんに、アルバイトの件をお話すると「若いうちは、なん
でも勉強よ。楽しんでらっしゃい」って言ってくれた。

バイト先を聞いた、お義母さんの目がキラッと光ったのを私は見落
とした。ひろくんはそれを見逃さず、お義母さんに苦笑していた。

お義母さんが「ウェアは私が見立てるわね」って言われ、後日最
新のスキーウェアが私の元に届いた。

今日は27日。私は菜緒子の家に行こうと最後の準備をしていると、ひろくんが「待ち合わせの場所まで送ってやるよ」って言ってくれた。

待ち合わせの駅に着くと、もう菜緒子が待っていてくれた。でも駅前のロータリーは車が一杯で、ひろくんは菜緒子に一言言っていると私を下ろして後ろの車にせっつかれるように帰って行った。

菜緒子のおじさんが私の荷物を車まで運んでくれて「紺野さん、アルバイトを引き受けてくれてありがとう」ってお礼を言われてしまった。

私は「こちらこそ、宜しくお願いします」って頭を下げた。

おじさんの1BOXカーに乗ると、後部座席には裕未と佐織がもう乗っていた。

私が乗り込んで菜緒子が私の横に乗ると、後ろから「結衣の彼氏ってどんな人だった」って菜緒子に聞いてきた。

菜緒子は「チラッと見たただけだけど、凄くカッコ良さそうな人だったよ」って言う。「早く見たいな」結衣の彼氏」」ってハモって言った。

私は「いいよそんな事気にしなくとも」って真っ赤になって言った。

「だって気になるじゃん」「そうだよ、そう」って二人で盛り上がっている。

おじさんが「出発するぞ」って言われたので、私と菜緒子はあわててシートベルトをした。

おじさんが運転する車は都会の町並みを抜け高速道路で一路長野のペンションへと向かった。

白い恋人たち（バイトスタート前編）

白い恋人たち（バイトスタート前編）

私たちを乗せた菜緒子のおじさんの車は休憩のため高速道路のサービスエリアに寄っている。

四人して、エリア内の売店でキャピキャピ騒ぎながらみやげ物やさん内を徘徊する。

佐織が「ねえ。あの人たち私たちを見てるよ」ってこそっと伝えてきた。

横目で見ると、四人組の大学生らしき人たちが私たちを見ていた。さらに菜緒子が「あっちにも、三人組の人が見てるよ」ってすこし笑った。

私たちがソフトクリームを買ってテーブルで休憩していると、その四人組が私たちに声を掛けてきた。

「ねえ、君たち何所に行くの？」

裕未が私の耳元で「結衣。ナンパだね」って言うと、思わず「え・・」って声を上げた。慌てて、裕未に口をふさがれ、もぐもぐする。

菜緒子が先頭に立ち「駄目だよ。私たち全員彼氏いるもん」ってやんわり断りの返事をする。

佐織が、裕未と私に「結構全員イケメンじゃん。ナンパされようか

な」ってこそつと言う。

彼氏暦名が長い裕未が佐織を睨んだ。佐織は「へへへ……」苦笑いだ。

彼らは「何だ、彼氏いるんだ。残念……君たちは高校生かな、俺たち先生の卵なんだ。これか俺らは志賀高原にボードをやりに行くんだ。仲良くしようよ」って言う。

先生の卵って聞いて、すこし安心したのか菜緒子が「私たちも、志賀高原に行くよ、但しアルバイトなんだ」って言う。

「へえ、そうなんだ。何所ですもの、遊びに行っている」って軽いのだ。

裕未が「先生目指してるんでしょう。そんな軽くていいの!!」って強く言う。

「この二人は、目指してるけど、俺とこやつは免許だけ取ろうって、さんだんさ。少しぐらい羽目は外さなきゃ」って口調も軽い。

菜緒子があからさまにいやな顔をする。その時、おじさんが「おい、出発するぞ」って声を掛ける。

奥に居る人が「あれれ、大林さんじゃないですか」って先生を目指している人が話しかけた。

おじさんが「えーっと君は……」 「やだな、忘れたのですか? 上ノ内ですよ」って話しかける。

「おお、そうだったね。御免旨く思い出せなかった」周りを見て「お前らは何処に行くんだ」って言う。

「俺ら、ボードをやりに行くんですよ。おじさんのペンションとは離れているけど、遊びに行きますよ」って笑いながら話した。

おじさんは腕時計を見て「お！、悪い遅くなるからお先に」って車に向かう。私たちも「じゃ」って慌てておじさんを追いかけた。

残った彼らは口々に「一人飛び切り可愛い子がいたな、ぜひとも親父さんのペンションに遊びに行こう」って話し合っていた。

私たちの話を盗み聞きしていた、何組かの男のグループも同じようなことを思っていたとは、ぜんぜん知らない私たちだった。

この話でペンションに人が、ごった返すのは数日後の話だった。

車の中で、おじさんが彼らの話をしてくれた。「あいつらたちは、以前にアルバイトをしてくれた連中で、仕事はがんばってくれるのだが、軽い連中で、すぐ一緒にアルバイトしていた子をナンパしようとするので、いつもしかってばかりだった」って話してくれた。

「でも、根は悪い連中で無いから、時にはアルバイトの女の子をナンパから守ってことも有ったよ。少しは下心もあったようだが。ははは」って笑った。

菜緒子が、「先生の卵だって言ったよ」って言う。「もうあいつ等は就職か、時はたつのは早いな」って、驚いたようだった。

車は高速を降りて山道に入る。道路も回りも雪で覆われて、白銀の

世界になっていた。おじさんは巧みなハンドルさばきで、まるで普通の道を走るように駆け上って行った。

大きな駐車場の淵に車を止めると、二台のスノーモービルが私たちの車に横付けされた。なんと、乗っている人は女の人だった。

菜緒子がさっさと降りて「おばさん。来たよ」って声を掛ける。女の人は「奈緒ちゃん。はるばる、ありがとうね。皆も無理言って御免ね」って私たちににも声を掛けた。

私たちは、早速一番後ろのそりに荷物を載せて、座席に座った。

お婆さんは「行くわよ」って声をかけて、勢いよくアクセルを開けた。すごい音ともに、ぐんぐん真っ白なゲレンデを登って、おじさんが経営するペンションに到着した。

ペンションはすごく大きかった。特にレストランが大きく2階部分の半分が吹き抜けで開放感もある。

一階がレストランと厨房で二階が売店と貸しスキーなどでその上が宿泊施設だ。新築ですごくきれい。

お婆さんは、裏口からペンションに入り。三階の大広間で休憩中の何人かと顔合わせする。

迎えに来てくれた、もう一人の女性はお婆さんの妹さんで小田 幸子さんって言う人だった。

厨房には幸子さんの旦那さんとおじさんがメインで料理を作る。後のお手伝いはパートのお婆さんが6人での交代で常時は2人、ウエ

イトレス役は私たち四人と地元的女子高校生3人と力仕事のウエーター兼雑仕事役の男子高校生3人だそう。後夕方から少し人が来るそう。

お婆さんが、私たちに料理が少しは出来る人は？って聞いて来た。おずおずと手を上げると休憩していた地元の女子高校生の一人が「私もいい」って手を上げた。

私と地元の女子高校生が厨房に連れて行かれて野菜のカットの試験をやらされた。彼女が先にキャベツの千切りを行う。

お婆さんは「翔子ちゃん旨いわね」って褒めた。次は私の番だ。お義母さんに鍛えられた腕を発揮する。さくさくさくスムーズなりズムで野菜をカットした。

「あらまあ」お婆さんがびっくりした顔で私に「結衣ちゃん。貴女ってすごく旨いのね、誰に教えてもらった」って聞いてきた。

私は「お義母さんに、鍛えられました」って答えた。お婆さんは「すごいわねあんたのお母さん」って豪快に笑った。

「じゃ。二人は厨房が忙しいときはお願いね」って言って皆で大広間に戻った。

奈緒子たちが私に「あんた。中学の時にはなにも出来なかったじゃない。いったいどうした？」って不思議がられた。

私は、ひろくんの為にいっぱい覚えたとは言えず「へへへ・・・」っていつもの曖昧な返事で返した。

地元組の高校生たちは以前から仕事だけど、私たちは明日からなので部屋に入って休憩することにした。

佐織が「みんな良い人たちみたいだね。明日からがんばろうね」って、まず全員でラフな格好に着替え始めた。

私を除いて皆はミニスカートだった。「なによ皆。何か意識してない？」って言うと、全員が「これくらいのかっこうしなきゃ、あんたに男ども、全員もってかれちゃうよ。だって結衣かわいすぎ」って言われる。

着替えたので、全員でペンション内を回ることにした。2階の売店には一緒に野菜を切った翔子ちゃんがレジに立っていた。

売店には地元のお土産などがいっぱい並べてあり、裕未が「これ可愛い」って地元のキャラクターのぬいぐるみを手にとって言う。

翔子ちゃんが「それって、人気があるのよ。皆結構買っていくわ」って話す。私たちが見ている間もカラフルなウェアを着たお客さんがいろいろなものを買っていった。

二階から下のレストランを覗くと、やはりかなりの人が休憩をしていた。

大広間に行くと、男子高校生の二人とパートの女の人が2人、休憩していた。

奈緒子が先に入って挨拶をする「初めまして、私たち、明日から皆さんと一緒に働かせてもらう者です」そう挨拶をすると。

パートの姉さんが「オヤジさんから聞いてるわよ。私は斉藤 美津枝 よろしくね」って告げる。隣の人も「小野田 由紀よろしくね」って言うてきた。

私たちは、頭を下げて「よろしくお願いします」って告げ、奈緒子が自己紹介を始める。

「私は、大林 奈緒子です。四人は中学からの友人で、この二人は同じ高校です。名前はこちらが、右から足立 裕未と隣が西村 佐織で、私の左隣が紺野 結衣です」って紹介してくれた。

すると男性人が「俺。加賀見 雄太よろしく」「俺は佐橋 省三仲良くしよう」って笑って挨拶してきた。

奈緒子は「ゆうくんに、しょうくんね。よろしくね」って、あつという間に親しくなった。

美津枝さんが結衣を見て「貴女。どこかで見たような気がする・・・」私は、ドキっとする。

奈緒子が声をかぶせて「結衣は可愛いからどこかのモデルにチョイ似かもしれないね」ってかばってくれた。

雄太君が柱時計を見て「休憩時間が過ぎちゃったよ」って四人して慌てて大広間から出て行った。

私がモデルをやっていることはここでは奈緒子しか知らない。よく利く機転でばれずにすんだ。

ここにいると皆が休憩に来て四人で旅の疲れ取りしている間に全員

と挨拶が出来ちゃった。

夕方になると夜専用の人が来て食事の支度などする、でも明日からは夜組みはお休みに入りその代わりは私たちだ。

片づけが終わると夜組みは「私たちは正月休みに入るから、後はよろしくね」って手を振って帰ったいった。

おじさんの奥さんが「今日はお客さん扱いだからお風呂に入って、お部屋で遊んでおいで、でも明日からは朝早いから、お寝坊さんしない様に早く寝るのよ」って釘も刺された。

私たちは「はい」って答えて、早めにお風呂に入り部屋に戻った。

部屋の戻ると、恋バナでもしようと思奈緒子が張り切ったが、佐織が「私もうだめ」って、布団を引いて、眠りに入った。佐織はアルバイトが始めての上に、色々気遣いで疲れが出たらしい。

裕未も同じくあくびを繰り返す。私は奈緒子の顔を見て「私たちも寝ようか、朝早いんだし」って話す。

奈緒子も「そうだね。結構早いもんね」ってお休みの準備にかかる。

「奈緒子。明日からって五時半起き？」って聞いた。

「ううん。そんなに早くなくてもいいよ。六時過ぎでも十分間に合うって、佳代子おばさんが言ってたもん」って言った。

佳代子さんはペンションオーナーの奥さんの名前だ。仕事は速く頭が切れて経営にたけてるらしい。

「わかった。六時には起きるようにするわ」って、目覚まし時計をセットして、皆で「お休み」って言って、眠りに入った。

佐織たちはペンションに着いてから、かなりバタついたりしたから、だいぶ疲れたようだけど、私は、葵家に慣らされているのか精神的にもあまり疲れなかった。

布団に入ってボケーっとしていると、奈緒子たちの寝息が聞こえてきた。私も寝よっとして目をつぶった。

明日からは、アルバイトのスタートだ。心で「がんばろう」って気合を入れて、「ひろくん。おやすみ」って眠りに入った。

白い恋人たち（アルバイト本番編 その1）

白い恋人たち（アルバイト本番編 その1）

ピピピ目覚まし時計の音がする。私は手を伸ばしてスイッチを切ると、いつもの背中に人肌の暖かさが無い。

ももぞと布団の中を探り、手を握る。「あれ？」感覚が違う、いつものガッチリした手でなく、私と同じくらいだ。

思わず手を離し、慌ててその方向を見ると、奈緒子が寝ていた。

「ああ・・・そういえば、奈緒子たちと志賀高原のペンションにアルバイトに来たんだ」って心でつぶやき、ゆっくりと布団の中から出た。

パジャマを着替えて、顔を洗いにいこうとすると、奈緒子が目を覚ました。「おはよう・・・」寝ぼけ眼で奈緒子が挨拶した。

「おはよう。六時だよ。どうする？・・・佐織たちともう少し寝る？それとも皆を起こす？」って聞いた。

「あんたが戻ってくるまでは寝るわ。戻ってきたら全員を起こしてね」って言って、布団をかぶった。「わかったわ」って小声で答えて洗面所に向かった。

冷たい水で顔を洗っていると、しっかり目が覚める。後ろから「あら、結衣ちゃん早いわね」って声をかけられた。

振り向くと、オーナー夫人の佳代子さんが立っていた。「おはようございます」って挨拶すると「おはよう。奈緒子たちは？」って聞いてきた。

「奈緒子は私が戻ったら起こしてねって言って二度寝してます」って言うのと「あいも変わらずね」って少し笑った。

私は「奈緒子たちを起こしたら、朝食のお手伝いします」って言うのと「悪いわね、奈緒子とは大違いだわ」って笑いながら「じゃ、下に下りてきて」って言って佳代子さんは階段を下りていった。

さっそく奈緒子たちを起こすと「私は、先に行くね」って部屋を出て厨房に向かった。

奈緒子たちは、「え・・・」寝ぼけ眼で結衣を見送った。裕未が「さあ起きよう」って掛け声をかけて、もののろろと布団から這い出した。

厨房に着くと、宿泊者の朝食の準備でバタバタしていた。「おはようございます」って声をかけると皆さんが口々に「おはよう」って挨拶してきた。

「すみません、私は何をやればいいのでしょうか」って尋ねると、おやじさんが「あれ？朝食手伝ってくれるの？」って言う。

「もちろんです。何からはじめます？」って言うのと、「ごめん、まづテーブルを拭いてから、宿泊者の看板を置いてくれるかな。場所と看板は、その事務机の上に置いてあるから」って、指示してくれた。

「はい。わかりました」って、私は早速、テーブルを拭くべく準備を始めた。

それが終わると、今度はテーブルに食器の準備を整える。そのころになったら、奈緒子たちが「おはよう」って言いながら降りてきた。

佳代子さんが「結衣ちゃん、先に奈緒子たちと朝食を済ませて、お手伝いをお願いね」って、私たちの朝食の用意を始めた。

私が、運ぶのを手伝っていると、奈緒子たちも慌てて食事を運んでそして「いただきます」って朝食を食べ始めた。

食べている間に、佳代子さんが「奈緒子は一度売店やったことあったね。だから売店よろしく。結衣ちゃんはそのまま宿泊者の朝食の準備の後はレストランのモーニングのウェイトレスをお願い。裕未ちゃんと佐織ちゃんも同じくウェイトレスさんやって貰おうかな」って、てきぱき指示をした。

このレストランはゲレンデ内レストランはセルフタイプがほとんどだけど、ここは接客式なのです。なぜかって言うとオーナーのこだわだそうだ。

私は宿泊者の朝食の準備が終わると、ウェイトレス用の衣装に着替えるため裕未たちと一緒に衣裳部屋に行った。

佐織が「メイド服かな」って言うもので、私は文化祭を思い出してしまった。ロッカーを開けるとメイド服ほどないけど、可愛いウェイトレスさん用の衣装が入っていた。

どっちかというと、ファミレスの衣装に似てた。三人して着替えて

「この服結構可愛いね」って皆で話しながら店に出て行った。

佳代子さんが私たちに「いいわね。皆似合って可愛いよ」って褒めてくれた。三人にウエイトレスの経験を聞かれた。

私は「文化祭で少しやったぐらいで、お店の経験は有りません」って答えた。

裕未は「私。一年生の夏休みと冬休みに＊＊のファミレスでアルバイトしてました」って言う。と。「よかった。経験者さんがいると説明が少なくてすむからね」って、「じゃ貴女はレジをメインにお願いね」ってレジを手で指した。

佐織は「私はレストランじゃないけどお母さんの実家が喫茶店なので時々手伝ってます」って言う。

佳代子さんは「これまたびっくり。奈緒子っていいメンバーを集めていたのね」って笑った。

厨房とレストランの間で、お客さんの挨拶などを教わってから、三人でレストランの配置に着いた。

9時に開店すると、徐々にお客さんが入ってくる。「いらっしやいませ」掛け声をかけて座ったところで、お水を持って行き注文をとる。

裕未や佐織は堂に入って動きもスムーズだ。私は経験がないので、おろおろ状態で挨拶や注文をとる。

しばらくすると、やたらと私によく指名がかかる。心で「えー・・・

また」って思いながらも、顔は微笑を崩さず注文をとった。

おろおろの私を佐織がフォローしてくれる。あるテーブルに注文の品を持ってゆくと「名前何って言うの、君って高校生？」って質問するのが多くなる。

そんな時も、佐織が「彼女は彼氏がいるので、だめですよ」って私の左手を見せてけん制してくれる。

10時半に休憩を取ると、佳代子さんが「結衣ちゃん人気があるわね。ナンパ野郎は大変だと思うけど、うまく断ってね」って苦笑していった。

でも心の中では「これで売り上げ倍増だわ」ってほくそ笑んだが、そんなのは序盤戦だけとは佳代子さんたちも予想できなかった。

お店に戻ると、裕未が寄ってきて「結衣。あんたの指名が多すぎ、そこらかしこで」あの子は？どうした」って聞かれ続けよ」ってため息をついた。

昼前からは地元の女子高生が来て私たちと交代した。地元の高校生たちは「今日は少し人が多いね。お正月休み言っても多すぎの気がする。去年はこんなじゃなかったもの」ってびっくりする。

でも昼ごろになると落ち着きを見せた。私たちは「早めに昼食を取ったら遊びに行っていていいよ」って言われた。

大広間で昼食を取った私たちはスキーの準備をして、外に出た。

おじさんたちに貸しスキーを用意してもらい、意気揚々としてゲレ

ンデに向かった。

リフトのフリーパスで滑りたい放題なんて思ったが、四人とも初心者域を出ず尻餅の連続だった。

今年はよく冷えてゲレンデはパウダースノー状態で尻餅についても痛くなく、四人でキャッキヤいながら楽しんだ。

四時過ぎて戻ると、女子高生たちが疲れた様子でため息をついていた。

昨日友達になった翔子ちゃんが理由を話してくれた。

「今日はね。いつもより大勢の人が訪れたんだけど、なぜか多くの人がキヨロキヨロしてたのよ。そしてね「午前中にいた髪の長い子はどうした」って、私たちに尋ねるのよ。私たちはあまり事情を知らないから「わかりません」って言うんだけど、注文を聞きたびにいろいろな人が言うので参っちゃった」ってお手上げのポーズをとる。

「まあ、私たちもナンパで声を掛けられるけどこんな経験は初めてよ」って溜息をついた。

「あっと」周りが暗い・・・私は度付きサングラスから丸めがねにかけ掛ける。

祥子の友人の明美さんが、私を見て「あんだ。どこかで見たような・・・」って言うと、奈緒子が「長い髪は結構いるから間違えやすいよ」ってフォローしてくれた。

私が、ジュジュのモデルをしていることは奈緒子しか知らないし、皆に言わないでお願いしたから話を違う方向に振ろうとしてくれた。

でも、私が着ているウェアを見て「これって、コウノジュンデザインじゃない。それも昨日発表したばかりのはずなのにどうしてあなたが着ているの？」って今度は違う疑問をなぜかけた。

「これはお義母さんに貰ったんだけど」って言う。明美さんが「お母さん？・・・こんなのが手に入るってお仕事は？」って聞いてきた。

しまった・・・私は何も考えずお義母さんから受け取って着ていた。ゲレンデにいる時に周りから見られているのは少しは気づいたけど有名デザイナーのウェアだとは、気づきもしなかった。

慌てて「衣料関係やってるので手に入ったんじゃないかな」って言う。うと。「そうなの？」って疑問を持ちながらも、なんとか納得したみたいだった。

彼女たちの仕事は上がりなので「後よろしくね」って、帰って行った。

ここはナイター設備もあるので宿泊客だけでなくナイターのお客さんも立ち寄るので裕未と佐織がレストランを手伝い、私は奈緒子に売店の仕事を教えてもらい、二人して接客にあたった。

ほとんどは明日帰る宿泊のお客さんたちで奈緒子のに教えてもらった、レジの扱いで詰まりながらも対応した。

こんな具合で、何とか一日目をクリアした。

全員が結構疲れたため、テレビを見ることもなく、早々に眠りに入った。でも奈緒子だけは佳代子さんに呼び出されて下に下りて行った。

下では「奈緒ちゃん。彼女ってどういう人？明日から少し考えないといけないみたいだけど・・・」って結衣の事を奈緒子に尋ねる。

「佳代子おばさん。実は彼女は・・・」

白い恋人たち（アルバイト本番編 その2）

白い恋人たち（アルバイト本番編 その2）

奈緒子サイド

「佳代子おばさん。実は彼女は・・・」って結衣に付いて話し始める。

「中学のときの親友なんだけど、裕未や佐織は同じ高校なんだけど彼女は別の高校へ行ったのよ。それで高校に行ってからスカウトに逢ってモデルをやるようになった。でも本人はあまり積極的じゃないみたいなの」って言うのと。

佳代子さんが「モデルのそれって、たぶんジュジュじゃない？」って言う。「そのとおりよ、でもその事は私しか知らないんだ」って告げる。

「やっぱり・・・なにげにお客さんが話していたのを聞いたのよ」「ねえねえ、あのこってジュジュの白鳥 葵に似ていない」ってね」

さらに「最初に見たときにどこかで見たような気がしたんだ」とも言った。「え・・・佳代子おばさんもジュジュ見てるの？」ってびっくりする。ファッション雑誌のジュジュの読者ターゲット層は中高生を指して発行されている。

「やゝねえ、私の友達も結構見てるって話よ。あの雑誌って主婦層にも結構人気があるんだから」って笑った。

「私たちは、中学から結衣を見ているから、あまり意識がないけど知らない人から見ると判るかも。だって裕未たちはきずかないんだもん」って話した。

佳代子さんは「明日からは結衣ちゃんは裏方に回そうかな。昼食時はアルバイトの子が大変だったらしいのよ」って悩んだ顔をした。

「いいと思うよ。彼女裏方でも平気だから」私が言うと、佳代子さんは「そうだね、彼女料理も上手のようだしそうしようかな」

「でも、いつの間にか料理が上手になってたんだけど。不思議なんだ」って疑問を佳代子さんにぶつける。

「そうね。でも彼女はたぶん毎日家で作っているみたいな感じだよ。いわゆる主婦ってやつね」って笑う。

私は「結衣が主婦？・・・考えられないよ」って不思議がった。「でも、手の動きは主婦そのものなんだけどね」って佳代子さんがいまさらに言った。

二人して結衣の調理していた姿を思い出し「ぶ・・・」って笑って、「悪いけど、結衣ちゃんには裏方に回してもらおうわ。よろしく伝えてね」って解散した。

奈緒子サイド 終わり

今日も朝から昨日と同じように朝のお手伝いから始まる。

朝食の準備が終わると、佳代子さんから「結衣ちゃん。今日は厨房のお手伝いをお願い」って言われて、厨房へと入っていった。

レストラン内はお客さんでごったかえしており、裕未や佐織が忙しく走り回っている中厨房の私は比較的楽チンだった。

昼の少し前から厨房が忙しくなる、地元の女子高生たちと休憩していると私が厨房に呼ばれた。今日はかなり忙しくなりそうながんじ。

そして私は、小田さんの旦那さんの指示に従い料理のお手伝いをする。そして様子さん達は着替えて裕未たちと一緒にウエイトレスを始めた。

なにげに、店内を見ると座席は満員で外にも待っている人がいる様だった。「本当に今日は忙しいようだ」って気合を入れなおした。

黙々と、調理していると。厨房に佐織が現れて佳代子さんになにやら耳打ちをした。

佳代子さんが困惑の顔をした。そして私のそばに來ると「結衣ちゃん」って声をかけられた。

「結衣ちゃん。相談があるんだけど、今レストラン内が大変になつての」って困った顔をする。

「え、何故ですか？」って聞くと、佳代子さんが事情を説明してくれた。

「結衣ちゃん。奈緒子から聞いたけど、貴女モデルやってるんですって」って言われた。

私は、小さく「はい」って答えると、佳代子さんが「昨日貴女がウエイトレスやったときに、貴女がジュジュのモデルじゃないかって、ことが噂で流れたらしいのよ。しかも明美ちゃんが「結構似てるじゃないかな」なんて言ったもんだから、さらに口コミが広がっちゃたみたいなのよ。」って苦笑した。

「では・・・私は如何すれば良いのでしょうか？」って尋ねると。

「貴女をモデルとして出すと、雑誌契約などで引つかかるはずだから、全面否定ね。何とか違う人ってことにしなきゃね」って妙案を練る。

「私。お義母さんに電話してみます」ってポケットから携帯を出してお義母さんに電話を入れた。

佳代子さんは「お母さんには私も事情をお話するわ」って言う。

数回のコールでお義母さんが出てくれた。

結衣「もしもし。結衣です」

お義母さん「あら、結衣ちゃんめずらしいわね、どんな御用かな」

結衣「お義母さん。今、長野のペンションでアルバイトしてるんだけど」って、今起きている様子を手短かに話した。

佳代子さんが「結衣ちゃん。代わってもらえるかな」って言ったので、私は携帯を渡した。

佳代子「結衣さんのお母さんですか。このたびは大変なことになってしましまして申し訳ありません」

お義母さん「いいえ。アルバイトの話を結衣から聞いたときに、こうなることは予想が付きましたわ」

佳代子「ええ!!・・・」びっくりして声を上げる。

お義母さん「大丈夫ですよ。ちゃんと手は打ってあります」って、なにやらいろんな話を佳代子さんに話したようだ。

佳代子はびっくりしながらも「すみません。ではそうさせてもらいます。よろしくお願いします」って私に携帯を返してくれた。

お義母さん「結衣ちゃん。佳代子さんの言うことを聞いて行動して頂戴。お話は全部しといたから心配しないように」

結衣「はあ・・・判りました」って携帯を閉まった。

お義母さんと、佳代子さんがどんな話をしたのか全然判らず、佳代子さんの指示を仰ぐことにした。

佳代子さんは「様子ちゃんと交代してもらうことにするわ。貴女はウェイトレスの服に着替え来て頂戴。」って言われて、私は慌ててロッカールームへと向かった。

着替えを終えて下に降りてゆくと、様子さんもエプロンを調理用の

ものと着替えなおして調理場へ入ってゆくところだった。

「あ、結衣ちゃん。お店の中すごいから頑張ってね」って声をかけられ「うん。解った」って答えた。

お店に出ると。3／4位のお客さんが一斉に、私を見た。思わず苦笑いをした私だった。佐織が私に駆け寄って「来てくれたんだ。助かるわ」って、ホッとした顔を見せた。

祥子さんが「これ、7番テーブルに」って、ワゴン車に載った料理を運んでいった。

ざわついた中、ワゴン車で料理を運んで「お待たせしました」って料理をテーブルに並べ「ごゆっくりどうぞ」って、また次の料理を運ぶように戻る。

佐織は言ったように、みんなの視線が痛い……。

女子高生と思われる、テーブルに行った時「あの……貴女ってジュジュのモデルの白鳥さんですか」って聞かれた。

う……言葉に詰まる。でもこういうとこの対処を佳代子さんから聞いて「違いますよ。でもよく似てるってみんなに言われます」って答えた。

周りから、ため息が聞かれる「えー違うんだ。でもそっくりじゃない」「そうだね。でもモデルさんがこんな所でウエイトレスさんをやるわけないよ」って、私の一言で、大きく波紋が広がった。

でも男性陣からは「そうだな、モデルさんが居るわけないものな。

でも似てるだけあって、可愛いや」「よし！俺交際を申し込もう」
って言う人が増えた。

敷居が高いモデルさんじゃないってことで、一気に押し寄せた感じだ。予期しない弊害に佳代子さんが慌てる。

料理をとりに戻る私を捕まえて、佳代子さんが「ごめんね。結衣ちゃん、余計大変になっちゃったみたいね。」って、手を合わせて謝ってくれたけど、思わず「大丈夫です」って答えてしまった。

でも内心は「あゝん。どうしよう」動揺しまくりだった。その時、奈緒子が「結衣。彼氏が居るのでしょうか。きちんと断らないとだめだよ」って言うってくれて、なんとか私は「うん。解った」って答えたが言うことができなかった。

お誘いに「お仕事中ですから」って、まずは一般的回答をする。もちろん終わりの時間など聞かれるが「プライベートは申し分けありません」って、答えなかった。

本人じゃないってことが知れわたったおかげで午前中よりは少しはお客さんが減ってきた様な感じだった。

全員がアップアップの一日が終わり、アルバイト全員が集められて、佳代子さんが今後の話をするようになった。

佳代子さんが全員に私の秘密をばらす。「みんな。薄々気づいていると思うんだけど、彼女は本物です。これを知っていたのは奈緒子だけなんだけど、ここまで大きくなると皆さんには隠せないと思います。ましてお話します。」って苦笑した。

皆口々に「やっぱりね。めっちゃ似てるもん、”あ！本人か・・・”でも、そっくりさんって言った時はビックリしちゃった。」って、意外と驚かなかった。

佳代子さんが「彼女が白鳥　葵ってことは、正月中は秘密でお願いします。」って頭を下げたので、私も一緒に頭を下げた。

男子高校生からは「OK。でも一回はデートしたいな」って、全員が言った。すかさず奈緒子が「だめだよ。結衣はちゃんと彼氏が居るんだから」ってだめを出す。

女性陣は「良いけど。友達に自慢できるし・・・でも仕事忙しすぎ、もうくたきたよ」って、笑いながら言う。

佳代子さんは「忙しいのは分る、今日も2日分の食材が無くなっちゃった。仕入れが大変になりそうなのよ。でも売り上げ倍増で、あなた達のアルバイト代も五割り増しにするわ。しかも」ってところでいったん区切る佳代子さん。

そしてビックリするお話を始めた。

白い恋人たち（アルバイト本番編 その3）

白い恋人たち（アルバイト本番編 その3）

佳代子さんはビックリする話を始めた。

「皆聞いてくれる。実はね、ジュジュの企画でこのペンションでコマージュの撮影をするって話が在ってね。もう受けちゃったんだ。」って、まじめな目をして語る。

私を除く全員が「えー！！」って、言った。私は下を向いて「お義母さんに、やられた」って、心の中で叫んだ。

さらに、佳代子さんは「明日、打ち合わせにジュジュのスタッフが来るから、当然皆さんも出演よ！よろしくね。」って笑った。

全員の、顔色が変わる。そして皆が一斉に私を見て「結衣！」「紺野さん」って私に言い寄った。いつも強気の奈緒子も呆れ顔になっていた。

私は両手を合わせて「皆さん。御免なさい、お義母さんは一度言い出すと絶対曲げない人だから、お願いします」って頭を下げた。

佳代子さんも「よろしくね」って、お茶目に舌を出した。「はく・・・」全員がため息をつく。

奈緒子が「結衣のお母さんのお願いらしいから、付き合っただけだよ」って、賛成してくれた。裕未や佐織もうなずいて、残りのメンバーも渋々引き受けてくれることになった。

「では、よろしく」って佳代子さんが解散を告げ、高校生のアルバイトの人たちは帰る支度をはじめた。

帰り支度をしながら様子さんたちが私に「今年はすごい正月になりそうだね」って、笑って言ってくれたので、少しほっとした。

そして皆は、なにやら口々に今回の事での雑談をしながら岐路に歩いていった。

跡に残された私達は慌てて、夜の仕事に入った。

宿泊客からも私に質問が飛んだのは当然のことだったが、お客さんには、ばらすこと大変になるので「友達にもよく言われるんですよ」って、他人を装った。

部屋に戻ってから、裕未と佐織に質問攻めに在ったのは当然のことだった。もちろん黙っていた、奈緒子も槍玉に上がったから、少しは攻撃が少なくなったのは、助かった。

「こら！ 結衣・・・あんた私達に黙って」って強い口調で佐織が言うのと、「まあまあ、あまり強く言うことはないじゃない」って奈緒子が助け舟を出すと「あんたも、知ってて！！」って今度は、奈緒子が裕未に怒られる。

私は、奈緒子に話したことを佐織達に話した。「あのね・・・」

「だから、あの時変な態度だったんだ」裕未が手芸ショップへ行く時の事を思い出して頷いた。

唯一の救いは、奈緒子たちは私のお母さんに余り会っていないなくて顔の覚えがなく、お義母さんをお母さんと勘違いしているようで、このまま結婚したことは黙っていよう。

そしてトイレに行くって言って、お義母さんに連絡を取り、話を合わせてもらう事にして貰った。

「では、お義母さん、仕事は引き受けるから、話を合わせるようにお願いします。」って通話をきった。

通話を切った後「あゝつまんない。折角お披露目で脅かそうとしてたのに・・・まあいいか、次の機会にしようか。」ってお義母さんは、にやって笑った。

一杯白状させられて「「おやすみ」」って眠りに着いた・・・って言いたいけど明日のことが頭に浮かび私一人だけが眠れぬ夜を過ごし明け方に浅い眠りには入った。

結衣がひろきにアルバイトを話した後の話。

お義母さんサイド

ひろきから電話が入る「もしもし。俺だけど、今年は結衣はそちらに行けなくなかった。結衣が友達に誘われて、アルバイトをやるんだって」

「アルバイト？・・・」

「そうアルバイト。なんでも中学時代の友達に誘われたらしい。」

「ふうん。どんなアルバイト？」

「なんでも、ペンションでウエイトレスだって、長野のスキー場って言ってたな。・・・えっとなんて名だっけな？」ってメモ帳を広げる。

「志賀高原のペンション・ビッグフォレストって言らしいよ」

「ふうんペンション・ビッグフォレストねえ、判ったわ、でひろきはどうするの？」

「予定は未定だよ一度事務所に顔を出したからかな。でも正月明けの四日には俺も呼ばれているから、そこに行く予定だよ」

「わかったわ。」って電話が終わると、早速ニヤニヤしながら、編集部に電話を掛けた。

「もしもし。私だけど、いい案が浮かんだわ」って話し始めた。

お義母さんサイド終わり

ひろきサイド

結衣が友達とアルバイトしたいと言ってきた。俺は社会勉強に思
いアルバイトを許可した。

結衣は友達と一緒にのがうれしいのか喜んでいた。

ちようにいい機会なので社長と今後を話そうと、お袋に正月は帰ら
ないことを電話で告げて次の日に事務所に向かった。

事務所の駐車場に着くと携帯が鳴った。電話の主はマネージャーの
白石さんだった。

ひろき「もしもし。ひろきですが」

白石「あ！HIRO、今どこに居ます？」

ひろき「今、事務所の駐車場に着いたところ」

白石「よかった。今急ぎの事後とが入ったのよ。急いできてくれる」

ひろき「了解」って電話を切って早足でエレベーターに乗り込んだ。

事務所に入って白石さんと合流し社長室に入っていた。

社長室に入ると、満面の笑みを浮かべた社長が居た。びっくりして

思わず二人して後ずさった。

「葵君。今年の正月はどういう予定かな？」って社長が聞いてきた。

「社長。いつも迷惑をかけています。今回は急用って話ですが……」
「って尋ねた。」

「正月は空いているんだろう。君に正月の番組での出演依頼とCM出演依頼が入っている。ともに同じ場所だから移動はなし、ぜひ君にとって依頼なんだ」ってプロジェクターに内容を写した。

「これの依頼主は……」ってプロジェクターに映し出されている内容を見ながら話した。

「ひとつは観光青年団プロジェクトだよ。まあひとつはボランティアアミtainなもんかな」って内容を説明する。

「もうひとつは、バレンタインチョコレート推進協会で」って再び内容をプロジェクターで映し出す。

俺は、見たとたん首謀者が分かり苦虫を浮かべる「はめられた」って心で思う。

俺は呆れ顔で「社長。断れそうありませんね」って両手を広げた。

社長は、にやって笑って「白石君頼んだよ」って告げると、白石さんも「了解しました」って微笑を浮かべた。彼女も依頼人か分かったようだ。

「では。打ち合わせに行ってきます」って白石さんは部屋を出て行

った。

「社長！・・・」笑いながら「すまんすまん。彼女からの依頼は断れないんだ」って両手を合わせる。

そして次の日に事務所を訪れると白石さんが「早速詳細を打ち合わせしましょう」ってやる気満々で俺を迎えた。

白い恋人たち（イベント 打合せ編）

白い恋人たち（イベント 打合せ編）

白石さんが打ち合わせ資料をテーブルに並べながら「奥さんは？」って聞いてきた。

「結衣は今日からアルバイトですよ、さっき駅に送って行ったばかりですよ。」って答える。

「ふうん・・そうなんだ。」って不適な笑いを向ける。俺は何か裏があるのかと怪訝な顔を見ると、ずっと目線をずらしテーブルの上に資料を並べ始めた。

内容はスキー場でのお正月の盛り上がりイベントだった。こんな時期によく決まったものだと感心する。内容はたいしたものではなかったのだが・・・。

白石さんがさらっと説明し素早く片付けて、次の仕事のプレゼン資料をテーブルに並べ始めた。

なにに、俺は並べた順に軽く目を通す。「白石さん。この企画って、まさか・・ジュジュがらみ？」って顔を上げて白石さんの顔を窺がう。

白石さんは微笑を浮かべながら「正解よ。」ってコクリと頷いた。

俺はため息をつきながら「やっぱり・・そんな感じがしたんだ」って言いながら企画書に全部目を通す。

俺は「相手役は？」って尋ねると。「現地調達よ」って真顔で答える。

思わず「そんな顔をしても無駄だよ。ちゃんと確保してあるんだろう。俺の一番知っている人を」って覚めた目で言った。

「やはり、私では誤魔化し切れないわね。ちゃんとオーナーには話を通してあります。人数も確保済みです」って話した。

「相手のメイン役は、まさか・・・じゃないだろうね」って白石さんの口から言わせようとする。「御免口止めされているの、言えないわ」って苦笑した。

「ふーん。まあいいかすぐに解る事だから」って追求をやめた。

白石さんが「出発は明後日です。足はお願いできるかしら」って聞いてきた。

「もうそのつもりでしょう」って笑って答えると。白石さんも笑いを堪えて頷いた。

家に帰る途中に「まあいいや。お袋には、だまされてあげよう」って独り言を言いながら岐路を進んだ。

明後日、俺のセカンドカーで長野に向かう道中に「白石さん。同乗するのはいいけど帰りは？どうするんです」って聞くと。

「あら大丈夫よ。帰りはお邪魔しないわよ。ちゃんとスタッフと一緒に帰るよう手配してあるわ。ふふふ」ってからかいぎにみ笑った。

山道に入ると路面は雪で覆われているけど、極太のスタッドレスタイヤとLSDでスムーズに上ってゆく。

ゆっくり駐車場にとめると、先についていたスタッフが私達を迎えてくれた。

スノーモービルでペンションに向かう。ペンションに近づくにつれ人だかりが増えてゆきペンションの前は人でいっぱいだった。

白石さんに「大丈夫ですか？俺ばれてませんか？」って尋ねると、「おかしいですね、絶対にバレてはいないと思うんですが」って頭をかしげた。

俺達はこそそと裏口からペンション内に入った。

ドアを開け中に入ると、女の人が待っていた。「ご苦勞様です。私オーナーの家内の大林 佳代子です。皆さんお揃いになっていらっしゃいます。三階の大広間へ案内します。」って階段を上っていった。

「こちらこそ、よろしくお願いします」ってオーナー婦人の後を白石さんと追った。

大広間に入ると、青年団の皆さんとジュジュのスタッフが私達の到着を待っていた。

「お待ちせしました。」って挨拶をして中に入る。青年団の女性スタッフがよろめきだす。青年団の責任者が私の前に現れて握手を求めて、「遠いところまで、ありがとうございます。私は今回の責

任者の佐橋です。よろしくお願いします」って挨拶をしてきた。

「いいえ。こちらこそ、よろしくお願いします」って握手した。

彼に案内されて、大広間の上座に案内されてそこに座った。

青年団のスタッフによるイベントの説明を受けて、最終の確認を取った。このイベントを受ける代わりにジュジュの撮影のお手伝いをしてくれるって言うことであつた。

撮影時の場所の確保や人員の整理やもろもろを全部引き受けてくれるらしい。

「よろしくお願いします」って会合を終えた後、なにげに、このペンションの前の騒ぎを聞いた。「佐橋さん・大林さん。このペンションの前の人だかりは何でしょうか？今回のイベントは極秘だと聞いていましたが」って二人に尋ねた。

佐橋さんが「大丈夫です。貴方のことは絶対ばれていません。でもこの騒ぎは・・・たぶん彼女のせいだね」って大林さんを見た。

「佐橋さん。どうせばれちゃうので言うけど親戚の子とその友達がアルバイトに来てるのだけどそのお友達の中にジュジュのモデルの子が居たのよ。HIROさんも競演したことのある、白鳥 葵さんが居るせいよ。でも外部にはそっくりさんって言ってるんだけど・・・口コミでどんどん広がっているようで」って困惑の顔をする大林さん。

佐橋さんや男性陣は、キョトンとするけど青年団の女性スタッフから「やっぱり・・・彼女がアルバイトしてるって本当だったんだ」

って声が聞こえた。

大林さんが「ぐれぐれも、他言無用にてお願いします」って皆に釘をさした。

女性陣が「あとでこそつと合わせてね」っておねだりした。男性陣が「そんなにすごい子なんだ」って言う。「美人じゃないけど可愛いというか、とにかく人気があるのよ」って女性陣の一人が代弁した。

俺は、そ知らぬ顔をして「ふゝん。彼女居るんだ。しかもアルバイト？面白い子だね」って笑った。

その後、佐橋さんの案内で隠密にホテルに入った。

結衣に電話を入れると、大変らしく「そうなの・・・」って声が沈んでいった。

結衣はジュジュの企画を聞いているらしく、俺がこちらに居ることを知っていた。

俺が「夜、こそつと会おうよ」って言う「うん」ってうれしい声が戻り、落ち合う打合せをして電話を切った。

「今年の正月は面白くなりそう」って俺はベットのの上に寝転がった。夕食後、待ち合わせ時間になって、結衣との待ち合わせ場所に変装して向かった。

外ではナイターが行われており、俺達が会っていたくらいではわか

らない状態だった。

ペンションに近づくと、裏口から出てくる結衣を見つけた。手を振ると、結衣も見つけたらしく手を振って俺に向かって駆け出した。

開口一番「ひろくん。会いたかった。」って抱きついてきた。「俺もだよ」ってしっかり抱き寄せてキスをした。

「アルバイト大変なようだね」って聞くと「ううん 大丈夫だよ」って答えてきた。

「どれくらい時間が取れる？」って聞くと「15分〜20分ぐらいかな」って結衣が答える。

「それじゃ、俺の部屋には来れないな」って拗ねると、「私もさびしいんだよ」って結衣が言って俺にしがみつく。

たわいもない話しか出来ず、俺は「メールするわ」って、キスして別れた。

今年はだめかと思った、カウントダウンが何とかかなりそうで俺は意気揚々とホテルに戻って行った。

白い恋人たち（イベント編 前半）

白い恋人たち（イベント編 前半）

次の朝、白石さんがホテルのドアをノックする。

十分に目覚めていた俺はドアを開けると白石さんの後ろにもう一人ワゴン車を持った人が立っていた。

「おはよう」って白石さんが部屋に入ると後ろの人も後を追って入ってきた。ワゴンには朝食が乗っていた。

「おはよう」って挨拶をすると、ワゴンを運んできた女の人が恥ずかしそうな顔をして「おはようございます」って、テーブルに朝食を並べてくれた。

「ごくろうさま」って言うと、顔を赤らめて「握手お願いできますか」って聞いてきたので、思わず苦笑し「いいよ」って手を出した。おずおずと手を出した彼女の手を握ってあげると真っ赤な顔をしながら「ありがとうございます」って慌ててワゴン車を押して出て行った。

白石さんが「結衣ちゃんにいつてやろ」って悪魔の微笑をする。思わず「ファンは大切にしなきゃ」って営業の顔をして言った。

朝食をとりながら、イベントの最終確認をする。「31日（大晦日）の今日は、10時半より12時までの一時間半と午後の2時より4時までの2時間だね」って白石さんの時間の確認をする。

「ええ・・・ですけどナイターでのお願いも、持ち上がっています。貴方しただけ追加をどうしますか？」って聞いてきた。

「うーん」悩んでいると。「受けてもらえれば、彼女とカウントダウンできるように運んでもらえるようにするけど」って飴を出してきた。

さすがに伊達に俺のマネージャーをやってないな・・・

「・・・わかった。その話受けるよ。結衣の件頼んだよ」って返事をした。

「ありがとうね。10時に迎えに来ます」ってニコニコ顔で白石さんは部屋を出て行った。

多少のため息と、結衣と一緒に過ごせることがわかり、にやけながら朝食を取った。

開始の時間まではだいぶある、俺は結衣にメールすることにした。

”今何してる？昼ごろ会えないかな”簡単な内容で・・・送信。

しばらくすると結衣から返事が来る”むり！忙しすぎ ヘルプ ミー” 内容を見て思わず苦笑する。

返信”了解。無理しないように。夜電話する”って送った。

ホテルの窓の外を見ながらまどろんでいると、ドアをノックする音が聞こえた。ノックの後「白石です」って声もする。

ドアを開けると「もうすぐ時間です。準備しましょう」って衣装を持って部屋に入ってきた。

衣装は最新のスキーウェアだった。早速着替えて結衣のプレゼン
トの帽子をかぶりスキーサングラスをかけて部屋を出て行った。

イベント会場の控え室に着くと、佐橋さんが「おはようございます。
ナイトー追加の件ありがとうございます。よろしくおねがいしま
す」って頭を下げる。

周りのスタッフ達も「おねがいします」って言ってきた。「いいえ、
こちらこそ おねがいします」って挨拶しスタンバイに入る。

控え室で待っていると、外で司会のお姉さんが話す声が聞こえる。
外はダイブ盛り上がっているようだ。

しばらくすると、司会者が俺を呼んだ。

ステージに上がると、大きな拍手に包まれた。ゲリラ的に開催して
いるにもかかわらず大勢のお客さんが詰め掛けていた。

「皆さん。今日は〇〇高原の年越しイベントに参加ありがとうございます
います。皆さんで盛り上がりましょう」って挨拶をした。

沢山の拍手に包まれてイベントが始まった。

お客さんとの触れ合いも多く思ったより盛り上がって楽しく午前の
部が終わった。

昼食時は結衣がアルバイトしているペンションでとる事になった。

白石さん結構気を使ってかって頑張ってくれているようだ

ペンションの応接室で休憩しているとドアがノックされる。

「どうぞ」って返事をする、食事を持って結衣が顔を出した。

ニコニコ微笑んで結衣は、開口一番「オーナー夫人と一緒に言ってくれた」って言った。

びっくりして「夫人って俺達の関係を知ってるのかな？」って結衣に尋ねた。

「ううん。全部は知らないはずだよ、でも私がモデルやってることは、ばれちゃったけれど、たぶん知り合いだって程度だと思っているはず。」って答えてくれた。

「モデルの件は全員にばれちゃった？」って聞くと「ペンションの騒ぎで皆に問い詰められちゃって、仕方がなく・・・」口ごもって言う。

「いいよ、俺達が夫婦って事さえバラなきゃ」って苦笑しながら言った。

そして食事中に結衣が「今日はお客さんは少なめだったから昨日よりは助かったわ」ってホッとした顔で話してくれた。

そして二人で昼食を食べて結衣は俺にチュウをして「じゃ、今夜ね」

って部屋を出て行った。

結衣とのデートを思い「よし！次は午後の部だ」って気合を入れた。午後の部もスムーズに終わり、夜の部の前に夕食だけどさすがに今度は結衣とは無理だった様だ。

夕食は青年会の人たちと取る事になっていて様で、宿泊しているホテルの宴会室へ案内された。

夕食はナイターの事もあり、打ち合わせを行いながら食事を進めた。ある一部の人はカウントダウンもやりたがっていた様だが、代表の人を含め家族志向が強いようでほとんどの人が家族と一緒に年越しするって言った。

「家族の団欒っていいですね」ってしみじみ思った。

青年団の一人が「そういえば、HIROさんのご家族は？この時期も仕事ですと家族や恋人にも合えませんか」って言ってきた。

「いいえ、いつもは家族と居ますが今回は特別ですよ」って言った。その通りで俺はこの時期には必ず家族と一緒に過ごす習慣だった。

まあ、結衣と結婚してからは少しは変化があって、そして今年はこんななんなのなあ・・・って心で思った。

でもちゃんと今年も結衣と一緒に年越しできそうで、少しお母さんにありがたうと思った。

ナイトーイベントも大きなトラブルなく進んで終わり、後は結衣を待つだけに成った。

白い恋人たち（年越し編）

白い恋人たち（年越し編）

結衣が来るまでには、まだ時間がある。少し仮眠を取るべくベツトに横になって目をつぶった・・・その時。

ドアをノックする音が聞こえる。白石さんかな？今日は打ち合わせなんか無い筈なのに・・・とりあえず「空いてるよ」って答えると、ドアがゆっくり開き、扉から中をのぞく顔が見える。

「結衣？」・・・なんと結衣が顔を覗かせていた。「誰も居ないよ。入っておいで」って声をかけると、きよろきよろしながら部屋に入ってきて「へへへ。少し早いけど来ちゃった」って言う。

確かに早い予定より1時間近く早い「こんなに早くて大丈夫かい？」って尋ねた。

「大丈夫。だって佳代子さんが少し早いけど・・・って言ってくれたもん」って答えた。

気を遣わしちやったな、なんて心で佳代子さんにお礼を言った。「早く逢えて良かった。結衣が来るまでにつまらないから少し休憩するところだったよ」って答えると。

「私も早く逢いたかったよ。アルバイトが思ったより大変で・・・でも、ひろくんにあえると思ったら頑張れたんだよ」って結衣は微笑んだ。

結衣はあいも変わらず可愛い事を言ってくれる。俺は慌てて結衣を招き入れてからしっかりドアをロックして・・・

思わず抱きしめてキスをした。「ああん」色っぽい声を上げて俺にしがみついてくる。

そのまま抱き上げてベットまでって行動し様としたときにドアをノックする音がした。

無視して結衣をお姫様抱っこして運ぼうとすると、さらにノック音が大きくなる。結衣が気にして「ひろくん。出ないと」って俺の腕から逃れようとした。

俺は仕方がなく結衣を降ろしてドアに行った。どうせ白石さんだろうって扉のロックをはずすと、あっという間にドアが開けられてお袋が現れた。

第一声「結衣ちゃん元気？」だった。結衣は慌ててスカートの乱れを直しつつ「こんばんわ。お義母さん」って返事をした。

俺は頭を抱えて「お母さん。何しに来た？」ってお袋にたずねる。

「打ち合わせよ・打ち合わせ、打ち合わせに来たのよ。でもなんだかお邪魔だったんじゃないかな」って知れーって言う。

俺はぶっちょよう面で、結衣は顔を真っ赤にして苦笑した。

「おかしいな・・・例の企画の打ち合わせは来年だったはずだけど、どんな魂胆で現れた？」ってお袋に尋ねた。

結衣は「ええ そうなの？」って不思議な顔をする」

「ははは・・・御免ね、実は打ち合わせって言うのはうそよ。結衣ちゃんの顔を見たかっただけなの、大みそかに会えなくて寂しくて」って結衣に近づく。

結衣が「今回は私の都合でアルバイトなんかして、勝って言って御免なさい」って頭を下げた。

お袋はニコニコしながら「良いのよ。そのお陰でジュジュの企画も考えられたし、こうやって大晦日も一緒に居られるし」って上機嫌だ。

俺は折角結衣と二人きりで新年を迎えられるって思ったのに、お邪魔虫が現れて少し機嫌が悪くなってしまった。

でも結衣はおふくろの言葉に大喜びなので我慢することにした。「もう・・・お母さんには参った。三人で新年を迎えようか」って言う・・・再び扉がノックされた。

怪訝な顔で結衣と二人でドアのほうを見ると、男の人が顔を見せた。結衣が「お義父さん」って声を上げた。

俺はあきれた顔をするしか無かった。思わずため息が出る「はく・・・」

結局四人しての年越しになってしまった。折角結衣と二人きりでいい事しようと思っていたのに、仕方が無く肩を落とした俺だった。

去年と同じで四人でTVを見て、カウントダウンを迎えた。俺が新年の花火が上がるよって、結衣を誘って窓からゲレンデを覗くと零時の鐘の音と同時に粉雪が舞うゲレンデに何発もの花火が上がった。

「わーきれい」結衣が目を輝かして花火を見つめた。

たしかに粉雪の舞う中の花火はすごく綺麗で思わず結衣の腰に手を当てて抱き寄せた。「あけましておめでとう今年もよろしく」って言って

そして・・・口付けをすると結衣が一瞬びっくりした表情を見せたけどすぐ抱きついてきた。

後で慌てて新年のあいさつをした。「あけましておめでとうこちらこそよろしくお願いします」って結衣が挨拶した。

幸せな気分だったけど両親を忘れていたために思わず振り向いたが、何故かいつの間にか両親が居なくなっていた。

どうも俺たちに気を使ってくれたらしい。結衣もびっくりしている。テーブルの上に手紙があった。

「あけましておめでとう！新年は二人でね はあと byお母さんより」俺は手紙を見てニヤってほほ笑んだ。

しばらくの間花火を見て過ごし

さっと結衣をお姫様だっこしてベットまで連れてゆくと、結衣は真っ赤な顔で恥ずかしかった。

姫はじめで新年がスタートした。はあと。

そして朝早く、結衣は起きだし「皆の所に帰るわね」って名残惜しそうに帰って行った。

「あと少しでまた会えるから」って手を振って結衣を送り出した。

今年もよい年でありますようにって仮眠をとるように結衣のぬくもりが残っているベットに向かった。

白い恋人たち（イベント編 後半）

白い恋人たち（イベント編 後半）

俺が気持ちよくベットで二度寝をしているとき・・・。

結衣サイド

ひろくんのホテルからペンションに戻り、そーっと中に入って、菜緒子たちの部屋に戻ろうとした時、後ろから「結衣ちゃん」って呼ばれる。慌てて振り向くと。

「え！ お義母さん」階段の下にお義母さんが居た。そして手招きで私を呼ぶ。

怪訝な思いでお義母さんの元に行くと、こっち・こっちって私を大広間に連れて行かれた。

大広間には佳代子さんと知らない人が数人いた。私が入ると、そのうちの一人が「白鳥 葵さんですね。私はこの青年団の代表をしている佐橋です。今回はお母さんの了解のもと正月イベントの参加ありがとうございます。」って頭を下げた。

私は「????」お義母さんの顔を見る。お義母さんは、私に耳打ちをする「私に合わせて」。

仕方がなく、佐橋さんに「こちらこそよろしくお願いします」って頭を下げた。

「今回のイベントのスペシャルゲストとして出演をご承諾を受けこちらとしてもうれしい限りです。後に控える撮影での協力は全力で協力させてもらいます」って改めてあいさつをされた。

私は恐縮しきりで困惑した・・・まてよ・・・「あ・・・でも私ペンションのアルバイトも頼まれているんですけど」って困った顔をする。

お義母さんが「結衣ちゃん大丈夫よ。ちゃんと助っ人を用意してあるわよ。って奥に座っていた二人の女の人を手で案内した。」

奥に座っていた女の人が立ち上がりこちらを見た。あれれ・・・見たことがある「ジュジュのモデルの朝倉由布さんと橘悠さんのダブル”ゆう”さんだ!!」って思わず声を上げた。

この二人はジュジュがメインで活躍するモデルだけど最近はあるこっちで活躍する俳優もやっている。

朝倉さんは可愛い系で橘さんは美人系だ、ともにジュジュのトップモデルだ。

お義母さんが「彼女たちがあなたの代わりを引き受けてくれたのよ」って告げた。

私は思わず目が点になってしまっ、だって私みたいなペイペイのモデルなのに、しかも私のアルバイトの代わりなんて恐縮してしまっ。

びっくりしている私を尻目に、朝倉さんが「一度ウエイトレスやってみたかったんだな、勉強にもなるし葵さんの代役を務めるなんて名誉なことよ」

橘さんなんかは「そうよ。私たち二人かかりでも白鳥さんの代わりが務まるかわからないのに。HIROさんと意気がぴったりなんて私たちにはとっても無理よ」なんて私を持ち上げる。

困惑する私だけど、息がピッタリなのは判る・・・だって夫婦なんだもん。

おろおろしていると、佳代子さんがドアを開けて入ってきた。「皆さん。おはようございます。えー・・・」朝倉さんと橘さんを見て「貴女たちね」って言うって頭を下げてあいさつした。

もちろんモデルの二人も「葵ちゃんには到底かないませんがお手伝いさせていただきます。」って頭を下げる。

お義母さんが「貴女達。よろしくね」って言うと、佳代子さんが「説明や準備準備がありますので、失礼します」って言いながら、三人して部屋を出て行った。

「さて、今度は貴女の打ち合わせよ」ってHIROとの絡みなどを打ち合わせした。

基本は私はスペシャルゲストで参加し彼との対抗戦で盛り上がるっていうアイデアだった。

しかも、私が出るのはひろ君には内緒ってことだった。びっくりさせるんだって・・・。

打ち合わせも終わり、お義母さんと朝食をとり出演準備前の休息になった。

お義母さんとの雑談で今回の計画の一部始終を語ってくれた。

私は朝が早かったので（ひろくんのホテルで泊まっちゃった為）二度寝することにした。

結衣サイド終わり

目覚まし代わりの携帯が目覚めの時刻を奏でる。携帯を開けて時間の確認をする。

コン・コン・コンドアをたたく音だ。たぶん白石さんだろう時間には正確な人だ。

時計を見ると9時10分だった。さらにドアを叩く音がしてベツトから降りてドアロックを外してドアを開ける。

ドアを開けると、白石さんが「おはようございます。そろそろ準備をお願いします」って部屋の中に入らず準備を即した。

俺は「了解」と言って仕事の着替えをして出演準備をする。

そして部屋を出てラウンジでモーニングコーヒーを飲んでいると、白石さんが「時間です」って呼びに来てくれたので席を立ち会場に向かった。

横目で結衣のアルバイトしているペンションをみると、あいも変わらず人がいっぱいだと思ったほど混んでいないようで「結衣も今日は少しは楽かな？」ってほほ笑んだ。

会場はかなりの人出だ。スキー場で正月を過ごす人でごった返している。

青年団の司会者がイベントの開始を告げる。俺の名前が呼ばれ舞台に現れると、かなりの数の拍手に包まれた。

手を振って司会者の横に行く会場に向かってあいさつする。「あけましておめでとうございます。皆様もよいお年をお迎えください」って観客席に手を振った。

皆もあいさつを返してくれる。「あけましておめでとうございます」会場は大みそかと違い男女比が半々だ。いつもの場合は男女比が5・4か4・3で女性のほうが多いけど、今回は若い男性陣もかなりいる。

今回の催しは、チームを二つ作って対抗戦を行うらしい。俺と青年団チームの二つかななんて思っていると。

司会者が「皆さん今日はHIROに対抗しましてスペシャルゲストをお招きしております」って言うのと、男性陣から「ウォー」って声がる。

司会者が俺が入ってきた反対の入り口を示すと、女性ゲストが恥ずかしそうに顔を出した。

・・・？結衣？・・・。

なんと、そこに現れたのは、妻の結衣だった。観客の見える位置まで出てくると、観客席から盛大な拍手が出る・・・俺の時より多いや！。

「スペシャルゲストはジュジュの専属モデルの”白鳥 葵”さんです」って紹介する。さらに大きな拍手で会場は唸りを上げた。

結衣が挨拶する「あけましておめでとうございます。白鳥 葵です。今回はこのようなイベントにお招きくださりありがとうございます。このようなイベントの参加は初めてですが、皆様のご声援を背にがんばりますので応援お願いします」って挨拶をした。

司会者さんが「HIROさんと白鳥さんで紅白対抗戦を行う予定です。お客様の参加もお願いしますのでぜひ参加ください。」って呼びかけた。

結衣が俺の横に来て挨拶する「あけましておめでとうございます。

対抗戦お手柔らかにお願いします」って握手を求めた。

結衣はほほ笑みの中「こんなになっちゃった」って目をした。

俺は、びっくりしたのを隠しながら「こちらこそ、よろしくお願いします」って握手した。

司会者さんが「皆さんに御協力をお願いします。対抗戦の選手参加

者の募集です。人数はH I R Oさんチーム10名 白鳥さんチーム10名の計20名です。我こそはと思われる方はH I R Oさんチームはこちら私の右手方向そして白鳥さんチームがいい方は私の左手方向に集合ください。」って話すると、各所から「よっしゃー」とか「私出たい」などの声上がる。

「尚、大勢の場合は抽選や選考を行いますのでよろしくお願いします。では今より各場所へ集合をお願いします」って告げると、各チームに大勢の人が集合した。

「むむむ・・・俺より結衣のチームのほうへの参加者が多いようだ。」しかも7割方が男性だった。
俺のチームのほうは、やはり女性陣が多く結衣と逆で7割以上が女性陣だった。

まずはスタッフが人選して両チームとも20名に絞り、さらに私たちが最終選考する。という手順で結構時間が掛ってようやくチーム構成ができた。

両チームとも男女各5人ずつの構成になった。

対抗戦は、スキー競技の簡易版や雪遊びの定番の雪合戦や新雪10m走など、バラエティーに富んだ構成となっていて、両チームとも一進一退のシーソーゲームになっていた。

色々あったけど、個人戦での新雪10m競争は俺と結衣との一騎打ちになった。

結衣には女性ってことで、ハンディーがついていた。足にロングのスノーブーツに最新式のカンジキが装備され俺は雪が入らないだけ

のノーマルのスノーブーツだ。

俺は「結衣は走るの早いんだけど・・・」なんて言えなくて、悶々としている間にスターターの合図が鳴りスタートを切った。

結衣はスタート直後はカンジキに戸惑ったけど、次第に慣れて1／3も過ぎたあたりからぐんぐん加速してゴールに向かう。

俺は・・・スタート直後大きく新雪に足を取られて何回も転びながら進むしかなかった。

俺と結衣では大きく体格が違い、俺の方が一見早く見えるが雪の上しかも新雪なんかは軽いほうが有利に決まっている、しかも相手は最新式のカンジキ仕様だ。

結果は・・・当然結衣のぶっちぎりで勝利だった。これのおかげで俺のチームはかなり点差を広げさせられて、最後の雪合戦で結衣のチームを全員倒さなければ勝利でなくなってしまった。

最後の対戦は全員による雪合戦いわゆる雪玉のぶつけ合いである。俺はリトルにも所属したことがあり、雪玉投げには自信がある。

スタートの合図で、次々と相手をやっつける・・・って訳には行かなかった。どうも相手に野球のうまいやつがいるようだ。

仕方がなくリトルで覚えたジャイロボールにスライダーを加えてなんとか男性陣を撃破した。しかし相手も強く我がチームも男性陣が全滅し女性陣が2名だけ残っていた。

しかし相手チームは結衣だけに成っていた。やった俺の勝ちだった

思った瞬間、空から雪玉が落ちてきて結衣の編んでくれた帽子にあたってアウトになってしまった。

結衣の手を滑らした投げぞこないが偶然に俺に当たってしまったのだ。結衣の超ラッキー雪玉に当たってしまった、大将（俺）が当たって負けてしまった為、結衣のチームが総合優勝になった。

優勝トロフィーを受け取った結衣が俺の横で「端いる女の子を狙って投げたら手がすってね・・・あさっての方向の上に投げちゃった。そしたらちようどひろ君がいて・・・えへへ」って小さな声で言い訳した。

まぐれでも勝ち勝ち「優勝おめでとう」って大きな声で祝福した。

結衣の参加でイベントは大きく盛り上がり大会委員にいっぱいお礼を言われ、盛況のうちにイベントの幕が下りた。

次の日はジュジュのモデルが来ているらしくその人たちに交替して俺たちのイベントの役目は終わった。

後で聞いた話だが、彼女たちが結衣の代わりのアルバイトをやっていたらしい。そのおかげか次の日のイベントもそれなりに盛り上がっていた。

マネージャーは帰ったが俺はそのまま宿泊し結衣と合流するまでをのんびり過ごすことにした。

白い恋人たち（アルバイト本番編 その4）

白い恋人たち（アルバイト本番編 その4）

お正月はお義母さんをお願いされたイベントでアルバイトはお休みになっちゃった。

でも、イベントの参加はひろくんのおかげで、いっぱい楽しませてもらった。イベントで遊んだだけなのに出演料がもらえるんだってなんか悪いみたい。

でもひろくんに言わせると「今回はほぼボランティアって話だからスズメの涙ってことだよ」って言ったけど私にとっては十分だった。

イベントは大変楽しくって。新雪10m競争なんかも、ちょっとカンジキの使い方が判らなかったけど、次第に慣れて結構速く走れた。

でも、ゴールしてひろくんを見ようと後ろを振り向くと、ひろくんが新雪に足を取られて新雪にダイブするところを見ちゃった。なんかかわいそう・・・。

最後はラッキーで優勝までもらって、思い出に残るイベントの参加だった。

このイベントはローカル地域の放送局が来てビデオ撮影し夜にローカル放送で流すらしい。菜緒子たちと一緒に見よう!!!。

イベントがお開きになってペンションに帰ると、皆が手ぐすねを引いて待っていた。

菜緒子たちが朝一番に私が居ないことにきずいて、おろおろしたところモデルさんたちが現れて、しかも私の代わりだってアルバイトの手伝いを始めてさらにびっくり仰天だって、まくしたてた。

特に朝倉さんの方は料理がとってもうまくペンションのオーナーもびっくりしていたらしい。

そりゃそうだ。ジュジュのモデルのトップ2なんだもの二人とも才色兼備のスーパーモデルなんだ。

でも菜緒子たちはまだ少し仕事が残っているので慌てて仕事に戻った。戻り際に「HIROとの共演話ちゃんと話してね」って言われた。

片付けなどと夕食やお風呂に入ったりしたら、結構な時間になってしまい、皆で見る予定のイベントのローカル放送を見逃しちゃった・・・。

皆で部屋に戻って「残念だったね」って言いながら「仕方がないよ。私たちはアルバイトに来ているんだもの」ってあきらめながらため息をついていると。

「コンコン」ドアをノックする音が聞こえ、菜緒子が「はい」って返事をするのでドアを開けて佳代子さんが顔を出した。

「菜緒ちゃん。はいこれ」ってCDを渡してきた。でもよく見ると、それはDVD-Rだった。「これ結衣ちゃんが出ていたイベントよ。録画してあげたの」って佳代子さんが中身を説明してくれた。

全員で「ありがとうございます」ってお礼を言った。菜緒子がさっそく部屋にあるDVDプレイヤーにセットして皆で見ることにした。私はカメラ目線での内容は知らなかったのも、新たな構図で見れたので大変よかったんだけど、菜緒子が「HIROって以外に3枚目なのね。菜緒なんかクールガイそのものだと思ってた。」って感想を述べる。

ひろくんは私と居る時は結構甘えん坊で、HIROとはキャラが全く違う。でも今回のイベントでの私との競技では結構三枚目を演じて皆に受けていたのを思い出した。

他の人も「HIROの意外な面を見ちゃった。ますます惚れちゃいそう」って目がハートになる。

私は思わず苦笑した。すると「いいな。結衣は・・・すぐそばに居られたんだから。この・この！！」って肘でつつかれた。

結構コミシャルや内容によっては早送りで見たのだけど、DVDを見終わる頃は日付がもう変わっていて、私たちは慌てて就寝にしていた。

次の日はイベント効果もあり、全員がめっちゃめっちゃ忙しく一日を過ごした。菜緒子たちは「貴女の代理が来てた時より大勢の人が来たようだよ」って汗をぬぐった。

私は「彼女たちはジュジュのNO，1・2なのよ。私より集客が少ないのはたぶんHIROの所為なんだわ」って心で思った。

アルバイトもあと一日で終わりになる。フアイト”結衣”って自分

で自分に気合を入れた。

白い恋人たち（番外編 モデル達編）

白い恋人たち（番外編 モデル達編）

私（朝倉由布）は突然にジュジュの編集長に呼び出されて、事務所の扉を開けた。

中に入ると副社長（結衣のお義母さん）と編集長が待ち構えていた。「おはようございます」頭を下げて「本日はどの様な件でしょうか」って尋ねる。

副社長が「そこに座って、あと一人来るので、お話はその時にします」って答えてくれた。

私は副社長はとても厳しい人なので、かなり緊張してソファに腰をかけた。

「どう、最近は」って尋ねられて「司会のアシスタントの仕事が入りまして、充実しております」って答えた。

さらに内容をとっていると、ドアをノックされた。編集長が「入ってきて」って言うと、ドアが開いて橘悠さんが入ってきた。

橘さんは「失礼します」って部屋に入ってきた。開口一番。あら！朝倉さん。貴女も呼び出されたのかしら」って尋ねた。

編集長が「朝倉さんの隣に座って」って私の隣に手をかざした。

「失礼します」って橘さんが私の横に座ってきた。

副社長が「お二人とも揃ったので、今回のお話をしたいと思います。」って私と橘さんを見た。

「今回のお話は貴女達に普通のアルバイトを経験してもらおうと思っ
て、芸の肥やしてて訳なの、お願いできるかしら」って尋ねたて
きた。

「いつ、どこで、どの様なことをするのでしょうか」って橘さんが
尋ねた。

「内容はね。白鳥 葵ちゃんが正月にアルバイトをするのよ。アル
バイトというのはスキー場のペンションのお手伝いなんだけど、一
日だけ、そこで行われるイベントに彼女を参加するために、貴女達
に彼女の代わりをお願いって訳なの。」って言った。

「へっ……イベントって何ですか」って朝倉さんが尋ねる。

「スキー場の青年団の催しなの、知り合いからは非って頼まれちゃ
って、でも貴女達も彼女の次の日に出演をお願いされているからよ
ろしくね」って微笑んだ。

「「えっ……」」二人でびっくりする。

「アルバイトの代わりだけじゃないのですか？」って聞くと、「も
ちろんよ」って答えてくれた。

二人で顔を見合せて、二人で苦笑した。

橘さんが「わかりました。私一回ぐらいそんなアルバイトしてみた

かったの。友達も同じようなことしてるみたいだし、少しは気にな
っていました」ってOKした。

橘さんは高校三年生で一年からモデルを始めたから友達がアルバイ
トでキャピキャピしているのを見ながら羨ましかったらしい。

副社長が「朝倉さんは？」って聞いてきた。

私は短大生で今年卒業後このモデル事務所の専属になるから、い
ろいろ言うことを聞いていた方が良いのでは、と思い「わかりまし
た。橘さんと一緒にいいです」って答えた。

その後内容の詳しい打ち合わせを行い事務所を後にした。

一緒に出た橘さんに「駅前の喫茶店で少しお話をしませんか」って
言うのと。

「私も、お話したかったです」って同意してくれ、一緒に駅に向
かった。

喫茶店で、私は「レモンティー」橘さんは？「私はミルクティーで」
ってウェイターに告げる。

橘さんが「二人でいると結構目立ちますね、特に男性の視線が・・・
」って笑う。

「そりゃそうよ。ジュジュのトップ2・3がいるんだもの、でも気
にしてちゃだめだよ」って言う。

「でも今回の仕事は変わってますね。でも事務所で言った通りに同

級生がアルバイトの話をしていると気になっちゃって、コンビニとかウエイトレスなんかの話で、一緒にいる、男性の話なんかしていると羨ましいなんて少し思っていました」って橘さんは話す。

「そうね、スタジオでは男性の平均年齢なんか結構高いものね。モデル同士だといういあるし・・・」少し笑った。

ウエイトレスが飲み物を持ってきたので話が一時中断した。

二人して飲み物を飲みながら「橘さん良かったじゃない。アルバイトの体験ができて」。

「はい。そうですね。私は良かったのですが、朝倉さんはどうでした？」

「うーん。何とも言えないね・・・でも、私は料理を習ってるから裏方の方でも一度腕を試してみたいわね」って笑った。

「それにしても、白鳥さんって結構自由なんだ。履歴も分からないし・・・でも友人と一緒にだって話だから少しは彼女の不思議も解けるかも」

「そうだね。休憩時間に探りを入れようか」ってほほ笑んだ。

その後たわいもない話をして解散した。

当日

副社長から白鳥さんが説明を受け私たちを紹介すると、びっくりしてしきりに頭を下げていた。

私たちはオーナー夫人に連れられてペンションで打ち合わせをして早速仕事に取り掛かった。

ペンションには白鳥さんの中学時代の友人がいて、私たちを見てびっくりしていた。

橘さんが年齢も近いこともありすぐ仲良しになった。そして彼女について、いろいろな話をしてくれたけど肝心なことは高校に入ってからのように肝心な部分は分らないままだった。

収穫は本名ぐらいで・・・劇的な変化は高校に入ってかららしい。まああきらめるしかなく二人して彼女の代わりをする。

店に出ると最初は彼女のことを聞かれたが、私たちの出演でお店に来る客も私たちにびっくりのようで悪い気がしなかった。

しかしイベントに人を採られて集客が少なかったらしく彼女の友人や地元のアルバイトたちがなぜかホッとしていた。

接待時に読者から直接感想を聞けて私たちにとっては有意義なアルバイトだった。

私（朝倉）の作る料理もそれなりに受けたみたいで少し自信がついた。後での感想だったけど白鳥さんが作る料理の方が家庭的だったらしくペンションの食堂としてはそちらの方が良いらしかったらし

い。

彼女の作る料理はほんわか温かいらしく人気があるらしい。でもオーナーシェフには一流の味付けだねって誉められた。

橘さんもウエイトレスとして走り回りたくただそうだけど、読者の感想が聞けて次の糧にできそうって喜んでいた。

アルバイトも終わり副社長と話す機会があったので今回の感想をすると「よかったじゃない」って誉めてくれた。

イベントへのゲスト出演もペンションの食堂に来てくれたお客さんが来てくれて、盛況なうちに終わることができた。

どうもモデルとしてお高くとまっているイメージが崩れたようで、これが功を奏したみたい。

このことがあり私たちのモデルとしての人氣が一段と上がったのは、これからしばらくしてからのことで、私（朝倉）はなんと料理番組のアシスタントとしてレギュラーが決まった。彼女（橘）も、女優のチョイ役が決まり・・・。

後日二人で「彼女って福の神かな」なって話し合ったのは数カ月あとの話だった。

白い恋人たち（アルバイト本番編 終了編）（前書き）

更新が遅れました。

肩痛と肩こりがひどく手先がしびれ気味になりキーを打つのがおっくうに

なってしまうモチベーションが落ちてしまいました。

肩痛は相も変わらずですが手先のしびれはほとんどと取れました。これから徐々にゆっくり更新したいと思います。

白い恋人たち（アルバイト本番編 終了編）

白い恋人たち（アルバイト本番編 終了編）

ピピピピピ 目覚まし代わりの携帯が朝を知らせる。

背伸びをして起きると、奈緒子たちはまだ夢の中だ。起こさないようにゆっくり起きて朝の支度をして下に降りると旦那さんが「朝早く御苦労さん。アルバイトは今日で終わりだったね。今日が終わったら、のんびりするといいよ。」って言ってくれた。

地元の高校生アルバイトー達も「今日で終わりなんて寂しいね。めっちゃ忙しかったけど、来年も来れるかな」って聞いてきた。

私は少し考えて「うーん・・・たぶん無理じゃないかな」って答える。来年は両親が会社の記念式典があるって一時帰国するって言ってたんだ。

私たちは、たぶんそちらに顔を出さないといけないから・・・。

アルバイトや従業員さんに「それは残念だね。今日が最後だから頑張ろうね」って言われた。

今日は朝から目っぱい忙しい！猫の手も借りたいぐらいだ。どうも私たちのアルバイトが今日で終わりなのがしれ渡っているらしい。

お客さんのほとんどの人から「アルバイト今日までだって」って聞かれる。中には「おれと付き合わない」っていう人もいる。大抵の人たちはグループなので一人が告げると全員が我先にと言ってくる。

そんな時は左手の薬指を見せて「私。決まった人がいます」魔よけの指輪を見せて告げると大抵周りが大きくざわめき落胆のため息が出る。今日は何回この仕草をしたのかわからないぐらいになっちゃった。

今も大勢の男性グループに捕まっている。今回は魔よけの指輪も通ししない……。困惑している私に奈緒子たちも忙しすぎて助け船を出せないでいると……。びっくりする人の助け船が入った。

「おい君たち、彼女が困っているんじゃないか」って声を掛けてくれた。

思わず振り返ると見覚えがあるような……。「貴方は確か……。上ノ内さんですよ」ってうら覚えの名前を呼んだ。

「ありがとう。名前覚えてくれていたんだ」って声かけてくれた男性がほほ笑んだ。その後ろにも見覚えがある顔が見えた。

後ろの人の顔が見えて軽く会釈すると「よ！」って手を挙げてくれた。

すると大勢のグループの中の一人が「あ……。大沢先輩」って立ち上がった。上ノ内さんの後ろにいた一人が「何だ。お前か、こんなところでナンパなんかするなよ。しかもウエイトレスさんに」って叱るように言った。

大沢って人が、私に「こいつは俺の生徒っていうかカテキョやってる生徒の一人」って告げ「お前らも困った奴らだな」って呆れた顔をした。

「先生。彼女と知り合い？いいな彼女のこと詳しく教えてよ」って彼に話に移った。

上ノ内さんが私に「厨房で料理長が呼んでるよ。早く行って」って私に厨房へ行くように告げたので、「すみません。料理長が呼んでるそうなので失礼します」って慌てて厨房へと向かった。

男性グループの啞然とする中素早くその場を離れた。「あゝ・・・」落胆の声を聞きながら、心で「ごめんなさいね」って、少しほっとしながら厨房に向かった。

厨房に戻り「料理長お話は何ですか？」って聞くと、料理長は「は？？呼んだ覚えはないけど」って忙しく手を動かしながら答えてくれた。

頭に？マークを描いていると、奈緒子が「偶然に彼らを見つけたの。だから私が彼に頼んだのよ。結衣おろおろしてたでしょう。」って厨房へ呼んだ理由を教えてくれた。

そして「忙しかったでしょう。少し休憩しよ」って上を指差した。料理長も「朝から大変だったから15分ぐらい休憩してきていいよ」って言うてくれたので、「ありがとうございます、少し休憩します」って休憩室へと向かった。

休憩室には佐織が待っていてくれた。「結衣。大丈夫？」不安げな顔で私に尋ねてきた。

「ううん。忙しかったから少し疲れただけよ」って答えると「でもこの忙しさは異常ね。結衣が今日で最後ってみんな知っているみた

い。だから男どもは必死で渡りをつけようとかんばってるらしいよ」
ってお手上げの恰好で話してくれる。

私はそれを聞いてがっくりとうなだれた。

トントントン・・・十五分たったぐらいにドアをノックした音がし
「入るわよ」って佳代子さんが入ってきた。

「みなさんご苦労様です。結衣ちゃん一番大変だね」って後ろを向
いて「入ってきて」ってドアに向かって声をかけた。

ドアから数人の男の人が入ってきて、私に向かって「よお！」って
右手を挙げて挨拶した。

何と入ってきた人は休憩前に私を助けてくれた男の人たちだった。

思わず立ち上がり「先程はありがとうございました。」って頭を下
げて挨拶した。

佳代子さんが「今日は大変そうだから貴女のためにボディガード
をとって彼らが名乗り出てくれたの」って少し苦笑しながら説明して
くれた。

「結衣ちゃん。俺らに任せとけ さっき見たいな事は起こさせない
から！」って力強く言ってくれた。

さらに「「私たちも手伝ってあげる」」ってドアから朝倉由布さん
と橘悠さんが顔を出す。

「え・・・」思わずびっくりしてしまう。ニコニコ笑う朝倉由布さ

んと橘悠さんを見て、気を取り直しつつ「すみません。私がごときにお二人まで巻き込んで・・・」

「いいのよ。昨日やってみて結構おもしろかったし。こんな状態も経験しなくっちゃ」って橘悠さんが微笑みながら話してくれた。

佳代子さんが「皆さん。彼女のフォローよろしくお願いします。」って頭を下げたので、思わず、私も「ご迷惑をおかけします。よろしく願います。」って慌てて頭を下げた。

上ノ内さんが胸を叩いて「任せとけ」って、ゆうさんたちは私にVサインを送ってくれた。

「私。店に出ます。」って頭を下げてレストランへ向かった。

「よし！みんな行くぞ」って上ノ内さんがみんなに声をかけてぞろぞろと部屋を出て行った。

私がレストランへ現れると皆一斉に私を見る。思わず「いらっしやませ」って頭を下げた。男性陣のどよめく声と女性陣のうなずく声が聞こえる。

朝の続きであっちこっちに引っ張りだこだ。あっちこっちのテーブルを飛び回る。

しばらくウエイトレスを務めると・・・男性陣の「お！お！お！・・・」って声が聞こえた。彼らの向いている方に顔を向けると、・・・なんと。

朝倉由布さんが濃紺のふりふりワンピースに縁取りに白いフリルがいつ

ばについて、さらにエプロンはピンクのハート形頭にはカチューシヤ・・・さまざま秋葉などにいるメイドさんの恰好だ。

朝倉由布さんに似合っていて、めちゃくちゃ可愛いメイドさんの恰好でレストランに現れた。

そのおかげで私にまわりついている男性陣の半分と女性陣の一部が由布さんに流れて随分と楽になった。「ホット・・・」

でも口コミで綺麗なモデルさんがメイドさんの恰好でウエイトレスやってるって広がったらしく。昼ごろには由布さん目当ての輩も多数来店されて、あまりの多さに由布さんの顔もひきつり気味になってきた。

そして午後からはなんと橘悠さんまでもがメイドさんの姿で私を手伝ってくれた。また悠さんの衣装も紅色の衣装でそれがまた似合っていて可愛かった。

いつもなら夕食時までにはお客さんも減るんだけど今日は夕食時もうっぱいで皆汗だくで仕事をこなした。

かなり多めに用意していたはずの食材が底を閉店の時間より少し早目の7時に店を閉めようとする第一部からブーイングも起こった。だけど朝倉由布さんが言葉話術で説得し事なきを得た。アナウンサー志望なのか由布さんは会話のたけていた

8時から皆で御苦労さん会を行った。私は皆さんに頭を下げて回った。でもみんな今回は「忙しかったけど楽しくできて良かったよ。」って皆言ってくれて私のせいで普段になく忙しくなった為に怒っていないようで良かった。

アルバイトも今日で終わり。一日休憩して、明後日からはバレンタインの撮影が始まる。

明日は奈緒子たちとスキー三昧だ!!。

おまけ

佳代子さんから「はい。これアルバイト代よ」って私たちに封筒を渡してくれた。

封筒を開けて奈緒子が開口一番「佳代子おばさん。いいの?こんなに頂いて」って金額を見てびっくりする。

「そんなことないわよ。これでも少ないぐらいよ。皆のおかげでびっくりするぐらい売上げが上がったんだもの」・・・「一番は結衣ちゃんのおかげなんだけどね」

私を除いた全員がその言葉に「うんうん」って同意した。びっくりして困惑している私を無視して橘悠さんが「皆さんご苦労さんでした。」って素早く乾杯の合図をしてグラスを高く上げた。

全員で「乾杯。ごくろうさまでした」って未成年者はジュースなどで大人はビールで乾杯した。ただしおろおろしている私を除いて・・・。

最後に上ノ内さん達が「明日は俺たちが君たちにスキーを教えてあげるよ」って手を振って帰って行った。奈緒子たちは「おねがいます」って見送った。

白い恋人たち（スキーは楽し編）

白い恋人たち（スキーは楽し編）

昨日でペンションのアルバイトも終わり今日一日はスキー三昧の予定なの。本格的なスキーに少し気合が入る。

しかも、いつも起きるのが遅い奈緒子たちも今日はやたらと朝は早くから起きだしハイテンションなのだ。

奈緒子なんかアルバイトのときは化粧なんてし少ししかしなかったのに、今日は朝から鏡とにらめっこしている。

でも今日は天気がいいので雪焼けしないようにUVメイクだけはしっかりした。だってお義母さんに「明日からの撮影に影響がないように」ってくぎを刺されているの・・・。

食堂に降りてゆくと、もう上ノ内さん達が待っていた。「おはようございます」って挨拶すると「おはよう。今日のスキーの指導は任せて」って胸を叩いた。

上ノ内さん達はもうスキーウェアに着替えていて、いつでも良いように準備していた。

「俺たちは、早朝スキーで体をほぐしてくるよ。君たちはゆっくりして着替えてて。又一時間後にここに来るからそれから始めよう」って外に行く準備を始めた。

私たちは「よろしくおねがいします」って頭を下げて、朝食を取る

べくテーブルにすわった。

裕未や佐織が私に「良かったね。コーチが簡単に見つかって。しかも無料だし」ってVサインを出した。

奈緒子たちの彼氏達は今日の午後ぐらいにこちらに来れるらしい。それまでは全員一緒に行動なのだ。「頂きまーす」って朝食に手をつけた。

朝食が終わりスキーウェアに着替えた後スキー板を持ってペンションの前に出てゆくと。ウエーデルンでカッコよく数人が並んで滑降する人たちがいた。

裕未があの人たち「カッコイイね」って滑る姿を憧れの目で追っ手いた。

彼らは、きれいなシュプールを描いて私たちのすこし前に雪煙を上げて停止した。そしてすばやくスキー板をはずして私たちのほうに手を上げた。

私たちが、目を点にしていると彼らはゴーグルを外した。

佐織が「あ・・・かっこいいと思ったら上ノ内さんたちじゃないですか」って雪の上をおぼつかない足取りで駆け寄ると、もちろん私たちも後を追った。

彼らは、佐織の「かっこいい」って言葉に反応し全員が表情を崩し、私たちに「「やあ」」って手を上げた。

私たちは横一列に並んで「今日はよろしくお願いします」って

お願いした。

でも奈緒子が「コーチは2時半ごろまででお願いします。」って言う。

「え？・・・なぜ」って聞く。

私を除く3人は今日の三時に彼氏が来ることになっているのだ。又都合よく奈緒子・佐織・裕未が「「彼氏が来るの！」」って声を合わせて言うのと、お互い顔を合わせてはにかんだ。

男性陣が「あ・・・」っと最初に合った時にした話を思い出し頭を抱えて”しまった”って顔をした。

でも私一人だけ何も言わなかった為全員が私に向かって「君は来ないようだね」って言うてきた。

「あ・・・でも私。明日の打ち合わせがあるから奈緒子たちも一緒に終わってほしいです」

上ノ内さんの横にいる人が「なに？・・・なんの打ち合わせ」って聞いてきた。

「えーっと戸井さんでしたっけ」

「わーありがとう名前覚えてくれてたんだね」ってニコニコ顔で一歩前に出と、慌てて左右にいる人がむんずと肩をつかみ元に戻した。

「わわわ！」戸井さんはバランスを崩しながら横並びになり左右の

人を睨みつけた。

「すみません。明日から又撮影があるの」

「撮影？」

「はい。詳しいことは言えないんですけど・・・」

私は奈緒子たちを見ながら「今度は奈緒子たちもエキストラで出てほしいって、マネージャーさんが」って言いかけたところで慌てて口を手でふさいだ。

いけない！その話はまだ内証だった。

奈緒子たちが「え〜！！」「そんな話聞いてないよ！」って困惑の顔をした。

「ごめんなさい。たぶん夕方には話があるはずなの、OKしてね」って両手を合わせて拝むように彼女たちにお願いをした。

これには男性陣も「あははは」って思わず笑う。奈緒子たちは思わずほほを膨らまして抗議した。

「しかし 残念だね俺達今日で帰るんだ」「おう 何を撮るのかわからないけど見たかったな」って男性陣が悔しがった。

上の内さんが「まあそれは仕方がない。じゃパートナーを決めようかお互い丁度4対4だからさ」「女性陣の意見を尊重し君たちで指名してくれていいよ。全員が指導員の資格は持っているから教えるのに優劣はないよ。」

私たちは全く滑れない私と裕未・ある程度滑れる奈緒子初心者の域を出ない佐織って感じた。

奈緒子が先頭を切って横に並んでいる右から二人目の人を指名した。それは戸井君だった。彼は少し苦笑しながらも「OK」って奈緒子に手を出した。

裕未と佐織が「私は！」ってそれぞれの人に向かって手を出す。そして最後に残った上の内さんが、小さく「ラッキー」って言うのにやってっ笑って私に手を差し出してきた。

奈緒子たちが「結衣は、ちゃんといい人がいるんだから、わかってるわよね」って上の内さんにくぎを刺した。

上の内さんは「わかってるよ」って私の手を握って「じゃ。個人レッスンを開始しますか」って彼らに声をかけた。

「「おー」」っと掛け声ともに各パートナー同士手を握って各所へ移動した。

私は「おねがいます」ってほほを染めながら上の内さんの手を握った。彼は満面の笑みを浮かべ「じゃ。まず板の履き方から覚えようが」って私の立てかけてあったスキー板を持ってなるべく斜面の角度のないところへ移動した。少し近くには裕未も同様にしていた。

奈緒子と佐織はリフト乗り場に向かうみたいだ。

彼はスキー板を斜面に直角に置いて滑らないように手で支えてくれ「まずは履こうか」って私に催促した。

私はスキー板を借りたときに一度履いてみただけで全くの初心者なのだ。慌ててスキー板を履こうとするのだけど、ロックが掛からない。

「あはは。結衣ちゃん靴の裏の雪を落とさないときちんと履けないよ。僕の方に靴の裏を見せて」

「え？・・・」「靴の裏にいっぱい雪がこべり付いて、ロックの邪魔をしてるんだよ。払ってあげるから靴の裏をこちらに向けて」

ストックで体を支えながら上の内さんに靴の裏を向けると彼のストックで靴の裏に付いている雪を払ってくれた。

スキーの金具ビンディングに靴を合わせてググって踏み込むと、ガチャって音とともにスキー板と私の履いている靴が一体となった。

両足とも履き終えると、初めてスキーを履いて雪の上に立って俄然やり気が出てきた。

「行くわよ」って心で気合を入れたら「あ・・・あ・・・あああ」勝手に後ろに滑ってゆく。

なすすべくも無く、手をくるくる回して何とかバランスを取っていると、彼がずっとスキーの先を手でさえて止めてくれた。

その拍子に私は後ろに尻もちをついちゃった。なんとか彼の手とストックを使って起き上ると、スキーの先の方向を変えて後ろにはいかないようにしてくれた。

これからの行き先がすこし不安になっちゃた。

でも滑りだしたら結構うまく行っちゃって、次々といろんな滑り方や止まり方を教えてもらった。

「結衣ちゃん。運動神経いいね、教えるのが簡単でいいわ」って誉めてくれた。

「いいえ。そんなことないですよ」って言いながら、心では「よし。しっかり覚えてひろくんを見返してやるんだ!!」私はさらに気合をいれた。

斜面を足をそろえながらゆっくり滑ってゆくと。裕未がへっぴり腰で滑っているのが見えた。「ああ・・・」って見ると裕未がおもつきし尻もちをついて転んだ。

裕未の近くまで滑って行き「裕未だいじょうぶ？」って声をかける。

「あはは。あんまり大丈夫でないよ」って苦笑しながら、頭をポリポリ掻くふりをする。裕未の顔にはかなり疲労が浮かんでいる。

上の内さんが裕未の指導相手の持田さんと声を掛け合って携帯をとるだし、どこかに掛けたようだ「お！俺だ。少し早いけどランチにしようか」「わかったペンションの裏口に集合な」って携帯をしまった。

「君たち今他の連中に連絡を取ったから、少し早いけどランチタイムにしよう泊ってたペンションの裏口までゆっくり滑ろうか」って話しかけた。

裕未はほっとした顔してから、私に「一緒に滑って」って言うてきた。もちろんランチ休憩のためだ。

「うん。ゆっくり滑ろうね」って声をかけて先に滑って行った。後を追いかけるように滑りだしたらいいけど「結衣！早いよ！もっと遅く」って後ろから大きな声で裕未が叫んだ。

止まって後ろを向くろ裕未がへっぴり腰でかなり離れた所から私に向かつて滑ってくるのが見えた。私の所まで来ると、又尻もちをついてコケ止まった。

「裕未。先行で行ってよ」って言うのと「えー・・・カッコ悪いの見られちゃう」って頬を膨らましながらかも立ち上がり滑り始めた。

その横を彼らが見守りながら滑ってゆく。それに合わせて私も滑り始めた。裕未は時々「キャー」って声を上げながら尻もちをついて転ぶ。

それなりの時間をかけてペンションの裏口につくと、奈緒子たちはもう先に着いていた。

手を振りながら奈緒子の前に止まると「結衣。すごいじゃん本当に滑るの今日が初めて？」って疑いのまなざしを向ける。

「もちろんよ」って言うのと横から「彼女も最初はあつという間にこけたよ」って上の内さんが答えた。

私は「こけた」の言葉に少しむくれて頬を膨らまし赤い顔をした。

でも私の横で裕未が止まれずにこけていた。もうスキー板を外して

いた佐織が裕未を助け起こしお尻についた雪を払った。

私たちはスキー板を外すと上の内さんたちが私たちのスキー板を立てかけて整理してくれた。

奈緒子が「中に入ろう」って先頭を切ってドアを開けて入って行った。私たちは食堂でなく3階の大広間に食事を用意してもらいワイワイ言いながら食事タイムを過ごした。

奈緒子が「午後からは皆で滑ろうよ」って言う。佐織や男性陣はもう手を挙げて賛成する。

一人浮かない顔が・・・裕未だった。「私は一人で過ごすよ。皆で滑っていいよ」って心なしか落ち込んでいる。

佐織が「裕未がいなきゃつまないよ。一緒に行こうよ」って誘う。

「でも・・・私がいると足を引っ張っちゃうもん」って俯き加減で言う。

裕未のコーチをしていた持田って人が「最初はどうしようかと思っただけど裕未ちゃんものすごく上達したよ。今ぐらい上達したら、皆と一緒にの方が上達も早いよ」ってフォローしてくれる。

皆の勧めもあり裕未の固い口から「足引っ張っちゃっても文句言いませんよ」ってようやく折れてくれた。

でも午後からは全員で楽しく滑ることができた。裕未もさらに上手になったようでニコニコ顔だった。

彼らの帰宅時間が近づいてきたので、上の内さんが全員で今より上に行って解散しようかってゴンドラに向かって滑り始めた。

ゴンドラに乗ってかなり上まで行くことができた。

「わーすごくいい眺め」って裕未が感嘆の声を上げる。女性陣は皆同意見なのだ。うんうんとうなずく。

男性陣はスキーの上手い奈緒子と佐織に「俺たちは上級者コースで帰るけど、君たちは林間の初心者コースで帰ること。たぶん下に着いたところにはいい時間になっていると思うよ。」ってアドバイスをして男性陣は私たちに手を振りながら上級者コースを滑って帰って行った。

私たちは「ありがとう」って全員で手を振って彼らを見送った。

奈緒子が「じゃ私たちも降りましょうか」って林間コースに向かって滑り始めた。佐織も「こっちだよ」って手で示し「私は一番最後にするわ」って林間コースに私たちが進むのを確認して後を追ってくれた。

裕未もこのころはへっぴり腰ながら意外とスムーズに滑り長いコースを途中途中で休憩しながら滑って行った。

コースの都合でほかの上級者コースを横断する所で少しつまずき気味になっていると・・・。

「ねえ君たち何処から来たの。一緒に滑らない」って8人組の男性陣に声をかけられた。

奈緒子が彼氏がもうすぐ来ることが分かっているのか「いいです。私たちだけで滑ります。」って丁度こけてしまった私の腕を取り起こしながら「皆行こうか」って声をかける。

佐織が「Ok」って今度は先頭で滑り始めた。

私や裕未もそのあとを追う。

ゆっくり滑る私たちの周りをなぜか彼らが付きまとい、楽しいスキーが一転暗雲が立ち込める。私たちは無口になり黙々と林間コースを進んだ。

沈黙に耐えかねて裕未がコースを外れ大きく転倒した。奈緒子が慌てて裕未のそばに行こうとすると男性陣の一人がそれを遮りさらにもう一人が転倒している裕未に近づき手を出してきた。

裕未がびくつき体をこわばらせた。残りのメンバーも私たちに張り付いて身動きが出来ないようにする。そして・・・。

とうとう裕未に魔の手が伸びる。「きゃー！」裕未が悲鳴を上げた。

佐織が自分の手を握っている男性の手を無理やりはがしスキー板をはずして裕未のもとへ、そして奈緒子もかな切り声をあげて行き先をふさいでいる人に道を開けようとするが・・・。

佐織はすぐ又腕を取られ、奈緒子も脇を通ろうとした時に捕まってしまった。私に張り付いている人もじりじりと向かって来た。

皆が悲鳴などを挙げながら抵抗していると。

「貴様ら嫌がる人相手に何をやってるんだ」って少し上から声が聞

こえた。

声の方をちらっと見て一人なのを確認して「えへちよっと遊んでるだけだよ」って手を緩めない。

「まったく・・・お前ら、どうしようもない連中だな」って私たちに近づく。慌てて残りのメンバーが助けに来た人に向かって威嚇しながらこちらに來れないようブロックにかかる。

「よお！お待たせ ははん 佐橋こいつらか連絡のあった連中っていうのは」って声がすると、次々と同じスキーウェアを着た人が現れた。

私たちに絡んでいる中のリーダーと思わしき人が「げ・・・お前らゲレンデパトロールか」って慌てて逃げようとするが多くの人に囲まれて全員がおとなしくなった。

私たちは彼らと離ればパトロール隊に守られほつとした。

最初に来た人が私たちの前に来てゴーグルを取って挨拶する「お嬢さん方少し遅れて申し訳なつたね。こいつらナンパ恐喝強盗の常習犯らしいんだ。」

「ええええ！」奈緒子が嫌な顔をして言う。

「少し前にこいつらを見かけたって連絡があったから、彼らを探していたところに丁度貴方達が絡まれていたのを見かけて慌てて駆け付けたけど、だいぶ絡まれちゃったみたいだね」

そう言いながら私たちの顔色をうかがい心配そうな顔をするも・・・

「あれ？君って葵ちゃんだね」って私の顔をのぞいてきた。

「あ・・・会長さんですね。助けにいただきありがとうございますって頭を下げた。」

奈緒子は「結衣。知り合い？」

「うん。ここの青年会の会長さん イベントの時に知り合いに」

そう話しているうちにナンパしてきた人たちは大勢に囲まれて捕ま
ったみたい。

「彼らはどうなるんです」って佐織が尋ねた。

会長さんの横にいる人が「彼らはね、かなりひどいことをやったみたいで、じつは大勢の人から告訴されているんだ。申し訳ないが後で事情聴取をお願いするので何処に宿泊しているのかを教えてほしい」

会長さんが「彼女たちは大林さんのところのペンションでアルバイトしていた子たちだよ」って言うてくれた。

「あ。あそこか、なんか人がいっぱい来てすごかったらしいじゃないか。ん わかった後で寄らせてもらうよ」って慌てて連行されている人たちを追った。

会長さんと数人の人が残り「俺たちが下まで一緒に付いていってあげるよ」って同行をしてくれることになった。

「すみません」「お願いします」

会長さんたちと一緒にゆっくり下へ滑り下りて行くことになった。

ペンション近くになってペンション方向をみると三人の人が私たちに手大きく振ってきた。

でした

奈緒子が笑顔になり大きく手を振ると裕未や佐織も負けじと手を振りながらペンションへと滑り降りて行った。

もちろん奈緒子と佐織はスーツと裕未は少しへっぱり腰ながらもあまりモタツキせずにだ。

やっぱり・・・三人は彼女たちの彼氏たちだった。

彼女たちは口々にさっきの出来事を彼氏に話している。やはり彼女たちと一緒にだと笑顔がいっぱいだ。

思わず私も笑顔が出た。

彼氏たちが一斉に私を見ると「君・・・葵ちゃん？」って彼氏たちが笑顔が満開になる。

「「う・・・」」当然彼女たちの肘鉄が彼らのわき腹に刺さったのはすごく当たり前のことだった。

わき腹を抑えて苦い顔をする彼らを見て苦笑する私だった。

白い恋人たち（撮影会 打ち合わせ編）

白い恋人たち（撮影会 打ち合わせ編）

「おい彼女を紹介してくれよ」奈緒子の彼氏が肘打ちに遭いながらも私に愛想をしながら奈緒子に言った。

「うんもう！」奈緒子にはらみ加減で「彼女の名前は」紺野 結衣” 中学生の時の同級生 高校は違うところに入ったけど中学時代は仲良しカルテットだったんだよ。」

「へえー結衣ちゃんって言うんだ」って佐織のの彼氏が私を覗き込む。

「うんもう・・・あんたも？」って彼氏の腕を引っ張り自分の横に戻す。

思わず奈緒子がくすくすと笑うと残りのメンバーも思わずつられて笑いだした。

奈緒子の横にいる人が「じゃ自己紹介 俺奈緒子に彼氏やってる”

斎藤 晃”」

佐織の横の人が「佐織の彼氏役の” 佐々木小次郎” う・・・じゃなく” 佐々木裕次郎”」

佐織が小次郎ってところで肘鉄でつつく

最後の人が「裕未の幼馴染兼彼氏やってる” 宮本健太”」って挨拶

してくれた。

宮本君が「俺と斎藤が海王大学で1回生で佐々木は一つ下、皆同じ町内で小さいころからつるんで遊んでた。」って3人で笑う。

奈緒子が「こんな場所ではなく早く中に入ろうよ。」って少し震えながら言う

皆が「了解」ってぞろぞろペンションに入って行った。

中に入るとオーナー夫人の佳代子さんが「奈緒子ちゃん達、大広間使っていいよ」って言うてくれたので「ありがとうございます」ってお礼を言いつつ大広間に向かった。

中に入ると、奈緒子が「私飲み物買ってくるわ。何がいい」

「アイスレモンティー」「ホットココア」「ポカリ」って次々皆注文する。

奈緒子は「了解」って言いつつ彼氏の腕をつかんで「荷物係り連れてくね」って笑顔で部屋を出て行った。

宮本君が「そういえば、先程ダレンデで事件が遭ったらしいって。しかもお巡りさんも来ていたらしいし、少し前になにやらがたついていたよ。何か見た」って聞いてきた。

襲われたのを気にして、裕未がパーツと顔を赤くしてうつむく。

しばらく沈黙の後……。

佐織が裕未の肩をポンと触って「ゲレンデの事件って私達なの。一番の被害者は裕未だから宮本さん裕未をいたわってあげてね」って事件の話をし始める。

ちょうどその時奈緒子たちも帰ってきて、男性陣はかなり憤慨して特に裕未の彼氏の宮本さんは警察に殴りこみをかける勢いだった。

宮本さんが立ち上がったところで私の携帯の着信音が・・・。

「もしもし。はい いいですよ」

お義母さんからの電話だった。

「結衣ちゃん。今から打ち合わせしたいけどいいかな」

「私はいいですけど、友達はちょっと・・・聞いてみます」

「あの・・・奈緒子たちには朝ちよつと話していた撮影会の打ち合わせを今からしたいって、いいかな」

男性陣は「なんや、その話・・・撮影会?・・・どんなん?」って言う。

奈緒子は「私達は良いよね」って裕未と佐織に合意を求める。

事件の話をそらしたいのか、裕未が「良いよ聞くぐらいなら」佐織は「裕未が良いって言うのなら私もいいよ」って賛成してくれた。

奈緒子が彼氏の腕を取り「いいよね聞く位なら良いわね」って甘え脅す。

宮本君が座ったところで斉藤さんが「まあ俺たちも聞く位なら良いかな、そうだよな」って残りの男性陣に声をかける。

二人とも彼女の顔を見て「・・・聞くだけ聞くか」って何とか賛成してくれた。

「もしもし。皆さんお話は聞くそうです」ってお義母さんに返事をする。

「分かったわ。説得は得意だから結衣ちゃんは何も言わなくて良いから。十分後にその部屋に行くわ。じゃその時」って電話が切られた。

「本当にどんなことするのかい」度胸が据わったのか興味か内容を聞いてくる男性陣に私は「ごめんなさい。何かのイベント用って事かしら知らないの」って答えるしかなかった。

「ふうん・・・」とりあえず皆、奈緒子たちが買って来た飲み物を飲み始める。

そして話は私たちのアルバイトの話になった。

「奈緒子。大変だったらしいな」

「すごかったのよ。お客さんは山のように訪れるし・・・てんやわんやだったのよ。それも皆、結衣がいたからなの」って私を見て笑う。

佐織も同調して「最初はわからなかったんだけど白鳥 葵ってばれてから、結衣見たさにお客さんがいっぱい来てねすごかったんだ。」

私がばつが悪い顔をする。

「でも、ねえ」佐織と裕未に向かって「忙しかったけど、めっちゃ楽しくもあったよね」って同意を求めた。

「うんうん」って大きく縦に首を振る佐織たち。

私は奈緒子たちに迷惑をかけたと思っていたのに・・・少しほっとした。

アルバイトの話が中身に移ろうとした時にドアをノックする音がする。

奈緒子が「その話はまた後でね」って「はい！どうぞ」って返事をした。

ドアを開けてお義母さんが入ってくる「皆さん。盛り上がり中ごめんなさいね。葵ちゃんにはあまり内容を知らせてなかったの」

お義母さんは皆に名刺を渡しつつ「ジュジュの総編集をやってる進藤 洋子です。横にいるのはスタイリストの粥川さんとマネージメントの荘川くん」って紹介した。

「まずはどんなことを言うと、ジュジュのバレンタインデー向けのチョコレート特集の駒写真とタイアップメーカーさんのバレンタインデー用CM撮影なの。葵ちゃんはジュジュの専属だからメインなんだけど一組じゃお話にならないけど貴方達が出演してもらえればぴったりの人数になるわ」って内容を説明する。

奈緒子たちは彼氏と顔を見合わせて結構大きな話にびっくりする。

「私なんて演技できないですし・・・」って裕未がビビりながら言う、男性陣からは「うんうん」ってうなずく人もいる。

「大丈夫よ。演技力なんていらなのよ、変な演技なんて邪魔なだけ。男性諸君は一足早いチョコレートがもらえるし、一度ぐらい雑誌に載ると自慢になるわよ」

元来眼立ちたがり屋な裕未がそれを聞いて「私やります」そして彼氏の横腹を肘でつついて「出てね」って反脅し気味に笑いながら言った。

「でも私・・・」はずかしやがりな佐織は尻ごみする。

「一度ぐらいいいかな。皆もいいわよね」ってリーダー役の奈緒子が言う「え〜」って佐織が彼氏の腕をつかんで、真っ赤な顔で首を横に振る。

佐織の頭をなぜながら「僕がフォローしてあげるよ」って彼氏が奈緒子に賛同する。

「佐々木はこういう事は大好きだからな。佐織ちゃん彼氏も言っていることだし、皆で出よう」って男性陣のリーダー格の斎藤さんが最終決定をした。

お母さんは佐織の態度を微笑ましく見ながら「皆さんありがとうね。まあ撮影はアドリブばっかだからセリフを覚えることもないし、粥川さん衣装サイズをお願いね」

私たちは部屋に戻って奈緒子たちのサイズ計測をしたと言っても簡易計測ですぐ終わった。

裕未が「なんだこれで終わり？」って物足りなさそうに言う。

「今回はスキウエアや上着がメインですから簡単ですけど町に戻ったらしっかり計測するわよ。」って笑いながら粥川さんが言った。

奈緒子たちは「え・・・ここだけじゃないのですか？」って聞く。

私は「奈緒子CMのワンカットシーンがあるんだって、でも物の数秒よ」お義母さんから少ししか聞かなかった概要を話した。

「なにそれって」

「なんでもチョコを選ぶシーンって聞いたよ。ごめん帰ってから半日ほどまたお願いね」って両手を合わせて拝んだ。

「皆。可愛い衣装を用意するから楽しみにね」って粥川さんがウィンクした。

「しかも今回と次回の着た衣装は全部進呈するって総編集長が言ってたよ。」

佐織が「やった!!」って手を握って喜んだ。

ドアをノックする音がした後「粥ちゃん。終わった？」って尋ねる声が出た。

「良いわよ。」ってドアまで行き扉を開ける。

マネージメント担当の荘川さんが顔を出し「中に入ってもいいかな」って聞いてきた。

「はい。良いですよ」って奈緒子が答えると荘川さんが入ってきた。

撮影用の打ち合わせはあっという間に終わり。荘川さんと粥川さんが「じゃあ明日よろしく」って帰って行った。

お義母さんは「この後はフリーだから夕食後に皆でナイターに行く」といいわよ。但し葵ちゃんを除いてね」

「えー・・・私だけ駄目・・・」がつくりとうなだれる。

「だって結衣は主役だもんね」って私の肩を叩いて慰めてくれる奈緒子。でも彼氏と一緒になので笑顔がこぼれてる。

夕食後奈緒子たちはナイタースキーへ「結衣。悪いわね」って手を振って奈緒子たちはナイターへ出かけて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0860i/>

私の旦那様は教師で芸能人？

2010年12月4日22時16分発行